

仙台市文化財調査報告書第33集

# 出土遺跡

発掘調査報告書

1981年3月

仙台市教育委員会  
仙台市富沢長町土地区画整理組合

仙台市文化財調査報告書第33集

# 出土遺跡

発掘調査報告書

1981年3月

仙台市教育委員会  
仙台市富沢長町土地区画整理組合

# 本文目次

## 序 文

## 例 言

## 調査要項

### 第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過.....	佐藤.....	1
2. 遺跡の環境		
(1) 地形.....	タ .....	1
(2) 地質.....	タ .....	4
(3) 歴史的環境.....	タ .....	4

### 第Ⅱ章 第2次調査

1. 調査の経過.....	結城.....	14
2. 基本層序.....	佐藤.....	14
3. 造構と遺物		

#### (1) 縄文時代の造構と遺物

##### 1) 遺物の分類基準

(i) 土器の文様分類.....	佐藤・吉岡.....	18
(ii) 石器の分類基準.....	藤原.....	28

##### 2) 造構と造構内出土遺物.....佐藤・吉岡.....38

##### 3) 各層の出土遺物

(i) 土器.....	佐藤・吉岡.....	62
-------------	------------	----

(ii) 土製品・齒牙製品.....	佐藤.....	154
--------------------	---------	-----

(iii) 石器.....	藤原.....	166
---------------	---------	-----

##### 4) 土器の製作技術について.....佐藤.....188

#### (2) 弥生時代の遺物.....タ ..... 199

#### (3) 古墳時代以降の造構と遺物

##### 1) 造構.....タ ..... 200

##### 2) 遺物.....藤原・佐藤..... 209

### 第Ⅲ章 考察とまとめ.....佐藤・吉岡・藤原..... 223

### 第Ⅳ章 花粉分析.....安田..... 235

### 付 章 第1次・第3次調査

1. 第1次調査の概要	結城	240
2. 第3次調査の概要	佐藤	247

## 挿図・表目次

第1図 山上遺跡位置図	2	第27図 1号土壙出土遺物1)	54
第2図 仙台平野の微地形分布	3	第28図 1号土壙出土遺物2)	55
第3図 遺跡分布図(旧石器時代)	6	第29図 1号土壙出土遺物3)	56
第4図 遺跡分布図(縄文時代早期)	6	第30図 1号土壙出土遺物4)	57
第5図 遺跡分布図(縄文時代前期)	7	第31図 1号土壙出土遺物5)	58
第6図 遺跡分布図(縄文時代中期)	7	第32図 2号・3号土壙出土遺物	59
第7図 遺跡分布図(縄文時代後期)	8	第33図 7号土壙出土遺物1)	60
第8図 遺跡分布図(縄文時代晚期)	8	第34図 7号土壙出土遺物2)	61
第9図 遺跡分布図(弥生時代)	9	第35図 7号土壙出土遺物3)	62
第10図 遺跡分布図(古墳時代)	9	第36図 7号土壙出土遺物4)	63
第11図 遺跡分布図(奈良時代)	10	第37図 8号・9号土壙出土遺物	64
第12図 遺跡分布図(平安時代)	10	第38図 10号土壙出土遺物1)	65
第13図 発掘調査区位置図	15	第39図 10号土壙出土遺物2)	66
第14図 第2次調査区構成配置図	19, 20	第40図 11号・12号土壙出土遺物	67
第15図 第1トレントン断面図(南壁面)	21	第41図 13号土壙出土遺物	68
第16図 第2トレントン断面図(北壁面)	22	第42図 8層出土遺物1)	71
第17図 第3トレントン断面図(東壁面)	23	第43図 8層出土遺物2)	72
第18図 第2トレントン平面図(縄文時代 11層上面、12層上面)	39, 40	第44図 8層出土遺物3)	73
第19図 第3トレントン平面図(縄文時代)41, 42		第45図 8層出土遺物4)	74
第20図 埋甕実測図	43	第46図 8層出土遺物5)	75
第21図 1号土壙実測図	44	第47図 10層出土遺物1)	76
第22図 2号土壙実測図	46	第48図 10層出土遺物2)	77
第23図 3号土壙実測図	48	第49図 10層出土遺物3)	78
第24図 土壙実測図	49	第50図 10層出土遺物4)	79
第25図 10号・13号土壙実測図	52	第51図 10層出土遺物5)	80
第26図 埋甕跡実測図	53	第52図 11層出土遺物1)	81
		第53図 11層出土遺物2)	82

第54図	第11層出土遺物3).....	83	第86図	第10層出土遺物16).....	115
第55図	第11 c 層出土遺物1).....	84	第87図	第10層出土遺物17).....	116
第56図	第11 c 層出土遺物2).....	85	第88図	第10層出土遺物18).....	117
第57図	第11 c 層出土遺物3).....	86	第89図	第10層出土遺物19).....	118
第58図	第 8 層出土遺物1).....	87	第90図	第10層出土遺物20).....	119
第59図	第 8 層出土遺物2).....	88	第91図	第10層出土遺物21).....	120
第60図	第 8 層出土遺物3).....	89	第92図	第10層出土遺物22).....	121
第61図	第 8 層出土遺物4).....	90	第93図	第10層出土遺物23).....	122
第62図	第 8 層出土遺物5).....	91	第94図	第10層・第11 a 層出土遺物1).....	123
第63図	第 8 層出土遺物6).....	92	第95図	第11 a 層出土遺物2).....	124
第64図	第 8 層出土遺物7).....	93	第96図	第11 a 層出土遺物3).....	125
第65図	第 8 層出土遺物8).....	94	第97図	第11 a 層出土遺物4).....	126
第66図	第 8 層出土遺物9).....	95	第98図	第11 a 層出土遺物5).....	127
第67図	第 8 層出土遺物10).....	96	第99図	第11 a 層出土遺物6).....	128
第68図	第 8 層出土遺物11).....	97	第100図	第11 a 層出土遺物7).....	129
第69図	第 8 層出土遺物12).....	98	第101図	第11 a 層出土遺物8).....	130
第70図	第 8 層出土遺物13).....	99	第102図	第11 a 層出土遺物9).....	131
第71図	第 9 層・第10層出土遺物1).....	100	第103図	第11 a 層出土遺物10).....	132
第72図	第10層出土遺物2).....	101	第104図	第11 a 層出土遺物11).....	133
第73図	第10層出土遺物3).....	102	第105図	第11 a 層出土遺物11).....	134
第74図	第10層出土遺物4).....	103	第106図	第11 a 層出土遺物12).....	135
第75図	第10層出土遺物5).....	104	第107図	第11 a 層出土遺物13).....	136
第76図	第10層出土遺物6).....	105	第108図	第11 a 層出土遺物14).....	137
第77図	第10層出土遺物7).....	106	第109図	第11 a 層出土遺物15).....	138
第78図	第10層出土遺物8).....	107	第110図	第11 a 層出土遺物16).....	139
第79図	第10層出土遺物9).....	108	第111図	第11 a 層出土遺物17).....	140
第80図	第10層出土遺物10).....	109	第112図	第11 a 層出土遺物18).....	141
第81図	第10層出土遺物11).....	110	第113図	第11 a 層・第11 b 層出土遺物1).....	142
第82図	第10層出土遺物12).....	111	第114図	第11 b 層出土遺物2).....	143
第83図	第10層出土遺物13).....	112	第115図	第11 b 層・第11 c 層出土遺物1).....	144
第84図	第10層出土遺物14).....	113	第116図	第11 c 層出土遺物2).....	145
第85図	第10層出土遺物15).....	114	第117図	表掲遺物1).....	146

第118図 表探遺物(2).....	147	第147図 後期の縄文土器器形分類模式図 .....	191
第119図 第8層・第10層出土ミニチュア ・小形土器 .....	151	第148図 綱代分類模式図 .....	195
第120図 第10層・第11層出土ミニチュア ・小形土器 .....	152	第149図 第8層・第10層出土土器底部 .....	196
第121図 第11層出土小形土器 .....	153	第150図 第10層出土土器底部 .....	197
第122図 第8層出土円盤状土製品(1) .....	156	第151図 第10層・第11層出土土器底部 .....	198
第123図 第8層・第10層出土円盤状製 品(2) .....	157	第152図 弦生土器 .....	200
第124図 第10層出土円盤状土製品(3) .....	158	第153図 1号河川跡平面図 .....	201.202
第125図 第10層・第11層出土円盤状土製品(4) .....	159	第154図 第3トレンチ平面図 (平安時代) .....	203.204
第126図 第11層出土円盤状土製品(5) .....	160	第155図 1号竪穴住居跡実測図 .....	205
第127図 第11層出土円盤状土製品(6) .....	161	第156図 1号・2号溝実測図 .....	206
第128図 各種の土製品 .....	165	第157図 1号・3号溝実測図 .....	207
第129図 第8層出土石器(1) .....	167	第158図 4号溝実測図 .....	208
第130図 第8層出土石器(2) .....	168	第159図 土師器(1) .....	210
第131図 第8層出土石器(3) .....	169	第160図 土師器(2)・赤焼土器 .....	211
第132図 第8層出土石器(4) .....	170	第161図 須恵器(1) .....	214
第133図 第10層出土石器(1) .....	173	第162図 須恵器(2) .....	215
第134図 第10層出土石器(2) .....	174	第163図 須恵器(3) .....	216
第135図 第10層出土石器(3) .....	175	第164図 青 磁 .....	218
第136図 第10層出土石器(4) .....	176	第165図 土 鍤 .....	219
第137図 第10層出土石器(5) .....	177	第166図 右器・磁石 .....	220
第138図 第10層出土石器(6) .....	178	第167図 木 製 品 .....	220
第139図 第11層出土石器(1) .....	181	第168図 C-5区出土歯骨 .....	222
第140図 第11層出土石器(2) .....	182	第169図 山口遺跡の模式的層序 .....	235
第141図 第11層出土石器(3) .....	183	第170図 山口遺跡の花粉ダイアグラム .....	237
第142図 第11層出土石器(4) .....	184	第171図 第1次調査区平面図 .....	241
第143図 第11層出土石器(5) .....	185	第172図 第1次調査区断面図 .....	242
第144図 第11層出土石器(6) .....	186	第173図 第3次調査区断面図 .....	245.246
第145図 第11層出土石器(7) .....	187	第174図 第3次調査区平面図 .....	248
第146図 胴部・底部接合方法模式図 .....	189	第1表 名取川扇状地周辺の遺跡地名 .....	11
		第2表 尖頭器を形成する石器長幅相関図 .....	29

第3表 碓器類長幅相関図	34	第16表 鹿骨同定表	222
第4表 碓器類長幅厚幅相関図(1)	35	第17表 各群グリッド別出土点数表	228
第5表 碓器類長幅厚幅相関図(2)	36	第18表 刺片類グリッド別出土数	230
第6表 碓器類、形態と使用痕の関係(1)	37	第19表 石器類グリッド別出土数	231
第7表 碓器類、形態と使用痕の関係(2)	37	第20表 各層の石器組成(1)	232
第8表 1号土壌内ピット一覧表	45	第21表 各層の石器組成(2)	232
第9表 2号土壌内ピット一覧表	47	第22表 山口遺跡の花粉・孢子出現率表	238
第10表 3号土壌内ピット一覧表	47	第23表 土器観察表	249
第11表 円盤状土製品の重量分布と 加工度比率	155	第24表 円盤状土製品属性表	250
第12表 底部分類表	194	第25表 石錐属性表	252
第13表 細分類表	199	第26表 石錐属性表	252
第14表 1号住居跡ピット一覧表	205	第27表 尖頭器属性表	253
第15表 炭化種子同定表	221	第28表 石匙属性表	253
		第29表 碓石器類属性表	253

## 写真図版目次

図版1	255	3. 5号土壌全景	
1. 遺跡遠景		図版5	259
2. 遺跡近景		1. 6号土壌全景	
3. 第3・第4トレンチ調査前の状況		2. 7号土壌全景	
図版2	256	3. 7号土壌石製品出土状況	
1. 基本層位		図版6	260
2. 1号河川跡断面(B-17区北壁)		1. 8号土壌全景	
3. 第2トレンチ土壌群		2. 9号土壌全景	
図版3	257	3. 10号土壌全景	
1. 第1トレンチ埋甃跡		図版7	261
2. 1号土壌遺物出土状況		1. 11号土壌全景	
3. 1号・2号土壌全景		2. 13号土壌全景	
図版4	258	3. 第2トレンチ遺物出土状況	
1. 3号土壌全景		図版8	262
2. 4号土壌全景		1. E-14区第8層出土深鉢形土器	

2. D-5区第11層出土土器	図版18 繩文土器3).....	272
3. E-14区第11層出土土器	図版19 繩文土器4).....	273
図版9.....	図版20 繩文土器5).....	274
1. E-12区第11c層出土土器	図版21 第8層出土遺物1).....	275
2. E-13区第10層出土イノシシ形土製品	図版22 第8層出土遺物2).....	276
3. F-13区第10層出土スプーン形土製品	図版23 第9・10層出土遺物1).....	277
図版10.....	図版24 第10層出土遺物2).....	278
1. E-13区第8層出土壺形土器	図版25 第10層出土遺物3).....	279
2. 第1トレンチ1号河川跡南岸検出状況	図版26 第11a層出土遺物1).....	280
3. 第3トレンチ1号河川跡南岸検出状況	図版27 第11a層出土遺物2).....	281
図版11.....	図版28 第11b・第11c層出土遺物.....	282
1. 第3トレンチ1号河川跡北岸検出状況	図版29 ミニチュア土器と土製品.....	283
2. 第4トレンチ1号住居跡全景	図版30 円盤状土製品.....	284
3. 第1トレンチ1号・2号溝全景	図版31 土器接合面の刻目と網代.....	285
図版12.....	図版32 第8層出土石器1).....	286
1. 第2トレンチ4号溝全景	図版33 第8層出土石器(2).....	287
2. 第3トレンチ1号溝全景	図版34 第10層出土石器(1).....	288
3. 第3トレンチ1号溝全景	図版35 第10層出土石器(2).....	289
図版13.....	図版36 第10層出土石器(3).....	290
1. 第1トレンチ1号河川跡出土須恵器	図版37 第11層出土石器(1).....	291
2. 第1次調査遺構確認状況(1~7区)	図版38 第11層出土石器(2).....	292
3. W10付近5号土壙(2区)	図版39 第11層出土石器(3).....	293
図版14.....	図版40 第11層出土石器(4).....	294
1. 8号・9号溝断面(4区)	図版41 遺構出土・その他の石器.....	295
2. 5号溝断面(5区)	図版42 鹿角・昆虫压痕・弥生土器.....	296
3. 6号溝断面(5区)	図版43 上師器・須恵器.....	297
図版15.....	図版44 土師器・須恵器・灰陶肉器・青磁.....	298
1. 第3次調査トレンチ北壁断面	図版45 土錐・獸骨・炭化種子.....	299
2. 1号溝全景	図版46 須恵器表の叩き目.....	300
3. 4号・5号溝全景	図版47 花粉の顕微鏡写真1).....	301
図版16 繩文土器(1).....	図版48 花粉の顕微鏡写真2).....	302
図版17 繩文土器(2).....		

## 序 文

仙台市の文化財行政に対し、日頃の市民各位からの御協力をいただき、心から感謝申し上げます。

このたび、仙台市富沢に所在する山口遺跡の正式報告書を刊行するはこびになりました。この遺跡をとり扱む一帯は、区画整理により宅地化されることになり、当教育委員会では土地区画整理組合と協議し、去る昭和53年3月から54年12月まで3次にわたる発掘調査を行なってまいりました。それに引き続き、55年6月から本報告書作成のための整理に努力してまいりました。この間、数多くの方々からご指導ご協力をいただき、重ねてこの紙面をもってお礼申し上げます。

さて、この地区は、東北一の区画整理事業として宅地に変貌し終えようとしていますが、今後、当市の事業として地下鉄建設、総合体育館建設が予定されており、これから調査の参考としても、本報告書の刊行が待ち望まれており、今後の文化財行政の指針ともなり得るものと考えております。

ところで、荒川の氾濫原の中に所在している山口遺跡は、調査成果からもうかがえるように、これまでの調査では類例のあまりない沖積地における縄文時代の遺構の在り方や生活環境の在り方を解明する上で貴重な資料となることと考えられます。

このことを踏まえ、多くの資料を提示し、一般市民及び研究者の参考となるよう努めてまいりましたが、膨大な資料をかかえ、期間に追われる状況の中での作業にならざるを得ず、筆の足りない点も少なからずあるかと考えられます。ご批評、ご指導をいただき、今後の参考としていきたいと存じます。今後とも仙台市の文化財行政に対する格段のご協力をお願いいたします。

昭和56年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 繁

## 例　　言

1. 本書は、仙台市宮城長町土地区画整理事業に伴う山口遺跡第1次～第3次調査に関する本報告書であり、すでに公表された略報告書等に優先するものである。
2. 報告書作成のための整理は佐藤洋・吉岡恭平が担当し、編集は佐藤洋・吉岡恭平・篠原信彦・結城慎一が協議して行なった。
3. 本文の執筆は佐藤洋・結城慎一・篠原信彦・吉岡恭平が担当し、石器は藤原妃敏氏（東北大学院生）、花粉は安田喜憲氏（広島大学）にお願いした。分担は、本文目次に明示した。
4. 作図、写真撮影については下記のとおり分担した。

遺構トレース —— 小倉啓子

遺物実測(土器、土製品) —— 佐藤洋・吉岡恭平・佐藤政人・佐藤憲一・松本純子・毛利貴洋・阿部多津子・渡辺晶絵・佐藤正弘・大場哲俊・鈴木勝子・玉水真里子・相沢美智子・佐藤明子  
遺物トレース(土器、土製品) —— 結城慎一・吉岡恭平・小倉啓子・松本純子

石器実測、トレース —— 藤原妃敏

遺構写真 —— 渋谷孝雄・佐藤洋・工藤哲司・結城慎一

遺物写真 —— 佐藤洋・毛利貴洋・藤原妃敏

5. 発掘調査及び遺物整理において、下記の方々及び機関に助言協力を賜った。(敬称略)  
安田喜憲(広島大学総合科学部助手)、小野泰正(岩手大学人文社会学部教授)、星川清親(東北大学農学部教授)、玉手英夫(東北大学農学部教授)、平川南(東北歴史資料館)、白鳥良一(多賀城跡調査研究所)、遊佐五郎・阿部恵(宮城県文化財保護課)、佐々木隆(仙台市科学館)、高取知男(仙台市健康都市建設推進事務局)、筑波学園都市農林省農業技術研究所、農林省東北農業試験所

6. 本報告書中の土色については、「新版標準土色帳」(小山、竹原:1973)を使用した。

7. 遺構図版中の水系レベルは海拔高を示す。

8. 本文中の継代の纏み方の説明は、経の条に対する緯の条の纏まれ方で統一した。

9. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」、「仙台南東部」を使用した。

10. 転回して器形の復元実測を行なったものについては、中心線を一点鎖線で示した。

11. 斷面実測のうち、接合面が確認できるものについては、そのまま実測図に示した。

12. 図版中の石には「S」の記号を付して表現した。

13. 文中の敬称は省略させていただいた。

14. 本遺跡の出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

## 調査要項

遺跡名稱 山口遺跡 (C-233)

所 在 地 仙台市宮沢字山口、字下ノ内浦外

調査主体 仙台市教育委員会

仙台市宮沢長町土地区画整理組合

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員 第1次調査 結城慎一、工藤哲司

第2次・第3次調査 渋谷孝雄(昭和55年3月退職)、佐藤洋

調査期間 第1次調査 昭和53年3月1日～3月31日

第2次調査 昭和54年6月4日～12月10日

第3次調査 昭和54年10月15日～11月30日

調査対称面積 1次調査 250m<sup>2</sup> (調査面積 180m<sup>2</sup>)

2次調査 800m<sup>2</sup> (調査面積 800m<sup>2</sup>)

3次調査 1,050m<sup>2</sup> (調査面積 444m<sup>2</sup>)

調査参加者

(第1次調査) 阿蘇幸二、阿部徳四郎、入間川富市、小沼ちえ子、小池英子、鈴木よしゑ、鳴瀬光之、巻野俊夫、松本寿一、真山尚幸、三塚正子、森節子、(故) 関根平次

(第2次調査) 調査補助員: 森剛男、石黒伸一朗、柳田俊雄(現・帝塚山大学助手)

参加者: 阿蘇幸二、阿部徳四郎、伊藤清之助、入間川富市、太田春雄、小沼ちえ子、柿沼勝信、柿沼敏朗、門脇郁子、川村裕之、木村一之、小池英子、郷古孝一、今野和枝、佐伯みつえ、坂忠彦、佐藤憲一、佐藤政人、佐藤正弘、白井一夫、菅原みほ子、鈴木よしゑ、高島芳弘、高野晃、中沢さつき、中沢裕一、成沢真喜子、三塚正子、村上昭弘、森節子、森屋アキ子

整理担当職員 佐藤洋、吉岡恭平

整理参加者 相沢美智子、阿部多津子、伊藤清之助、入間川富市、大場拓俊、小倉啓子、小沼ちえ子、小池英子、佐伯みつえ、佐藤憲一、佐藤政人、佐藤正弘、佐藤貴貴、佐藤明子、菅原みほ子、鈴木勝子、鈴木よしぇ、玉水真里子、松本純子、三塚正子、毛利貴洋、森節子、森剛男、渡辺晶絵

調査協力 日東建設株式会社・秋野工務店

# 第Ⅰ章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

近年、仙台市では、東北自動車道の開通や東北新幹線・地下鉄の建設予定など都市機能の整備が充実され、こうした現象と相まって、人口が急速に増加している。このような状況下において、宅地開発事業の増加という現象もまた当然の帰結であろう。仙台市及び周辺部の宅地開発はすさまじい限りである。

仙台市南部の富沢・長町地区も水田をつぶして上地区画整理が開始された。昭和51年の水路工事の際に遺物（土師器）が表採されたため、小字名をとって、山口遺跡（仙台市文化財登録番号C-233）として登録した。昭和53年に、遺跡内において、道路に沿った水路建設が計画され、同年3月1日から1ヶ月間、水路建設に先立って第1次調査が行なわれた。この調査の詳細については別項にゆずるが、その際、縄文土器が出土し、平安時代の生活面の下位に、縄文時代の遺跡の存在が予想されるに至った。

第2次・第3次調査の契機は、遺跡内において下水道管理設工事が計画されたことに始まる。仙台市富沢・長町地区画整理組合との協議の結果、仙台市教育委員会が事前調査を行なうことになった。調査は、第1次調査をふまえて、平安時代の生活面に限らず、より下位に存在すると予想された縄文時代の包含層及び遺構も対象として、昭和55年4月10日より開始した。

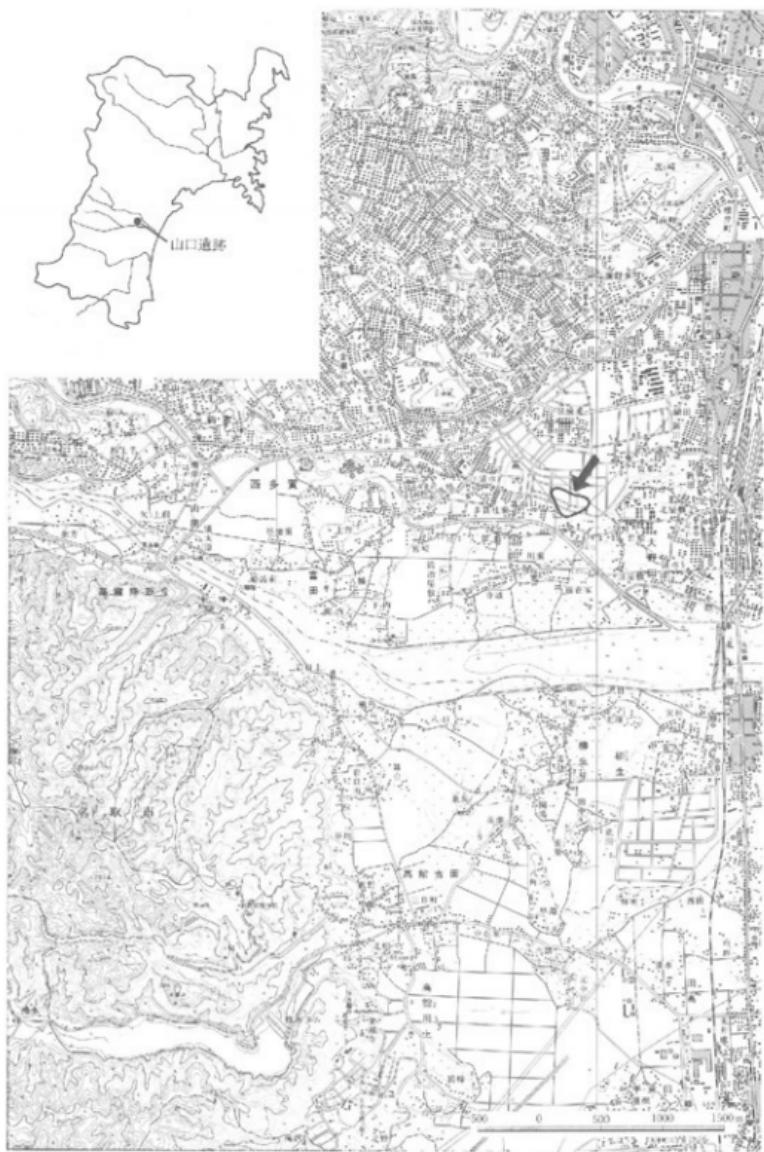
## 2. 遺跡の環境

### (1) 地形 (第2図)

仙台市の東部には、海岸沿いに幅約10kmにおよぶ海岸平野がみられ、宮城野海岸平野と呼ばれている(地学団体研究会仙台支部編、1980)。この平野は、仙台平野の中央部に位置し、その一部を構成している。この海岸平野には、阿武隈川、名取川、七北田川の大小の河川が曲流し、仙台湾に注いでいる。

このうち、遺跡の南側を東流する名取川は、奥羽山系の南大東岳付近に源を発し、多くの段丘地形を発達させた。特に、名取川の支流である広瀬川は、仙台市街地において多くの段丘群を形成し、地形学上の標式的段丘となっている。これらの段丘は、古期から、青葉山段丘、台ノ原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘の大きく5つに分類されている。また、名取川の下流域の右岸には、開析の激しい山地性の高館丘陵、左岸には、残丘が多く、起伏の大きい山地性の蕃山丘陵が存在し、その東側には、青葉山段丘が連なる。さらに、蕃山丘陵の南東には、先の5つの段丘に対比される規模の小さな段丘が数多く発達し、多くの遺跡が散在している。

また、蕃山丘陵と高館丘陵と沖積地の地形変換点には、名取川の新期堆積物が形成した扇状



第1図 山口道跡位置図



第2図 仙台平野の微地形分布(松本原図)

地性沖積面が広がっており、数多くの遺跡が散在している。この扇状地性の沖積面は、名取川左岸では郡山低地、右岸では名取低地と呼ばれる。山口遺跡は、この郡山低地（扇状地扇央部から扇端部にかけて）上に存在する。名取低地とともに郡山低地には、名取川が形成した自然堤防、ポイントバー、後背湿地等、平野部の典型的な地形をみることができる。名取川の一支流である笊川は、番山丘陵中に存在する太白山周辺に源を発し、名取川が形成した後背湿地帯を曲流しており、頻繁に洪水を起こしていた。

本遺跡は、名取川が形成した自然堤防上に立地し、すぐ南側には、笊川が東流している。調査区域内には旧河道が2本みられ、平安時代の古笊川の流路と考えられる。平安時代後半にはこの旧河道は、ほぼ完全に埋没していたであろう。したがって、古笊川は、自然堤防を浸食しつつ、流路を南側へ移して、現在の流路となったものであろう。

## (2) 地質

宮城野海岸平野の基盤は、北部では中生代三疊紀の粘板岩（利府層）があり、アンモナイト等の化石が見つかっている。東部の福田町付近では、地下約100mに利府層と思われる粘板岩が確認されている。また、南部では、岩沼・真理付近で古生代と思われる粘板岩や千枚岩質の岩石（割山層）、そして花崗岩類が存在する。

名取川周辺の沖積層は、層厚60~80mに及び、下部では河床の堆積物である砂礫層が厚く堆積し、上部では陸成や海成の砂層・シルト層・粘土層の互層によって、沖積層が形成されている。名取川層状地では、堆積速度が速く、海成層の発達は悪い。

山地や丘陵部に転じると、名取川周辺では高鉛層・茂庭層・旗立層等が中流域でみられ、支流の荒川の上流域では旗立層や綱木層等がみられる。これらは、いずれも第二紀中新世の名取層群の一部を構成している。名取川は、中流域で最も浸食が著しく、層状地の新期堆積物は、前述の名取層群や周辺の第四紀の段丘堆積物等によって構成されている。第3次調査の深掘りトレンチでは、地下約3mの砂礫層中に木葉の化石がみられることからも、上流から運ばれた堆積物であることがわかる。また、前述した名取層群中、高鉛層は玄武岩・複輝石安山岩・集塊岩・凝灰岩等で構成されている。茂庭層は、礫岩・石灰質砂岩で構成され、有孔虫・貝類・サンゴ・サメの歯・パレオバラドキシアの歯等の化石を多く含む層であり、高鉛層に不整合にのる。旗立層は、凝灰質砂岩・シルト岩等で構成され、貝類・有孔虫・海綿等の化石を含み、茂庭層に整合にのる。綱木層は、名取川の上流の釜房ダム・秋保付近にもみられ、火山礁凝灰岩・凝灰質砂岩・礫岩等からなり、上流では軽石質凝灰岩が分布する。

ところで、本遺跡の調査結果から、層状地上の自然堤防では、大別すると黒色シルトと黄褐色シルト及び砂層の互層によって土層が構成され、黄褐色土層中には、凝灰質砂岩等の砂礫が認められることから、河川の堆積物であることが明瞭である。また、古墳時代に相当する上層にもマトリックスは黒色シルトであるが、前記した礫が多く混入している。したがって、古墳時代以降平安時代前半までは、河川の影響が大きかったと考えられる。逆に、縄文時代中期から後期にかけては、粒子のほぼ均一な黒色シルトで構成され、クラックもよく発達して、堆積速度はゆるく、河川の影響が少ない比較的安定した地盤であったと推定される。縄文時代についてみると、松本（1981）の指摘した仙台平野の海水準変動は、約8000年前から約5000年前にかけて上昇速度低下期となり、約5000年以降の安定期に入る現象と、前者は山口遺跡の形成期、後者は最盛期にそれぞれほぼ一致する。

## (3) 歴史的環境

仙台市南部および名取市北部にかかる名取川の層状地性沖積面は、谷口となる余方付近から東方に広がり、また、若山丘陵、青葉山段丘の南面、さらに、高館丘陵東面には、各時代の遺

跡が綿々として存在している。最近の各種開発に伴なう調査事例の増加に伴ない、徐々に考古学的な解明がなされつつある。ここでは、扇状地およびその周辺の遺跡について、各時代別に概観してみたい（第3～12図・第1表）。

旧石器時代の遺跡は、現在3ヶ所が知られている。青葉山遺跡では、ナイフ形石器、フレイク等、金剛寺貝塚では、スクレイパーが採集されている。また最近、上ノ台遺跡が調査され、大分県早木台遺跡の石器群と類似した、前期旧石器時代の文化層4枚（チョッピングツール・三棱尖頭器・ポイント等）、後期旧石器時代の文化層5枚（スクレイパー・ナイフ形石器・ブレイド・石核等）が確認された。地形的にみると、青葉山遺跡は青葉山段丘面（最高位面標高約200m）、金剛寺貝塚は高館丘陵（標高約50m）、山田上ノ台遺跡は上町段丘（あるいは台ノ原段丘）に対比される河岸段丘面（標高約50m）に位置している。

縄文時代は、時期別に概観する。

早期の遺跡はすべて段丘上に存在し、占地形態は、旧石器時代と共通性を示す。しかし、この時期を主体とする遺跡はなく、あくまで客体的な存在である。早期末の条痕文系土器群を伴なう時期の遺跡が多く、三神峯遺跡、萩ヶ丘遺跡、北前遺跡が知られ、また、上ノ台遺跡では、条痕文土器以外に、沈線文土器や貝殻腹縫文土器がわずかに出土している。これらの遺跡はいずれも約30～50mの蕃山丘陵南端に位置する段丘や青葉山段丘上に位置する。この時期に遺構が検出された遺跡は、現在皆無である。おそらく、分布の中心となるのは、名取川の上流域（川崎盆地付近）や、中流域の河岸段丘上に立地することが予想される。中流域の中町段丘（標高70～80m）に対比される面の川添東遺跡では、多くの条痕文土器が表採されている。

前期は、図幅内では7遺跡確認されており、前期に比べ増加の傾向を示している。また、大規模な集落跡の出現もこの時期からであり、注目される。三神峯遺跡や今熊野遺跡（住居50軒）は、集落跡として認識できるが、他は遺物包含層が確認されているにすぎない。ところでこうした生活様式の変化は、文化的に1つの画期と見なしうるであろう。この時期の遺跡は、それ以前と同様、扇状地周辺の青葉山段丘や高館丘陵、また同丘陵の東端に連なる小規模な段丘面を占地している。

中期は14遺跡が確認されており、前期の遺跡数の2倍に増加している。中期初頭は調査事例が少なく不明な点が多い。山田上ノ台遺跡において遺物包含層が確認されている。初頭段階では低調であったと思われる。立地条件は中期段階でも、それ以前と同様、段丘上を主な生活面としていた。特に山田・富田付近の扇頂部に規模の大きな遺跡が点在している。ところが、六反田遺跡、本遺跡の調査の結果、扇尖部の自然堤防上に前者では大木8b式期の住居跡が、後者では大木8a式期からの遺物包含層が確認されている。このことは、扇状地性沖積面（標高約10m）が比較的安定期に入り、生活面の拡大に繋ったと考えられ注目されるところである。

第4図 遺跡分布図(縄文時代早期)



第3図 遺跡分布図(旧石器時代)



第6図 遺跡分布図(縄文時代中期)



第5図 遺跡分布図(縄文時代前期)



第8図 遺跡分布図(縄文時代後期)



第7図 遺跡分布図(縄文時代後期)



第10図 週遊分布図(古墳時代)



第9図 週遊分布図(弥生時代)



第12図 通路分布図(平安時代)



第11図 通路分布図(奈良時代)



第1表 名取川筋状地図辺の遺跡地名

番号	遺跡名	所属時期	番号	遺跡名	所属時期
1	音葉山遺跡	旧石器	51	西台遺跡	弥生・古墳
2	三神事遺跡	旧石器(?)・神文(早・前・中)	52	春日社古墳	古墳
3	山上上ノ台遺跡	旧石器(前・後)・神文(早・中・後)	53	鳥居塚古墳	古墳
4	金剛寺貝塚	旧石器・縄文(前・中・後・晩)	54	玉の塚古墳	古墳
5	萩ヶ丘遺跡	縄文(早・前・晩)・平安	55	長町清水遺跡	古墳
6	兜塚古墳	縄文(早・前)・古墳	56	大牟寺山横穴群	古墳・奈良
7	北前遺跡	縄文(早・中)・平安	57	安宅山横穴群	古墳・奈良
8	紙瀬山遺跡	(宋登録)・縄文(前)・奈良・平安	58	宗神寺横穴群	古墳・奈良
9	六反田遺跡	縄文(中・後・晩)・弥生・古墳・奈良・平安	59	郡山遺跡	古墳・奈良
10	安久東遺跡	縄文(晚)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	60	二ツ沢横穴群	奈良
11	羽黒台遺跡	古墳・奈良・平安	61	約場遺跡	弥生
12	羽黒堂遺跡	古墳・奈良・平安	62	根岸遺跡	縄文(中)
13	西田通遺跡	奈良	63	八木山緑町遺跡	縄文(中)
14	町道跡	古墳・奈良	64	向山森遺跡	縄文(中)
15	御安半沖跡	奈良・平安	65	茂ヶ崎城跡	中世
16	清大原西遺跡	縄文(中)・奈良・平安	66	前田跡	中世
17	清太原東遺跡	縄文(中)・奈良・平安	67	末光園遺跡	縄文(後)・弥生・平安
18	船渡前遺跡	縄文(中・後)・弥生・奈良・平安	68	今前野遺跡	縄文(前)・弥生・古墳・奈良・平安
19	上野遺跡	縄文(中・後)・奈良・平安	69	真坂遺跡	縄文(中・後・晩)・弥生・奈良・平安
20	六本松遺跡	奈良・平安	70	南台窓跡	奈良・平安
21	鍛冶屋敷A遺跡	奈良・平安	71	下中東遺跡	奈良・平安
22	鍛冶屋敷B遺跡	奈良・平安	72	岩口上遺跡	古墳・奈良・平安
23	富武跡	奈良・平安・中世	73	高畠遺跡	弥生・奈良・平安
24	富沢清水遺跡	奈良・平安	74	東野東遺跡	弥生・奈良・平安
25	葛原上ノ台遺跡	奈良・平安	75	上町遺跡	縄文(中)・奈良・平安
26	麻遺跡	古墳・奈良・平安	76	川上遺跡	縄文(後)・弥生・奈良・平安
27	土子内横穴群	奈良・平安	77	東内蛇遺跡	平安
28	芦口遺跡	平安	78	清水遺跡	弥生・古墳・平安・中世
29	土子内窓跡	平安	79	上余田遺跡	奈良・平安
30	砂押屋敷遺跡	平安	80	沢目遺跡	弥生・奈良・平安
31	泉崎遺跡	縄文(後)・奈良・平安	81	八幡遺跡	奈良・平安
32	山口遺跡	縄文(中・後)・弥生・古墳・奈良・平安	82	北野横穴	奈良・平安
33	豊東遺跡	古墳・奈良・平安	83	鶴野堂横穴群	古墳・奈良
34	天袋日遺跡	縄文(後)・奈良・平安	84	馬崎城跡	中世
35	大野田遺跡	縄文(後)・奈良・平安	85	小畠遺跡	中世
36	伊古田遺跡	奈良・平安	86	鶴野堂大蛇跡	中世
37	闇場遺跡	奈良・平安	87	大門圓板碑群	中世
38	苗遺跡	奈良・平安	88	高須山館跡	中世
39	音地田遺跡	奈良・平安	89	鶴野堂経塚	中世
40	安久遺跡	古墳・奈良・平安	90	大路山館跡	中世
41	北遺跡	平安	91	達神屋敷跡	中世
42	中田南遺跡	奈良・平安	92	森鷦鷯跡	縄文(前)・中世
43	後河原遺跡	平安	93	八反田遺跡	弥生
44	栗遺跡	古墳	94	高須山古墳	古墳
45	三神塚古墳	古墳	95	西北畠遺跡	縄文(後)・弥生・古墳・平安
46	裏町古墳	古墳	96	箕輪A地区古墳群	古墳
47	金洗沢古墳	古墳	97	箕輪B地区古墳群	古墳
48	教塚古墳	古墳	98	大神社古墳	古墳
49	金岡八幡古墳	古墳	99	下田高麗遺跡	古墳
50	奥野丁目遺跡	古墳	100	鶴野郡都神社	中世

ただ単に地形的な拡大だけなのか、生活様式の変化としての現象なのか今後の他地域との比較を含めた検討が必要である。

後期は、10遺跡が確認され、中期よりやや減少傾向を示している。しかし、今後の調査によつては、さらに増加する可能性があり、中期の遺跡数との比率にさほど差はないものと思う。占地も中期とほとんど変化はないが、沖積面への積極的な生活面の拡大を行なっている。こうした現象は、金剛寺貝塚の調査の結果から、後期後半から晩期にかけての貝塚が確認され、越水塙から淡水産の貝類へ変化し、名取川扇状地以南から阿武隈川流域付近がしだいに陸化しつつあった地域、あるいは、松島湧周辺の貝塚群と好対照をみせている。

晩期は、6遺跡確認され、青葉山段丘や高館丘陵と扇状地の扇中央部から扇端部にかけての自然堤防上に分布する。遺跡数はかなりの減少傾向を示している。現在、遺構を伴う遺跡は確認されておらず、ほとんどが小規模な包含層である。むしろ、名取川の上流に位置する川崎盆地において比較的多くの遺跡が確認されている。

弥生時代には、14遺跡が確認され、晩期に比べ2倍以上の増加を示している。占地形態をみると、段丘上はわずか2遺跡にすぎず、他はすべて扇中央部から扇端部の沖積面を生活の基盤としている。绳文時代に比べ極めて異なった占地形態を示している。このような占地形態の差は、農耕社会に発展した1つの大きな変化と考えられる。

古墳時代になると、遺跡数は現在36遺跡を数える。占地形態は低位段丘や丘陵の縁辺部に偏在する傾向が看取される。また、扇中央部から扇端部の自然堤防上に群在する。古墳群にもやや偏在性が看取されるようになる。青葉山段丘縁辺や荒川沿いにある名取川の自然堤防上のグループと、名取川右岸の中田周辺のグループ、さらに団幅南端の段丘上の古墳群（この古墳群は雷神山古墳を中心とした古墳群に括されるグループ）と、大きく3グループに分けられよう。横穴古墳についても、愛宕山、向山、宗禪寺等の大牛寺山周辺のグループ、三神峯の上手内横穴群、熊野堂横穴群の高館グループが分布している。これらの古墳群の分布と集落跡との関係については、興味あるところである。

奈良時代は、50遺跡が確認され、その大半は、沖積地を舞台として展開している。特に自然堤防に沿うように分布しているといえよう。また、段丘や丘陵にも遺跡が分布しているが、これらの遺跡は、はたして生活の基盤を水田農耕に依存していたのか、あるいは何らかの専業集団が居住していたのか、興味のあるところである。また、名取川右岸の扇端部には、比較的規模の大きな遺跡が集中しているといえよう。古墳時代における開拓の共同作業から発展して、家族あるいは単位集団の労働によって、一定の収穫を維持できるほどに成長したことを、この時代の小規模な遺跡数の増加は示しているのではないであろうか。もちろん律令国家の統制による社会的、政治的影響の側面も看過できない。

平安時代は、59遺跡が確認され、奈良時代と同様の古地形態を示し、ほとんどの遺跡が奈良時代の遺跡と重複している。また、現在のところ、唯一の生産跡と考えられる名取川南台窯跡、近接して北野窯跡が存在し、調査を経てないが、奈良あるいは平安時代の所産と考えられる。この時代の葬法は不明な点が多いが、安久東遺跡では土師器の合口壺が検出されている。この図幅にはないが、周辺の沖積地や丘陵には、多賀城跡、陸奥国分寺跡、台ノ原窯跡群が存在し、名取川中流域には嶺山C遺跡の鐵冶跡等があり、種々の機能をもつ遺跡が散在し、複雑な様相を呈するようになる。このことは、奈良時代以来の成長しつつある社会環境を反映している。図示していないが、中世になると、館跡が丘陵や沖積地に築かれるが、一般の集落の実体は不明である。わずかに、安久東遺跡の調査で、館跡の一部と思われる遺構、また清水遺跡で井戸が検出されているにすぎない。これらの遺跡の周辺に中世の古碑群が数多く点在している。やがて中世末期以後の伊達藩の支配によって統一され、新たな時代を迎える。

以上、名取川が形成した扇状地性沖積面、およびその周辺の丘陵や段丘に残された人間の活動を素描してみたが、まだまだ個々の遺跡の内容が不明なものが多く、極めて粗い素描となつた。また、今回対象とした地理的空間は、名取川が形成した扇状地性沖積面とその周辺の段丘、丘陵であり、一つの地理的まとまりを示すものであろう。この地域に展開してきた人間の行動の軌跡を歴史的に概観した結果、一つの領域を設定したるものと思う。旧石器時代以来形成してきた領域は、水田農耕に伴う経済的、社会的変革によって崩壊が進行する。さらに、古墳時代の再編成を経て、しだいに律令国家の統制に組み込まれ、かつての領域は消失し、新たな政治的領域の一部に包括される。今後はさらにミクロ的視野に立って、地域の歴史的特徴を把握し、他の地域との比較検討によって、マクロ的展開過程を把握しなければならない。

#### 引用・参考文献

- 宮城県教育委員会 1976 宮城県遺跡地名表
- 宮城県教育委員会 1980 金剛寺貝塚、宇賀崎貝塚、宇賀崎1号墳他
- 宮城教育大学考古学研究会 1972 「名取川水系遺跡分布調査 第2次・第3次調査予報」  
宮教考古第4号
- 宮城教育大学考古学研究会 1973 「名取川水系遺跡分布調査」宮教考古第5号
- 松本秀明 1981 「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」地理学評論 第54巻  
第2号
- 地学団体研究会仙台支部編 1980 「新編仙台の地学」 宝文堂
- なお、分布図の製作時に、石黒伸一朗氏、森剛男氏の御協力をいただいた。心より御礼申し上げる次第である。

## 第Ⅱ章 第2次調査

### 1. 調査の経過

この調査は、区画整理地内道路敷地に下水管が埋設される計画があるため、事前に実行されたものである。遺跡の範囲として遺跡分布図に線引きしていなかったところは既に埋設工事が完了しており、もちろん道路本体は舗装されていないものの、水田の上に盛土されて形をなしていた。

このような状況の中で仮杭を打ち、まずバックホーで道路の盛土及び旧水田の田床下面までの土砂を排除した。この段階で道路中心線を中軸として両側に3m幅、計6m幅のトレンチを設定し、それぞれ第1、第2、第3トレンチとし、この3本のトレンチの交わる地点を第4トレンチとした。また中心軸の両側を第1トレンチではA、B、第2トレンチではE、F、第3トレンチではC、Dと分け、さらにそれらを3×3mのグリッドに分割し、1、2、3……と呼称することにした。しかしながら、実際の掘削段階では、境界線と堆土の問題があり、各トレンチのグリッドは3×2.5m程にならざるを得なかった。

第4層上面で平安時代の面が確認されたが、荒川の氾濫原であったため、その検出には困難を伴う。その後、試掘溝を設定し、その下の層のあり方を確認しながら縄文時代の包含層を検出した。再度バックホーを入れて縄文時代の包含層面を全体的に検出した。縄文時代の遺構はさほど多いものではなかったが、包含層は大別して3層確認され、多量の土器片が検出された。

この調査期間中には、6月の梅雨、9月から10月の台風の雨により、深さ約2mのトレンチ内が水没することが度々あり、また第1、第2トレンチの南壁をはじめとして、ほとんど崩落するということもあり、調査が遅れがちで、しかも遺物に層位不明のものが多少見つかる状況も生じた。

### 2. 基本層序

2次調査区の基本層序は、縄文時代の包含層の存在の有無を確認するために試掘した、第2トレンチE-14区北壁に見られる堆積層を基本とした（第16図下段西半）。しかし、第9層については第2トレンチでは認められず、第1トレンチ及び第3トレンチで観察された層をこれに該当させた。また、盛土については区別した。

盛土 最近の土地区画整理事業に伴って盛土された土層である（現表土）。

第1層 2.5YR 4/1暗灰黄色粘土質シルト。第1層は水田耕作土である。第3トレンチではさらに細分され、下部層は小礫（径20mm前後）や白色バミスを含む（1b層）。

仙台市宮沢長町二地区画事業地内



第13図 采掘調査区位置図

盛土する前に削平を受けており、本来の地表面は不明である。わずかに上師器の細片を含む。

- 第2層 10YR 4/3 鈍い黄褐色粘土質シルト。第2層は第1層に伴う床土である。この層は、第3トレンチでは検出されない。
- 第3層 2.5Y 4/2 黄灰色シルト。第3層は、少量の炭化物・マンガンを含む。本層はさらに2層に細分されるが、第3トレンチでは区別できない。第3トレンチでは小礫（約2cm）及びバミスが含まれ、特に北部で顕著である。
- 第4層 2.5Y 5/3 黄褐色シルト。第4層は無造物層と考えられ、平安時代の住居跡や溝はこの層を掘り込んで構築されている。1号河川跡及び2号河川跡に流れ込んでいる。また、1号河川跡では、4層の下部の堆積層中にも平安時代の遺物が多く認められる。したがって、この4層は平安時代のある時期に短期間に堆積した可能性が考えられる。本層には、酸化鉄・マンガン・炭化物を少量含む。後述する河川跡の堆積層はこの層を境に上部と下部に分離した。
- 第5層 10YR 3/1 黒褐色粘土質シルト。バミス及び凝灰質砂岩の粒子や酸化鉄を含む。クラックの発達が顕著である。古墳時代前半の遺物を包含するが、本層が古墳時代に形成された層であるか明らかではない。第3トレンチではさらにa、b、cに細分される。このうち、3号溝は5e層上面より検出された。
- 第6層 10YR 4/2 灰黄褐色シルト。バミス及び凝灰質砂岩の粒子そして粗砂を多く含み、炭化物や酸化鉄をわずかに含む。
- 第7層 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト。凝灰質砂岩の粒子を多量に、マンガン・酸化鉄をわずかに含む。
- 第8層 10YR 2/1 黒色粘土質シルト。炭化物を含み、クラックの発達が顕著である。本層は縄文時代後期の包含層であり、主に第Ⅱ群～第Ⅳ群土器を含む。
- 第9層 2.5YR 3/1 黑褐色シルト質粘土。本層は、主に第1・第3・第4トレンチに存在し、第2トレンチでは欠如しており、わずかに南壁の南西部で認められるにすぎない。遺物の出土は極めて少ない。
- 第10層 10YR 2/1 黒色粘土質シルト。大小の円礫・亜円礫（2～20cm）を含み、クラックが認められる。本層は、復元可能な土器を多く含み、主に第Ⅱ群・第Ⅲ群・第Ⅳ群土器を含む。第2トレンチ東部では、2層に細分される。
- 第11層 黑褐色粘土質シルト。本層は、グライ化が顕著でさらに3層に細分される。主に第Ⅰ群～第Ⅳ群・第Ⅴ群土器を含む。
- a層 10YR 3/1 黑褐色粘土質シルト。遺物・サンドパイプを多量に含み、小円礫（2

～5 cm)・骨片(骨粉)・炭化物を含む。円礫については、第10層のものも同様であるが、遺物の集中する地点(特に第2トレンチ)に多いことから人為的に運ばれてきた可能性が考えられる。主に第Ⅶ群・第Ⅷ群土器を含む。

b層 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト。遺物・サンドパイプを多く含み、小円礫・炭化物を含む。このうち、円礫については、第4トレンチでは少なく、第1・第3トレンチではほとんど見られない。主に第Ⅱ群～第Ⅵ群土器を含む。

c層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。わずかに焼土や骨粉を含む。第2トレンチのE-10区からE-13区にかけてみられるが、他には存在しない。ほぼ純粹な第Ⅲ群土器の包含層であり、わずかに第Ⅰ群土器を伴う。

#### 河川堆積層

河川が埋没する過程で形成された層を対象とする。河川跡内には、基本層序の第4層の堆積が認められたが、これは除外した。また、この第4層を境として上部と下部に分離される。上部の堆積層は河川本流の堆積層ではなく、埋没後の凹地に堆積した層であるが、河川跡内にほぼ納まることから、一応ここで扱うこととした。こうした現象は、1号・2号河川跡に共通して認められる。

##### 1. 1号河川跡堆積層(第3トレンチ東壁セクション)(第17図)

(上部) 1層 5Y5/1 灰色粘土質シルト。炭化物・酸化鉄・バミス少量含む。

2層 10YR3/1 黑褐色粘土質シルト。土器・炭化種子(作物類)・炭化物・獸骨(馬)・バミスを含む。

3層 2.5Y4/2 暗褐色粘土質シルト。土器・炭化物・酸化鉄を含む。

4層 2.5Y5/3 黄褐色シルト。酸化鉄・バミスを含み、特に下部には白色火山灰のブロックを含む。

5層 2.5Y6/2 灰黄色シルト。白色火山灰を多く含み、河川跡の両岸に顯著に認められる。火山灰のブロックが連續して認められることから、平安時代に降下した火山灰の2次堆積層であると考えられる。

(下部) 6層 2.5Y5/2 暗褐色粘土質シルト。酸化鉄・炭化物を含む。

7層 2.5Y5/3 黄褐色砂。酸化鉄を多量に含む。

8層 2.5Y5/2 暗褐色砂質シルト。酸化鉄・土器を含む。

9層 7.5Y5/2灰オリーブ砂質シルト。酸化鉄・土器少量含む。C-5区より出土した馬の上腕骨及び木製品はこの層に対応する層より出土している。

10層 10YR4/6 暗褐色砂。亜円礫(0.5～3 cm)を多量に含む。

- 11層 10Y R 4/2 灰黃褐色シルト。バミス・暗褐色土ブロックを含む。
- 12層 7.5Y5/2 嵐オリーブ色砂質シルト。有機物（木葉、果実）少量含む。
- 13層 10G 5/1 緑灰色細砂。有機物層と細砂の互層となる。
- 14層 10Y R 3/2 黒褐色シルト。第5層、第6層の流入土と考えられる。
- 15層 10G Y 4/1 暗緑灰褐色細砂。有機物層と細砂の互層となる。
- 16層 10G 5/1 緑灰砂礫層。亜円礫（0.5～20cm）を多量に含み、土師器・須恵器を含む。
- 17層 5 G 4/1 暗緑灰砂。
- 18層 10Y 3/1 オリーブ黑色粘土。有機物と粘土の互層となる。このうち、有機物層中に粗砂を含む。

## 2. 2号河川跡堆積層（第2トレンチ北壁セクション）（第16図）

- （上部）1層 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。炭化物を少量含む。
- （2層）図には現われないが、1号河川跡2層に対応する層が存在する。馬の歯1点が出上している。
- （下部）3層 7.5YR4/6 褐色細砂。マンガンを少量含む。
- 4層 5 G 4/1 暗緑灰細砂。下部に有機物（木葉、樹皮等）を含む。
- 5層 5 G Y 4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土。黒色粘土層との互層となる。炭化物を少量含む。
- 6層 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂。円礫（1～2cm）を含む。
- 7層 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト質細砂。炭化物・黒色土ブロックを含む。
- 8層 10G Y 4/1 暗緑灰粗砂。円礫（1～3cm）を少量含む。

以上、1号・2号河川跡の堆積層について述べてきたが、1号及び2号河川跡の堆積層の内容に大きな差異が認められる。2号河川跡については、充分な調査が行なえなかったが、遺物は馬の歯以外はほとんど出土していない。また、明確な有機物層や砂礫層は確認できなかった。1号河川跡と2号河川跡の内容の差が、いかなる理由によるものかは明らかでない。

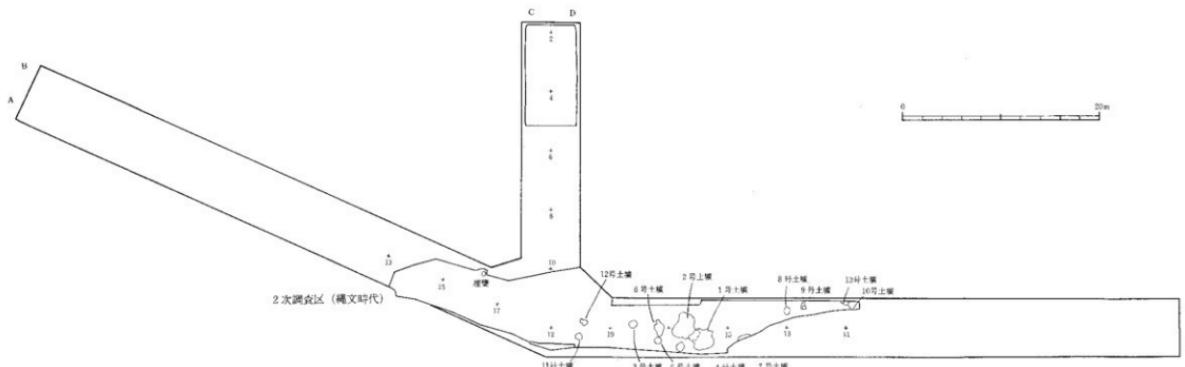
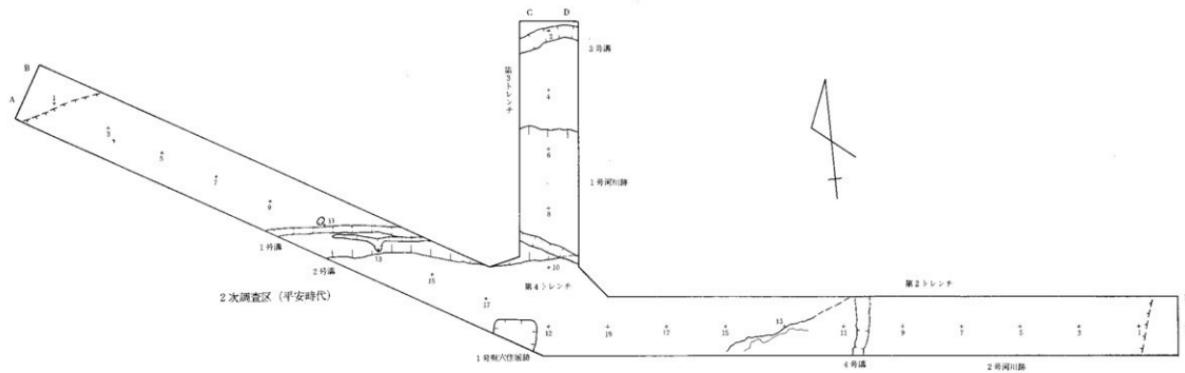
## 3. 遺構と遺物

### （1）縄文時代の遺構と遺物

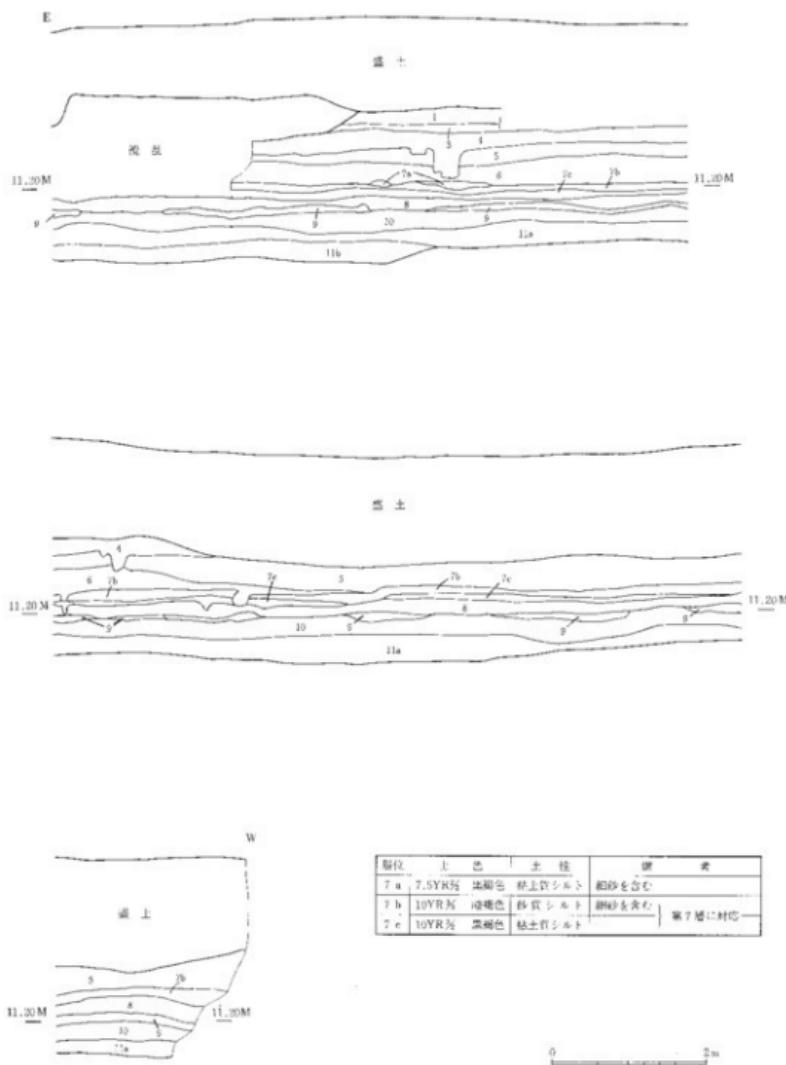
#### 1) 遺物の分類基準

##### (i) 土器の文様分類

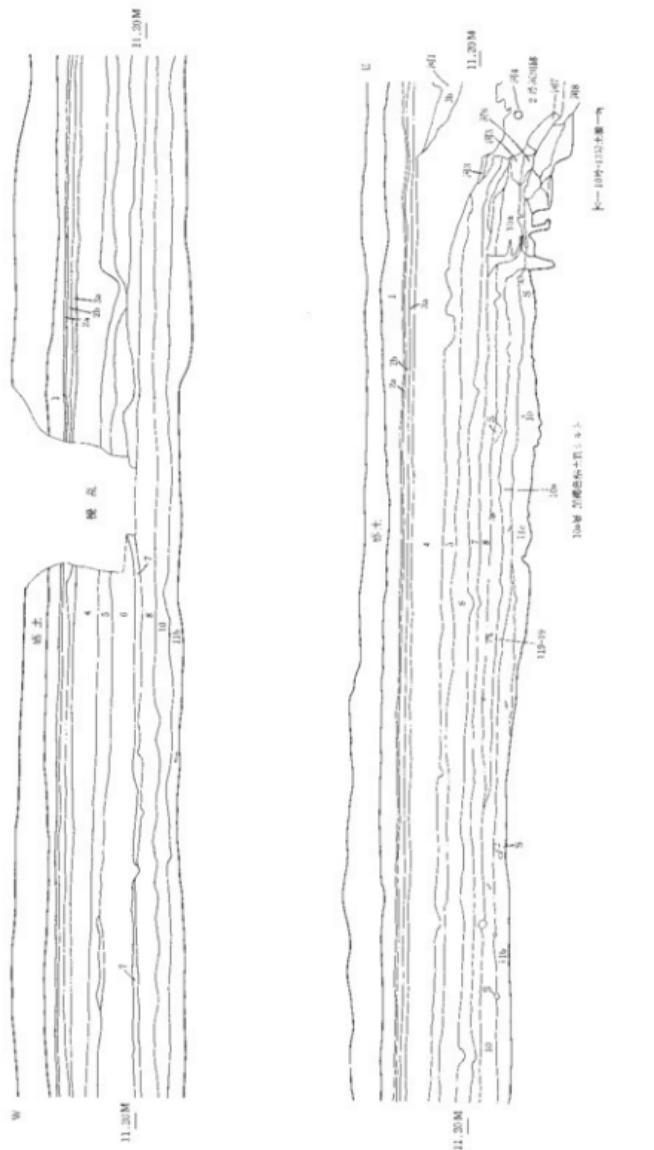
文様は、施文方法や表現方法によって各時代・各時期さらに地域差や分布圏を反映する。この文様は、土器の属性の中でも、大きな比重を占めていると言えよう。ここでは、時期別を



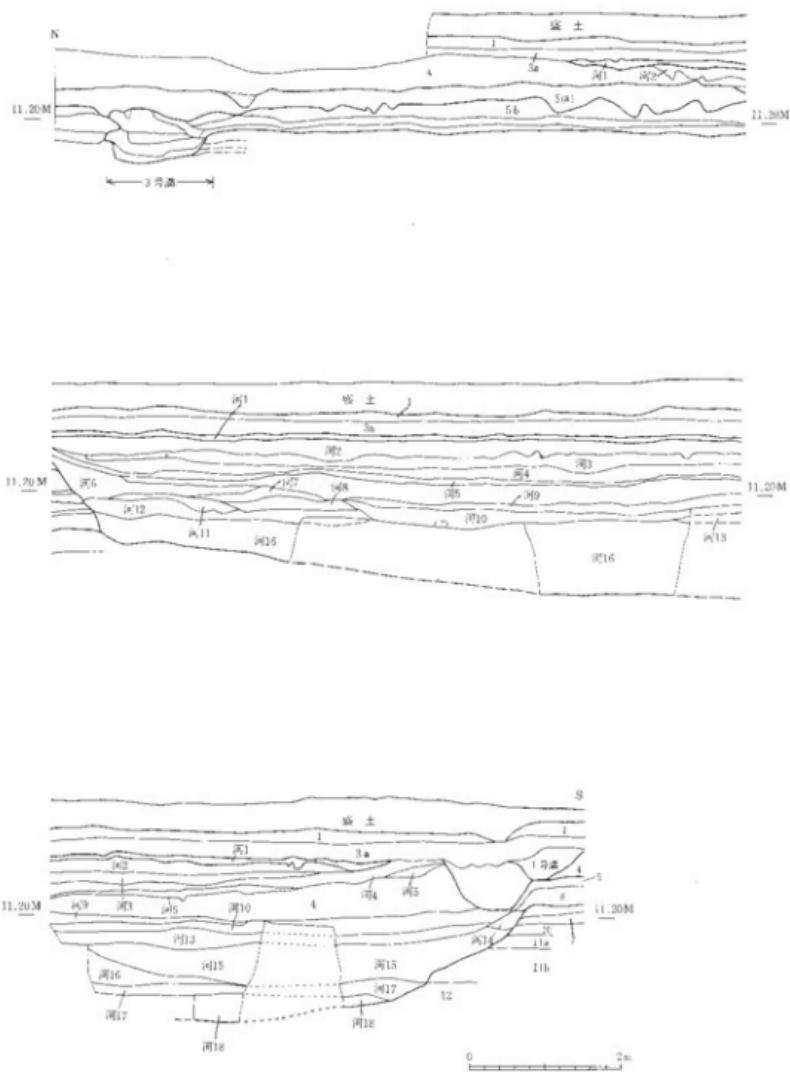
第14図 第2次調査区構造配置図



第15図 第1トレングル断面図（南壁面）



第16図 第2トレンチ断面図（北壁面）



第17図 第3トレンチ断面図（東壁面）

「群」で、文様類型を「類」で示し、さらに施文方法や表現方法によって分類できるものは、細分化した。

#### 第Ⅰ群土器

本群は、口縁部と胴部破片のみで、全体の器形を知り得るものはない。いずれも深鉢形土器の破片である。

1類 地文に縄文を施し、縦位の撚糸圧痕文と横位に展開する平行沈線文を施文する口縁部。

2類 地文に縄文を施し、横位や縦位の平行沈線文を施文し、この沈線文間に波状沈線文を施文する胴部。

#### 第Ⅱ群土器

本群は、第56図1や第57図1等、器形を推定できるものは少なく、他はすべて破片である。器形のバラエティーは見られず、すべて深鉢形土器である。本群は、文様を表現する沈線や隣帶によって3類に分類される。

1類 縄文のみを施文するもの。本類には、単節と複節が存在し、一般に原体の節は大きい。

2類 地文に縄文を施し、沈線によって種々の文様を表現するもの。本類は、沈線による渦巻文を特徴とする。

3類 地文に縄文を施し、隣帶の貼り付けによって文様を表現するもの。本進跡では、破片が多いため、便宜的に2種に細分した。

a. 直線的あるいは曲線的な表現をするもの。

b. 渦巻文を表現するもの。

#### 第Ⅲ群土器

本群に属するものは極めて少なく、また全体の器形を知り得るものはない。いずれも深鉢形土器の口縁部である。本群土器は、文様モチーフが縦位に展開し、大木8b式で盛行した渦巻文は退化する。ここでは、数量が極めて少ないため、文様の分類は行わなかった。

#### 第Ⅳ群土器

本群は、大部分が破片で、第27図に示した埋葬跡の埋設土器が唯一器形のわかる例である。本群は、施文方法によってさらに3類に細分される。

1類 縄文のみを施文するもの。本類には、単節と複節の両者が存在し、前者が多い。

2類 地文に縄文を施し、磨消縄文帯を隣帶と沈線（隣沈文）によって区画するもの。（本類に、充填縄文も含めた。）

3類 地文に縄文を施し、磨消縄文帯を沈線で区画するもの。（本類に充填縄文も含め

た。)

4類 地文に縄文を施文し、磨消縄文帯に円形の刺突文を施文するもの。

#### 第V群土器

本群は、いずれも細片で全体の様相を知りえるものがないが、いずれも深鉢形土器ではないかと考えられる。

1類 地文に網目状撚糸文を施文し、連続刺突文のある隆帶を貼付するもの。

2類 無文帯に刺みのある隆帶を貼付するもの。

3類 平行する沈線文間に連続刺突文を施文するもの。

4類 地文に撚糸文を施文し、平行沈線文に沿って連続刺突文を施文するもの。

#### 第VI群土器

本群は、破片の出土数は極めて多いが、実測可能な土器は極めてわずかである。したがって、破片の文様で分類を行っている。

1類 地文に縄文を施文し、沈線文によって文様を構成する深鉢形土器。

a . 口唇部に刻目をもつもの。本例はいずれも細片で、図示し得なかった。

b . 口縁部の無文帯を隆帶で区画するもの。

c . 口縁部無文帯を1条の沈線で区画するもの。

d . 口縁部無文帯を2～3条の沈線文で区画するもの。

e . 口唇部に1条の沈線文を施文するもの。

f . 平行する数条の沈線文を孤状に施文するもの。

g . 曲線文をもつもの。1～3条の沈線によって表現され、わらび手文や蛇行沈線文を含めた。

h . 湫巻状の沈線文をもつもの。

i . 同心円状の平行沈線文をもつもの。

j . 横位の平行沈線文をもつもの。

k . 平行する縱位沈線文を施文するもの。

l . 縦位の磨消縄文帯をもつもの。

2類 地文に撚糸文を施文し、沈線文によって文様を構成する深鉢形土器。

a . 口縁部無文帯を1条の沈線で区画するもの。口唇部直下に施すものもある。

b . 口縁部無文帯を2条以上の沈線文で区画するもの。

c . 口唇部に条が横位の撚糸文を施し、さらに、横位の隆帶を貼付したもの。

d . 複合縁に近い隆帶を貼付するもの。

e . 円形竹管文を連続施文するもの。

- f. 同心円及び渦巻文を施文するもの。
  - g. 連続刺突文を施文するもの。
  - h. 平行沈線文を数条施文するもの。本例には弧状に表現するものも含めた。
  - i. 脊部に横位沈線文を施文するもの。
  - j. 曲線文を施文するもの。沈線間を磨消するものやわらび手文を含めた。
  - k. 縱位の沈線文を施文するもの。
- 3類 沈線文で構成される深鉢形土器。
- a. 口縁部付近に円形刺突文をもつもの。
  - b. 横位の沈線文を施文するもの。1条ないし複数の沈線表現があり、特に口縁部付近に多く認められる。
  - c. 口縁部に、楕円及び三角形の区画文を施文するもの。
  - d. 頭部及び胸部上半に、沈線による楕円の区画文を施文するもの。
  - e. 半同心円状の沈線文を施文するもの。
  - f. カッコ状の沈線文及び斜位の曲線文を施文するもの。およそ3～5条の集合沈線で構成される。
  - g. fと同様であるが、太い沈線による曲線文を一括した。
  - h. 縱位の平行沈線文を施文するもの。稀に1条の沈線で表現するものも存在する。
  - i. その他の曲線文を一括した。
- 4類 隆帶によって文様区画のなされるもの。本類は口縁部に多く認められる。
- 5類 地文に繩文を施文し、さらに櫛描文で文様を構成するもの。
- 6類 地文に撚糸文を施文し、さらに櫛描文で文様を構成するもの。
- 7類 地文に櫛描文を施文し、さらに沈線文で文様を構成するもの。
- 8類 無文部が主体となる口縁部を一括した。
- a. 隆帶の貼付がみられるもの。b. 隆帶上に刺突のみられるもの。c. 口唇部付近に刺突あるいは刻目のみられるもの。d. 口縁部に横位沈線文（1条及び2条）を施文するもの。
- 第Ⅶ群土器
- 本群は、直線的、曲線的平行沈線で区画をし幾何学的な文様を構成する一群である。第Ⅵ群土器とは文様が横位に展開する点で異なる。区画された部分が磨消繩文となるものが多い。平行沈線の状態、地文の有無、磨消繩文の効果等で以下の9類型に分類される。
- 1類 口縁部付近に刻目のある横位の隆帶をもつもの。

- 2類 a. 平行沈線による磨消繩文を施されたもの。  
b. 平行沈線による充填繩文を施されたもの。
- 3類 平行沈線による幾何学文で構成されるもの。磨消繩文帯は三角形や菱形になる。
- 4類 平行沈線による曲線文で構成されるもの。
- 5類 地文に繩文を施し、平行沈線による曲線文で構成されたもの。磨消繩文のものとそうでないものがある。
- 6類 平行沈線による幾何学的な文様構成をもつもの。繩文等の地文は施されず沈線のみである。
- 7類 地文に繩文を施し、平行沈線を斜位に施文するもの。
- 8類 地文に繩文を施し、平行沈線を横位に施文するもの。
- 9類 口縁部に平行沈線を施文するもの。

#### 第Ⅵ群上器

本群は、横位に数段にわたる直線的平行沈線文を基本とする一群である。磨消繩文になるもの、内面への平行沈線文の施文、地文の種類等により以下の6類型に分類される。

- 1類 平行沈線による磨消繩文を数段重ねたもの。
- 2類 外面が無文となり、内面に数段の平行沈線を施文するもの。
- 3類 外面が無文となり、内面に連続刺突文をもつもの。
- 4類 地文に繩文を施文し、横位の平行沈線を数条施文するもの。
- 5類 地文に捺糸文を施文し、横位に平行沈線を数条施文するもの。
- 6類 隆帯によって文様を区画し、その間を円形刺突文によって構成するもの。

#### 第Ⅶ群土器

本群は、地文として繩文・捺糸文・櫛描文等を施文するだけの一群である。地文に加えてさらに沈線文等を施すなどの次なる工程がない装飾性の乏しいものー粗製土器ーとして捉えている(注1)。地文の種類、口縁部の無文帯の有無等で以下の8類型に分類される。

- 1類 地文が繩文のもの。さらに3種に細分した。  
a. 斜行繩文のもの。  
b. 横走する繩文のもの。  
c. 内面に格子状沈線をもつもの。
- 2類 地文が繩文と綾格文のもの。口縁部が無文帯になるものもある。
- 3類 地文が羽状繩文のもの。
- 4類 地文が捺糸文のもの。さらに2種に細分した。また、原体の太細、間隔の粗密、2種類の原体使用などにより違いがみられるが細分はしなかった。

- a . 摂糸文のみのもの。
  - b . 内面に格子状沈線をもつもの。
- 5類 地文が網目状摂糸文をもつもの。
- 6類 口縁部が無文帶となるもの。地文の種類、無文帶の区画方法により細分される。
- a . 地文が繩文となるもの。
    - a - 1 . 区画の文様がないもの。
    - a - 2 . 無文帶を沈線文で区画するもの。
    - a - 3 . 無文帶を押奈文で区画するもの。
    - a - 4 . 無文帶を格条体压痕文で区画するもの。
    - a - 5 . 無文帶を隆帶で区画するもの。
  - b . 地文が摂糸文のもの。
    - b - 1 . 区画の文様がないもの。
    - b - 2 . 無文帶を沈線文で区画するもの。
    - b - 4 . 無文帶を格条体压痕文で区画するもの。
    - b - 5 . 無文帶を隆帶で区画するもの。
- 7類 地文が櫛描文のもの。櫛歯状工具により1度に數本描くものと半截竹管によるものとがある。
- a . 直線的表現のもの。縱位のものと横位のものがある。
  - b . 曲線的表現をするもの。
    - b - 1 . 「( )」状の文様を連続施文するもの。
    - b - 2 . 流水文風のもの。
    - b - 3 . 同心円を表現したもの。
  - c . 櫛歯の間隔の広いもの。
    - c - 1 . 直線的なもの。
    - c - 2 . 曲線的なもの。
- 8類 地文としては何ら施文されず、無文のもの。

#### 第x群土器

本群は時期不明の土器を一括したものである。

(注1) 第Ⅱ章3-(1)-4「土器の製作技術について」を参照のこと。

##### (ii) 石器の分類基準

山口遺跡においては、主に第8~11層にかけて、石器が出土している。しかし、石器群を各層ごとに分割した場合、数量的に全体を代表できなくなる可能性が生じる。したがって、ここ

では、山口遺跡出土の全石器群を対象に、分類基準を考察することとする。

まず、大まかな分類を以下のように規定する。

- (1) 打製石器—加撃 (percussion) による石器製作が行なわれているもの。
- (2) 磨製石器—研磨によって石器製作がなされているもの（敲打によって形を整形するものを含む）。
- (3) 繰り素材とし、それに使用痕が付されているため、石器と認定できるもの。
- (4) 石製品

(1) 打製石器

- ① 剥片石器—石核から得られた石片（剥片）を素材として、それに二次加工が加えられることによって完成する石器。

(A) 意識的に尖頭部を形成する石器

意識的に尖頭部を形成した石器は、尖頭部とその他の部位（石核の基部は除外する）の外面形の側辺部に不連続点があるか、ないかで二分される。

外面形に不連続点をもたない石器の長幅分布を第2表に示した。(1)に著しい集中が認められる。更に(1)より長く細身のもの—(2)—と(1)と長幅指数は変わらないが大形のもの—(3)—に区分できる。これらを従来の定義に従って以下のように命名する。

(1)のまとまり—石核

(2)のまとまり—石核Ⅰ類

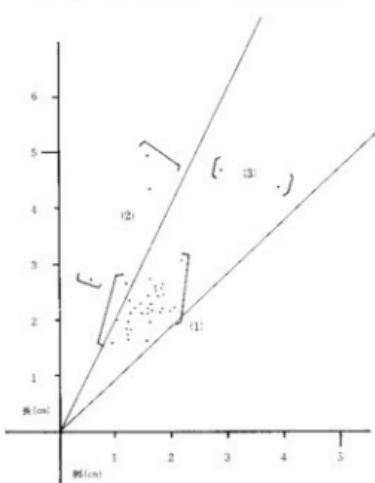
(3)のまとまり—ポイント

意識的に尖頭部を形成する石器の中で、外面形側辺部に不連続点をもつものを石核Ⅱ類と定義する。以下、各種の細分の基準について述べる。

(a) 石核の細分

属性表を第25表に示した。素材打点位置とは、腹面に素材面を残している場合、先端部を上にした場合、打点がどこに位置するかを示したものである。加工状況の両面加工とは、表裏いずれにも素材の面を残さないもの、両面とは片面に素材面を残すもの、周辺加工とは、両面いずれにも素材の面を残すことを示す。

第2表 尖頭部を形成する石器長幅相関図



石鎚は基部の形態によって以下に細分される。

I類 — 基部が凸出するもの（凸基の石鎚）。

a類 凸部が明確で、えぐり（かえし）が入るもの。

b類 凸部が不明確でにぶく尖がるもの。

II類 — 基部が平縁のもの（平基の石鎚）。

III類 — 基部が凹入するもの（凹基の石鎚）。

#### (b) 石鎚の細分

属性表を第26表に示した。石鎚は先に述べたように、外面形側面に不連続点をもつものともたないものに分けられる。

I類 先端部と基部の境界がないもの。したがって全体的形状はポイント状を呈する。

II類 先端部と基部の境界が明確なもの。その形状、製作技術によって細分可能である。

II a類 先端部が長く、人念に両面から調整されているもの。通常、基部にも二次加工がくわえられるのが普通である。

II b類 剣片の一端に小さな尖頭部を形成したもの。剣片の尖鋭な部分を選択し、そこにわずかな調整を施しただけのものである。外面形は、剣片の形状に左右され、一定のかたちをなさない。

II c類 先端部が複数形成されているもの。

#### (c) ポイントの細分

属性表を第27表に示した。2点のみ完形品が認められるだけなので、数量的に細分は不可能である。

#### (B) 意識的に尖頭部を形成しない石器

##### (a) 石匙 — つまみ部を形成した石器

本来「つまみ部」とは、他の属性と相入れない独立した属性ではない。したがって、つまみ部を有した尖頭器などが存在する場合には、石匙の定義は複雑な問題を含むこととなる。しかし、本遺跡出土のつまみ部を有する石器においては、他の部位に、必ず連続する二次加工を施された部位があることで共通する。ここでは、スクレイバーの一種として、つまみ部を有する石器を一括して石匙と定義する。

石匙の属性表を第28表に示した。素材打点位置とは、つまみ部を上にした時、素材の打点の位置がどこにくるかを示したものである。つまみ形成とは、つまみ形成の剣離が、腹面→背面の方向でなされているものを「+」、背面から腹面になされているものを「-」とした。素材背面側を表、つまみ部を上にして、左右を決定し、+と-が複合する場合には、切り合いの新しい方を上に表示している。主要な刃部がつまみ部と相対する縁辺に位置する、いわゆる横形

の石匙は存在しない。また、刃部の属性によって、細分するには、総数7点と量的に貧弱なため、一応、一括して石匙としておく。

(b) ピエス・エスキュー

両極加撃の痕跡を残し、しかも、二ヶ一対の潰れ状の刃部を有する四角形の石器をピエス・エスキューと定義する。

両極加撃の痕跡をもつ剝離面は以下のような特徴をもつて区分可能である。

- ・ 剥離面は平坦で、リングは密に認められる。
- ・ 剥離面の中に、反対縁に及び、しかも加撃方向が、いずれの側の方向からも向かうものが認められる。

潰れ状の刃部は、二ヶ一対であること、背面側、腹面側のいずれにも及ぶことを特徴とし、二ヶ一対にならないもの、片面だけに剥離痕が認められるものなどは除外する。ピエス・エスキューは、二ヶ一対の刃部が一つであるか、二つであるか、また碎片が剥出された状況などから細分できる。しかし本遺跡では数量的に乏しいため、一括してとらえておきたい。

(c) その他の石器

従来、不定形石器、スクレイパーなどと規定されている石器である。これらの石器は現在のところ、明確な分類基準が確立していない。この原因は以下の二点に求められる。

- ・ これらの中に定型的石器の未成品を含む可能性が高いこと。各々の定型的石器の製作過程が明らかにされ、未成品を除外しない限り、本来のまとまりが明確にならない可能性が高い。
  - ・ この種の石器の中には、単に機能部位を形成することのみを目的とするものが多く含まれている可能性が高いこと。したがって全体的な「形」を基準に分類を行なうことができない。
- 本遺跡でも、この種の石器は数量的には、剝片石器の主体を占めている。ここでは、この種の石器を以下に二分しておく。

- (イ) 全体的外形状にある程度のまとまりを有するもの。便宜的に不定形石器と総称する。
- (ロ) 連續的な二次加工をくわえることによって、刃部を形成するもの。スクレイパーと総称する。

(イ) 不定期石器

I類 — 全体的形状は台形、もしくはほぼ橢円形を呈する。加工は両面加工、もしくは剝離加工で、末端に平縁な刃部を形成するもの。石器の最大幅は刃部側もしくは中央部にある。従来ヘラ状石器と規定されているものに最も類似する。しかし、その刃部の加工方法、側辺部の作り出しなどが異なっており、又、破損品が多いことなどから、あえて不定形石器の一類としておく。(第129図15~18、第134図24)

II類 — 厚手の綫長剝片を素材として、側辺部、先端部に急角度な加工がくわえられ、先端

部が、にぶくとがるもの。(第134図28、29)

Ⅲ類 — 削片を素材として、折断を行なって一定の「形」をととのえた後、連続的な二次加工をくわえたもの。形は三角形、もしくは四角形となるものが多い。厳密に折れ面が意図的なものか、破損によるものかを区別することは現状では難かしい。ここでは、二次加工が、折れ面を切っているもの、もしくは折れ面に更に二次加工がくわえられているものを意図的な「折り」と規定した。

(d) スクレイパー

連続的な二次加工によって刃部を形成した石器。全体の形を一定にする意図は、あまり認められない。素材と刃部の相対的位置関係、刃部の形状によって以下に細分する。

I類 — 石器の長軸に平行な縁辺（多くは縱長削片の側辺部）に刃部を形成した石器で、刃部が直線的なもの。いわゆるサイド・スクレイパーにあたる。

II類 — 石器の長軸に直交する縁辺に刃部を形成した石器である。刃部は多くの場合は弧状となる。いわゆるエンド・スクレイパーである。

III類 — 二次加工によって一個、あるいは連続しない凹形の刃部を形成したもの。いわゆるノッチである。

IV類 — 二次加工によって、凹部が連続するジグザグな刃部を形成するもの。いわゆる鋸歯縁石器（デンティキュレイト）である。

この他、破損して全体の形状が不明なもの、あるいは特殊なもので、一点しか存在しないものもある。これらについては後の各層の出土遺物の項で論することとする。

② 石核石器

礫を素材にして、それに加工を加えることによって、石器が製作されているもの。1点のみ出土している。(第137図37)

(2) 磨製石器

石器が研磨によって製作されているもの。敲打によって形が成形されているものも…応含めておく。

① 磨製石斧 — 斧形で最終段階で研磨がなされているもの。3例あるが、いずれも破損品で、細分は不可能である。

② 石棒 — 敲打のあと、研磨がなされ、棒状に整形されたもの。破損品1点あるのみである。刃部は形成されない。

③ 石刀 — 一側辺にのみ刃が付されているもの。破損品1点が出土しているのみであり、詳細は不明である。

④ 石皿 — 大形で、広い平坦面あるいは、やや凹んだ面が作り出されているもの。軟質な

石材を用い、敲打によって整形されている。ややもりあがった「ふち部」をもつもの—〔I類とふちをもたない〕類に細分できる。

(3) 碓を素材として、それに使用痕が付されているため石器と認定されるもの。

從来、敲石、磨石、凹石などと呼ばれている石器である。この種の石器は円礫を獲得し、それを使用することによって形成された石器である。しかも、三種の使用痕は、各々独立して付されているわけではなく、多くの場合、それらが組み合って一つの石器が形成されている。したがって、礫を選択する時の目的意識を重視し、まず形態のまとまりをとらえ、それと使用痕の関係を考察しなければならない。北海道聖山遺跡の資料について、そのような詳細な分析がなされている(注1、後藤、1979)。ここでは、それにのっとり概略的ではあるが、分類を行なっておく。尚、詳細は属性表第29表を参照されたい。

まず、この種の石器の長幅分布を第3表に示した。この中で図中の〔I〕、〔II〕、〔III〕、は分布の中心から、除外される。

〔I〕は長さ5~7cm、幅3~4cmの小形の一群で、使用痕は打痕に限定される。石材も極めて硬質であることで共通する。これを敲石I類と規定する。

〔II〕は長幅指数、約100程度の扁平礫を素材とし、最大幅を有する縁辺上に剝離面状の打痕を有している。これを敲石II類と規定する。

〔III〕は極めて大形の円礫で、使用痕は凹痕に限定される。これを凹石I類と規定する。

さらに、図には表示できなかったが、多孔質かつ軟質な不定形の石材を用いるものがある。使用痕は凹痕に限定される。これを凹石II類と規定し、「不定形」という特徴を〔IV〕としておく。

〔I〕~〔IV〕を除外したすべてについて、縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を表示したものが第4表である。図上に〔V〕~〔IX〕のまとまりを認定する。さらに、〔V〕と〔VI〕の中には、少數ではあるが、軽質でもろく、一見して他から区別される石材を用いているものがある(図中ではXで表示、属性表ではCで表示)。これを便宜的に〔V〕、〔VI〕とする。

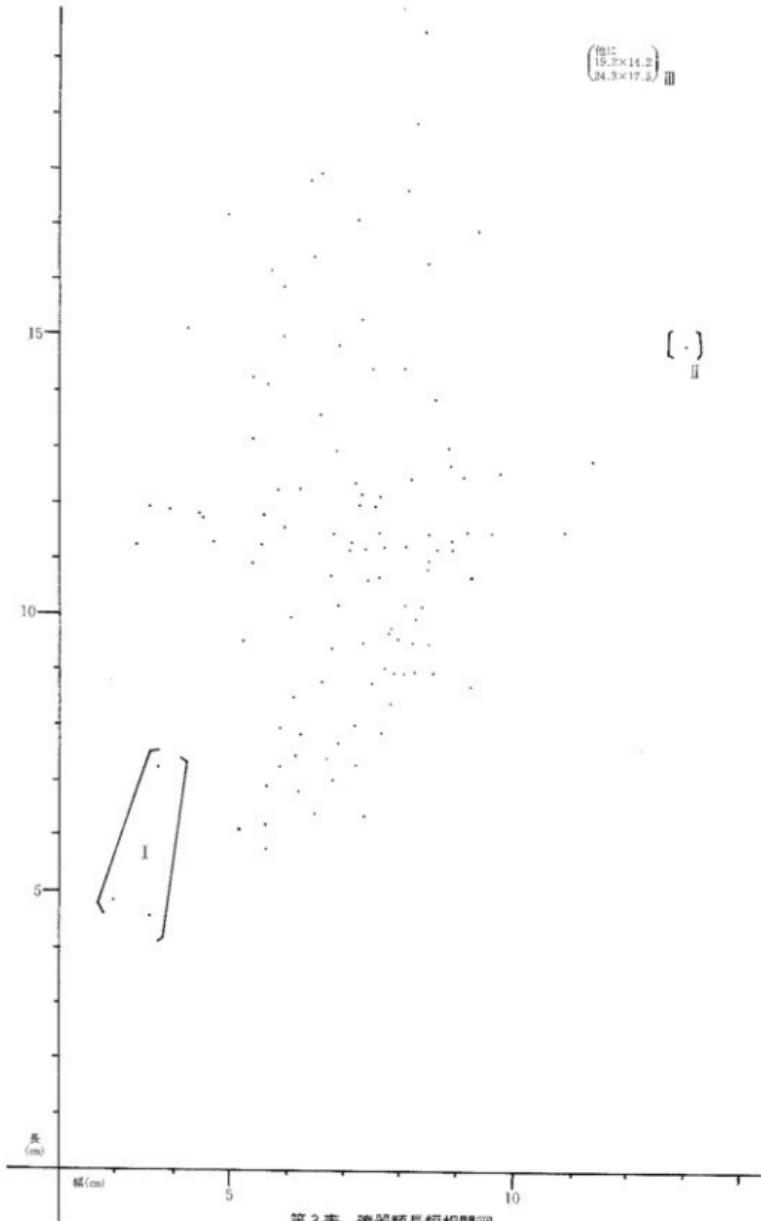
以上から、この種の石器は、形態から〔I〕~〔IX〕に、さらに頭著な石材に注目し、〔V〕、〔VI〕を区分すれば、11種類に区分されることとなる。

この形態の区分と使用痕の関連をみてみることとする。まず各々の形態と、使用痕の組み合わせを示したのが第6表である。さらに各々の使用痕の有無と形態の関係を表示したのが第7表である。また長/幅と厚/幅の相關図に、磨痕だけをもつもの、打痕だけをもつものの分布範囲を合成したのが第5表である。これらのデータから以下の事が読みとれる。

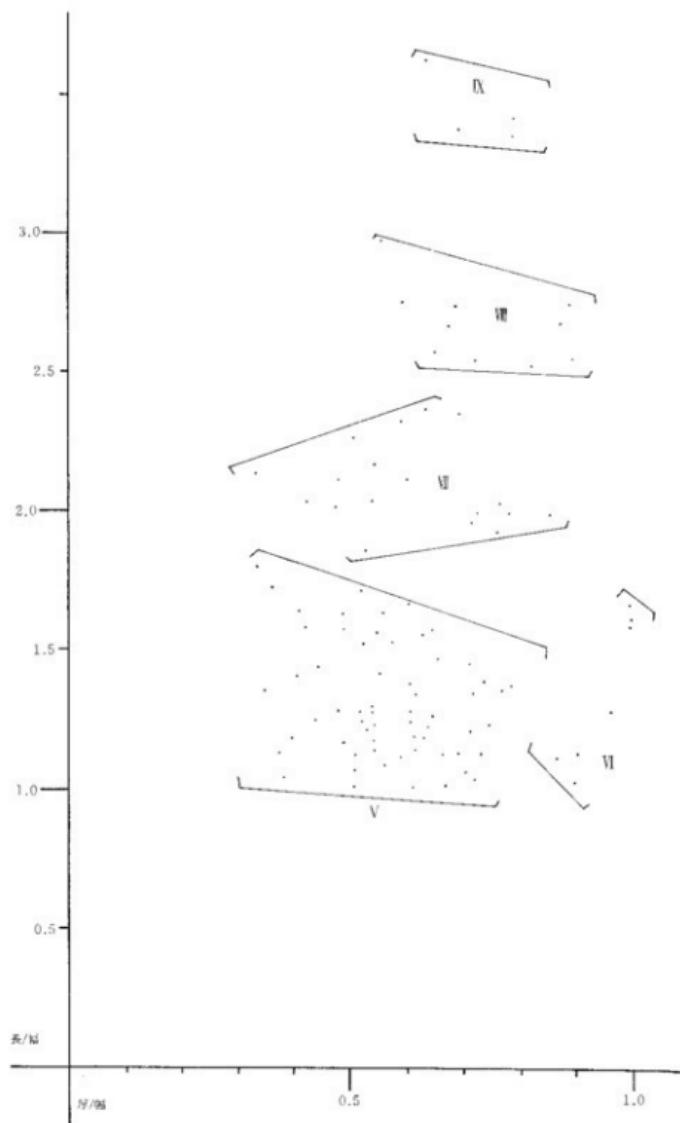
- ① 形態IVには、打痕のみを持つものしか存在しない。
- ② 形態VIは、一応凹痕が、かろうじて認められたが、全面的に二次的な磨滅が著しく、他の使用痕については言及できない。この〔VI〕を除けばVI類よりも細身のもの(長幅指数1.9

$(\frac{19.2}{24.3} \times 14.2)$

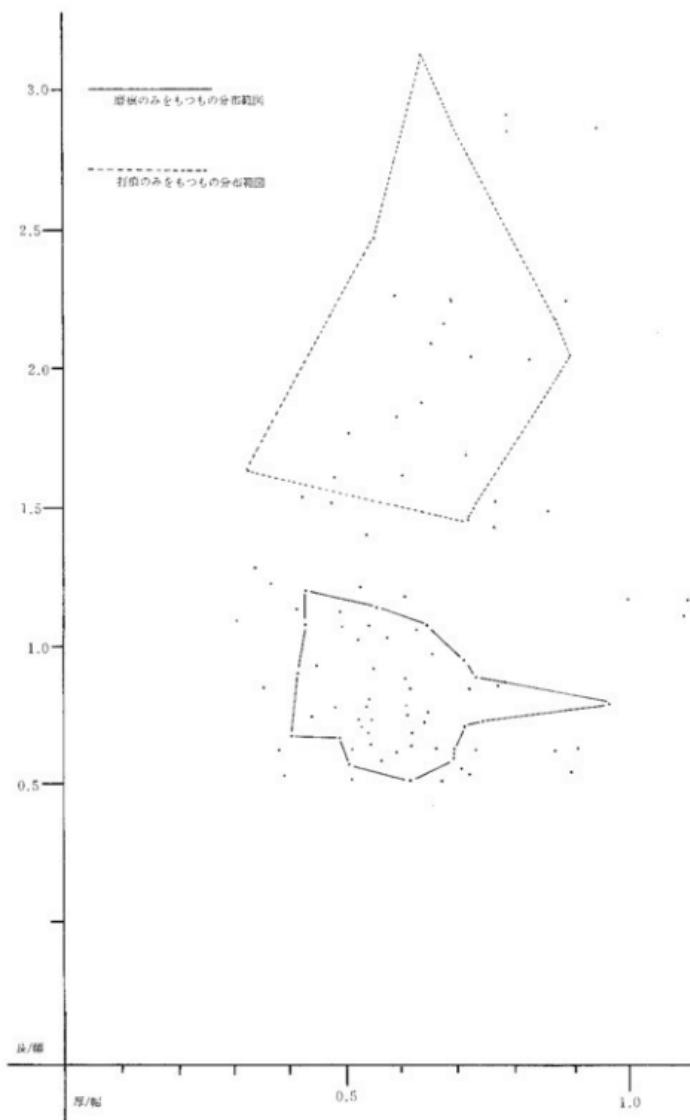
[ ]  
II



第3表 碳器類長幅相関図



第4表 瓦器類長幅厚幅相關図(1)



第5表 嗜器類長幅厚幅相関図(2)

形態	磨痕	打痕	凹痕	磨+打痕	打+凹痕	磨+打+凹痕
V	17	1	6	15	1	20
V'	1		1	2		2
VI		4			1	6
VI'		(3)				
VII	3			5		3
IX	3					

形態	磨痕をもつもの	磨痕をもつないもの	打痕をもつもの	打痕をもつないもの	凹痕をもつもの	凹痕をもつないもの
V	58	0	26	22	35	23
V'	2	1	3	0	3	0
VI	4	0	2	2	2	2
VI'	6	5	11	0	7	4
VII	(0)	(3)	(0)	(3)	(3)	(0)
VIII	3	8	11	0	8	3
IX	0	3	3	0	0	3

以上)には必ず打痕が認められる。

- ③ 形態[V]、[V']、[VI]について、わずか1例を除けば、磨痕が普遍的に認められる。
  - ④ [VI']を除外すれば、磨痕は[V]～[VI]、→[VII]→[VIII]→[IX]と順次結びつきが弱くなり、逆に打痕を有するものは、順次、その比重を増す。一方、凹痕は[IX]類を除けば、いずれの形態にも認められる。いいかえるならば、細身になるにつれ、磨痕との結びつきが薄くなり、逆に打痕との結びつきが強くなる。
  - ⑤ 打痕のみをもつもの、磨痕のみをもつものの分布を全体の中でみれば、打痕のみのものは[V]～[IX]にまたがり、磨痕のみのものは、V～VIの分布の中心に位置する。さらに、両者の分布は重複することはない。
- 以上から、[V]～[VI]は磨痕との結びつきが強く、[VI]～[IX]([VI]は一応除外する)は打痕との結びつきが強いので、それぞれ磨石、敲石と一応よぶこととする。さらにその形態に応じ、[V]を磨石I類、[V']を磨石II類、[VI]を磨石III類、[VI']を敲石III類、[VII]を敲石IV類、[VIII]を敲石V類と規定する。なお[V']の磨痕を持たない1点、さらに使用痕の全体が把握できない[V]については、命名の仕様がないため、一応礫石器類としておく。以下この分類をまとめておく。

磨石I類 — 極めて大形の円盤に凹痕がつけられているもの。

磨石II類 — 不定形の軟質多孔質な石材に凹痕がつけられているもの。

磨石III類 — 長さ5～7cmの小形の一群に打痕が認められるもの。

磨石IV類 — 長幅指数100の大形の扁平礫に斜面状の打痕が認められるもの。

磨石V類 — 長幅指数190以上240以下の一群。打痕の他、磨痕、凹痕を組み合わせて有している場合もある。

敲石VI類 — 長幅指数250以上300以下の一群。打痕の他、磨痕、凹痕を組み合わせて有し

ている場合もある。

敲石Ⅴ類 — 長幅指数330以上の打痕をもつ一群。

磨石Ⅰ類 — 略楕円形の礫に磨痕が認められるもの。多くは打痕、凹痕を組み合わせて有する。

磨石Ⅱ類 — 形態は磨石Ⅰ類と同様であるが、軟質な石材を用いているもの。

磨石Ⅲ類 — I・II類よりも部厚い一群。凹痕、打痕を組み合わせでもつ場合が多い。

その他礫素材で、使用痕で認識できる石器に砥石類がある。これらは以下の様に分類できる。

砥石Ⅰ類 — 角礫の一面に磨痕もしくは擦痕が認められるもの。

砥石Ⅱ類 — 使用部分が凹むもの。

II a類 線状に凹むもの。多くは軟質な不定形の石材を用いる。

II b類 溝状に凹むもの。II a類よりも凹みの幅が広いもの。

(注1) 後藤秀一 1979「峰下型山遺跡、第5章 XI、XII」PP 166~171. 七飯町教育委員会

#### (4) 石製品

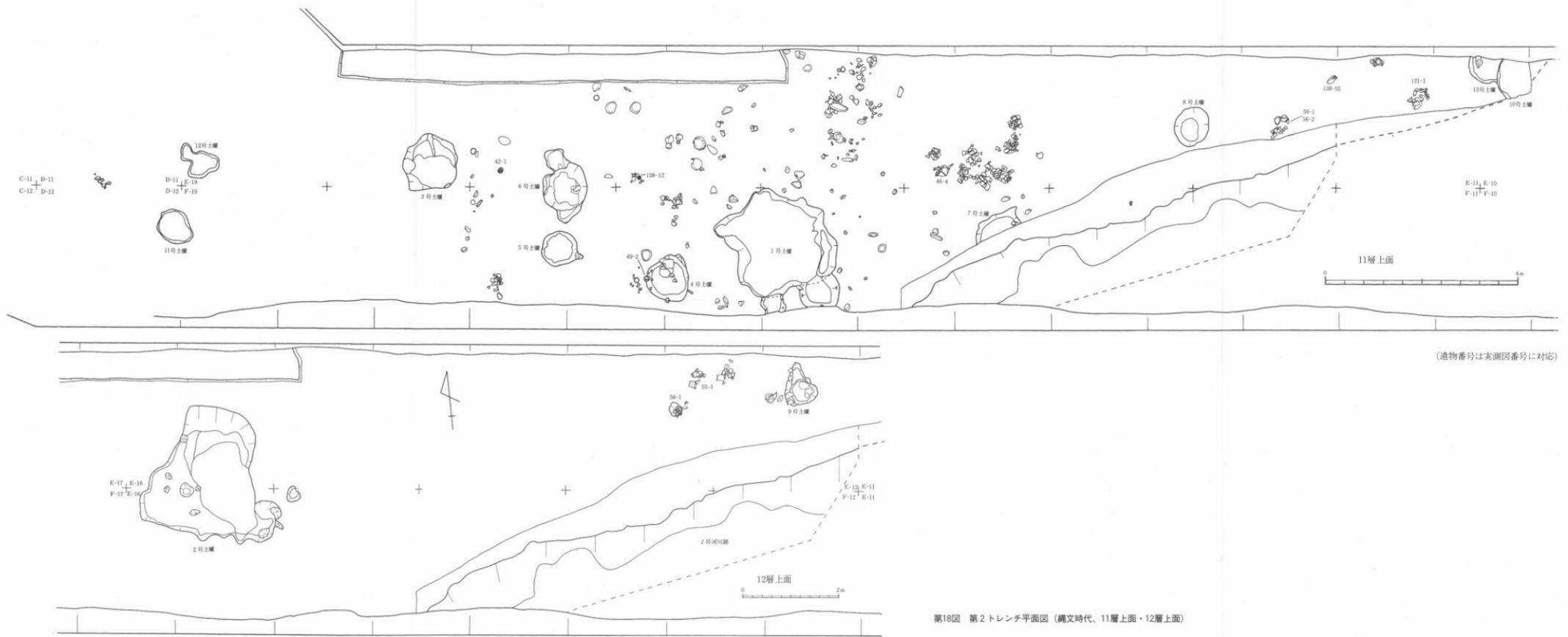
2点出土している。その特徴の詳細については各層の出土遺物の項でのべることとしたい。

### 2) 遺構と遺構内出土遺物

#### 埋甕跡（第20図、図版3-1）

B-16区の1号河川跡のすぐ南側に位置し、11b層に類似する層の上面より確認された。掘り方である上縁は、埋設土器よりも1回り大きくなられ、規模は約0.55×0.4m、深さ31cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋設された土器は、第IV群に属し、胴部上半に最大径をもつ深鉢形土器である。口縁部の大部分と底部を欠くが、このうち、底部は意識的に欠いている。本例は、胴下半に火熱を受けていることから、実用品を転用したものと思われる。埋土は5層で構成されている。埋甕は、一般に埋葬用と言われているが、本例からは土器片が出土したものの、骨片などの遺構の性格が判明するような遺物は何ら得られなかった。

土器（第26図）は、底部から外傾して胴部に至り、胴部上半から口縁部にかけて内溝し、口唇部付近ではほぼ直立する。この時期の器形としては特異な存在であり、稀少な形態と言えるであろう。口縁部は無文で丁寧に磨かれ、2ヶ所に焼成前の穿孔が見られる。また、口縁部は波状を呈し、1対は確認できるが、本来は2対4単位の波状口縁であった可能性が考えられる。胴部のJ字状のモチーフの位置と波状部がほぼ対応する。文様モチーフは、地文に縄文（L R）を施し、隆帯によってモチーフが区画され、変形J字状に地文を残し、周囲を磨消している。変形のJ字状のモチーフは4単位見られ、さらに、長楕円のモチーフを充填している。モチーフを引き立てるためか、これらのモチーフの下位には、波状の隆帯の貼り付けがみられる。これは、大木10式土器の特徴の1つと言えよう。胴下部には縦位に磨きがなされている。

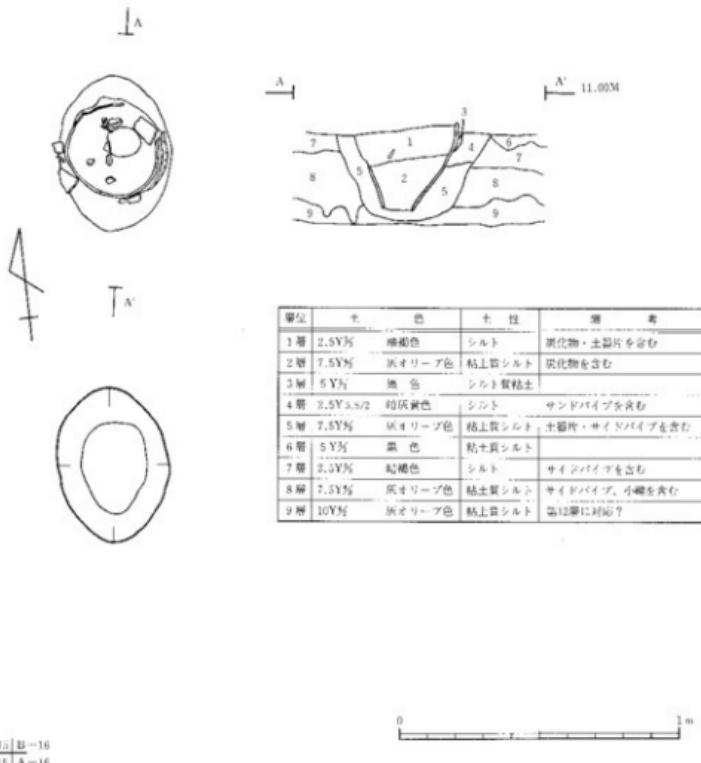


第18図 第2トレンチ平面図（縄文時代、11層上面・12層上面）



(遺物番号は実測図番号に対応)

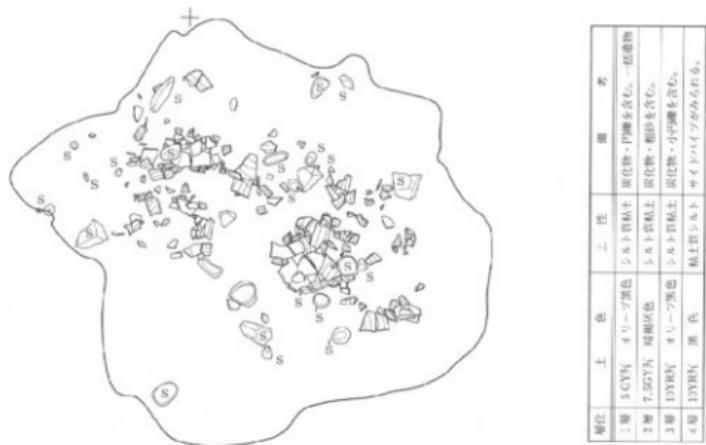
第19図 第3 トレンチ平面図（縄文時代）



第20図 埋蔵跡実測図

### 1号土壤（第21図、図版3-1・2）

F-15区、11層上面で確認された不定形の形態を呈する土壤である。規模は $2.66 \times 2.29\text{m}$ 、深さ47cmを測る。土壤内の中央部は、さらに一段下がっており、ちょうど一段目の横底は、テラス状を呈している。この部分に、ピットが集中して検出されたが、形態や規模は不規則である。埋土は、6層で構成されている。出土遺物は、1層中より多量に出土し、2層では少量出土し、他の層ではほとんど出土していない。1層中の土器は、面をなして出土していることから一括で破棄されたようなものと推定される。土壤自体は、不定形で凹凸が激しく、定形化されたものではないことから、性格については不明である。



1号土壤遺物出土状況平面図



第21図 1号土壤実測図

〈出土遺物〉(第27~31図、図版16-1、図版18-1~3、図版41-2・3・8・10)

第27図1は深鉢形土器で第Ⅷ群の土器に分類される。口縁部は低い山形状の突起が5~6対ある。胴部には横走ないし斜行するL R 銀文、R 摺糸文が施される。底部は網代痕である。第27図2~4は深鉢形土器の底部と考えられる。2には木葉痕がある。第28図1、2は深鉢形土器である。1は口縁部に4個の山形突起があり、その頂上部には3つの刻みが施されている。第Ⅷ群土器1類に属する。2も口縁部に4個の山形突起があり、胴部にはRの摺糸文が施される。第Ⅷ群土器4類に属する。第29図1~6は第Ⅶ群に、7は第Ⅸ群土器に属する。第29図8~15、第30図、第31図1~8は第Ⅹ群土器に属する。第31図9、10は円盤状土製品である。9は胴部片を素材とした半欠品、10は口縁部片を素材とした完形品である。

第31図11~15は石器である。11、12は石錐で、11はII b類、12はII a類に属する。11は小形の剝片を素材とし、大まかに形を整形した後、鋸向剝離によって先端部を形成している。石錐の先端部形成に鋸向剝離を用いる例は他に1例あり、先端部断面形を菱形にするためには有効であったものと考えられる。12は剝片を素材とし、その末端部に長い先端部を形成している。先端部形成に関わらない剝離はみられない。先端部形成に際して、剝片を縱に折断し、断面を大まかに四角形に整形したのち、二次加工が加えられている。13はビエス・エスキューである。剝片を四角形に折断したのち、四ヶ二対の潰れ状の刃部が形成されている。対応する刃部のうち、一方(図上下の刃部では「上」、左右では左図の左)に剝離が密で、他の部分においては、剝離はわずかに認められるにすぎない。ビエス・エスキューとして使用される前段階に、折断によって整形がなされたことを示す興味深い資料である。14はスクレイパーI類に属するものと思われる。上半部が欠損しており、全体の形状は明らかではない。素材は縦長剝片であった可能性が高く、一侧辺に腹面→背面の連続的な加工が加えられている。15は磨石II類に属する。片面に磨痕、凹痕さらに周辺部に潰れ状の打痕が認められる。石質は極めて軟質であり、磨石の中では相対的に小さいものである。

この土壤の時期は出土遺物より第Ⅸ群土器の時期に相当するものと推定される。

第8表 1号土壤内ピット一覧表

番号	規格(cm)	深さ(cm)	備考	番号	規格(cm)	深さ(cm)	備考
P <sub>1</sub>	16×10	8		P <sub>11</sub>	19×12	9	
P <sub>2</sub>	24×21	15		P <sub>12</sub>	20×15	16	
P <sub>3</sub>	—×16	15		P <sub>13</sub>	29×22 (20×18)	47	2段構造
P <sub>4</sub>	13×13	10		P <sub>14</sub>	29×22 (22×14)	35	
P <sub>5</sub>	21×20	8		P <sub>15</sub>	25×12	14	
P <sub>6</sub>	11×9	18		P <sub>16</sub>	28×13	9	
P <sub>7</sub>	33×31	14		P <sub>17</sub>	13×7	13	
P <sub>8</sub>	16×13	12		P <sub>18</sub>	14×10	15	
P <sub>9</sub>	37×26	37	2段構造	P <sub>19</sub>	98×33	15	
P <sub>10</sub>	26×14	18		P <sub>20</sub>	38×35 (24×19)	19	2段構造

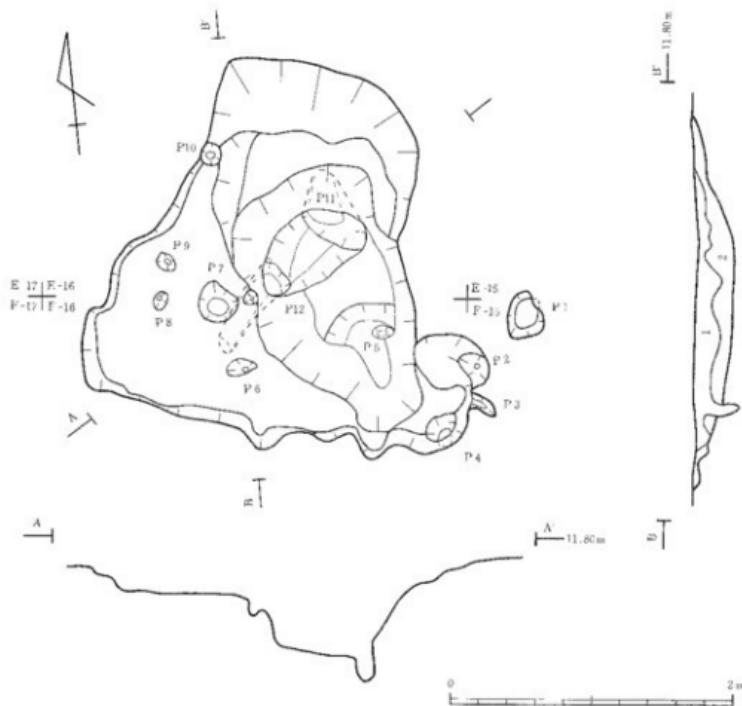
## 2号土壤（第22図、図版3-3）

E-16区・F-16区にかけて位置し、12層上面で確認されたが、明確な掘り込み面は確認できなかった。平面形態は、1号土壤同様、不定形の形態を呈する土壤である。土壤内部は、さらに一段深くなっている。南東部では、1号上層に一部を切られている。規模は、 $2.79 \times 2.77$  m、深さ約75cmを測る。埋土は、2層で構成され、遺物をほとんど伴わない。土壤内部には、12個のピットが確認されたが、このうちP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は、1号土壤に伴ったものと考えられる。1号土壤同様、性格不明である。

### 〈出土遺物〉（第32図1-10、図版18-8-10）

第32図2は第II群土器に属する。R.L.R縄文を地文とする。3は第IV群、4、5、6は第VI群土器に属する。1は注口部であるが全体像が不明な為第IX群として分類した。7-10は第V群に属する。

土壤の時期は、埋土の遺物が第VI・VII群土器を主体とすることから後期前葉と考えられる。



第22図 2号土壤実測図

第9表 2号土壌ピット一覧

番号	幅 横(cm)	深さ(cm)	備考	番号	幅 横(cm)	深さ(cm)	備考
P <sub>1</sub>	32×26	13		P <sub>1</sub>	30×28	21	
P <sub>2</sub>	—	—	11号土壌に伴う	P <sub>2</sub>	13×9	23	
P <sub>3</sub>	—	—	—	P <sub>3</sub>	16×12	24	
P <sub>4</sub>	25×16	23		P <sub>4</sub>	16×14	17	
P <sub>5</sub>	15×10	27		P <sub>5</sub>	50×24	59	
P <sub>6</sub>	22×11	34		P <sub>6</sub>	26×17	35	

## 3号土壌 (第23図、図版4-1)

E-18区に位置し、11層上面で確認された不整円形を呈する土壌である。規模は1.30×1.18m、深さ28cmを測る。土壌内部は、さらに一段深い円形の土壌が存在する。埋土は9層で構成される。ピットは、土壌の東部から南部にかけて3個、内部に4個確認されている。遺物は、土器片がわずかに出土している。

## 《出土遺物》 (第32図11~15、図版18-11~13)

第32図11は第Ⅳ群土器に属し、12、13は第Ⅶ群土器に属する。14、15は第Ⅸ群に属する。

この土壌の明確な時期は不明であるが、ほぼ後期前葉に属するものであろう。

第10表 3号土壌ピット一覧

番号	幅 横(cm)	深さ(cm)	備考	番号	幅 横(cm)	深さ(cm)	備考
P <sub>1</sub>	13×10	14		P <sub>1</sub>	5×5	8	
P <sub>2</sub>	24×15	12		P <sub>2</sub>	6×6	5	
P <sub>3</sub>	29×21	7		P <sub>3</sub>	7×6	5	
P <sub>4</sub>	34×25	12					

## 4号土壌 (第24図、図版4-2)

F-16区、11層上面で確認され、平面は不整円形を呈する土壌である。規模は1.0×0.85m、深さ19cmを測る。壁はほぼ直立し、底面は比較的平坦である。壇底には、規模16×12cm、深さ17cmのピットが1個検出された。埋土は単層で、5G Y35オリーブ黒色のシルト質粘土である。遺物は、土器片がわずかに出土したにすぎない。土壌の時期は不明である。

## 5号土壌 (第24図、図版4-3)

F-17区、11層上面で確認され、平面は円形を呈する土壌である。規模は0.75×0.74m、深さ16cmを測る。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。ピットは3個検出されたが、遠縄に伴うものか判断できなかった。他の小ピットについては、木根によるものと思われる。埋土は単層で、5G Y35オリーブ黒色のシルト質粘土であり、炭化物を少量含む。遺物は、土器片がわずかに出土したにすぎない。土壌の時期は不明である。

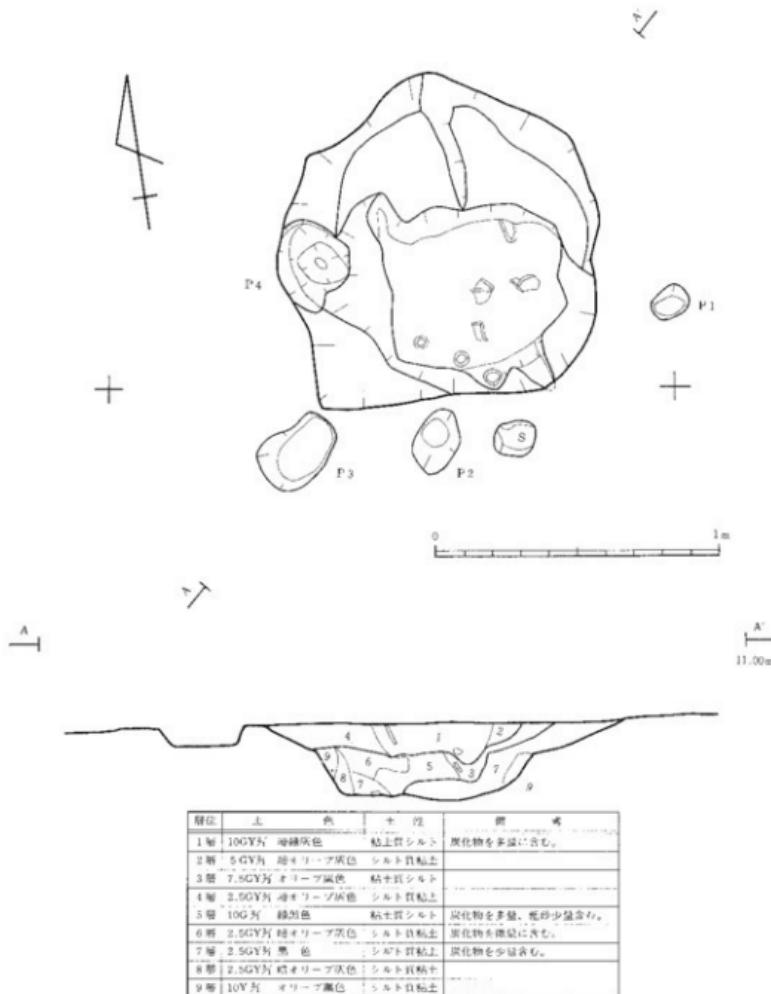
## 6号土壌 (第24図、図版5-1)

E-18区・F-17区にかけて位置し、11層上面で確認された不整円形を呈する土壌である。規模は0.91×0.89m、深さ22cmを測る。壁はゆるく立ち上がり、底面は平坦である。壇底の中央には、3ヶ所の高まりが認められる。本土壇は、南北のピットを切っている。西側の小ピッ

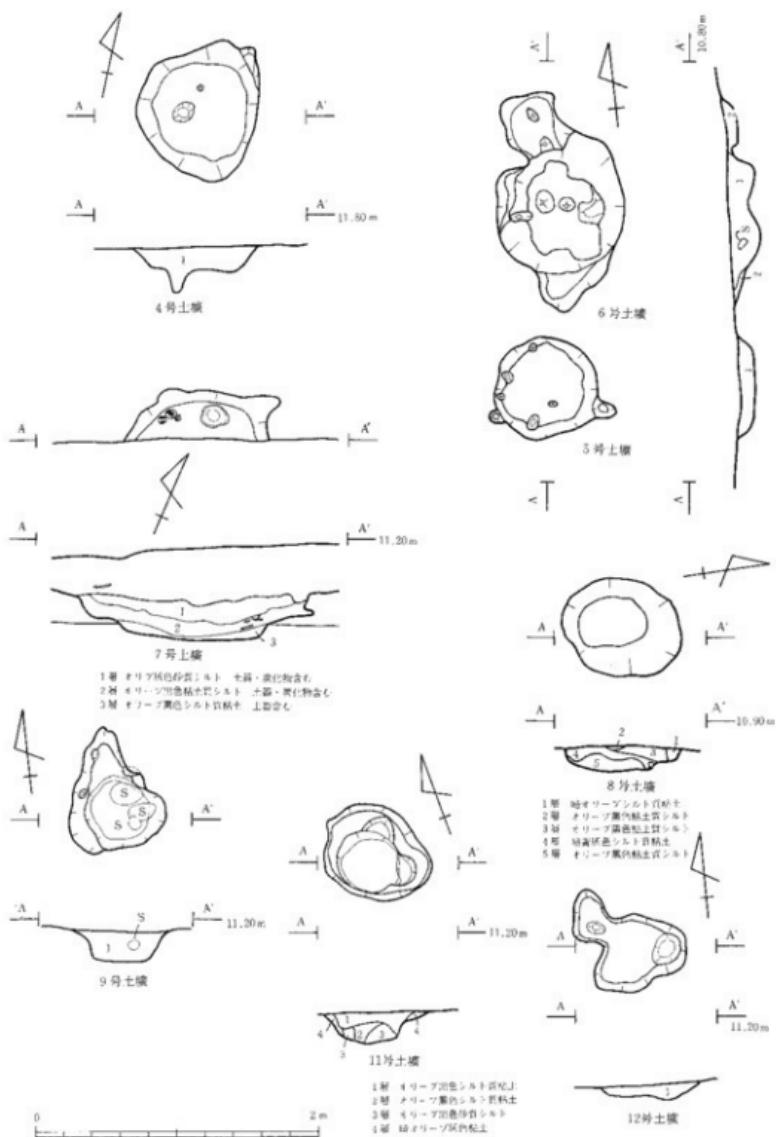
トについては、木根であると思われる。埋土は2層で構成される。

遺物は、第VI群土器に属する土器片が1片出土（第33図1）しているにすぎない。

土壤の時期は不明である。



第23図 3号土壤実測図



第24図 土 壤 実 測 図

## 7号土壙 (第24図、図版5-2)

E-14区に位置し、梢円形を呈する土壙である。明確なプランは、12層上面でようやく確認できたが、断面の観察の結果、本来は11層上面より掘り込まれたことが判明した。本土壙は、南側を2号河川跡に切られており、北側約3mの調査に留まった。規模は確認時には、長軸1.04mを測ったが、土壙断面の観察より、少なくとも長軸1.62m、深さ33cmの規模をもつ土壙であることが推定される。本土壙は、2段に掘り込まれており、下段はほぼ直立し、上段はゆるく立ち上がる。壙底は平坦である。埋土は3層で構成されている。遺物は、2層中より多く出土し、3層では極わずかである。

〈出土遺物〉(第33図2~14、第34~36図 図版19-2~10、図版41-4~5、10)

第33図2~7は第VI群1類に属する。4は口縁部の無文帯を沈線で区画し、その沈線上の円形刺突文を基点とし下位へ沈線文が継続に展開している。8~11は第VI群2類に、12、13、第34図1、2は第VI群3類に、3~5は第VI群8類に属する。6は内面に沈線が数段重なるもので第VII群2類に属する。第33図14、第34図7~11、第35図1~6は第VII群土器に属し、第33図14は綾絞文が継続に施され、第34図7、8は地文がR L R 繩文、9は0段3条のL R L 繩文である。第35図7は注口部である。8は約2.3cm×約2.6cmのやや不整形の毛状土製品である。9、10は円盤状土製品で、9は胸部を10は底部を素材とする完形品である。

第36図1は石錐III類である。剥片を素材に両面から剥離を加えることによって、三ヶ所の尖頭部を形成している。2はスクレイバーIII類である。剥片の打面と相対する縁辺に背面→腹面の剥離をくわえ2個の凹部を形成している。3は全体の形状は不明である。一側辺に、腹面→背面に急角度の二次加工が加えられている。3方向に折面が認められる。4も全体の形状が不明である。先端部に潰れ状の打痕が認められる。その形態から、敲石IV類、もしくはV類に属するものと考えられる。5は石製品である。凝灰質砂岩を素材とし、研磨によって形を整形し、一面には同心円状の文様、他面には2ヶの渦巻状の文様が沈線によって描かれている。また底面にも沈線によって波形の文様がつけられる。破損しているが、その形態から「石冠」とされるものに類似している。

土壙の時期は、埋土の遺物が第VI・VII群七器を主体とすることから、後期前葉と考えられる。

## 8号土壙 (第24図、図版6-1)

E-12区・E-13区にかけて位置し、11層上面で確認された円形を呈する土壙である。規模は0.85×0.70m、深さ17cmを測る。壁はゆるく立ち上がり、壙底は皿状を呈する。埋土は5層で構成される。

〈出土遺物〉(第37図1~9、図版19-10、図版20-1~3)

第37図1は第VII群土器に属する壺形土器である。口頭部と胸部との間に隆起が貼付され、

円形刺突文が連続的に施されている。腹部はL.R.縄文施文後、沈線による渦巻文が描かれている。2~4は第VI群土器に属し、5~9は第V群土器に属する。

上塙の時期は、埋土の遺物から後期前葉と推定される。

#### 9号土壤 (第24図、図版6-2)

E-12区、12層上面で確認された不定形を呈する上塙であるが、本来の掘り込み面は11層上面に存在した可能性が考えられる。規模は0.89×0.68m、深さ22cmを測る。上塙内部は、東側で2段構造となっており、下段の土壤は不整円形を呈し、塙底は平坦である。壁は、下段の上塙ではほぼ直立し、上段ではゆるやかに立ち上がる。埋土は単層で、5 G.Y.所オリーブ灰色のシルト質粘土である。遺物は、わずかに土器片(第37図10)が出土し、また円錐が3個出土している。時期は不明である。

#### 10号土壤 (第24図、図版6-1)

E-10区に位置し、11c層上面が掘り込み面であろうと推定される。本土塙は、東側約1mは2号河川跡に切られ、また北側は調査範囲外になるため、正確な形態を把握することは困難である。調査範囲内の観察では、ほぼ円形を呈するプラスコ型ピットと推定される。規模は、最長0.81mまで測れたが、本来は1mを越すものと推定される。深さは62cmを測る。壁は、塙底付近ではほぼ直立するが、上部はゆるく立ち上がるものと推定される。塙底はほぼ平坦である。13号上塙との切り合い部分の壁は、明確にしがたい。埋土1層及び2層は、どちらの土壤に帰属するのか、明確な判断は下せなかった。遺物の取り上げに際しては、最下層以外の埋土中のものについては、13号土壤と区別して取り上げることができず、一応、13号土壤の遺物図版に括した。遺物は、焼土とともに土器・石器・獸骨等が破棄されたような状態で出土している。獸骨については、埋土5層より出土したものに注目すべきものがある。これらはすべて哺乳類のもので、中に鳥類の骨1点が含まれ、また截断時の加工痕をもつ鹿角図版42-2が1点含まれている。他は、明確な同定は困難である。

#### 〈出土遺物〉(第38・39図、図版20-4)

第38図1、2ともに深鉢形土器である。1はR縄糸文、2はL縄糸文を地文とし第V群土器に属する。3、4、第39図3も第V群土器に属する。第39図1は第I群土器に属する。腹部上面に最大径を有し、口縁へ向けて内湾する口縁部付近の土器片である。R.L.R.縄文施文後、沈線による曲線文を表出している。2は第VII群、3は第VIII群土器に属する。

第39図4は、ビエス・エスキューである。剖離面に特徴的に波立フリングが認められること、バルブが散漫なことなど、両極剖離の特徴が明確にとどめられている。形態はおむね四角形であったと考えられるが、碎片が剖離し、結果的にはほぼ三角形となっている。5はスクレイバー1類に属する。下部は欠損しており、全体の形状は明らかではない。剖片の一側辺に腹面

→背面の連続する二次加工が加えられている。6は石刀である。本遺跡における唯一の出土例である。珪化木片を素材としている。全面に研磨がなされているため、製作過程は明らかではない。背にあたる部分に1条の沈線が認められる。両端が欠損している。

土壙は、縄文後期と考えられるが、明確な時期は判断できない。

#### 11号土壙（第24図、図版7-1）

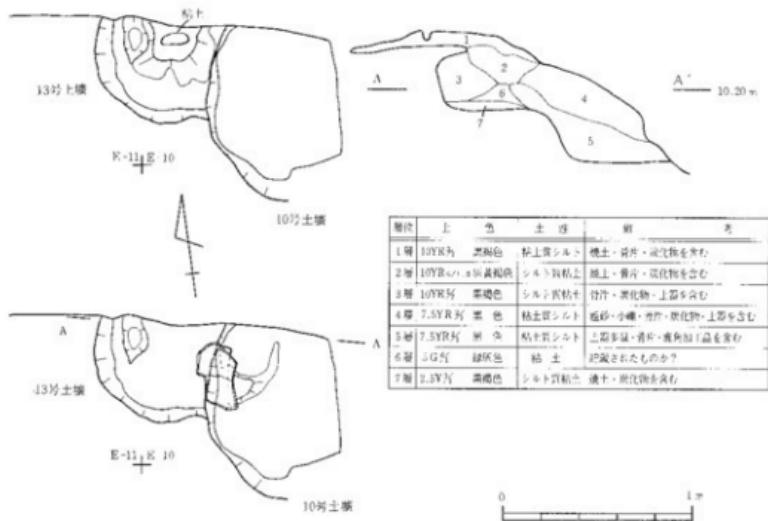
D-12区・F-19区にかけて位置し、11層上面で確認された不整円形を呈する土壙である。本土壙や12号土壙は、D-12区・F-19区を中心に南側へ傾斜した面に構築されている。規模は $0.77 \times 0.67$ m、深さ23cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壙底はほぼ平坦である。埋土は4層で構成される。遺物はわずかに土器（第40図3）、石器があり、いずれも埋土1層より出土している。土壙の時期は不明である。

#### 12号土壙（第24図）

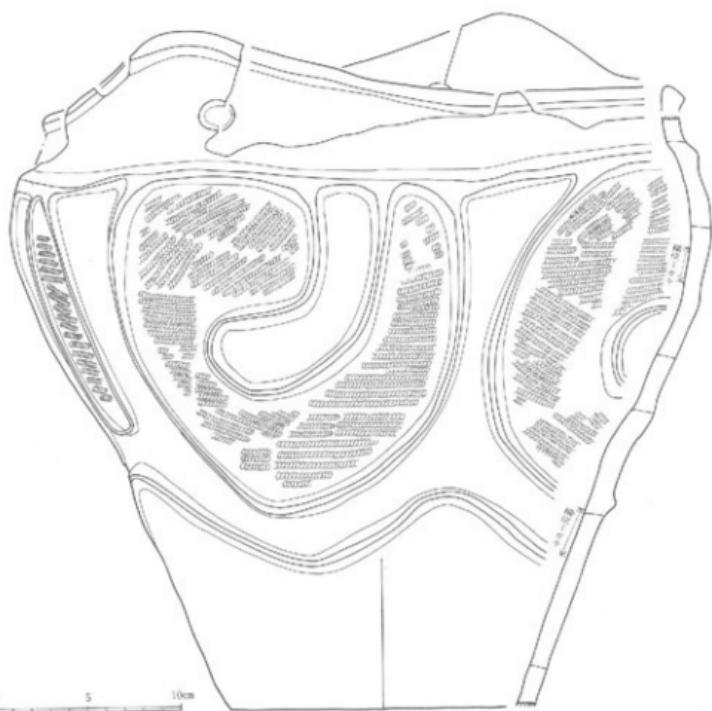
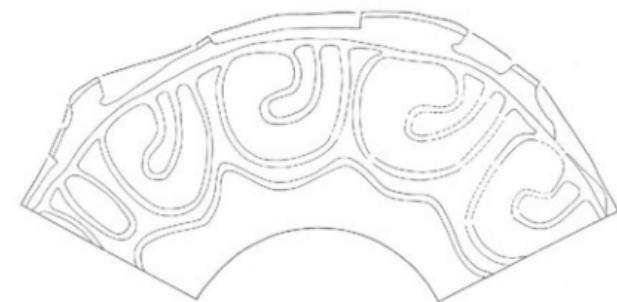
E-19区、11層上面で確認された不定形の土壙である。規模は $0.85 \times 0.59$ m、深さ8cmを測る。壁はゆるく立ち上がり、壙底はほぼ平坦である。埋土は単層で、7.5G-Y有暗緑灰色のシルト質粘土である。底面には2個のピットがみられるが、いずれも極めて浅く、木根などの擾乱によるものと推定される。遺物は土器片がわずかに出土した。

#### （出土遺物）（第40図1、2、4）

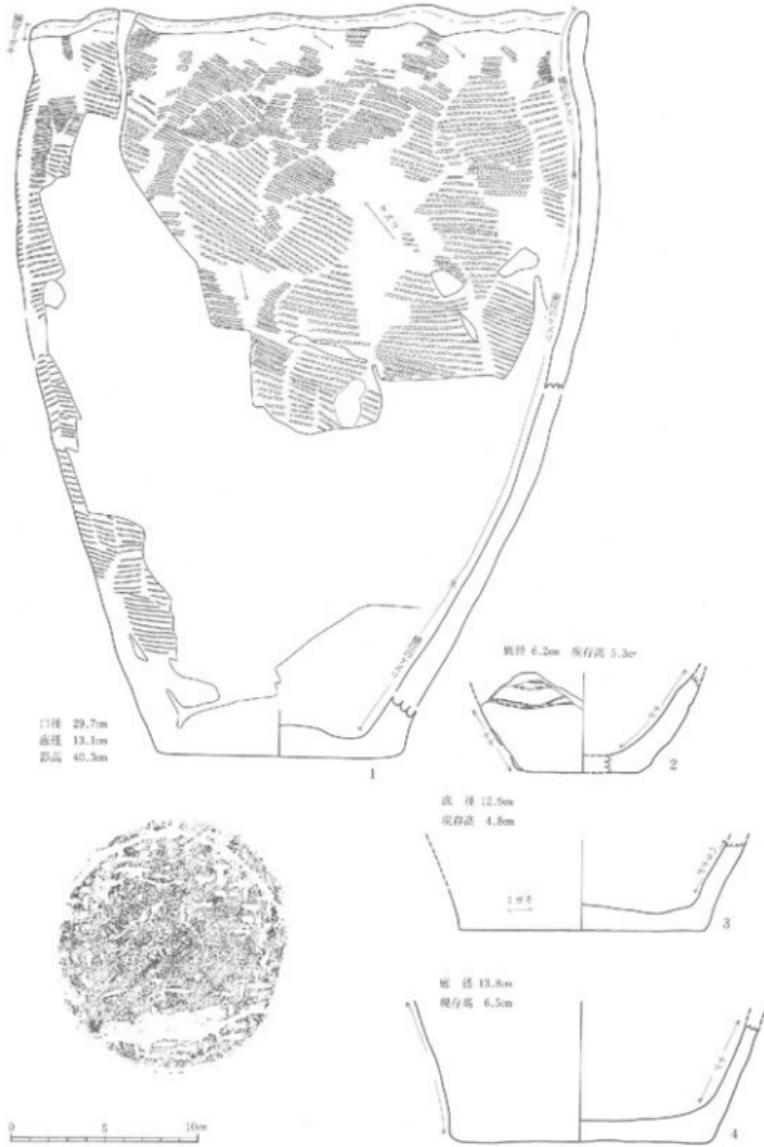
第40図1は第IV群土器に属する。2は第V群土器に属し、網目状捺糸文を地文とし逆鎖状浮



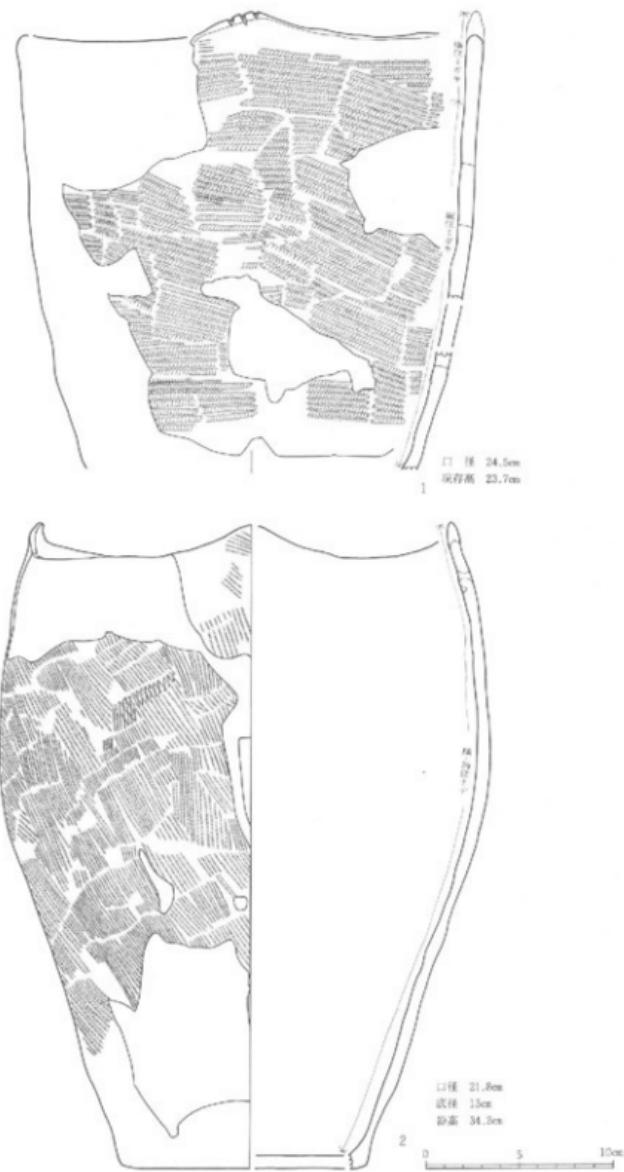
第25図 10号・13号土壙実測図



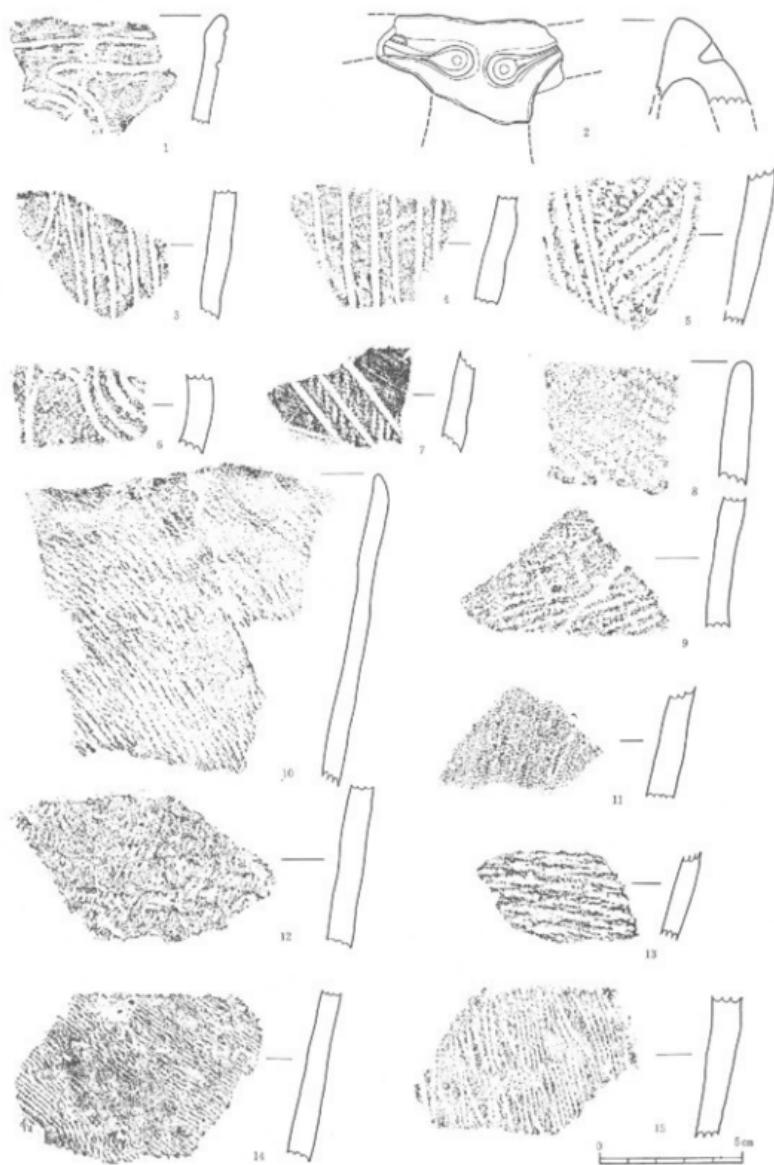
第26図 埋  
斐



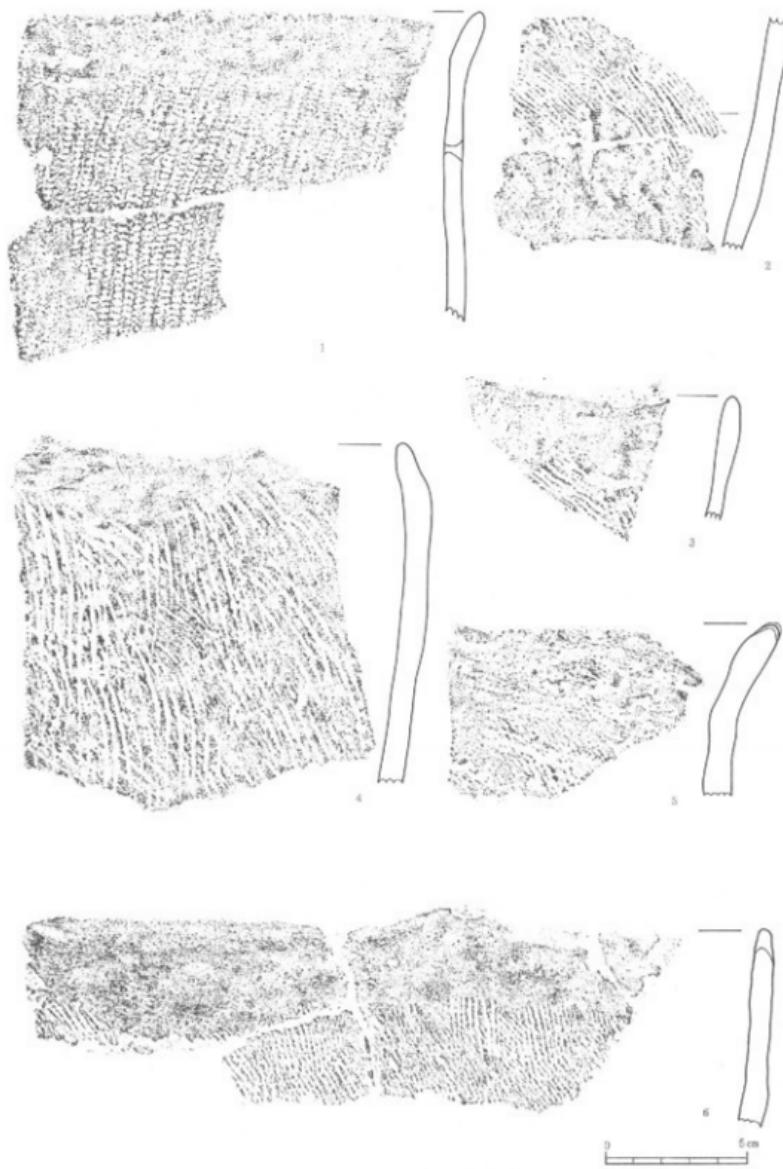
第27図 1号土壤出土遺物(1)



第28図 1号土壤出土遺物(2)



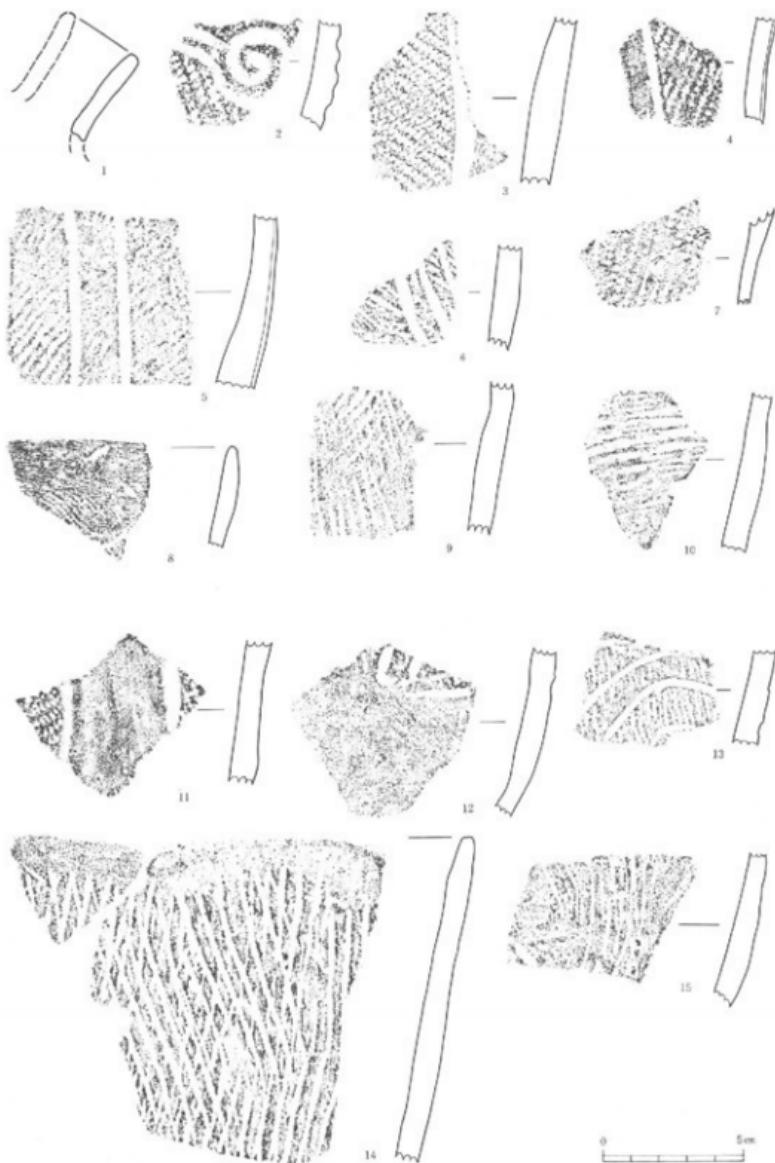
第29図 1号土壤出土遺物(3)



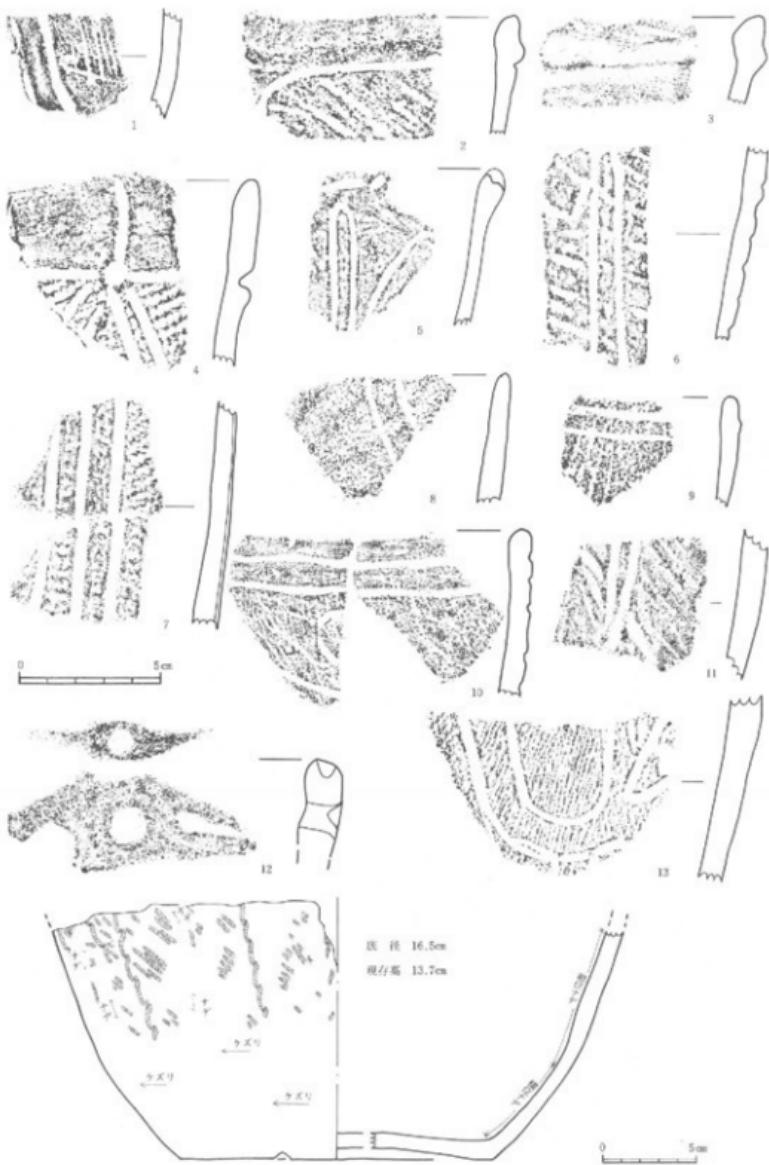
第30図 1号土壤出土遺物(4)



第31図 1号土壤出土遺物(5)



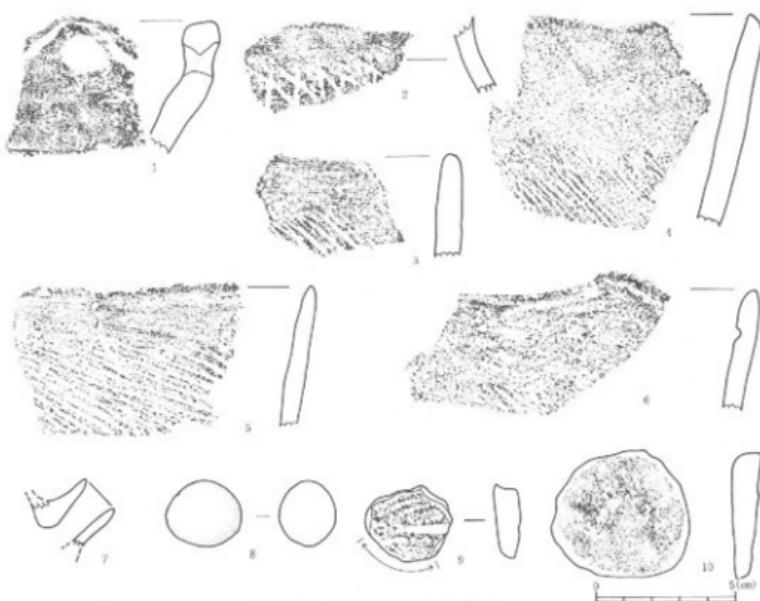
第32圖 2號・3號土壤出土遺物



第33図 7号土壤出土遺物(1)



第34図 7号土壤出土遺物(2)



第35図 7号土壤出土遺物(3)

文が縦位に施されている。4は第II群土器に属する。

土壤の時期は不明である。

#### 13号土壤 (第24図、図版7-2)

E-10区・E-11区にかけて位置し、11層上面で確認された。東側を10号土壤に切られ、北側が調査区域外になるため、土壤の全容は判明しなかった。残存部から判断して、円形を基調とした形態を呈する土壤であろう。

#### 〈出土遺物〉 (第41図、図版20-6・7)

第41図8は深鉢形土器である。胴部はゆるやかに膨らみ口縁部は直立する。口縁部は無文帶で、胴部との区画に格条体圧痕文が施されている。地文はR捺糸文である。1～3は第VI群土器に属し、4～6は第V群に属する。7はスタンプ状の土製品である。劣化欠損している。

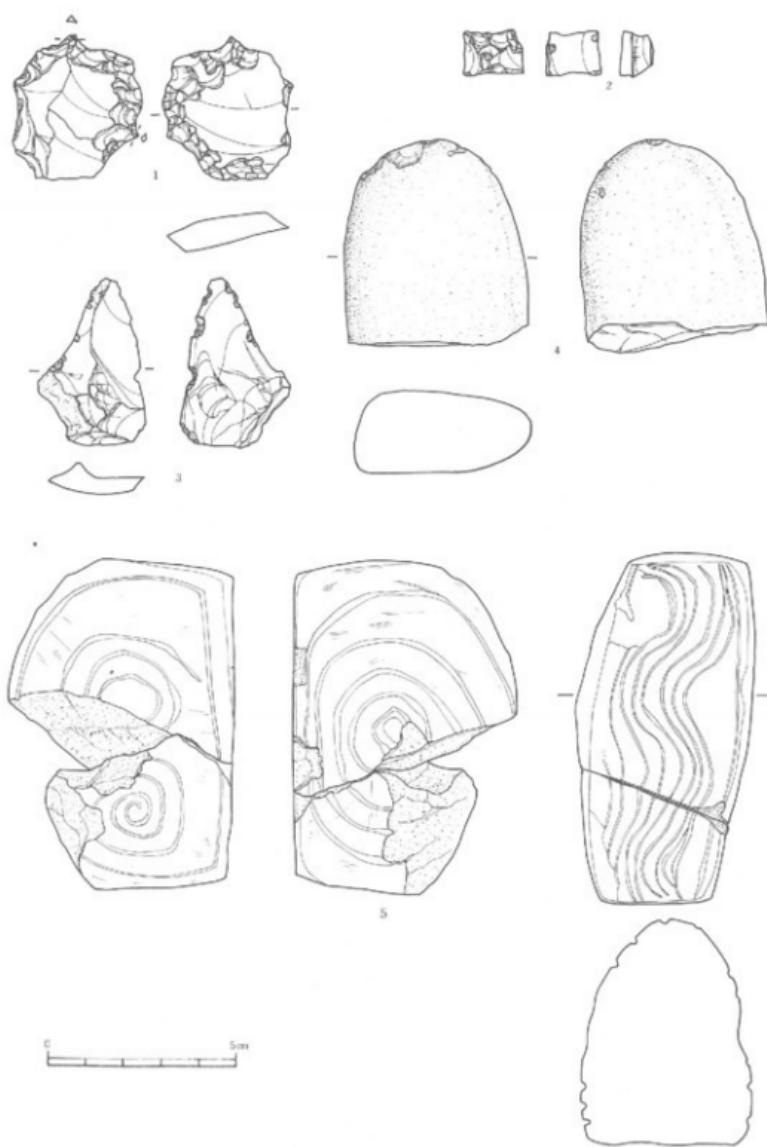
土壤の時期は、埋土の遺物より後期前葉と考えられる。

### 3) 各層の出土遺物

#### (i) 土 器

##### a, 8層出土土器

###### 第II群土器 (第58図1)



第36図 7号土壤出土遺物(4)

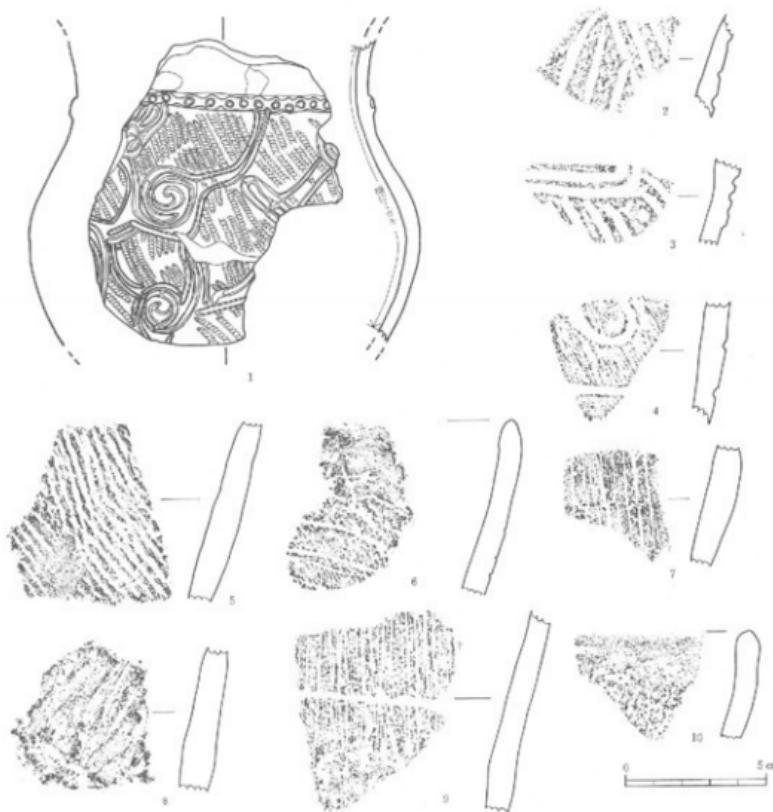
第58図 1は、3類aに属する。

第V群土器（第58図6）

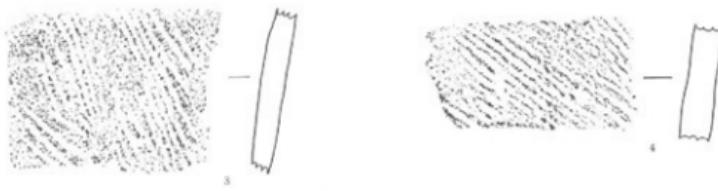
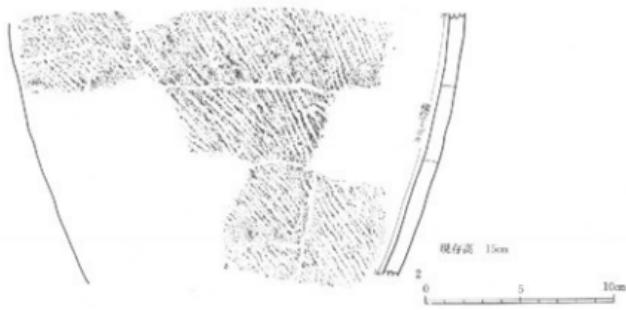
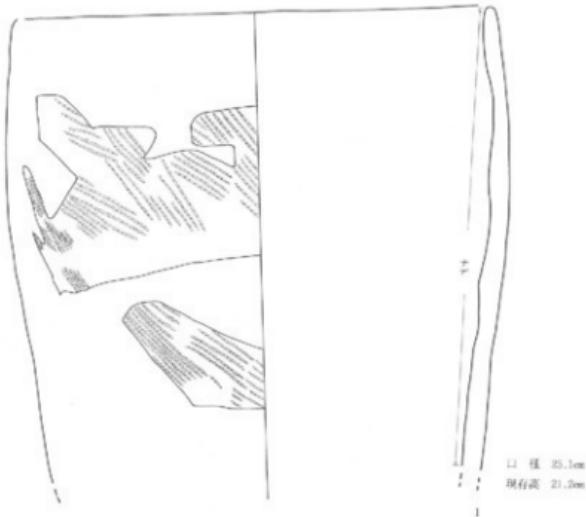
6は、1類に属し口唇部に連続刺突文のある隆帯が貼付されている。また、平行する沈線文が下位に伸びる。本例は、今のところ他に例がない様である。

第VI群土器（第58図2～4、6～7、9～11、第59図1～7、9～12、第60図1・2、4～12、第61図1）

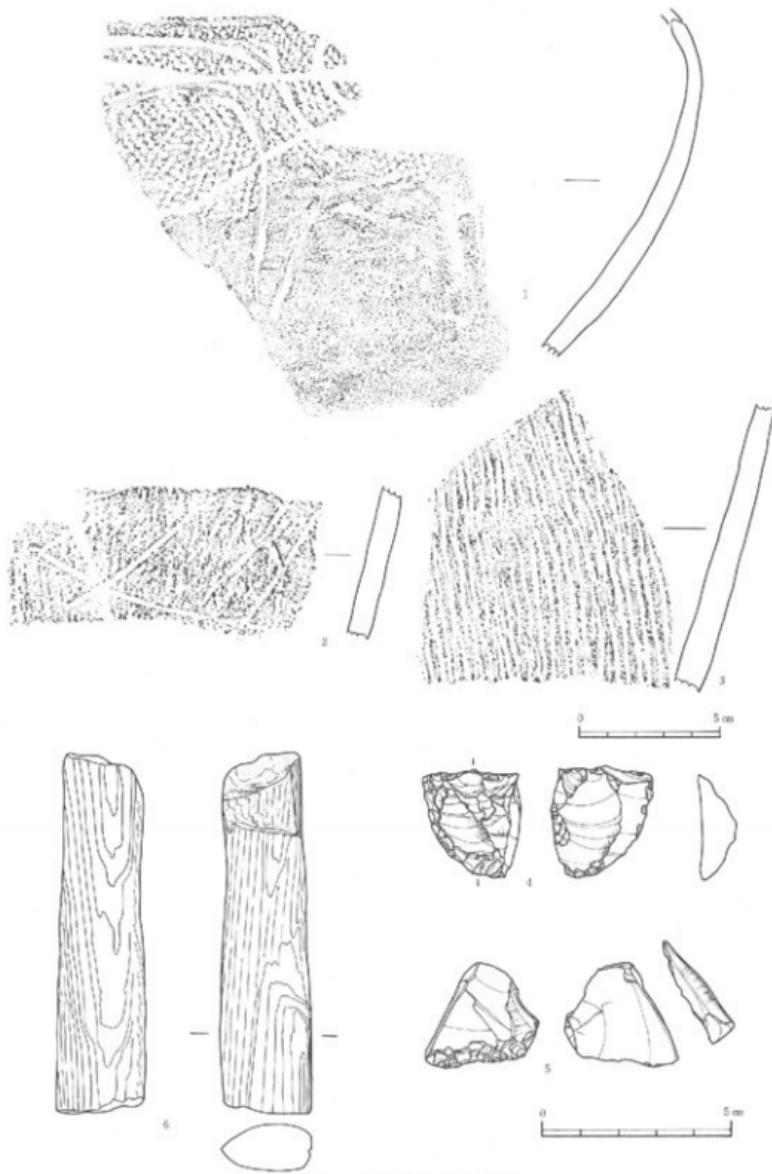
第58図2は8類aに属し、波状部頂点下に有孔を伴なう。6はd型の波状口縁を示す。第59図7は2類jに属し、R撫糸文に細沈線文を施する。この沈線は、櫛描き状の効果に仕上げて



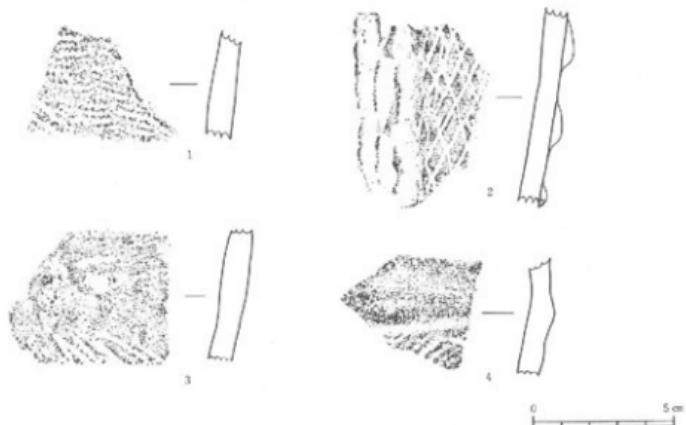
第37図 8号・9号土壤出土遺物



第38図 10号土壤出土遺物(1)



第39図 10号土壤出土遺物(2)



第40図 11号・12号土壤出土遺物

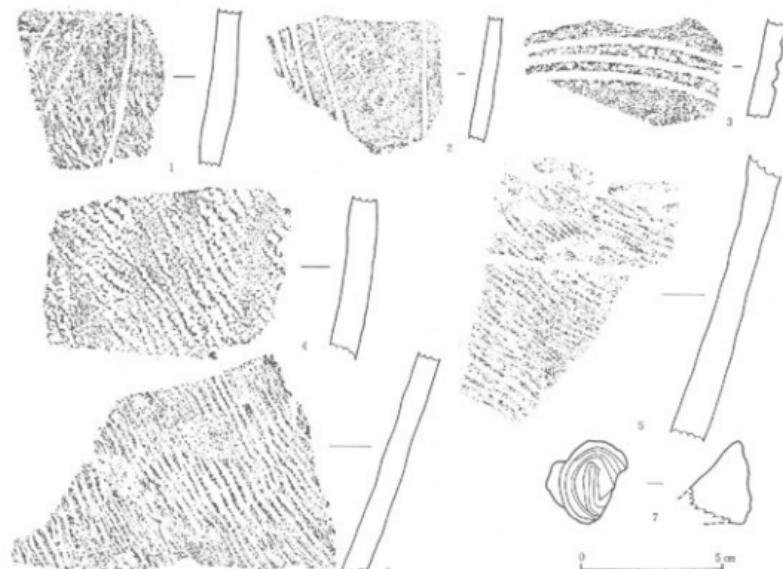
いる。第59図8は本群に含めたが、異質な感じをもち、より後出の可能性も考えられる。第60図4は円形竹管文を縦位3列に施文する。第60図11・12は5類dに属すが、あるいはⅧ群土器に伴なう可能性も考えられる。

#### 第Ⅷ群土器（第42図1、第61図2～19、第62図1～12、第63図4、10）

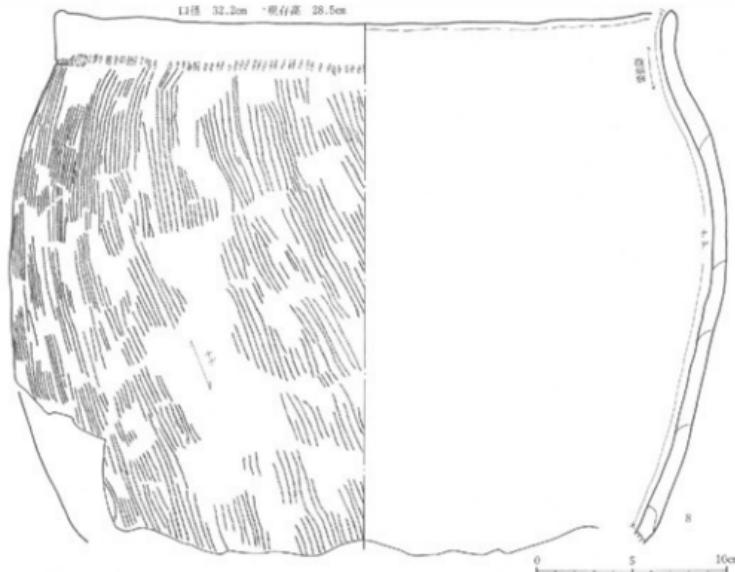
第42図1は4類に属する。曲線的な2条の沈線によって文様が構成され、沈線間にし縄文が充填されている。第61図2～8、第62図には2類に属する。2～4は口縁部破片で、その上部に2条の沈線間に縄文が施文された磨消縄文帯が横走する。2はその下部に曲線状の磨消縄文が施文される。6は壺形土器の肩部片と考えられる。9～13は3類に属する。横位、斜位に施された平行沈線により幾何学的な文様が構成され、沈線間に縄文が施されている。14～16は4類に属する。17～19、第62図1～3は5類に属する。横位ないし曲線的に施された2条の沈線により文様が構成され、沈線間に縄文が施されている。4～7は6類に属する。横位、斜位に施された2条の平行沈線により文様が構成されている。縄文は施されない。10、11は8類に属する。横位に施された平行沈線により文様が構成されている。8、9は9類に属する。口縁に沿って2～3条の平行沈線が施されている。

#### 第Ⅸ群土器（第42図2～6、第63図1～3、5～9、11～15、第64図1～3、5～7）

第42図2、5、第63図1～3、5、6は1類に属する。第42図2は壺形土器の口縁部である。口縁部に山形突起が8個形成されている。口縁部上部、下部にそれぞれ平行する横位の沈線が施され、下位の沈線間に1対のコブ状隆帯が貼付されている。5は高環形の土器の脚部と考えられるものである。環部下半に相当する部位は、縦位、横位の平行する2条の沈線、脚部に



13号 32.2cm 一般有高 28.5cm



第41図 13号土壤出土遺物

相当する部位は平行する2条の横位沈線により文様が構成され、沈線間にはL・R縄文が施されている。第63図1～3・5・6は磨消縄文帶を数段重ね構成されている。1には山形突起がありその下部に「8」の字状の隆帯が貼り付けられている。第42図6、第63図8は2類に属する。第42図6は、外面無文の深鉢形土器である。内面口縁上部に3条の横位の沈線、下部に2条の横位の沈線が施され、両者の間に2条の沈線による長楕円文が充填され、さらに長楕円文間の下部に円形刺突文が施されている。第42図3、第63図9・11～15、第64図5・6は4類に属する。第42図3は壺形土器の口頸部である。下半部にL・R縄文と3条の平行沈線が施されている。第63図13～15も壺形土器の肩部で、地文の縄文と数条の沈線で文様が構成されている。第64図1は6類に属する。隆帯による区画と区画内に施される円形刺突文により文様が構成されている。この類は本例のみである。7は地文の縄文と格子状沈線とで文様が構成される胴部片である。上部に1条の横位沈線があり、文様を区画していることから口縁部付近の破片と考えられる。

#### 第Ⅳ群上器（第43～45図、第46図1・4・5、第64図8～11、第65～70図）

第64図8～11、第65図1・2は1類aに属し、縄文は斜行する。第65図3～5は1類bに属し、横位の縄文となる。6・7は2類に属し、6は横位に7は縦位に綾縞文が施文される。9は3類に属し羽状縄文である。第43図1・3、第65図8・10～12、第66図1～7は4類aに属する。第43図1は、胴部が外反し口縁部がほぼ直立する深鉢形土器で、外面にR撚糸文が不規則に施文されている。同図3は底部から口縁部へゆるやかに外反する深鉢形土器で、外面にR撚糸文が施文される。底部には木葉痕がある。第43図2、第66図8は4類bに属する。第43図2は、深鉢形土器で外面はL撚糸文が斜行し、内面には格子状沈線が施文されている。底部は網代である。第67図1・2は5類に属する。第67図3は6類a～1に属する。原体は2段3条のR・L縄文である。4は6類a～2に属し、縦位に綾縞文が施文されている。5～8は6類a～3に属する。第45図2、第67図9～11、第68図1・2は6類a～4に属する。第45図2は無文帶を格条体压痕文で区画され、胴部にはR・L縄文が施文される深鉢形土器である。第68図3～5は6類b～1に属する。第43図5、第44図1、第68図6～9は6類b～4に属する。第44図1は壺形土器で、胴部にはR撚糸文、無文帶との区画に格条体压痕文が施文されている。第45図1・6・8は7類aに属する。第45図1は胴部が内湾する深鉢形土器で、外面には櫛描文が縦位に施文されている。第70図2・4は7類b～1に属する。第44図2は7類b～2に属する比較的小形の深鉢形土器で、胴部は流水文風の櫛描文が施文されている。第70図3・6～8は7類b～3に属する。7は同心円状櫛描文と「( )」状櫛描文とが併存している例である。第43図4、第44図3・4、第46図4、第70図9～13は8類に属するものである。

### b. 9層出土土器

#### 第Ⅵ群土器（第71図6）

6は1類mに属し、胴部に穿孔が認められる。沈縫文間には、L R縄文を充填している。

#### 第Ⅶ群土器（第71図2～4）

2は6類a～4に属し、3・4は4類に属する。

#### 時期不明の土器（第71図1）

1は地文に縄文を施し、櫛齒状工具を左右180°ずつ交互に回転させて得られた文様で、いわゆるコンバス文の一種と考えられる。この文様は第Ⅷ群5類と共通するが、時期を明確にできない。

### c. 10層出土土器

#### 第Ⅰ群土器（第71図6、第94図6）

いずれも1類に属する平縁の口縁部である。第94図6の口縁部には、さらに突起が認められる。いずれも胎土に多量の砂礫を含み、特に金雲母の混入が目立つ。また、針状物質をわずかに含む。

#### 第Ⅱ群土器（第71図8～12）

8は、1類に属する口縁部破片で、口縁部は外反し、口唇部直下にも縄文が施文され、口唇部は肥厚している。9・11は3類bに、12は3類aに属する。10は、本群に伴う突起である。

#### 第Ⅲ群土器（第72図1）

第72図1は、縦位のモチーフが展開し、隆沈文によって区画がなされる。口唇部には退化した渦巻文が貼付される。

#### 第Ⅳ群土器（第72図2～5）

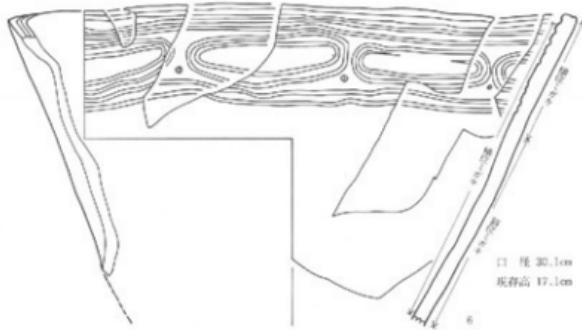
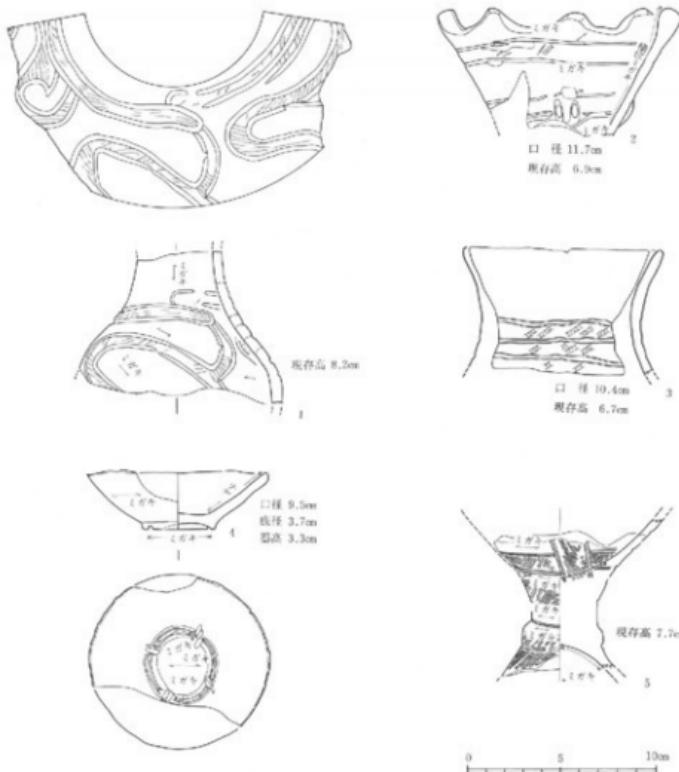
2は3類に、3～5は2類に属する。いずれも単節で、2は充填縄文である。

#### 第Ⅴ群土器（第72図6～9）

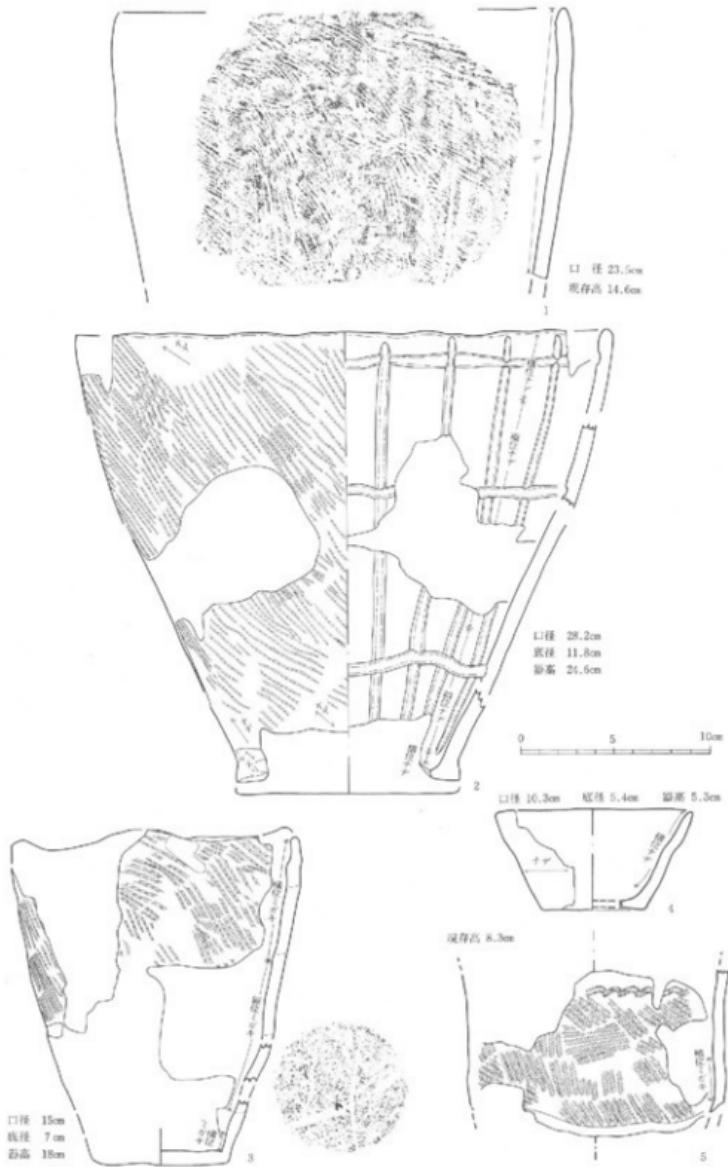
6は、2類に属する口縁部付近の破片であろう。7は、1類に属し、横位の隆帶から垂下する隆帶が見られ、その集中部には刺突された円形浮文を貼付している。8は、3類に属する唯一の例で、文様効果は称名寺II式と類似する。刺突文は、角柱状工具の先端を刺突して得られたものであろう。9は、4類に属する唯一の例である。いずれも胎土の砂粒は少なく、焼成は良好である。

第Ⅵ群土器（第47図1・2、第72図10～17、第73図1～11、第74図1～19、第75図1～18、第76図1・2、第77図1～12、第78図1～18、第79図1～11、第93図1・2）

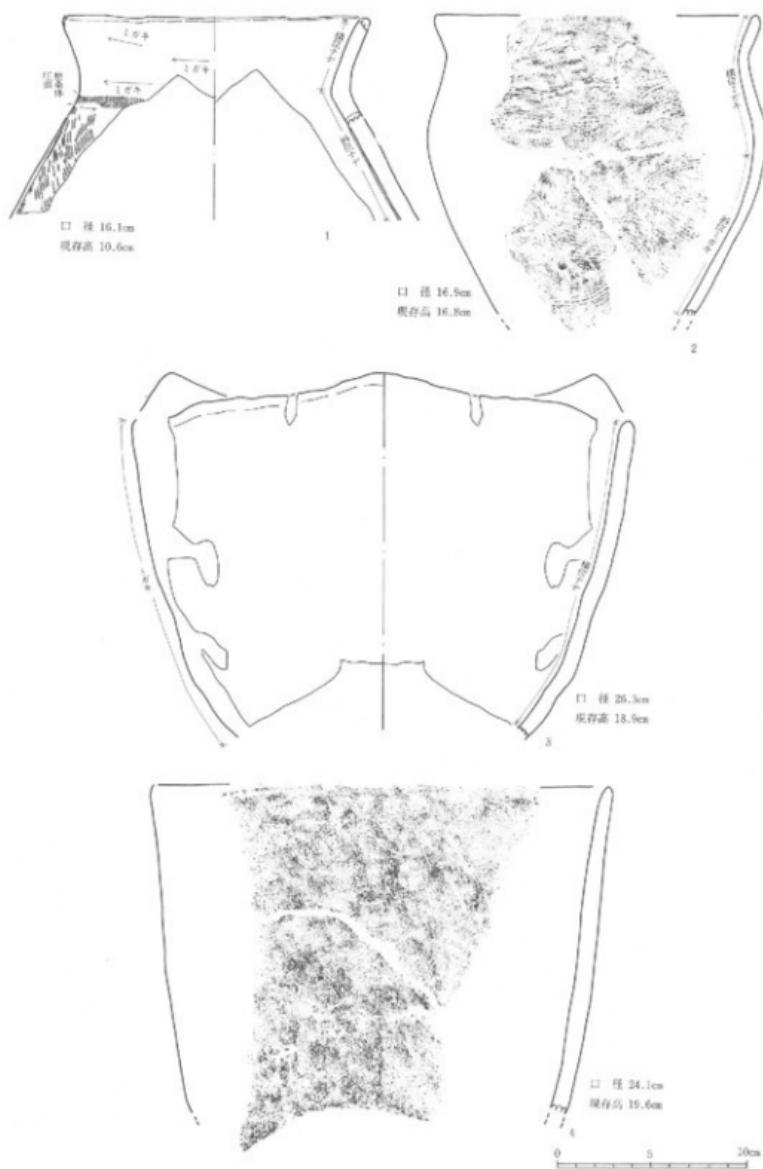
第47図1は3類iに属し、逆三角形の下位の頂点部や口唇部に円形の刺突文がみられる。また、口唇部上には一条の沈縫文をめぐらせる。器形は、深鉢Eを示すものと考えられる。第47



第42図 第8層出土遺物(1)



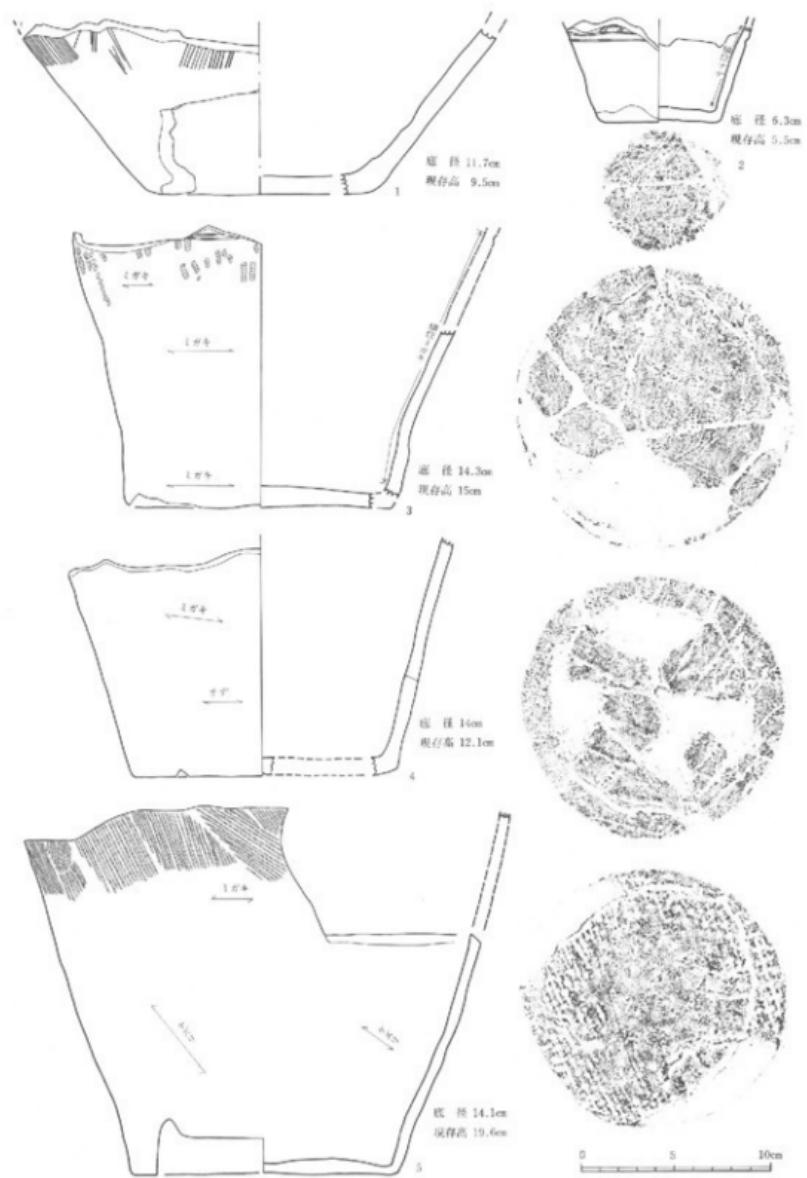
第43図 第8層出土遺物(2)



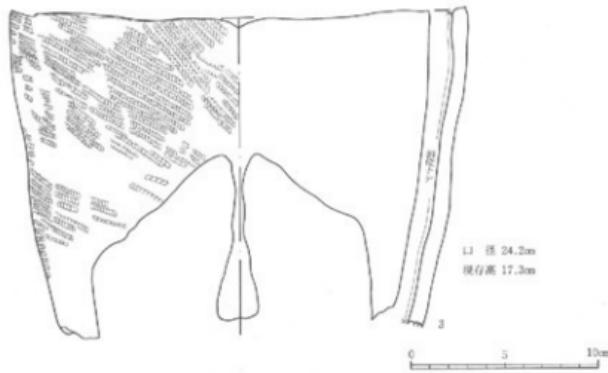
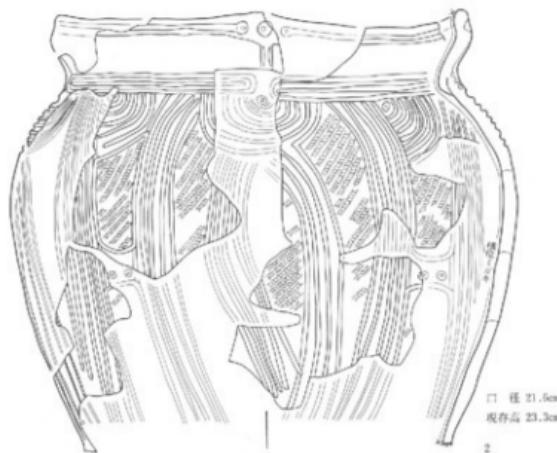
第44図 第8層出土遺物(3)



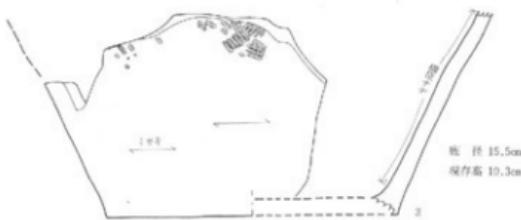
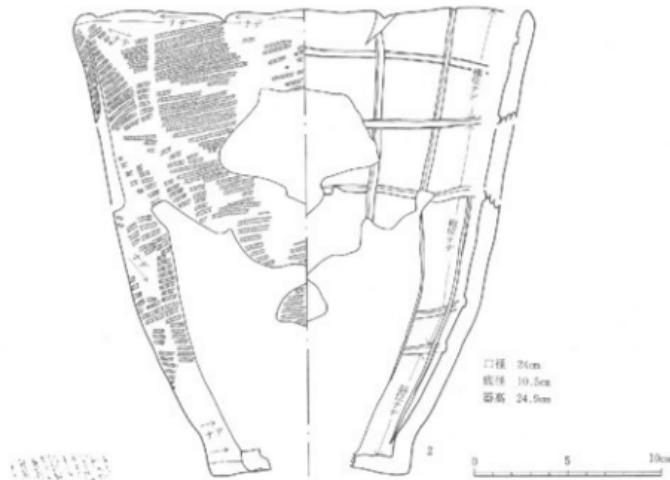
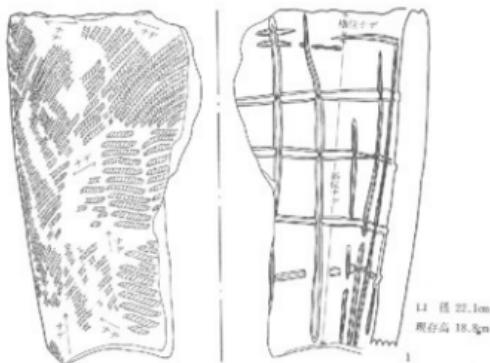
第45図 第8層出土遺物(4)



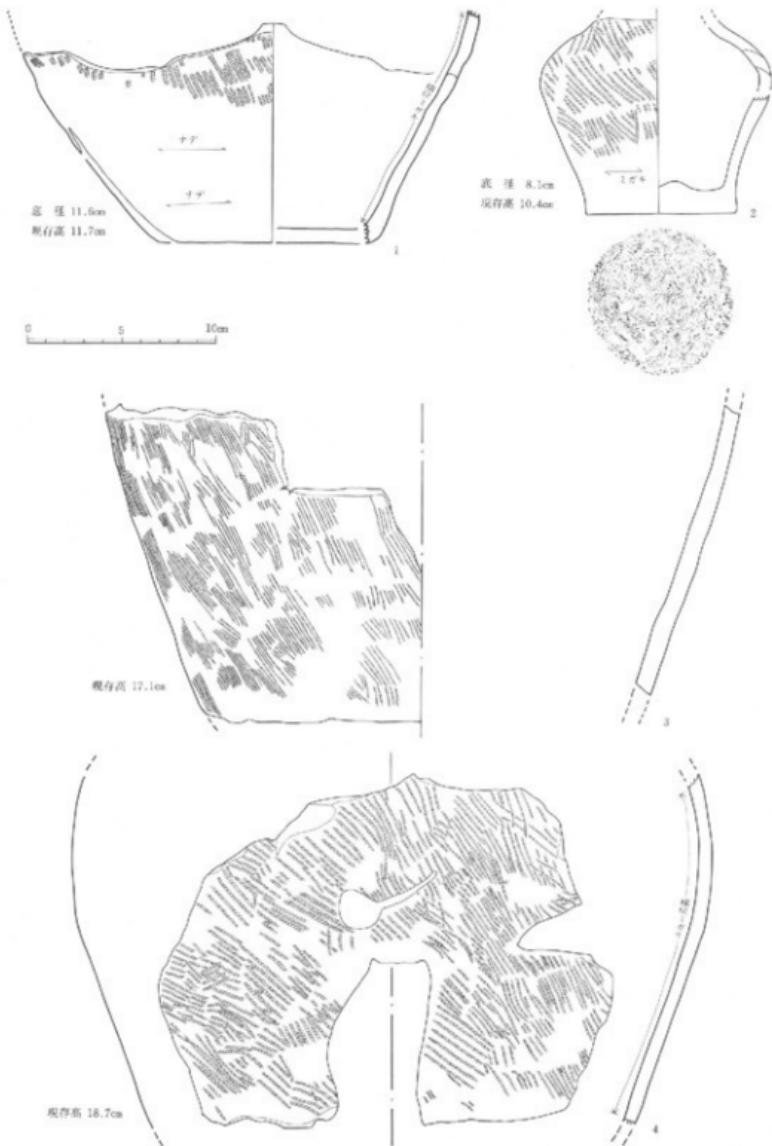
第46図 第8層出土遺物(5)



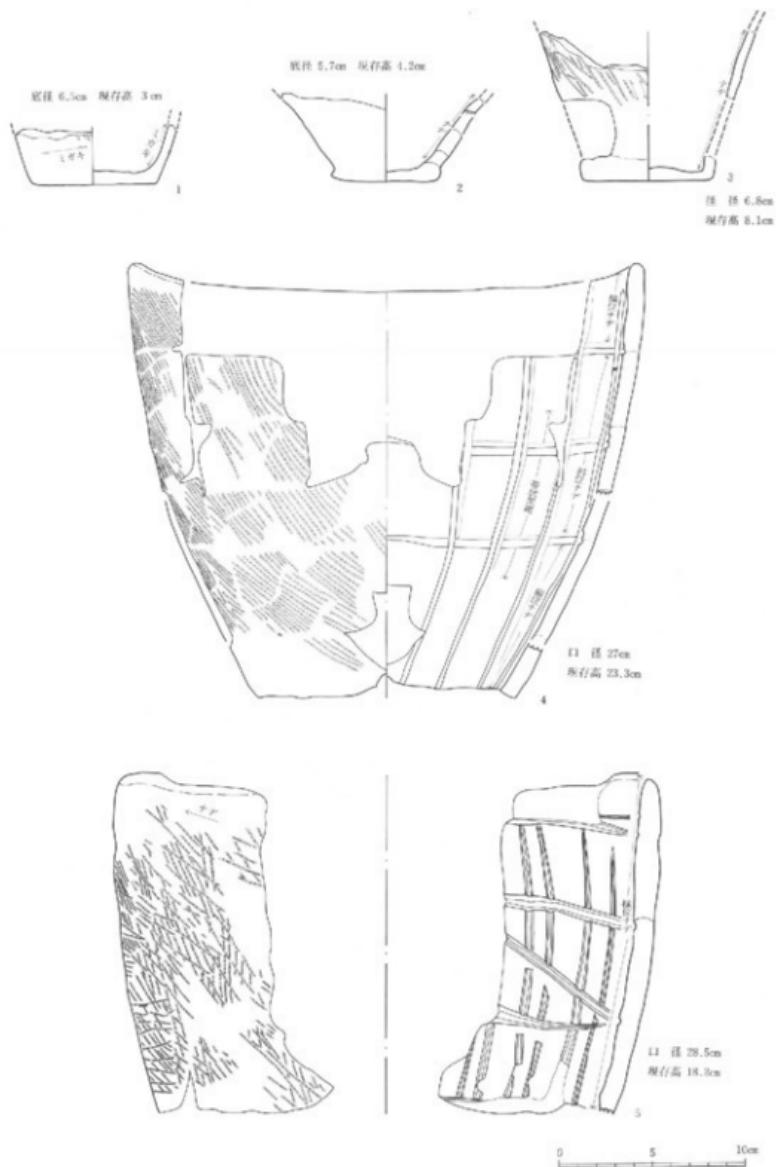
第47図 第10層出土遺物(1)



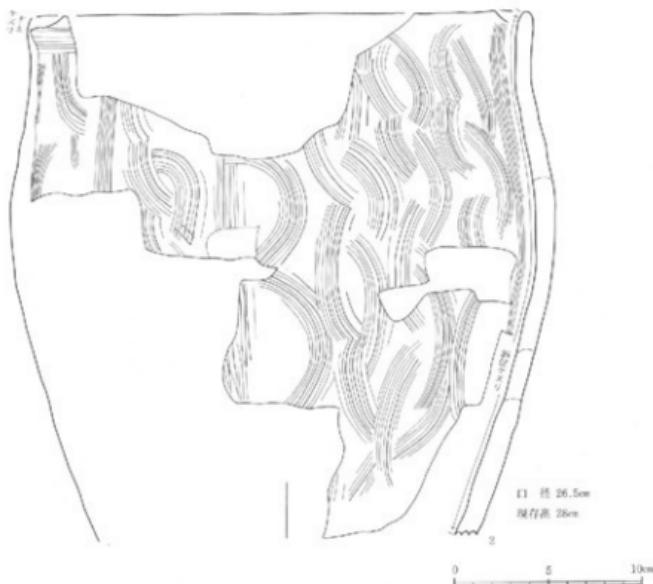
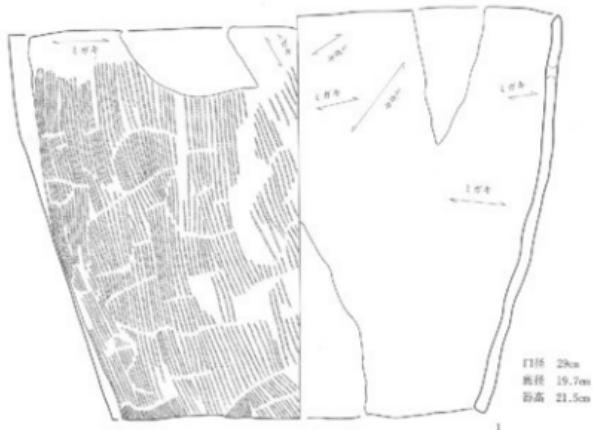
第48図 第10層出土遺物(2)



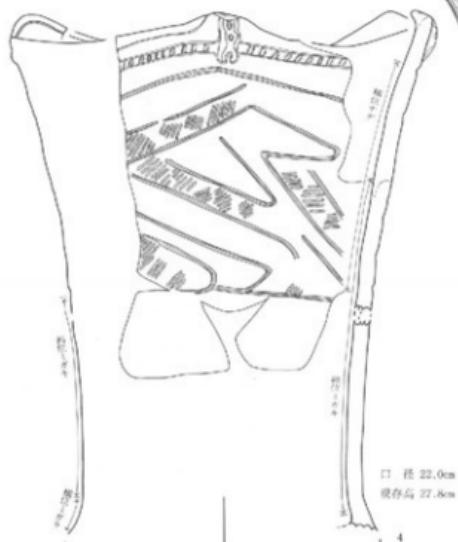
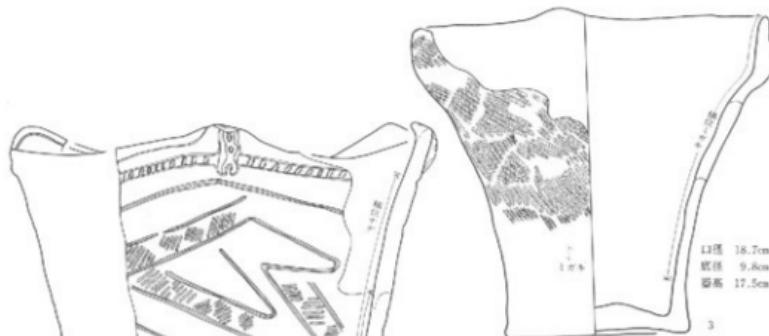
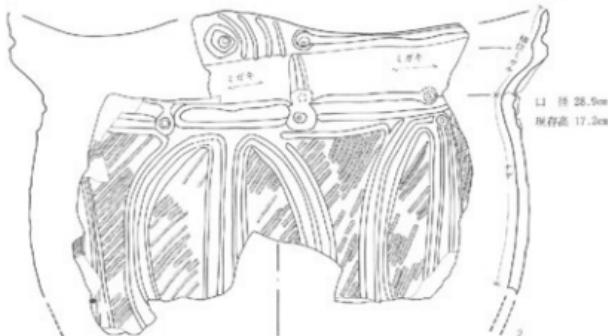
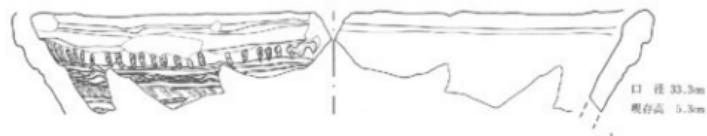
第49図 第10層出土遺物(3)



第50図 第10層出土遺物(4)

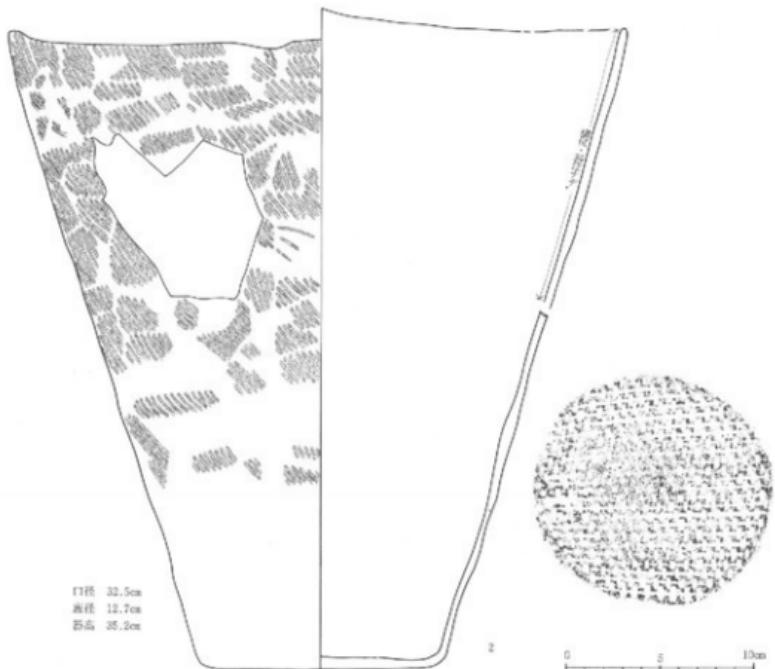
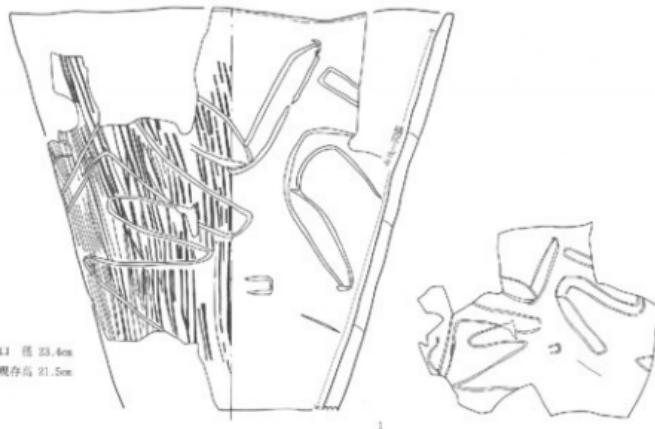


第51図 第10層出土遺物(5)

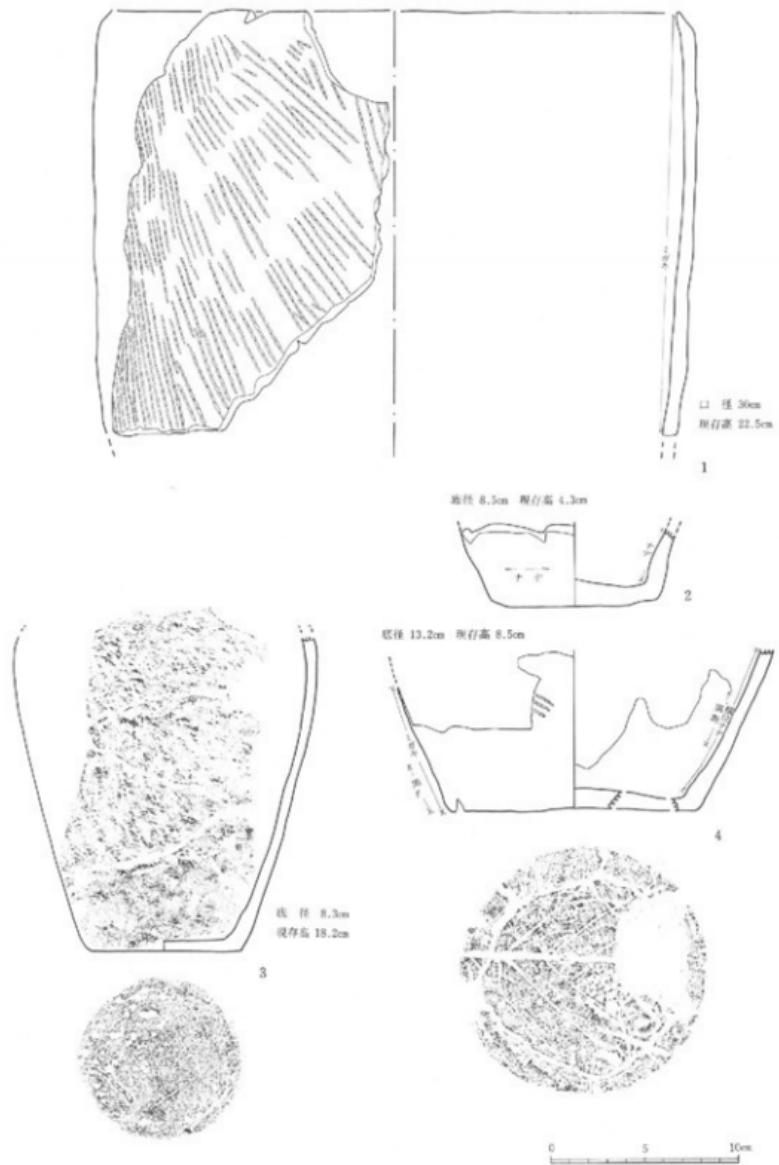


0 5 10cm

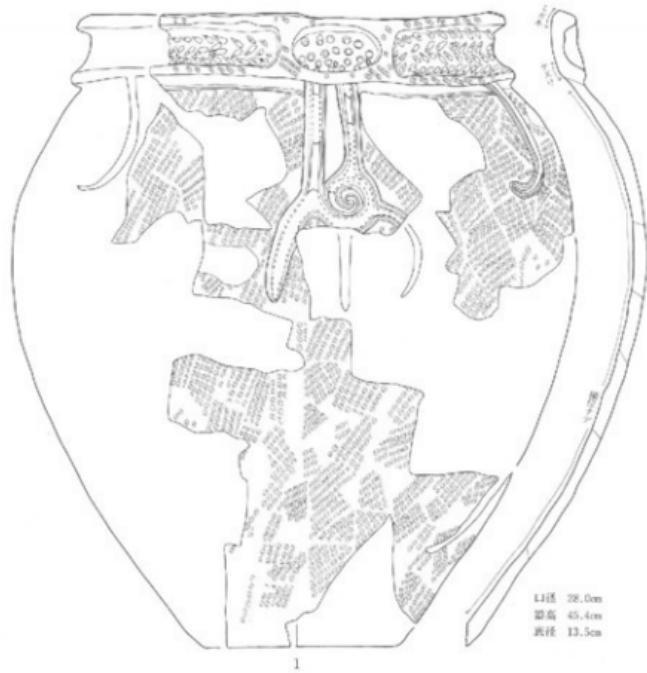
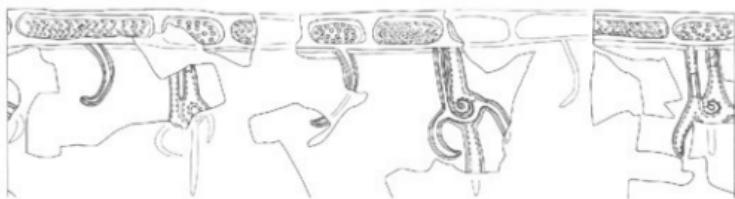
第52図 第11層出土遺物(1)



第53図 第11層出土遺物(2)



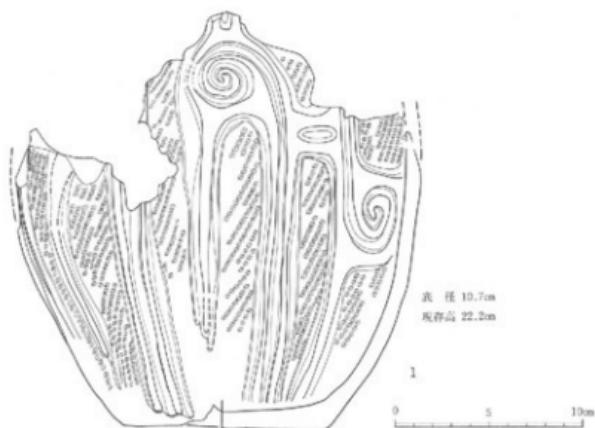
第54図 第11層出土遺物(3)



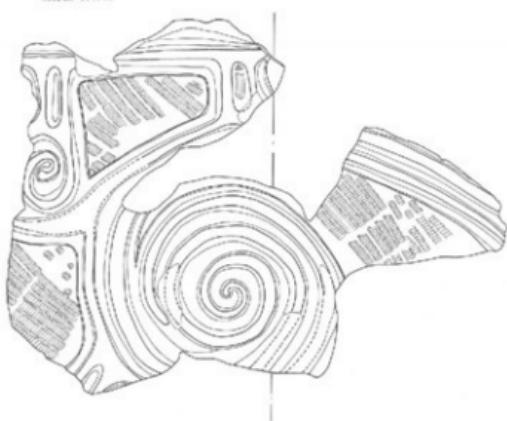
1



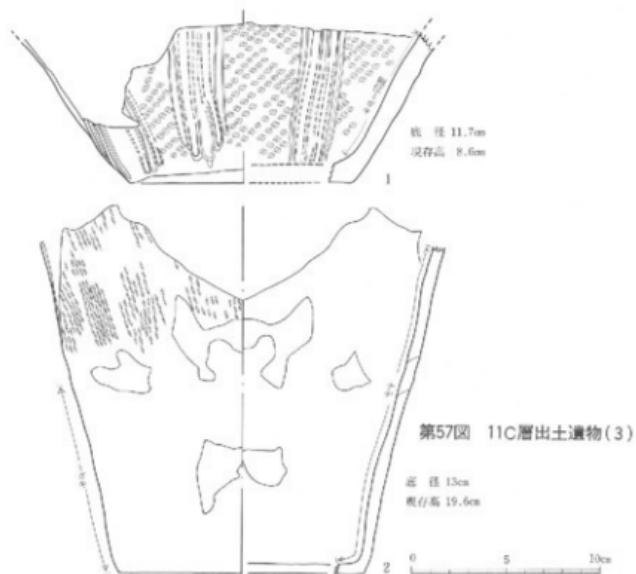
第55図 11C層出土遺物 (1)



現存高 19.7cm



第56図 11C層出土遺物(2)

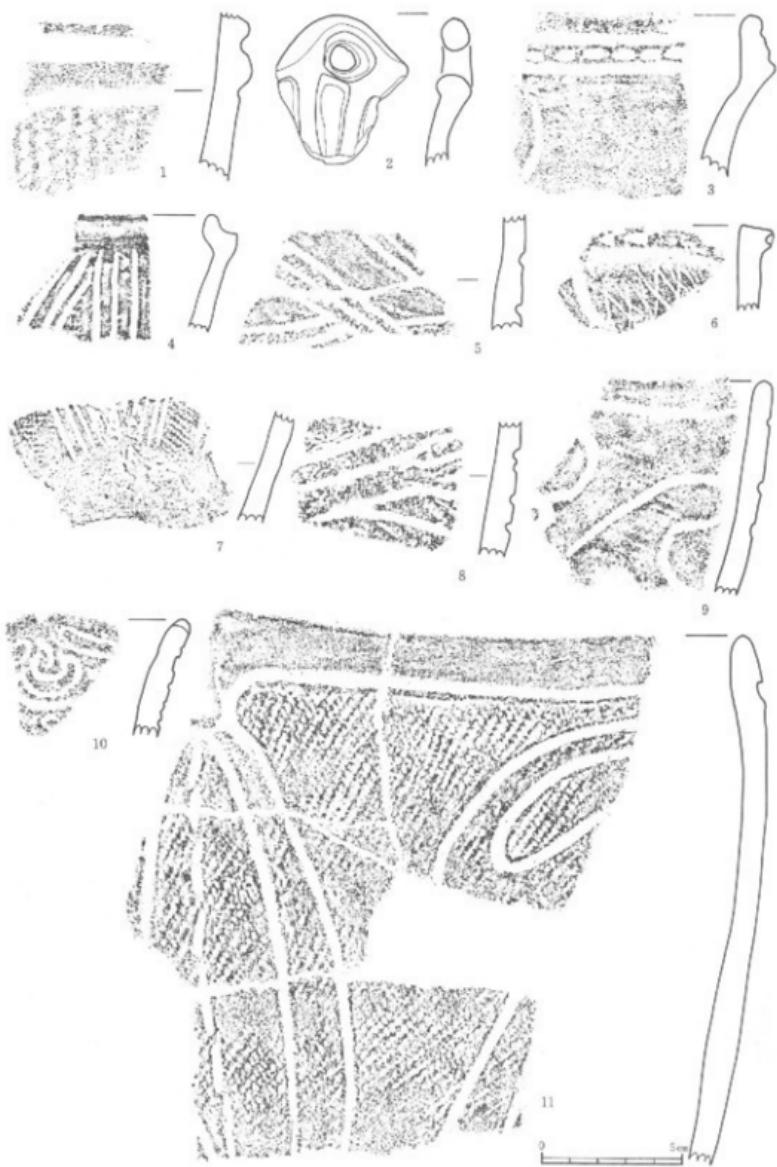


第57図 11C層出土遺物(3)

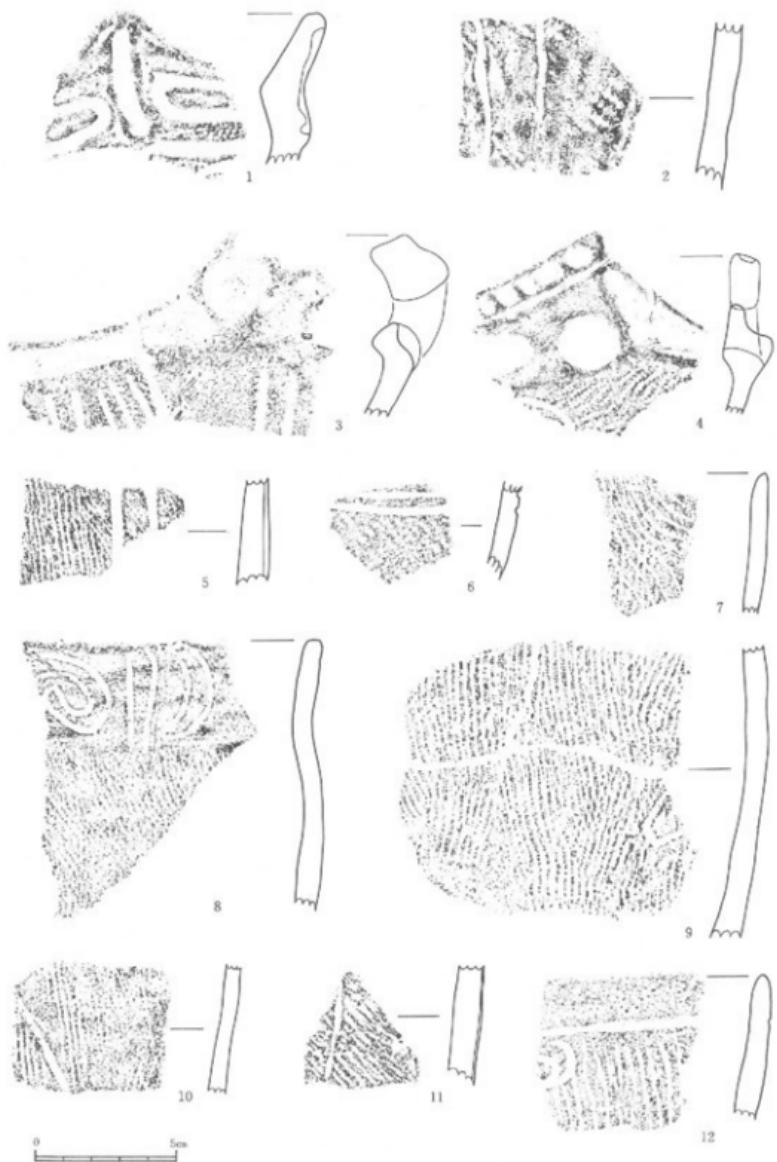
図2は1類に属し、器形は深鉢Eを示す代表例である。文様は胴部でf・i・jの要素、口縁部では5類a・dの要素を合わせもち、内面はミガキが施される。第47図2は、前述した1と類似するが、肩部の張りはみられない。第53図1は7類に属し、横描文は極めて幅が広く、長楕円を基調とした沈線文を胴部に施す。第73図5～7は、本群土器に伴なう口縁部と考えられる。第73図10・12は1類fに属し、時に10は特徴的なモチーフを示す。第75図15・18は2類jに属し、特徴的な蛇行沈線文を施す。第76図1・2は2類に属し、さらにa・j・kなどの要素を合わせもつ。これらの土器は、ゆるい大型の波状口縁を呈し、極めて特異的な波頂部をもつ。第77図9は2類gに、12は2類eにそれぞれ属し、他にあまり例がない。第78図6・10は3類d・e・fの要素をもち、頸部には把手を貼付する。器形は、深鉢Eを示す。

#### 第VII群土器（第79図13～20、第80図、第81図1～12）

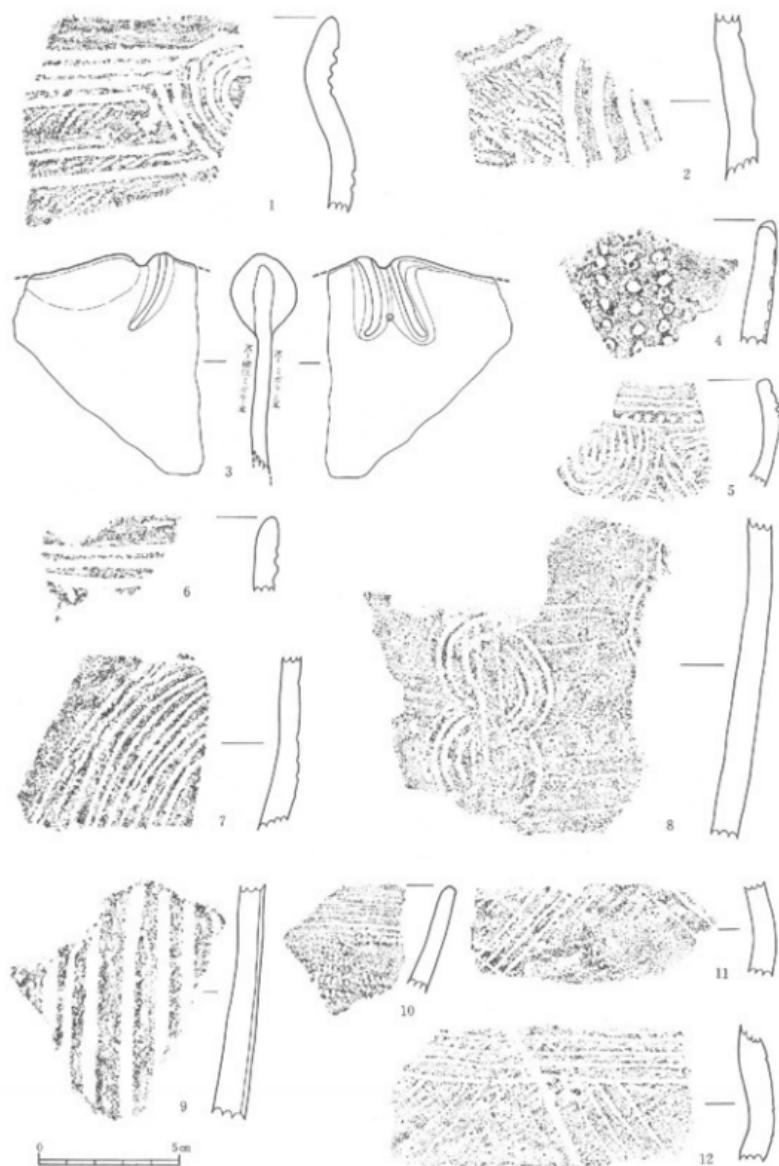
第80図6は1類に属する。口縁上端部に隆帯が貼付され、刻目が施されている。第79図13～20は2類に属する。横位に施される数条の平行沈線により文様が構成されている。第80図1～5・7～14は3類に属する。横位、斜位の平行沈線により幾何学的文様が構成され、沈線間に繩文ないし撚糸文が施されている。12は特に沈線が幾重にも施されている。15は4類に属する。胴部が膨らみ、口縁部が直立する形態で、胴部には渦巻状の沈線が施されている。第80図16、第81図1～7は5類に属する。直線的・曲線的平行沈線により文様が構成されている。8～11



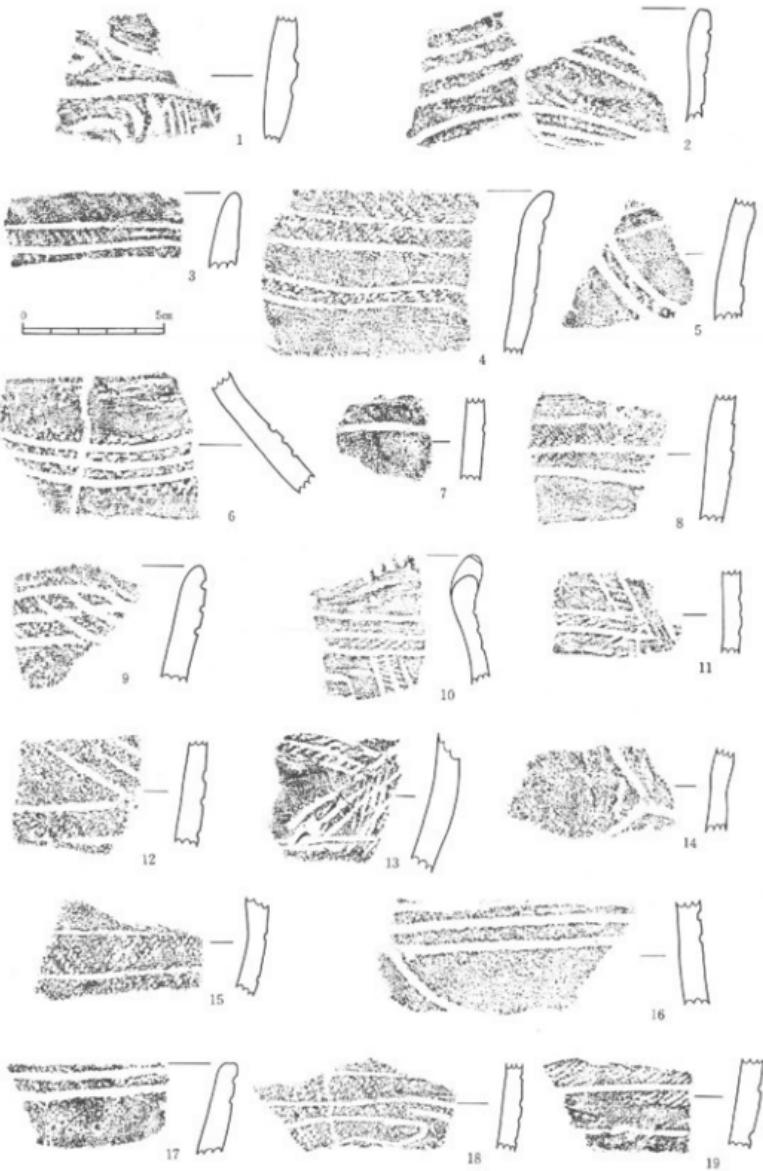
第58図 第8層出土遺物(1)



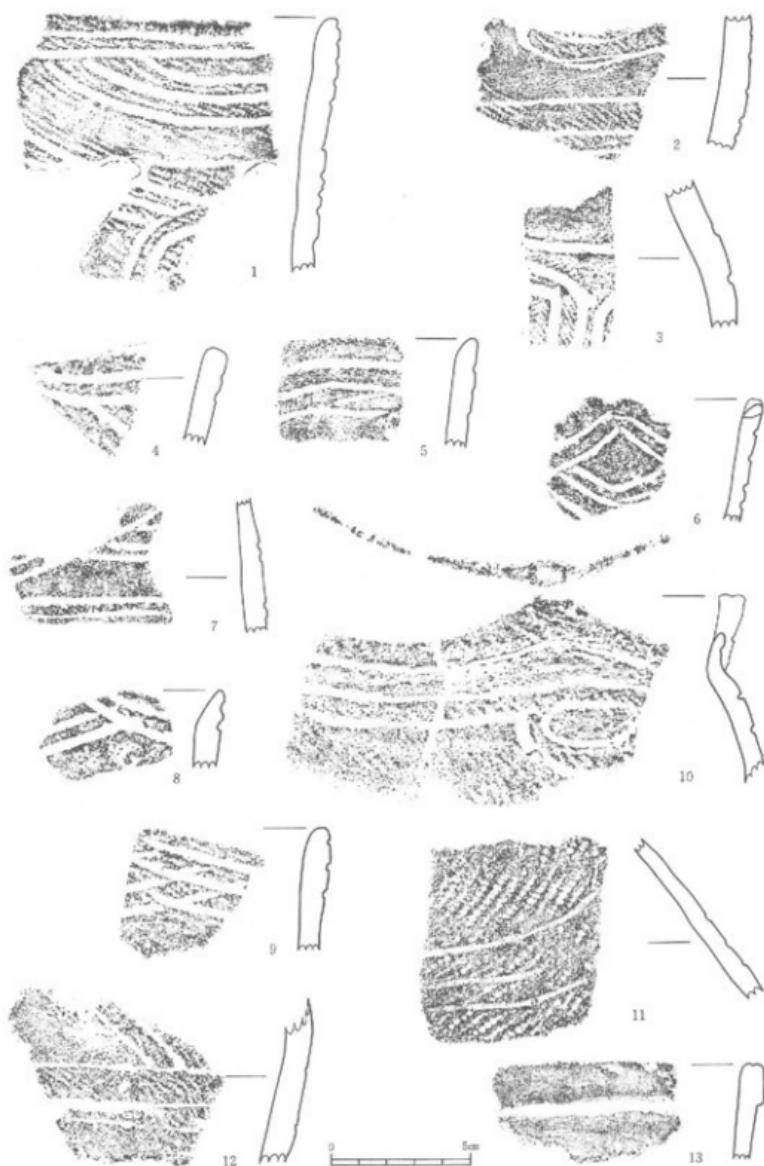
第59図 第8層出土遺物(2)



第60図 第8層出土遺物(3)



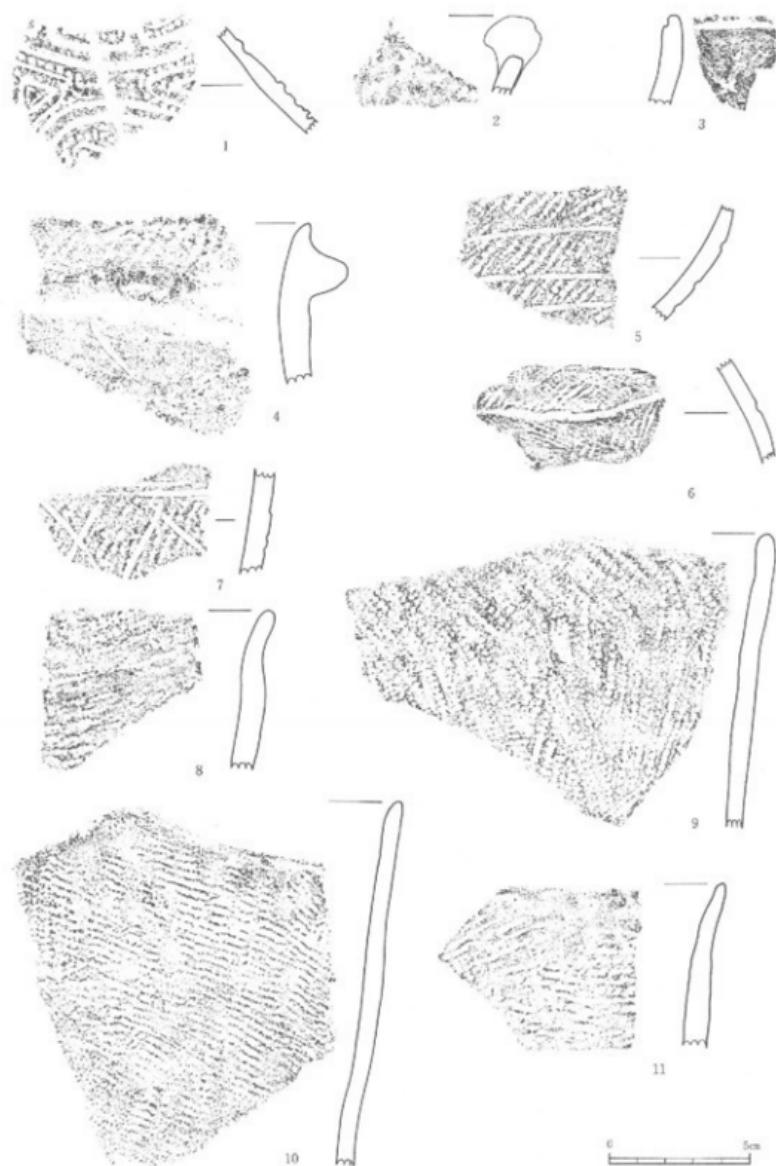
第61図 第8層出土遺物(4)



第62図 第8層出土遺物(5)



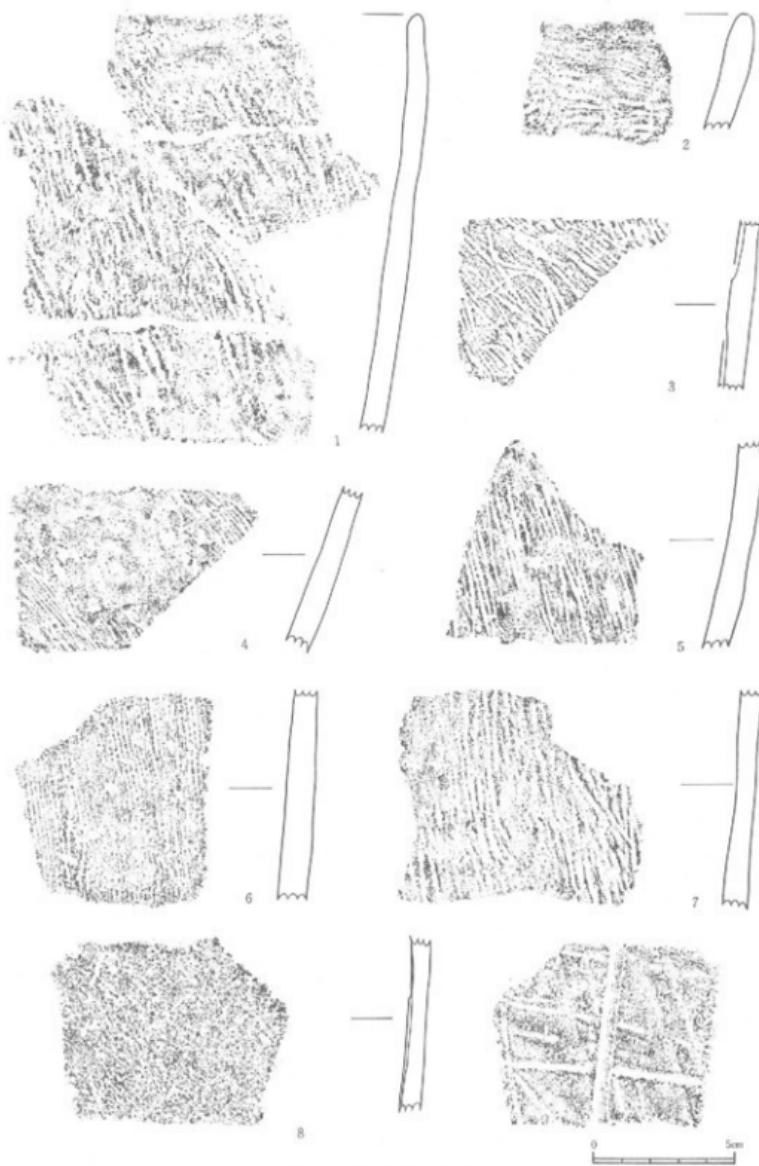
第63図 第8層出土遺物(6)



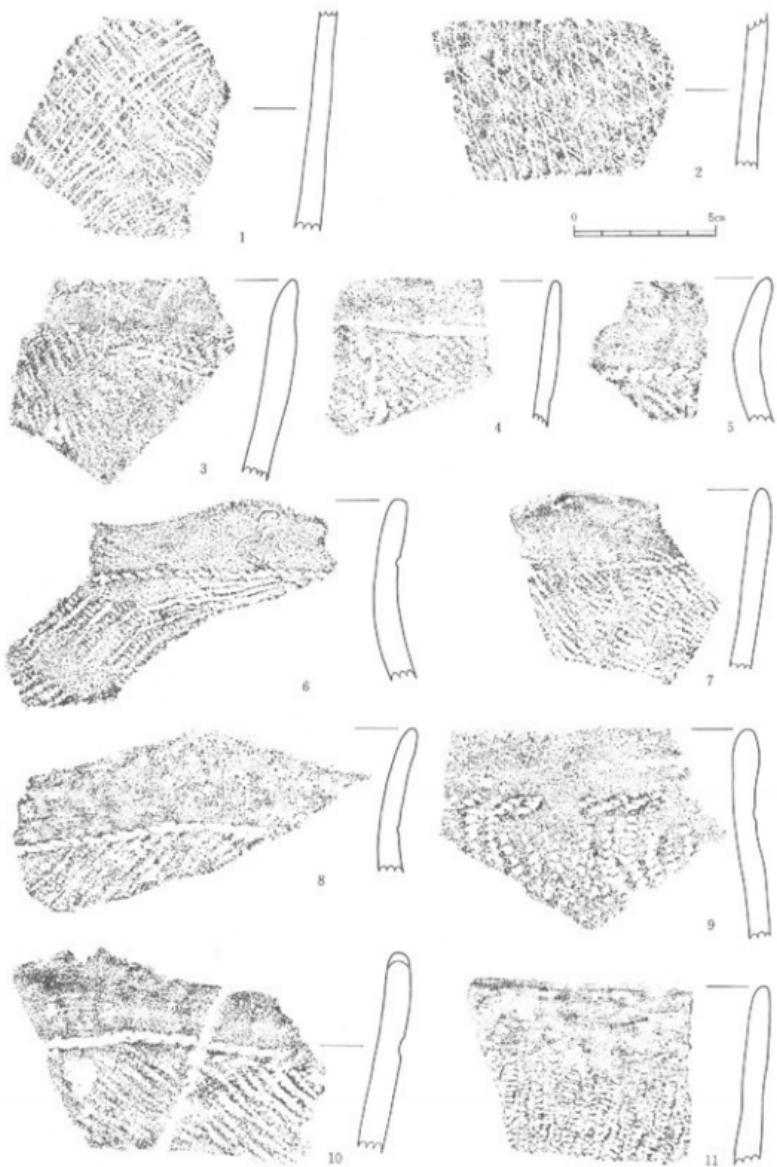
第64図 第8層出土遺物(7)



第65図 第8層出土遺物(8)



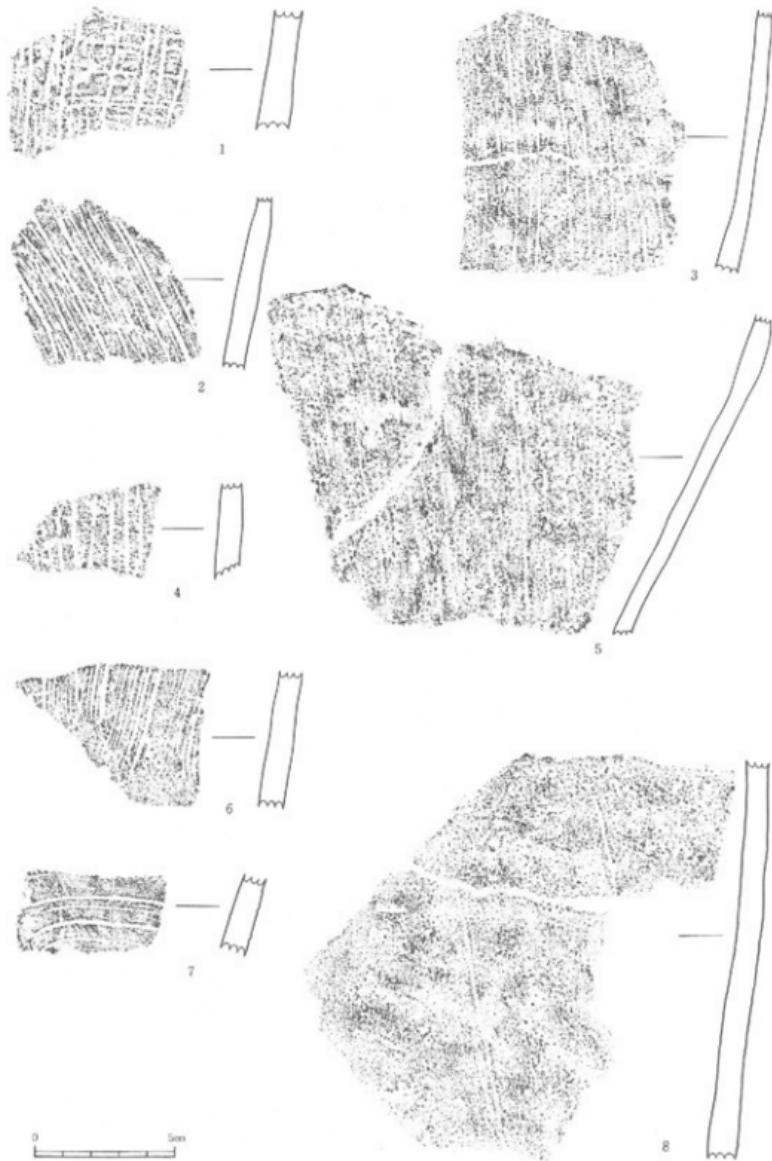
第66図 第8層出土遺物(9)



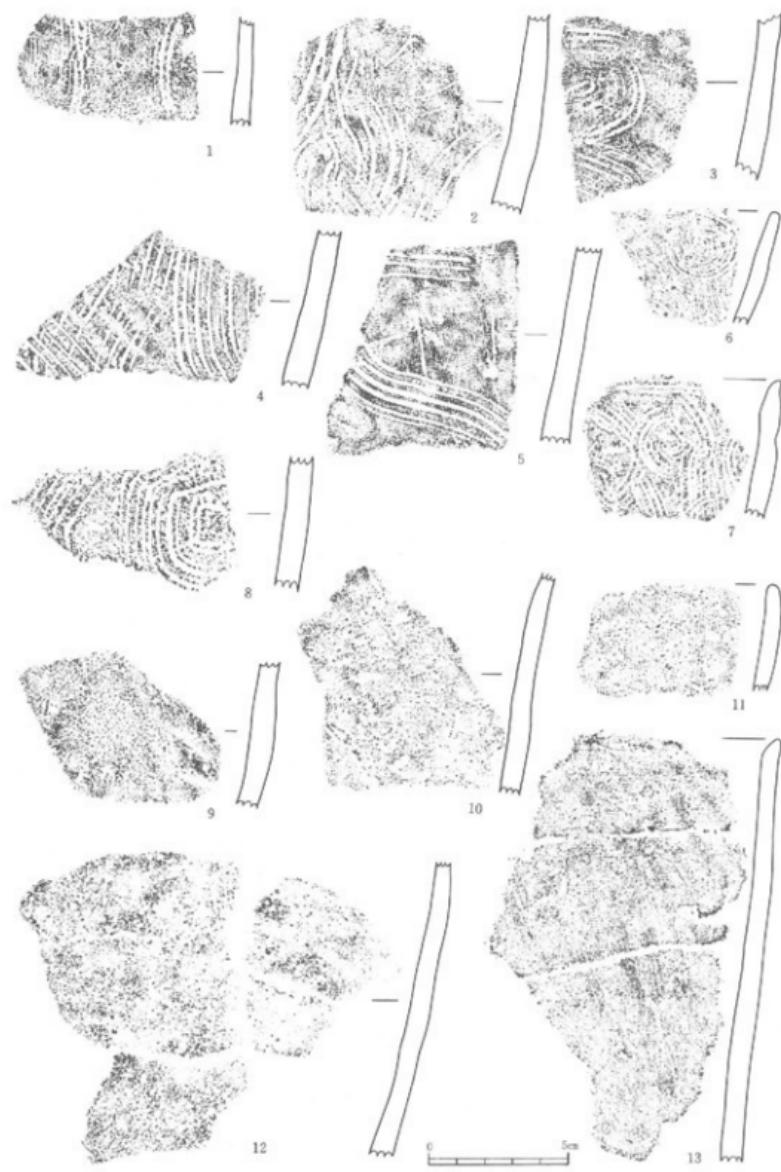
第67図 第8層出土遺物(10)



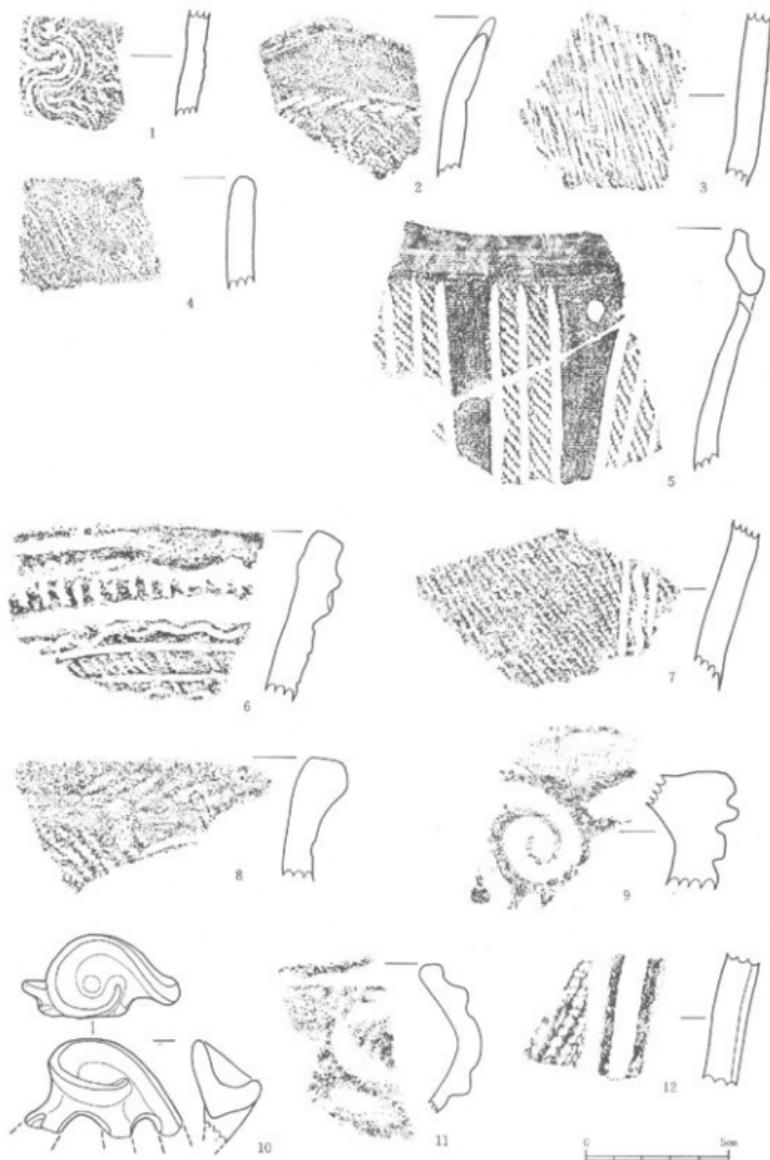
第66図 第8層出土遺物(11)



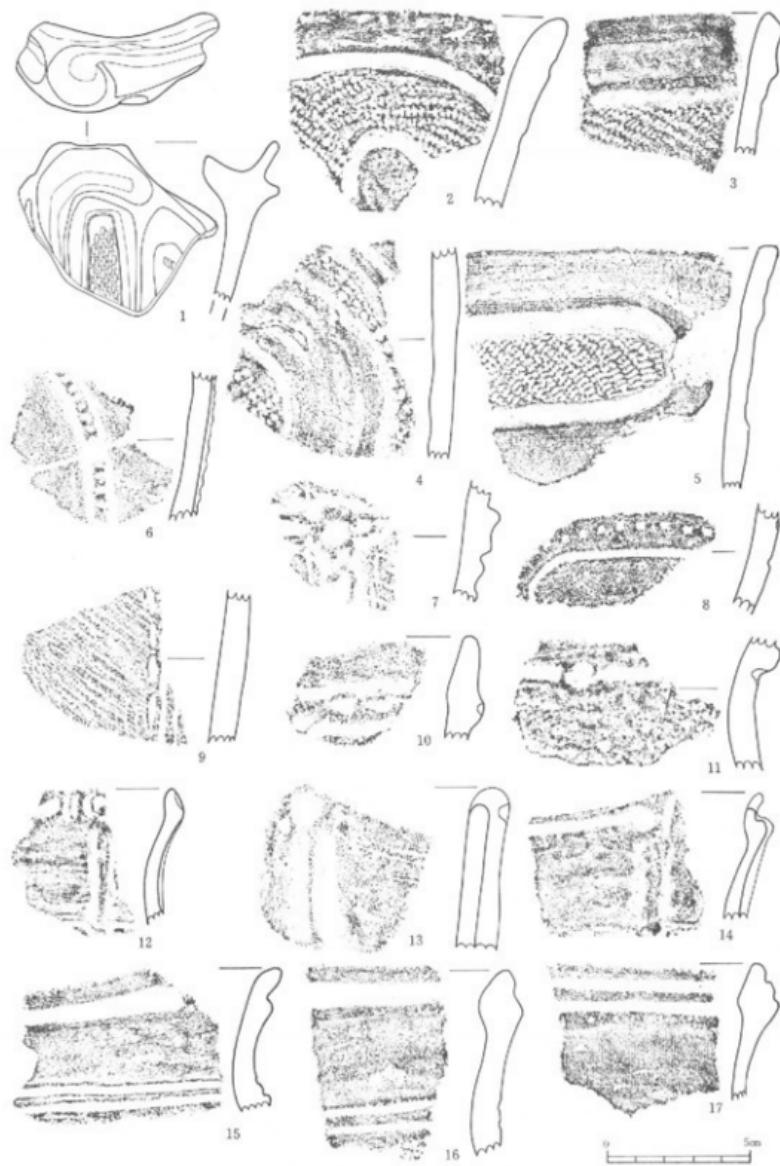
第69図 第8層出土遺物(12)



第70図 第8層出土遺物(13)



第71図 第9層・第10層出土遺物(1)



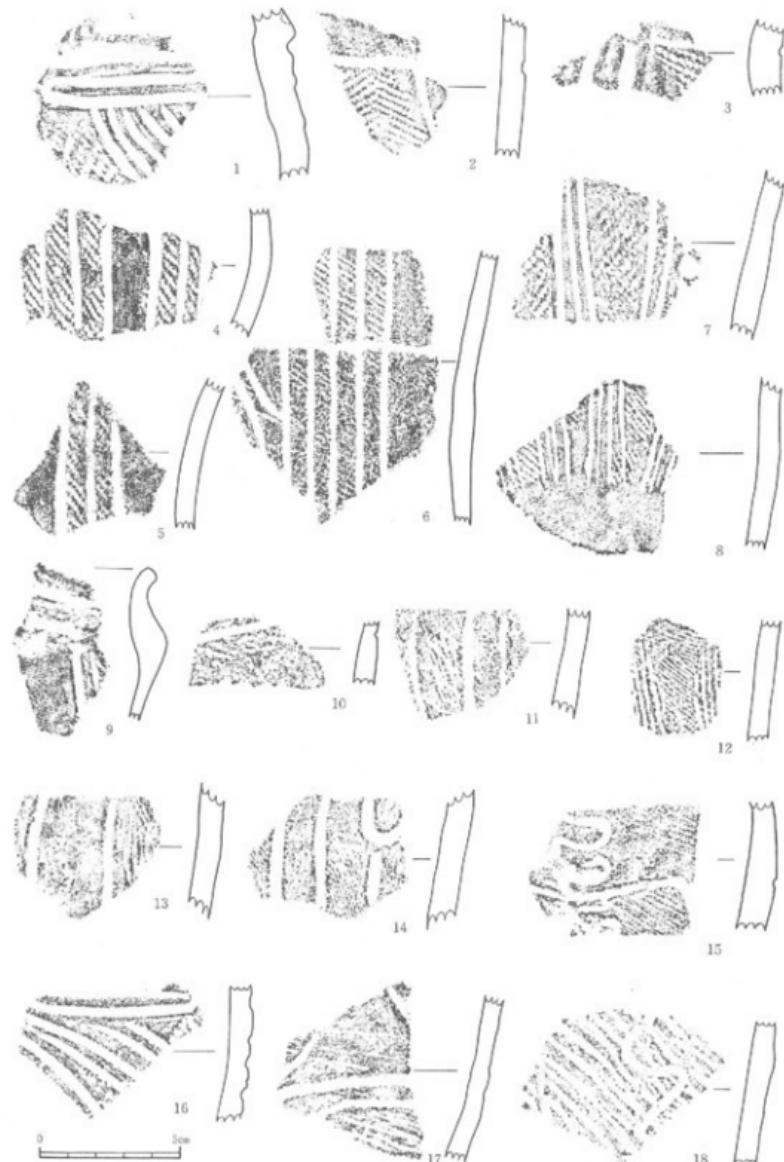
第72図 第10層出土遺物(2)



第73図 第10層出土遺物(3)



第74図 第10層出土遺物(4)



第75図 第10層出土遺物(5)



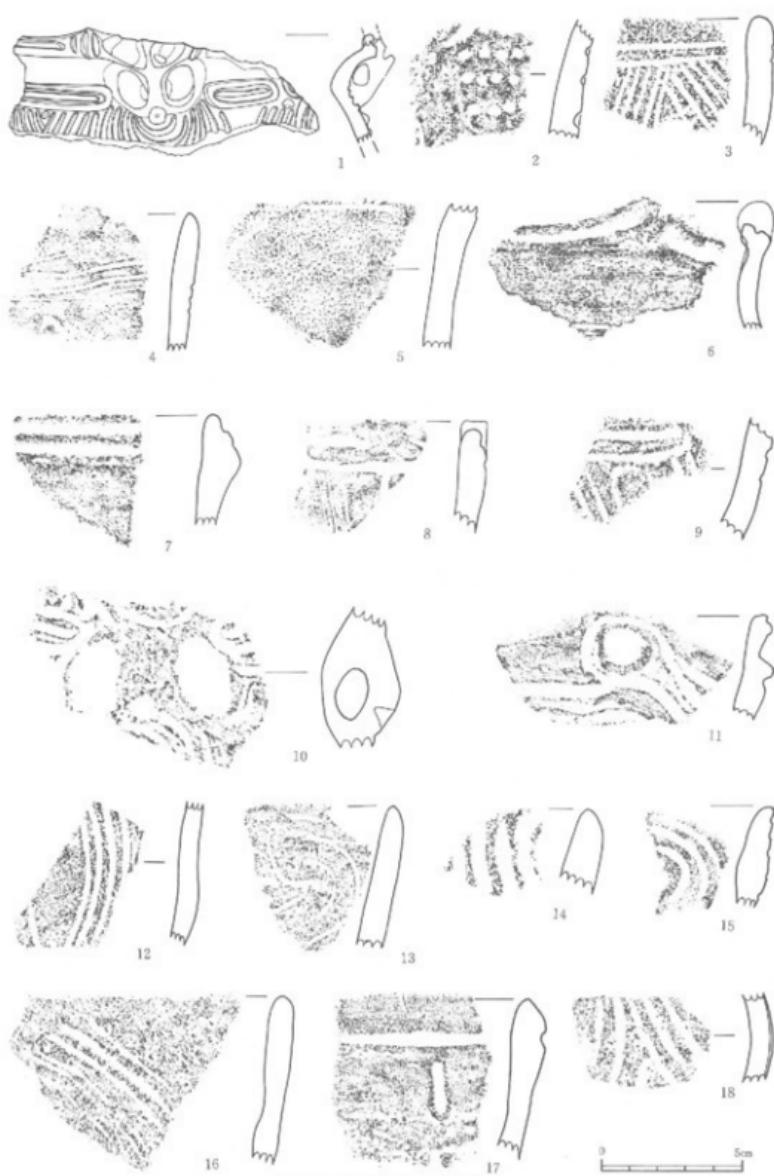
0 5cm



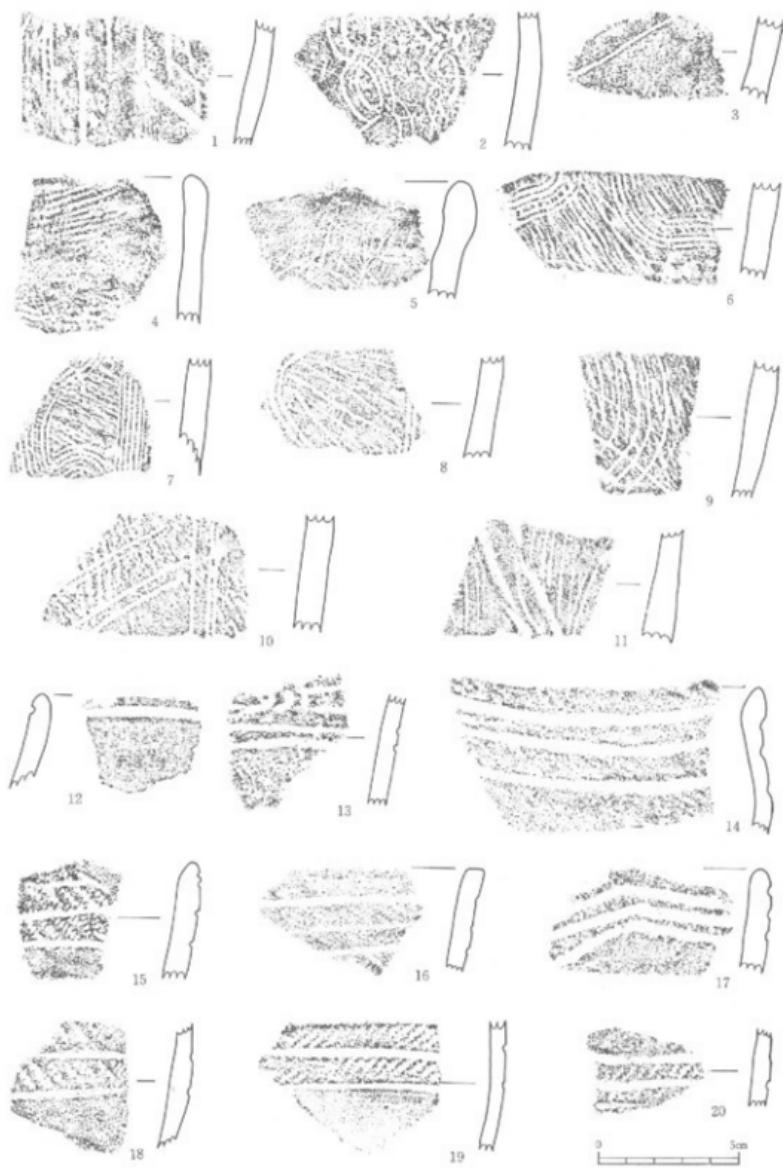
第76図 第10層出土遺物(6)



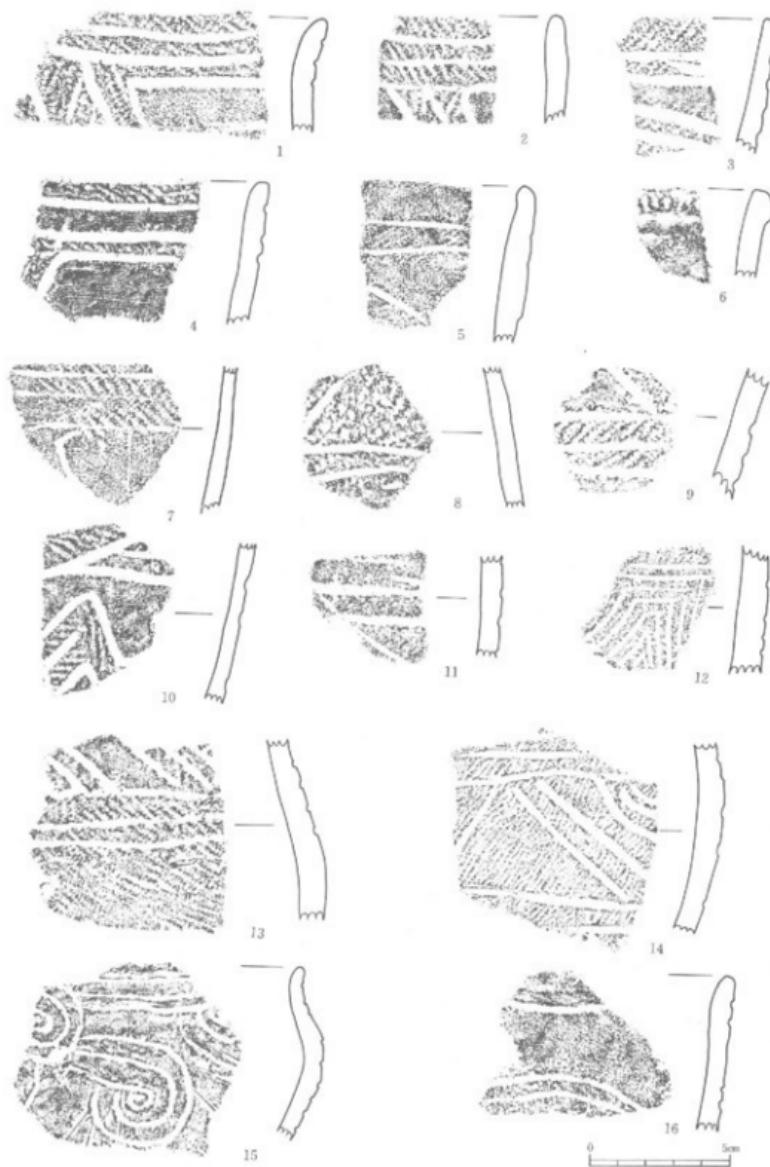
第77図 第10層出土遺物(7)



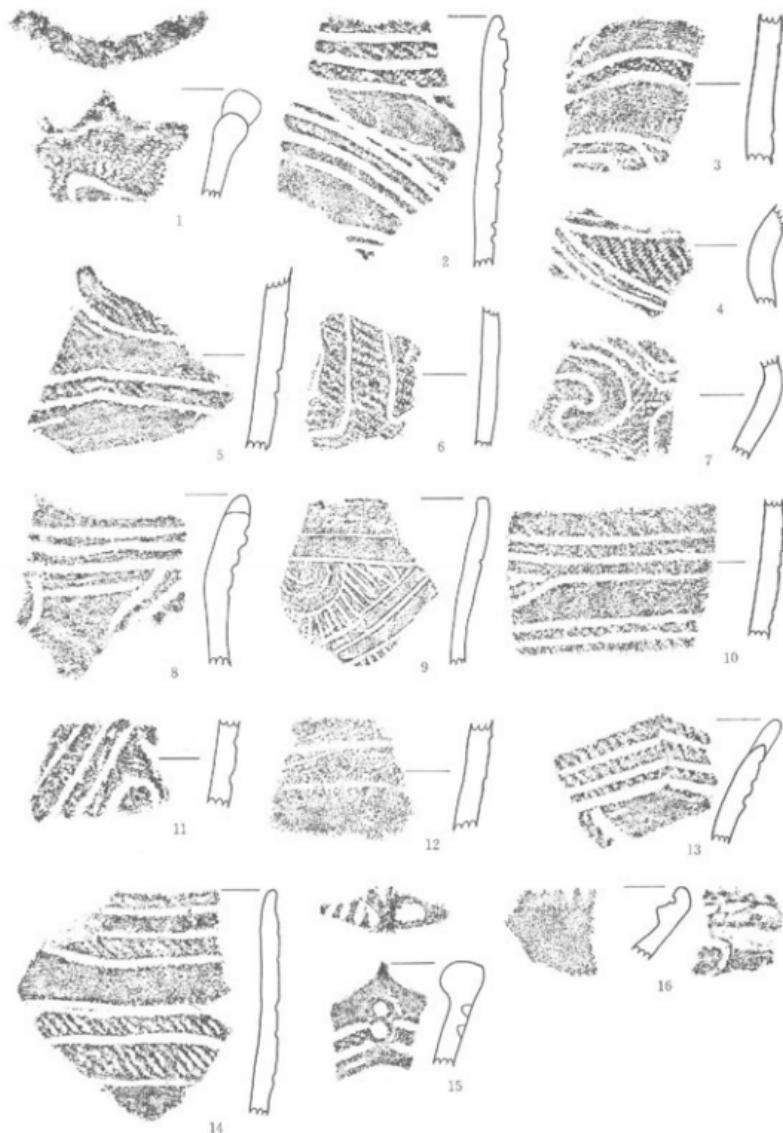
第78図 第10層出土遺物(8)



第79図 第10層出土遺物(9)



第80図 第10層出土遺物(10)

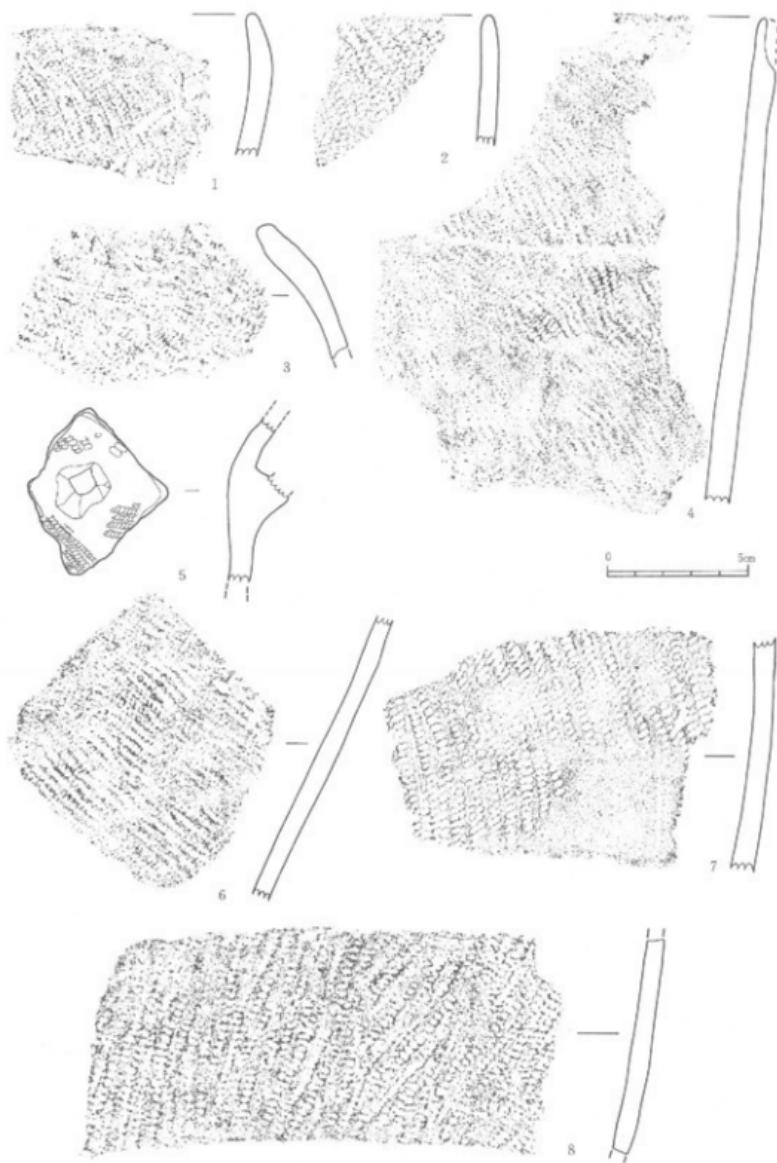


第81図 第10層出土遺物(11)

0 5cm



第82図 第10層出土遺物(12)



第83図 第10層出土遺物(13)



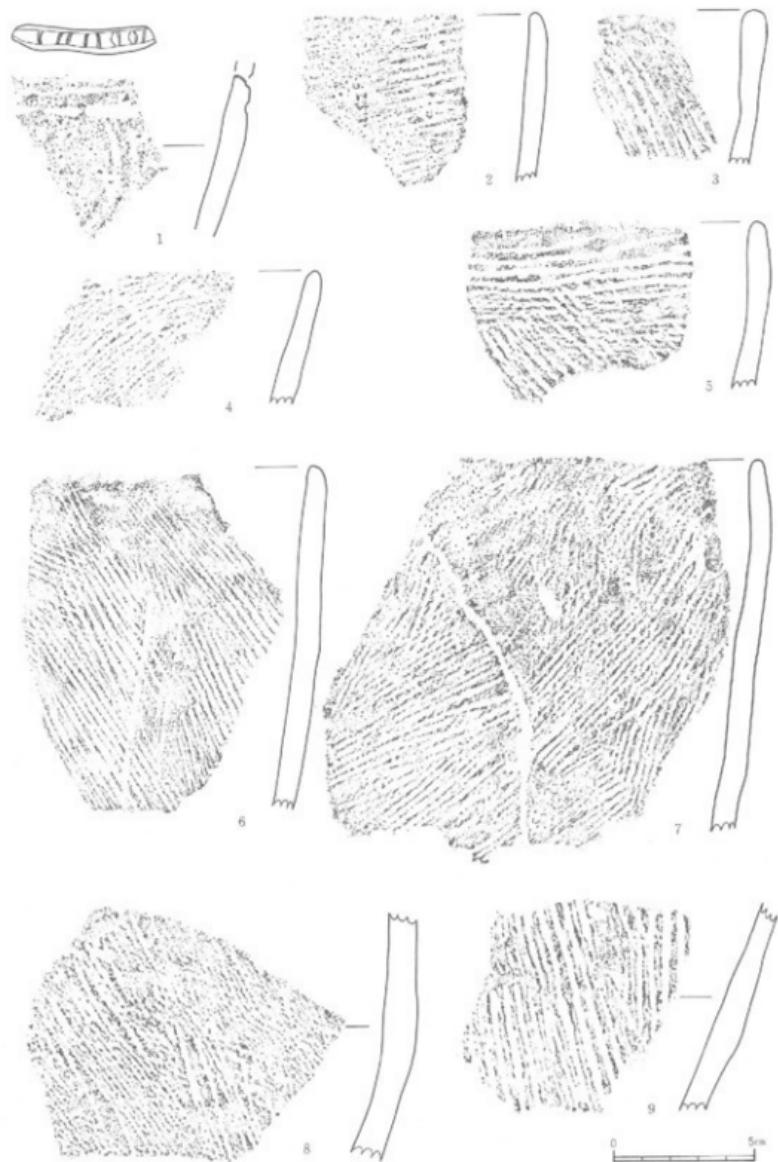
第84図 第10層出土遺物(14)



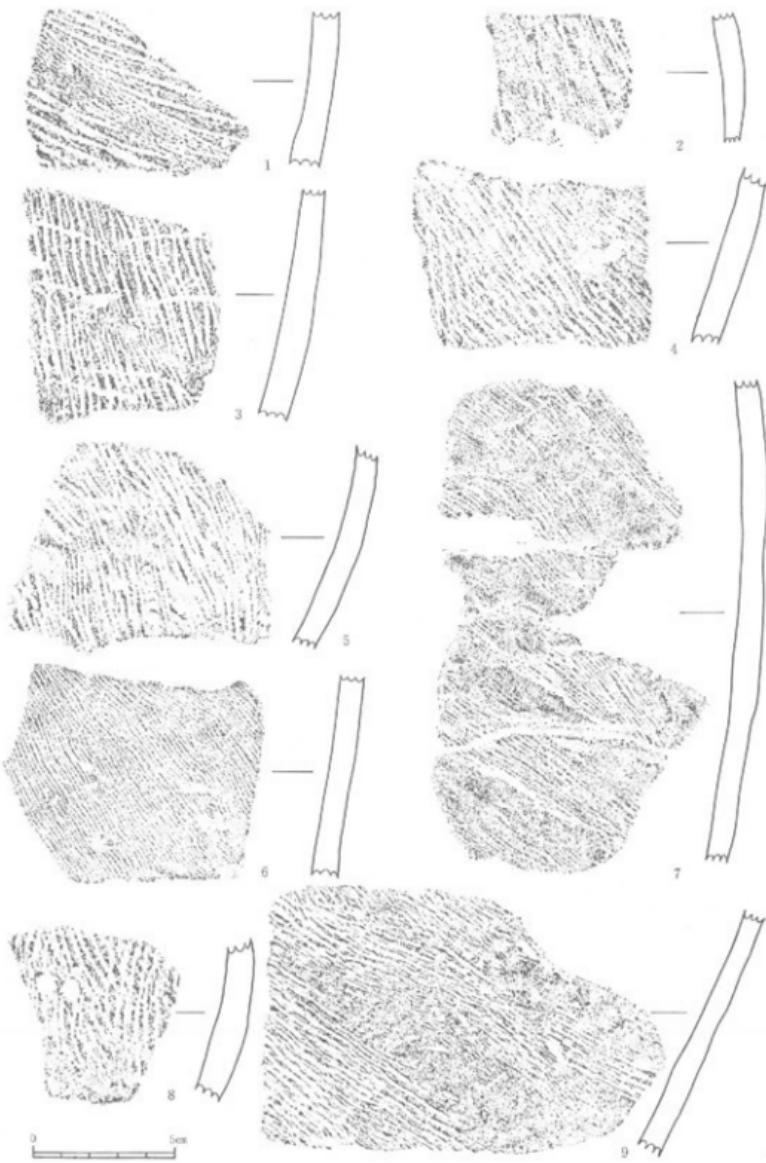
第85図 第10層出土遺物(15)



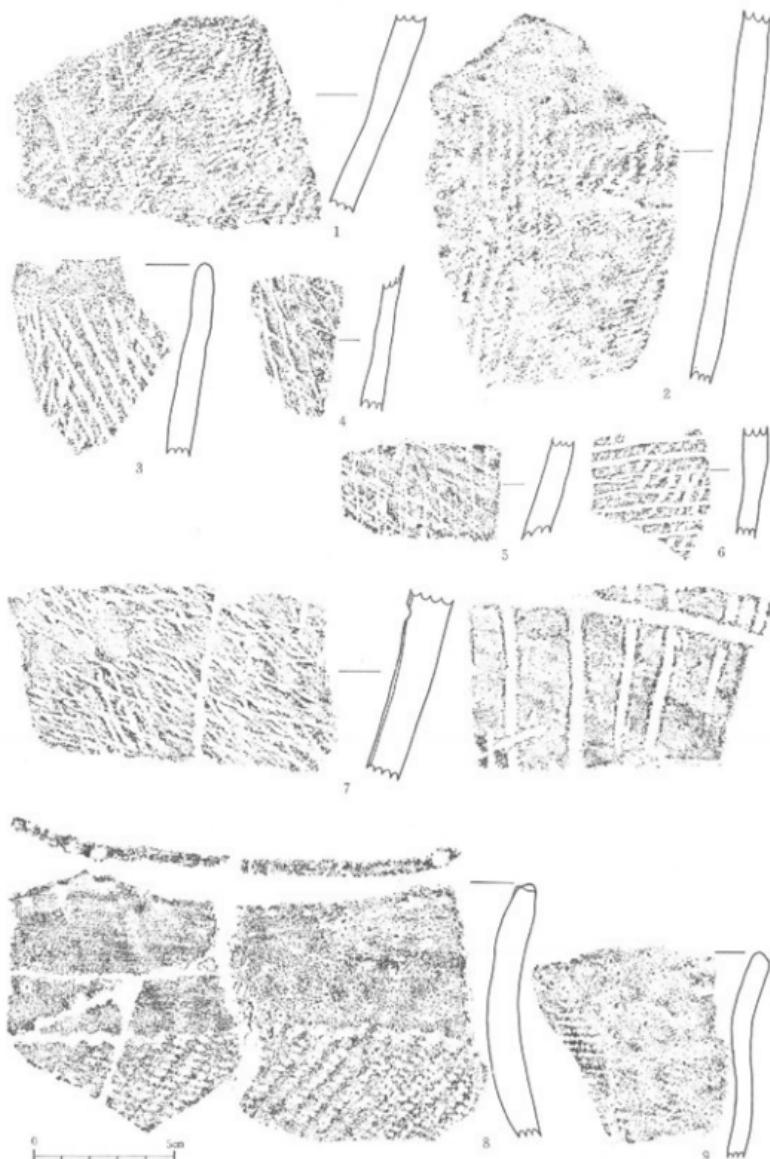
第86図 第10層出土遺物(16)



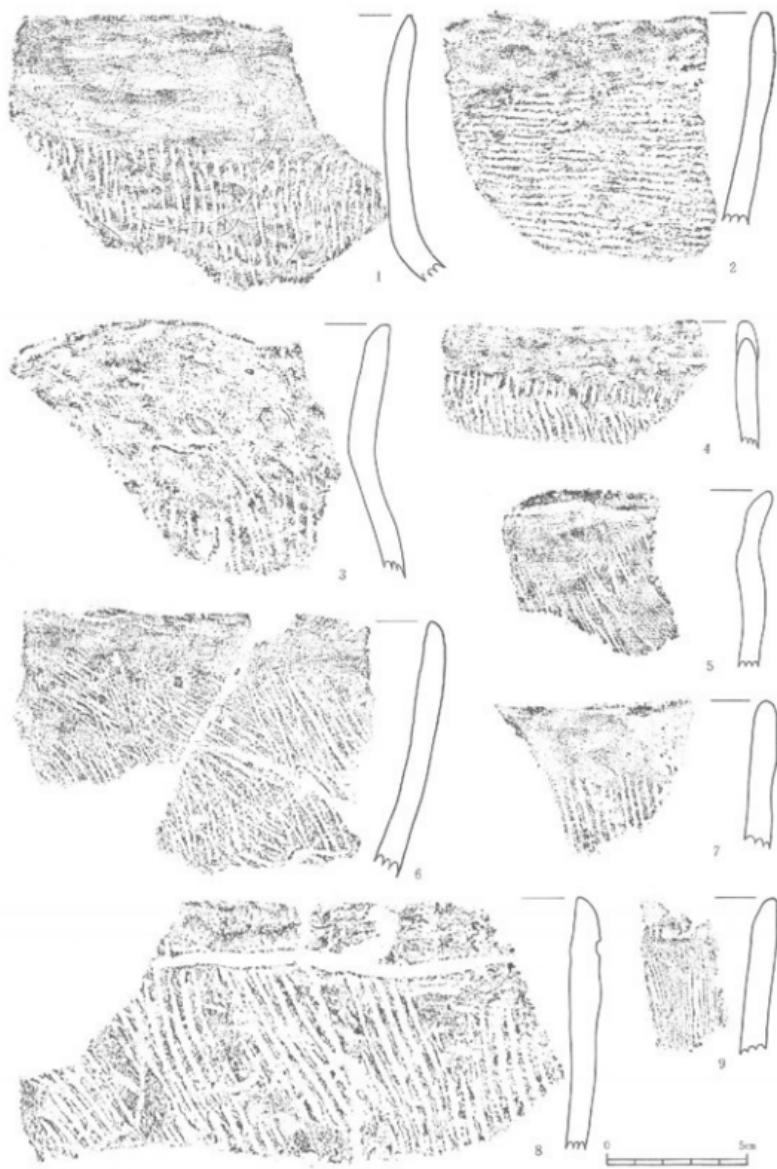
第87図 第10層出土遺物(17)



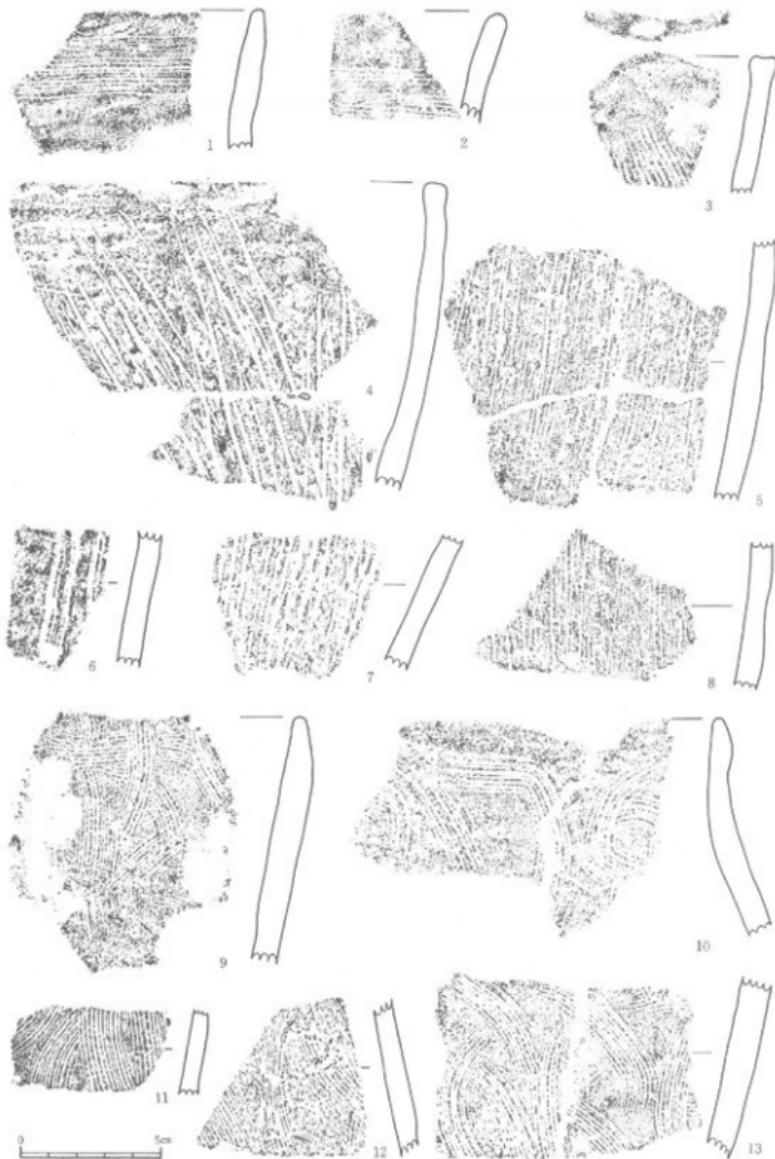
第88図 第10層出土遺物(18)



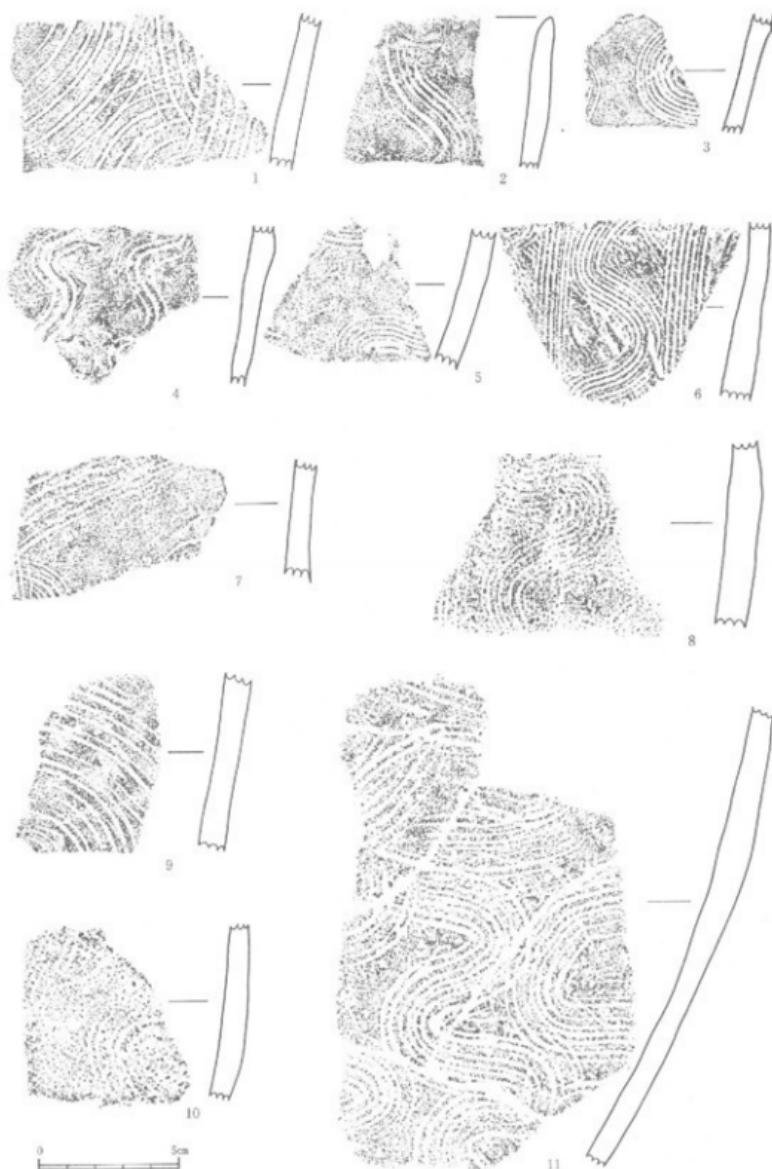
第89図 第10層出土遺物(19)



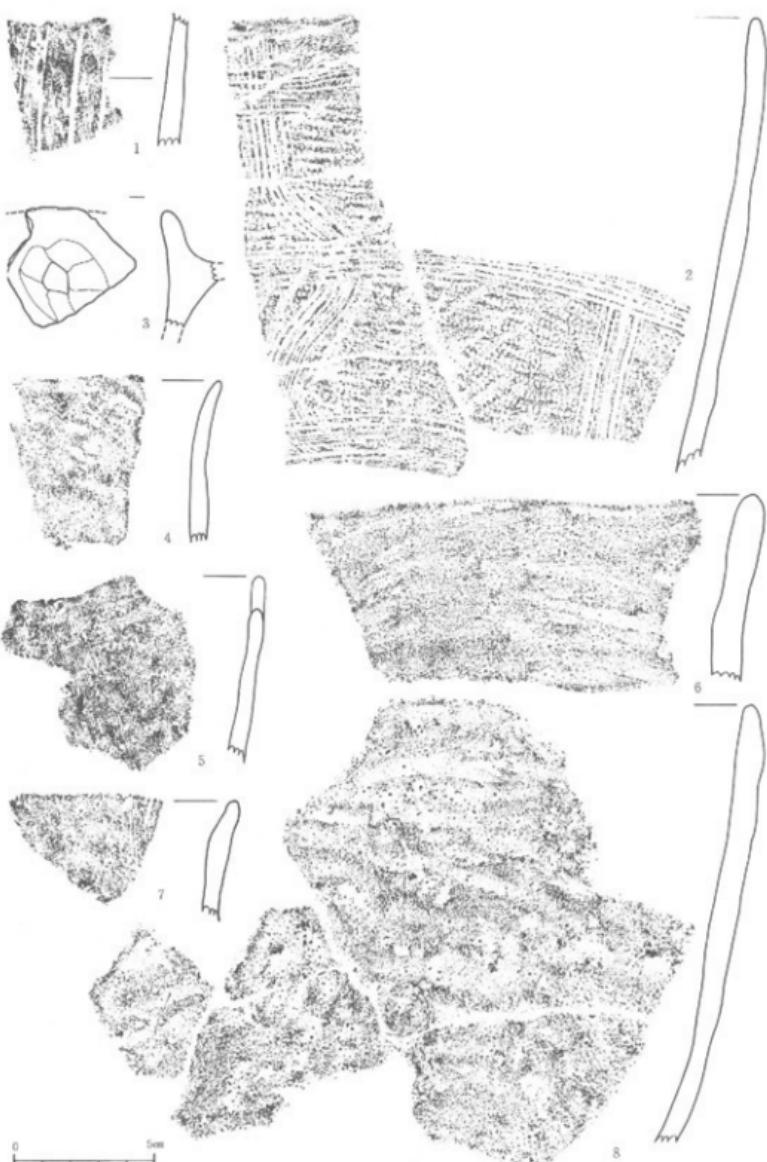
第90図 第10層出土遺物 (20)



第91図 第10層出土遺物(21)



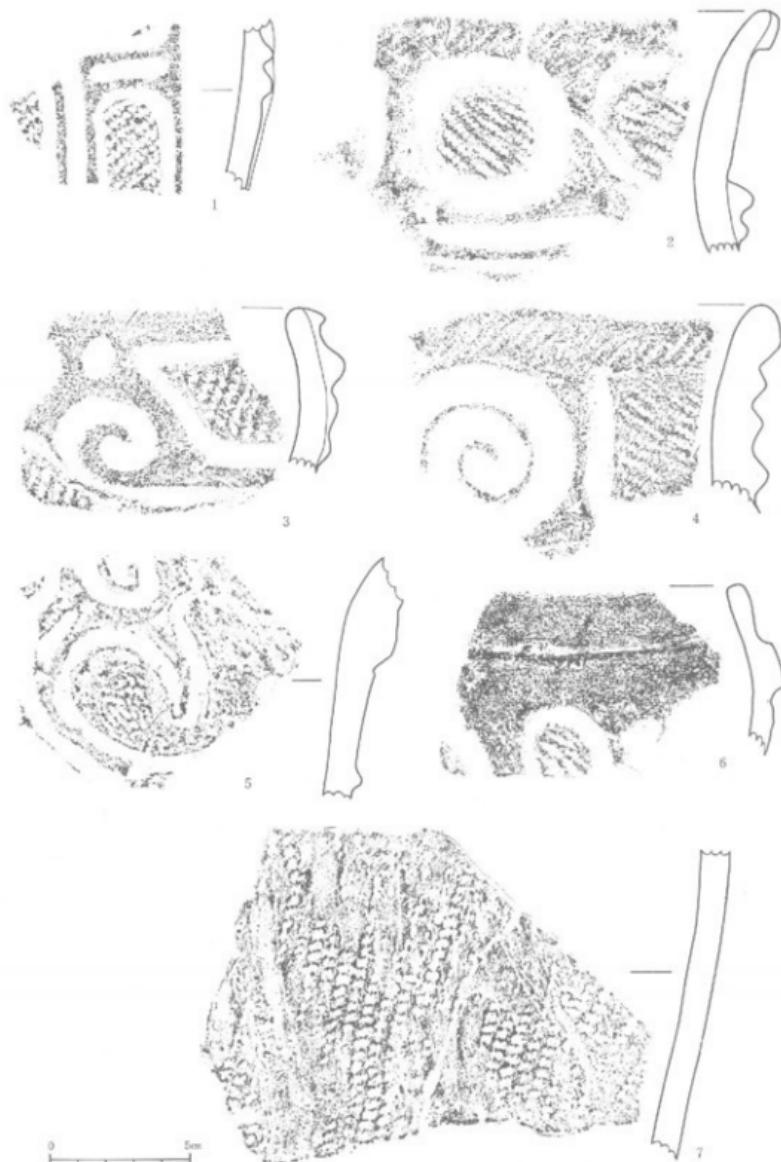
第92図 第10層出土遺物(22)



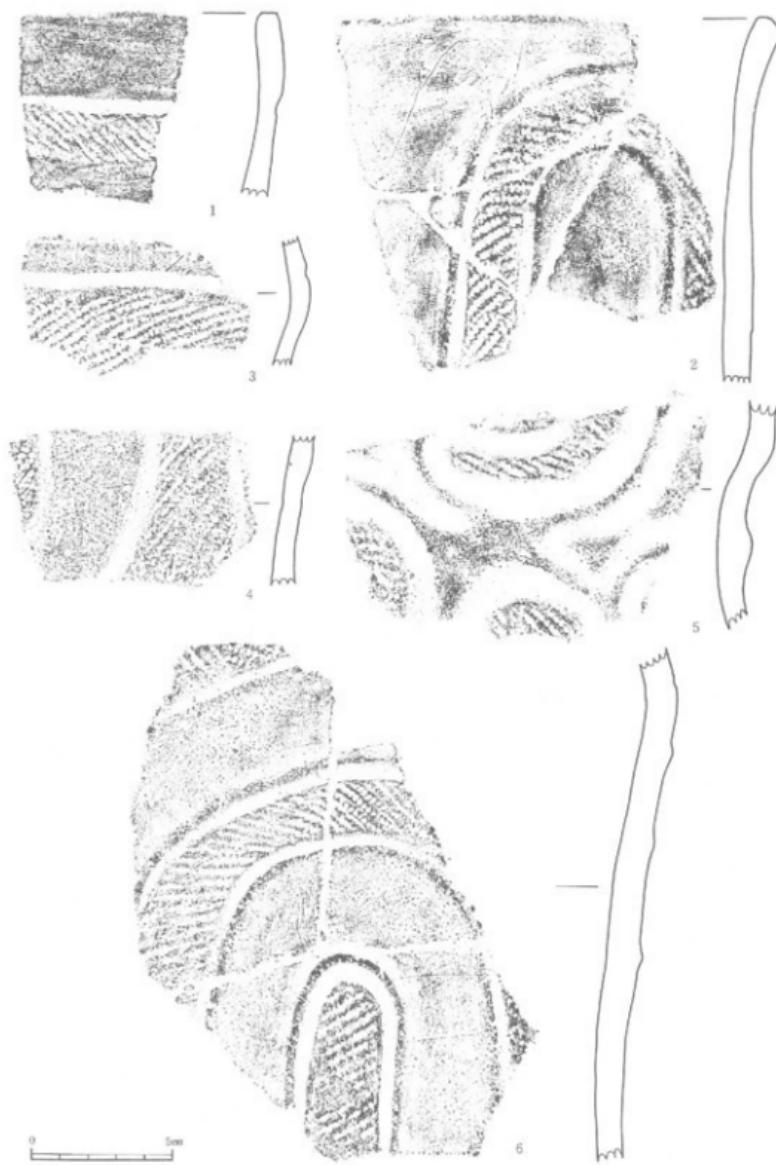
第93図 第10層出土遺物(23)



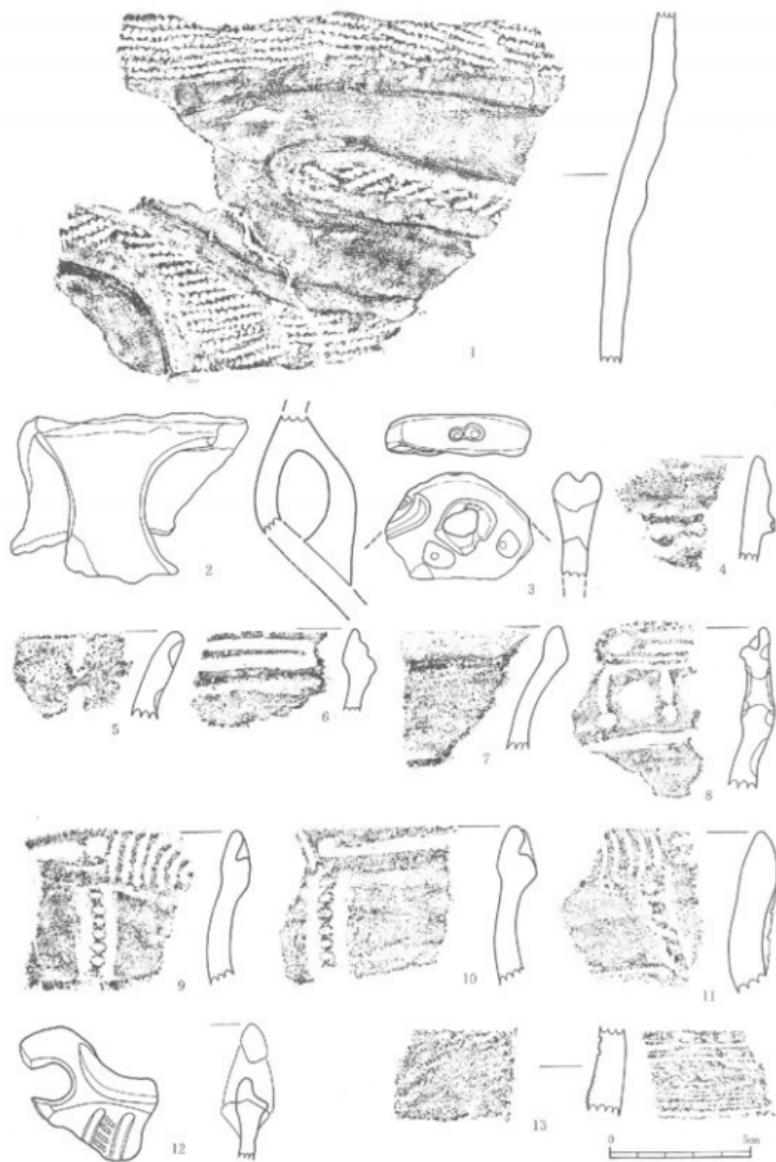
第94図 第10層・第11a層出土遺物(1)



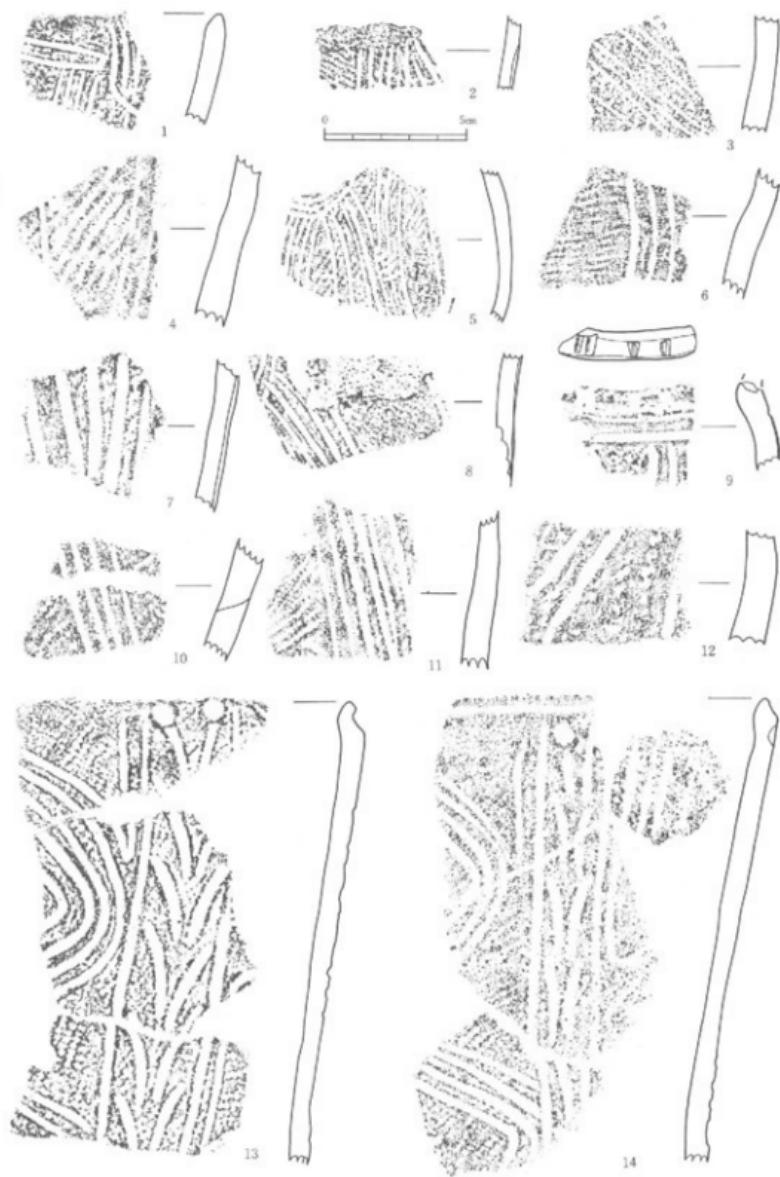
第95図 第11a層出土遺物(2)



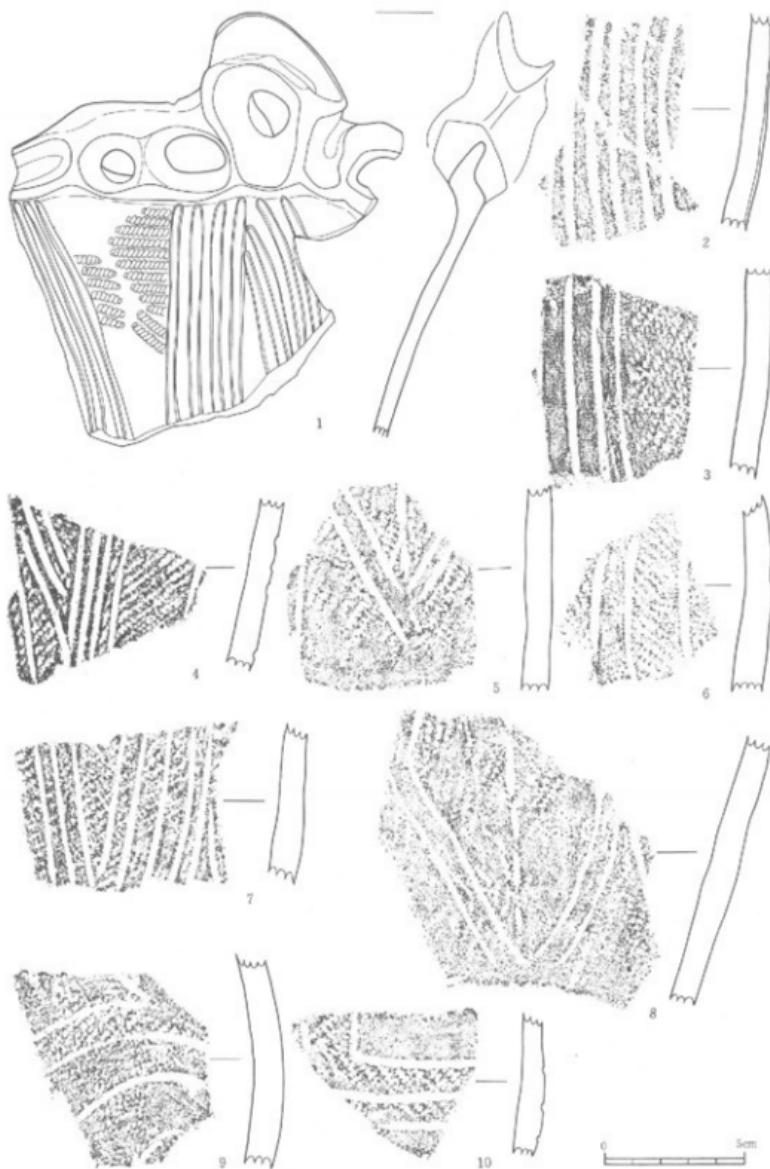
第96図 第11a層出土遺物(3)



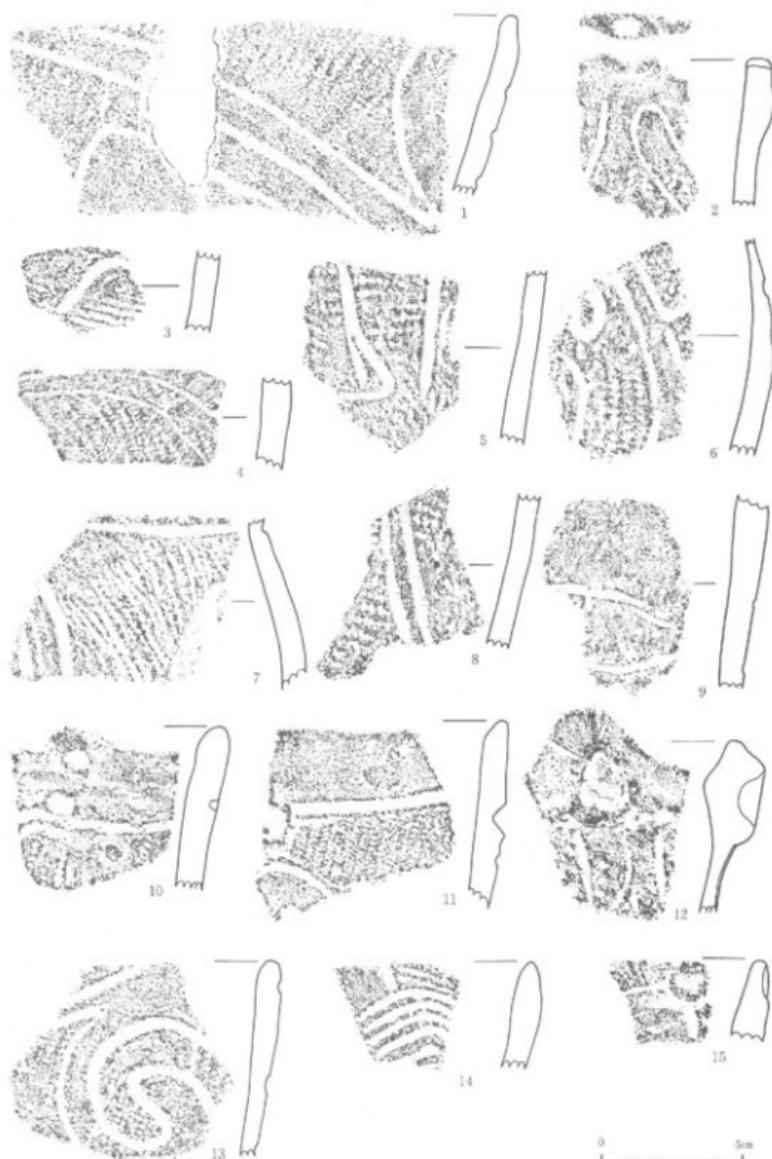
第97図 第11a層出土遺物(4)



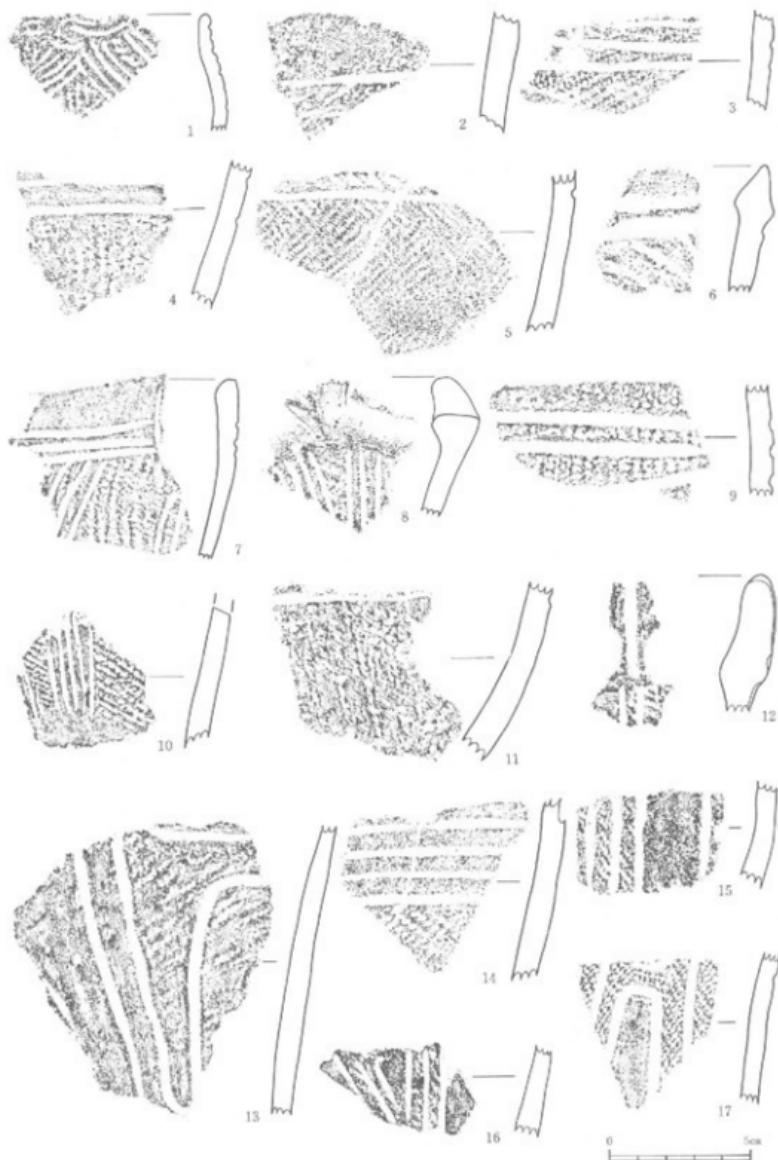
第98図 第11a層出土遺物(5)



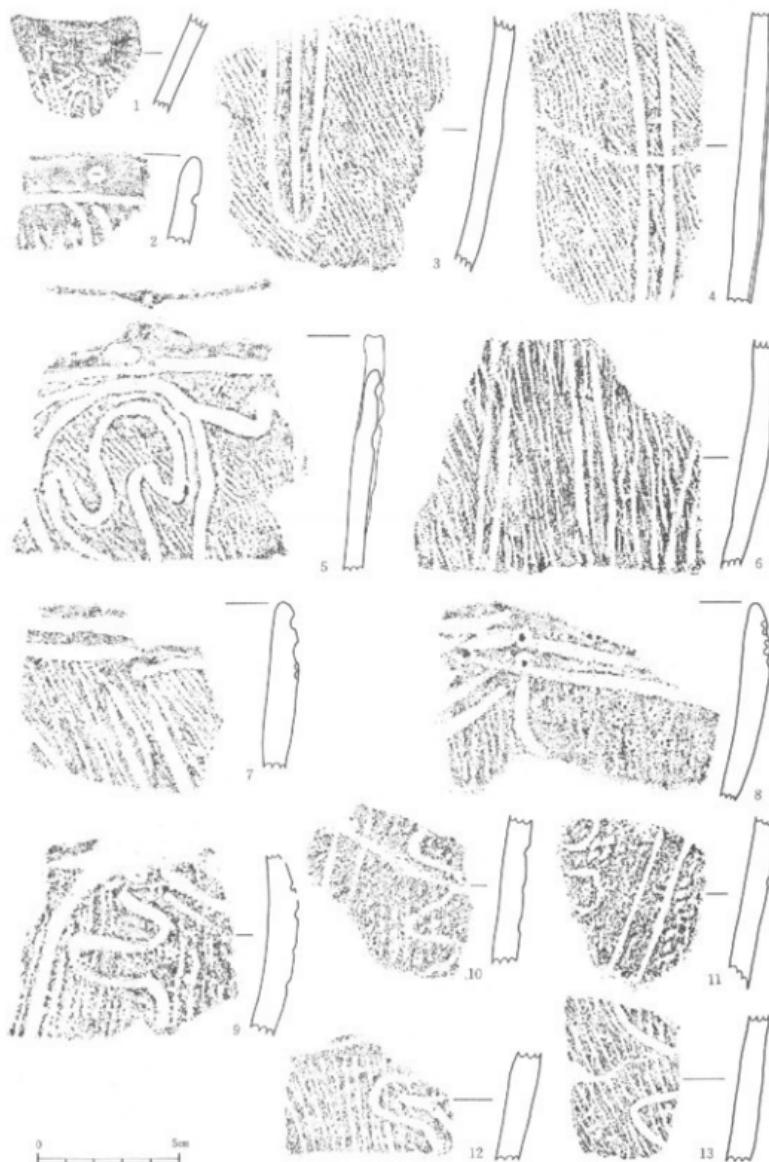
第99図 第11a層出土遺物(6)



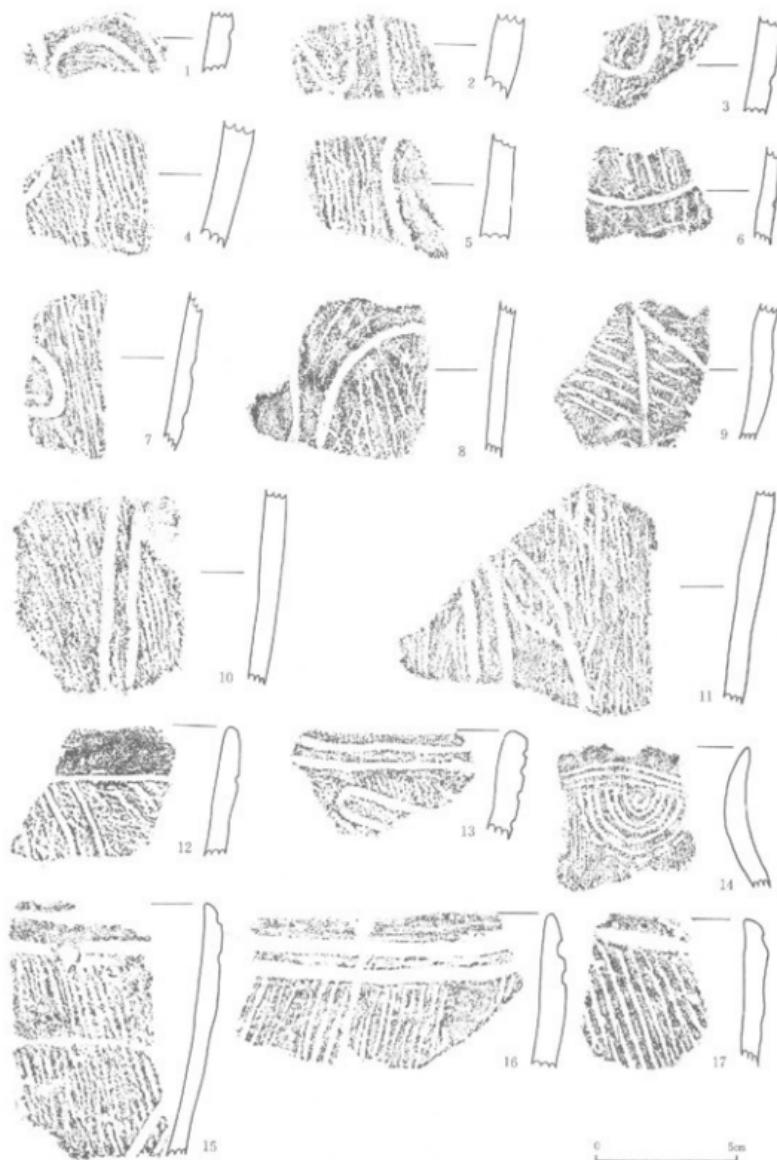
第100図 第11a層出土遺物(7)



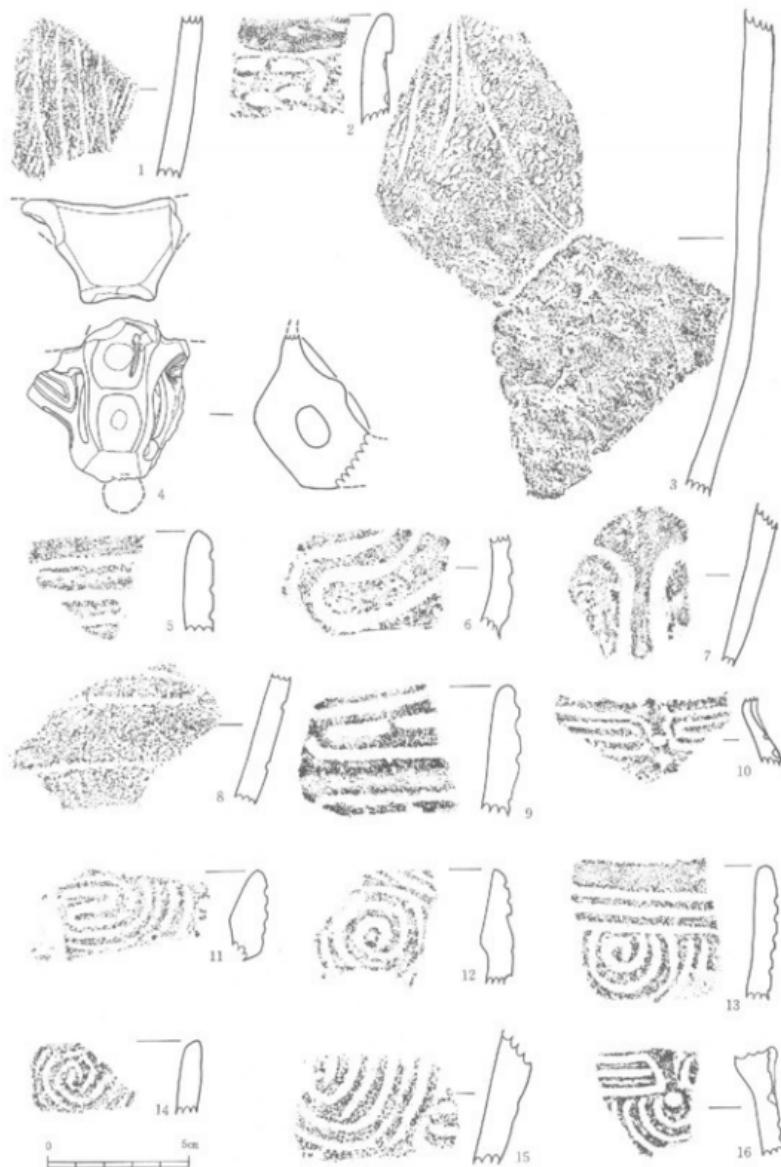
第101図 第11a層出土遺物(8)



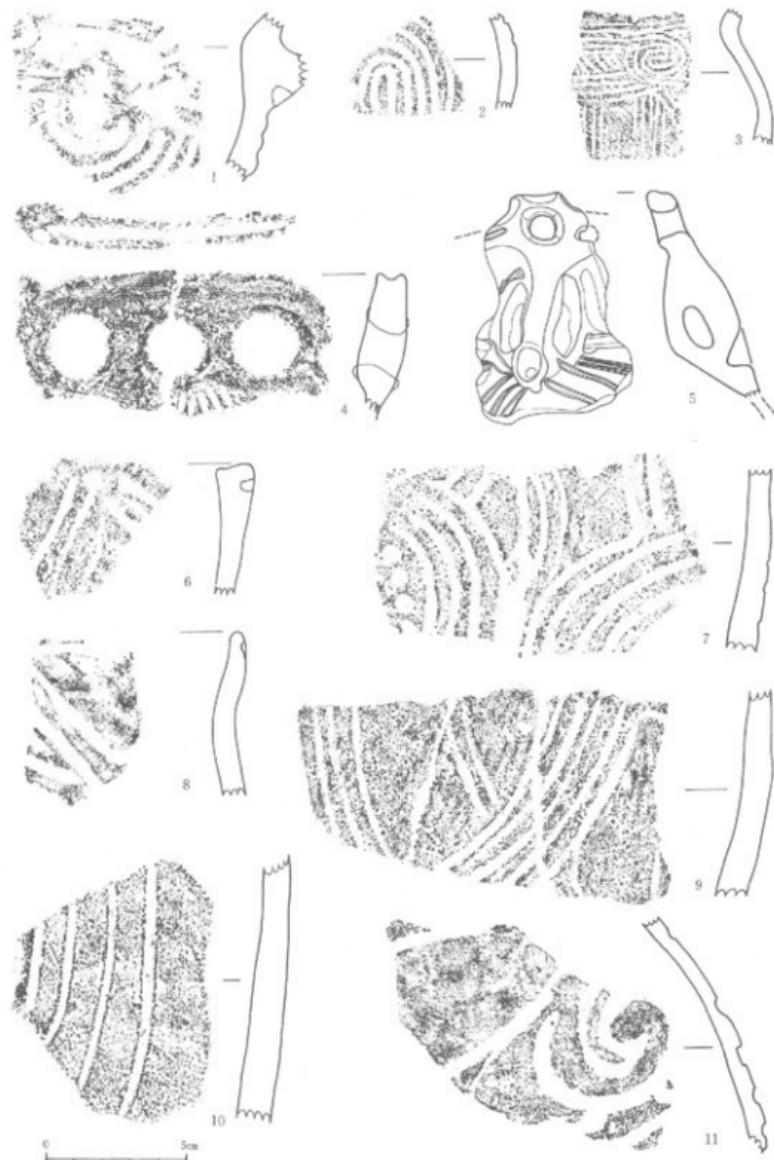
第102図 第11a層出土遺物(9)



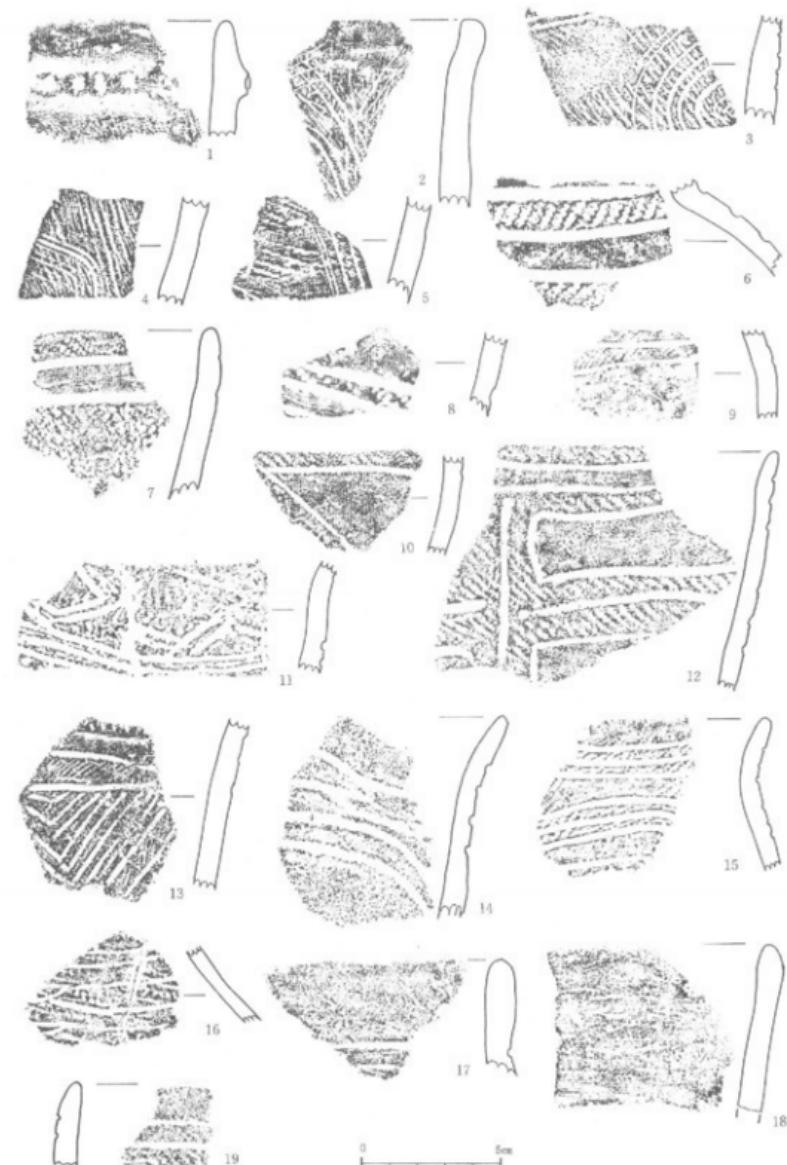
第103図 第11a層出土遺物(10)



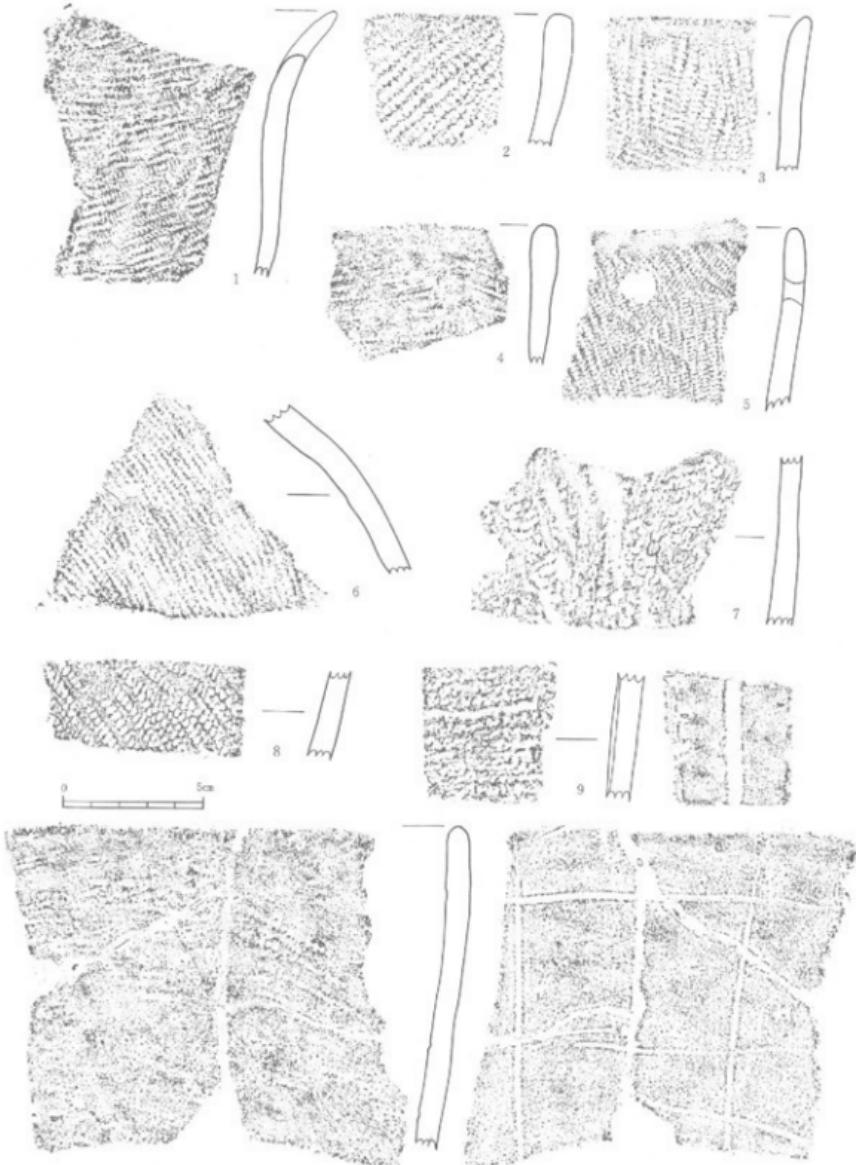
第104図 第11a層出土遺物(11)



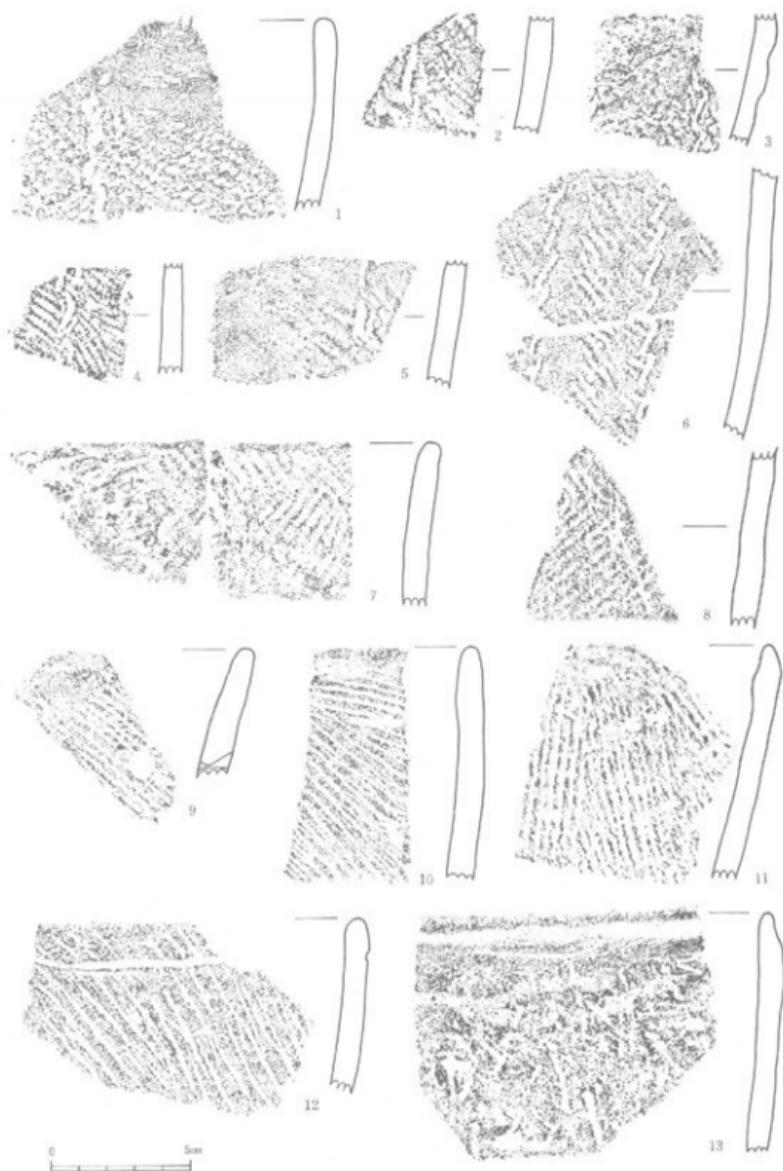
第105図 第11a層出土遺物(12)



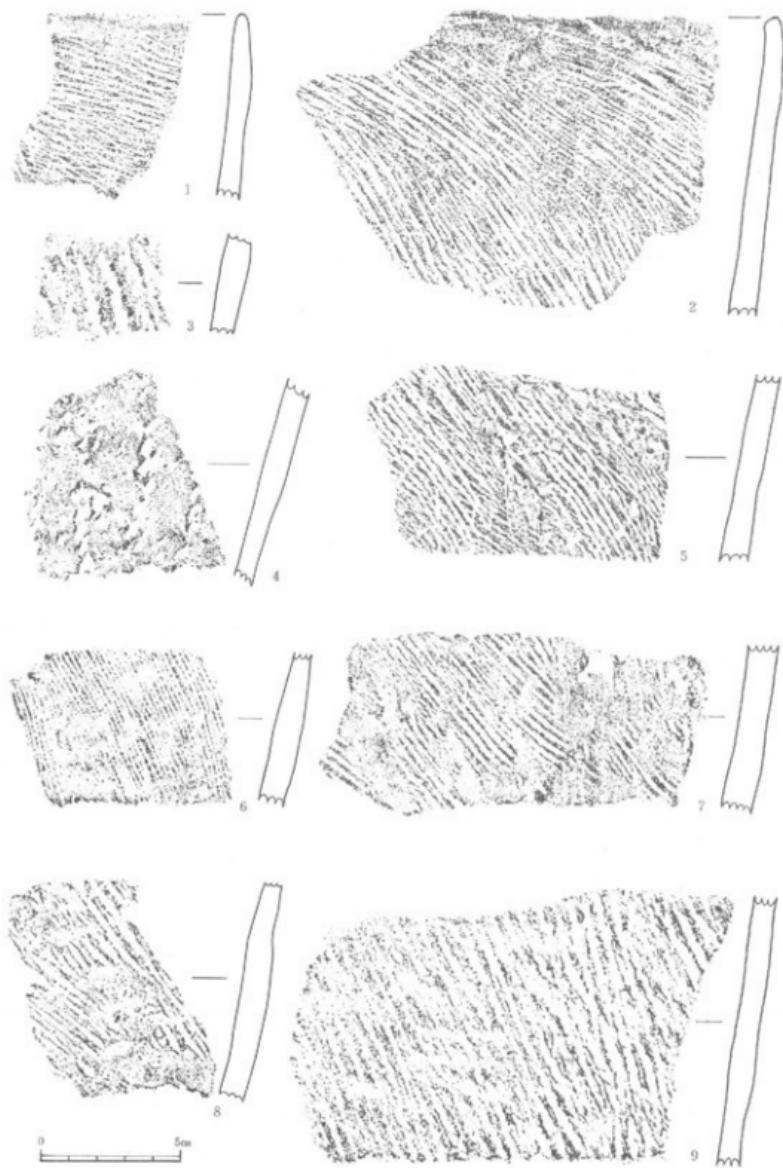
第106図 第11a層出土遺物(13)



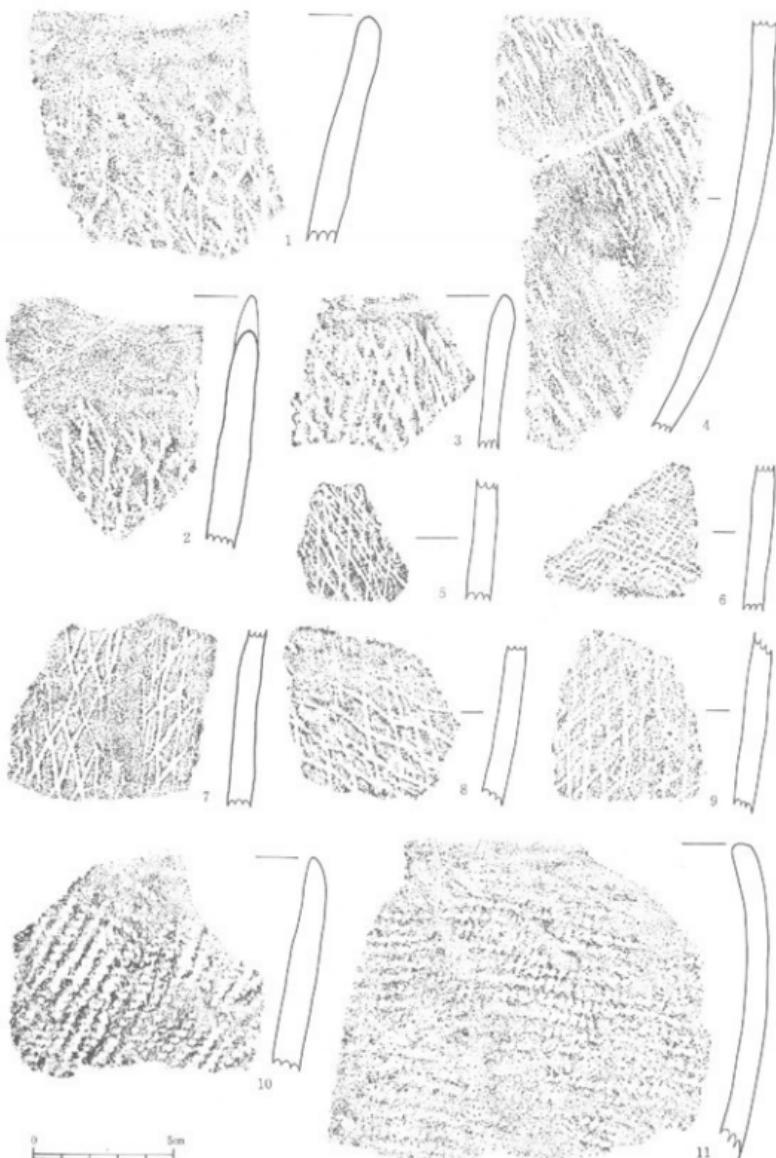
第107図 第11a層出土遺物(14)



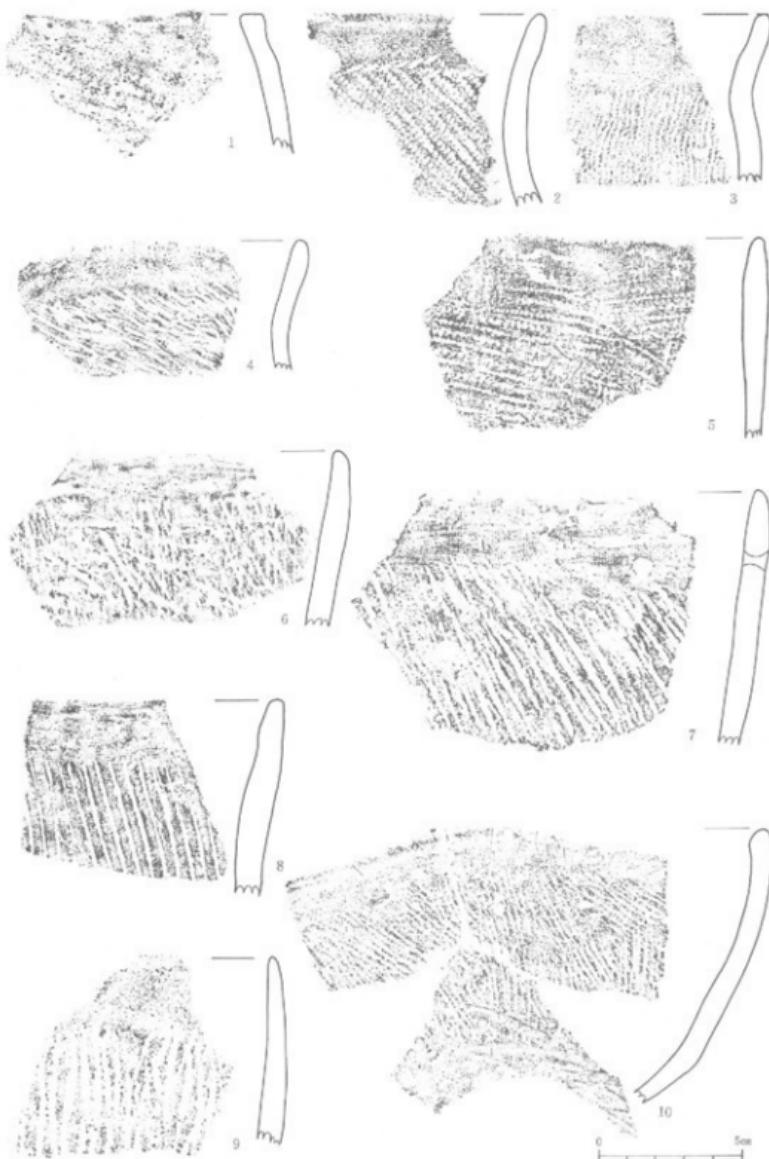
第108図 第11a層出土遺物(15)



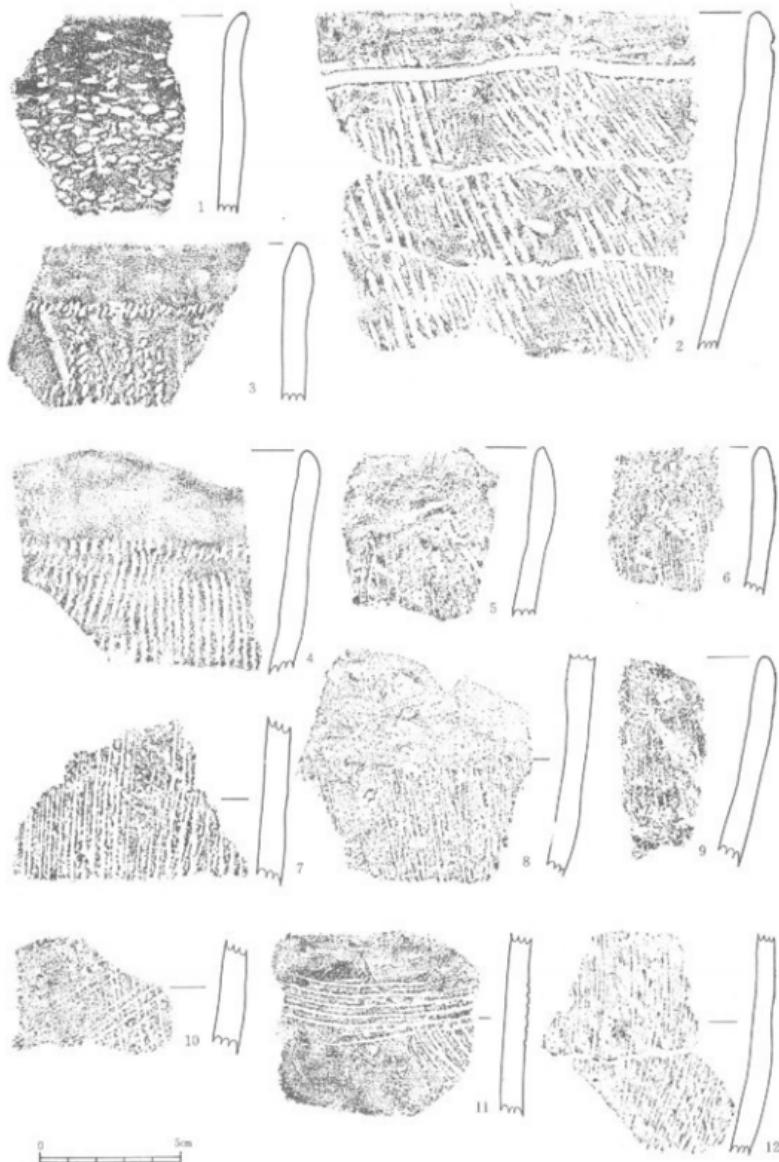
第109図 第11a層出土遺物(16)



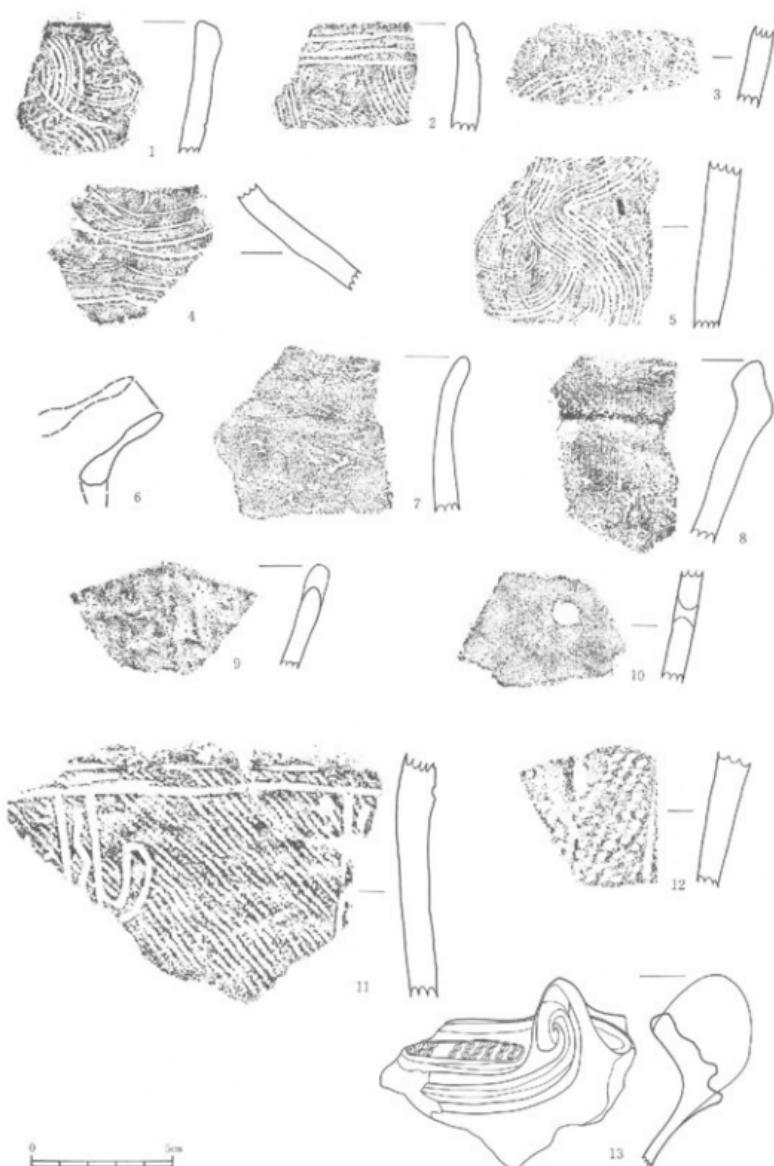
第110図 第11a層出土遺物(17)



第111図 第11a層出土遺物(18)



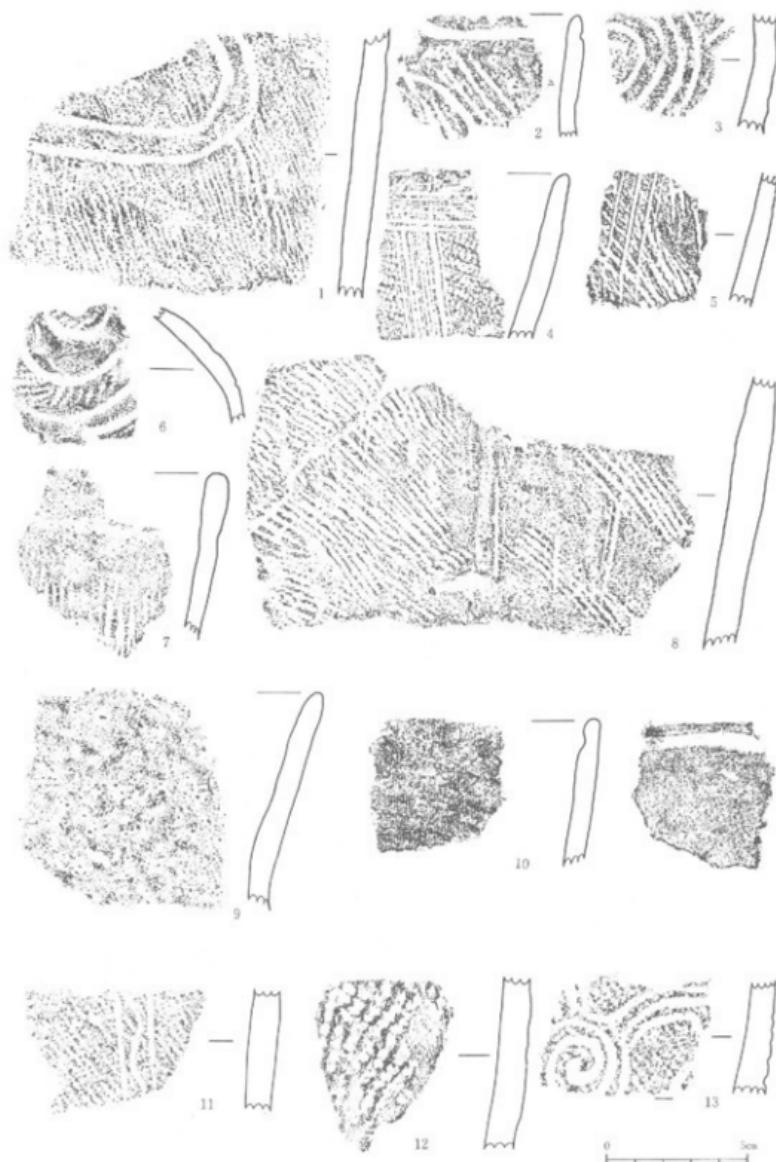
第112図 第11a層出土遺物(19)



第113図 第11a層・第11b層出土遺物(1)



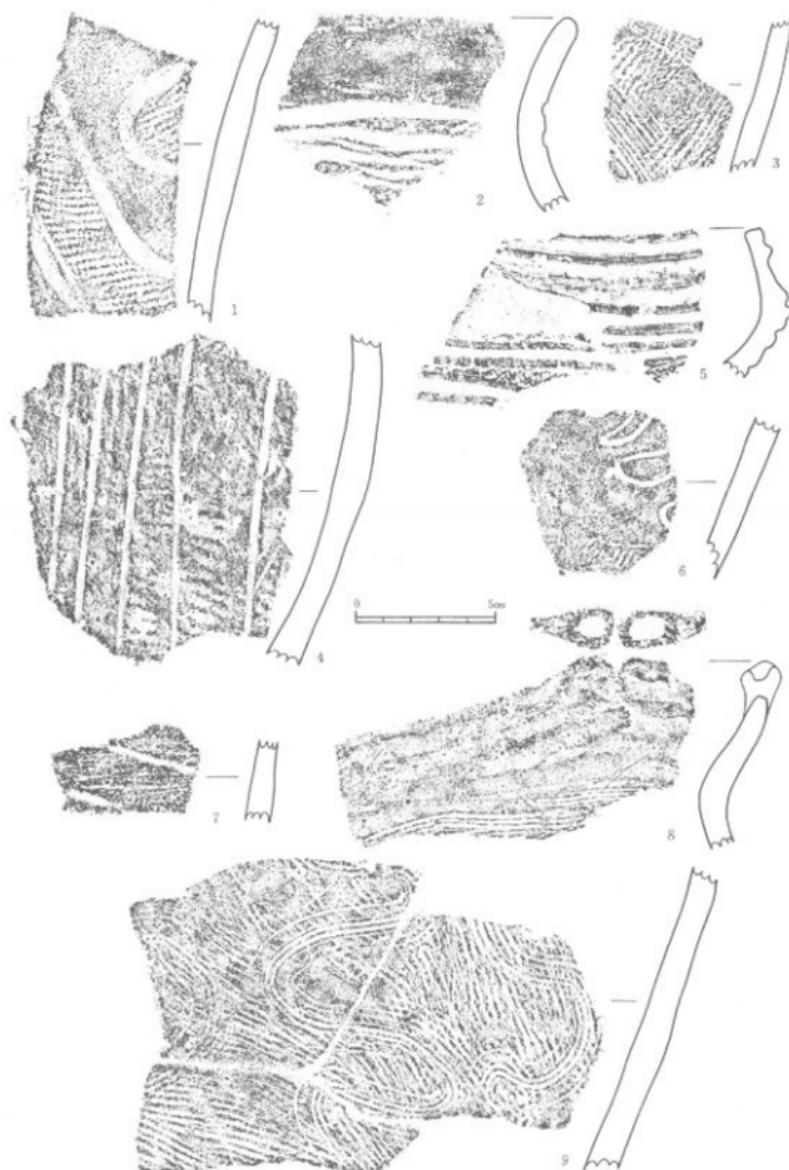
第114図 第11b層出土遺物(2)



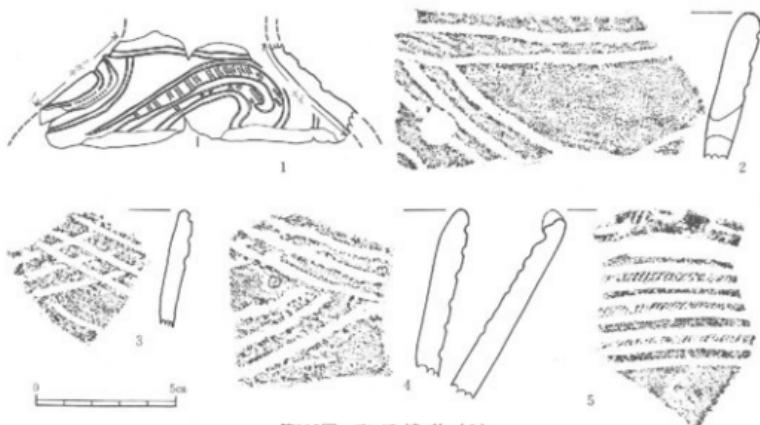
第115図 第11b層-第11c層出土遺物(1)



第116図 第11c層出土遺物(2)



第117図 表採遺物 (1)



第118図 考採遺物(2)

は6類に属する。6は斜位、横位の平行沈線に加えて、同心円状の沈線とそれを基点とする放射状沈線が施されている。12は8類に属する。

#### 第Ⅲ群土器（第81図13～16、第82図）

第81図13～15は1類に属する。15には突起と縦位に2個並ぶ円形刺突文が施される。第82図1～6は2類に属する。内面に数段の平行沈線が施される。1～5は、破片の傾きから浅鉢形土器と考えられ、6は深鉢形土器と考えられる。4・5には沈線間に細かな刻目が施されている。7は平行沈線が数段にわたること。8・9は幅の広い磨消繩文帯を有することから第Ⅳ群に属するものである。

#### 第Ⅳ群土器（第47図3、第48～51図、第83図～第84図1～4）

第47図3、第83図、第84図1～6図は1類aに属する。第84図1は3段4条のR L R 縄文、2は複々節のL R L R 縄文、3～6は複節のR L R 縄文である。第48図3、第84図7・8、第85図は1類bに属する。第48図1・2、第86図1～5は1類cに属する。第48図2は深鉢形土器で外面にはL R 縄文、内面には格子状沈線文が施される。底部は網代である。第86図3の原体は2段3条のL R 縄文である。第86図6～9は2類に属する。第49図2～4、第50図3、第51図1、第87図2～9、第88図、第89図1・2は4類aに属する。第50図4・5、第89図7は4類bである。第50図5と第89図7はともに外面が網目状糸文である。第50図4は波状口縁になる深鉢である。第89図3～6は5類に属する。第89図8・9は6類a-1である。8は波状口縁で頂上部が凹んでいる。第90図1～3・5～7は6類b-2に属する。第90図8は6類b-2、4・9は6類b-4に属する。第91図1～8は7類aに属する。第51図2、第91図9～13、第92図1は7類b-1に属する。第51図2は、胸部が膨らみ洞部に最大径をもつ深鉢形

上器で、外面には「( )」状の横描文が縦位に施されている。第92図2～6・8・11は7類b-2に属する流水文風描文である。第93図4～8、第94図1～4は8類に属する無文土器である。

#### d. 11層出土土器

11層は、さらにa・b・cの3層に細分されるため、区別して述べたい。

##### 第I群土器

11層出土土器（第52図1） 本例は1類に属す、唯一実測可能な土器である。器形は、口縁部が内湾しながら大きく開く深鉢形土器と考えられる。

11a層出土土器（第94図6） 本例は1類に属す口縁部破片で、口唇部に突起をもつ。

11b層出土土器（第113図11） 本例は2類に属し、地文に単節縄文（J.R）を施文し、釣針状に沈線文が表現されているのが特徴的である。

11c層出土土器（第115図11） 本例は、2類に属す。

##### 第II群土器

11a層出土土器（第94図7～12、第95図1～5） 第94図7は3類aに属し、横位の隆帯間に縦位の刻みを二段に施文する。この手法は、関東地方の加曾利E II式土器と共通する。8～11は3類aに属し、9は下位に渦巻文をもつ。12は3類bに属し、隆帯上に縄文を施文し、隆帯間に円形刺突文を充填している。

11b層出土土器（第113図13、第114図1） 第113図13は3類に属し、本遺跡では唯一の突起をもつ例で、突起の両側面に沈線による渦巻文を施文している。地文は複節縄文を施文している。口縁部の下部は無文帶となるキャリバー形の深鉢形土器である。第114図1は3類bに属し、隆帯上に縄文、また隆帯間に円形刺突文を充填している。本例は、第94図12と共に特異な例であろう。

11c層出土土器（第57図1・2、第58図1・2、第59図1、第115図12・13、第116図1～7）

第55図1は3類に属し、口縁部の隆帯上には縄文が施され、隆帯間に刺突文を充填する。胴部の隆帯による文様は、極めて簡略化されている。第55図2は3類に属し、本群中最も大きな土器で、渦巻文を多用する。第56図1は3類に属し、渦巻文はみられるものの、数は減少する。また、隆帯によるモチーフは縦位に展開する点は新しい要素と考えられられる。第56図2は3類に属し、大型の渦巻文が極めて特徴的である。

##### 第III群土器

11a層出土土器（第95図6） 第95図6は、口縁部に段を有する点で特徴的である。隆沈文の区画によって、縦位のモチーフが展開されるものと考えられる。

##### 第IV群土器

11a層出土土器（第95図7、第96図1～6、第97図1） 第95図7は1類に属し、R L Rの繩文が施文され、部分的にナゲによって消されている。本群土器は単節（L Rが優勢）が多く、複節は稀である。

11b層出土土器（第114図2～5） 2は4類に属し、地文に無節の繩文を施文する。磨消帶には、3段に円形刺突文が施文される。3・4は2類に属する。5は3類に属し、L Rの繩文を充填している。

#### 第Ⅳ群土器

11a層出土土器（第97図2～12、第98図14～27、第99図1～10、第100図1～15、第100図1～17、第102図1～13、第103図1～17、第104図1～16、第105図1～11、第106図1～5） 第97図2は頭部が無文となり、把手が認められる。8は、口縁部突起の内外面に沈線文や円形刺突文が施文される。2ヶ所に有孔が認められる。第98図22は1類fに属し、図版31にも示したごとく、粘土帶の接合面に刻目が認められる。第98図26・27は1類fに属し、蛇行沈線文と逆「八」字形の沈線文を連続施文する。第99図1～8は1類fに属し、1は口縁が極めて特徴的であり、また、5・8は中間に継位の列点文を特徴とする。第101図12・15～17は1類lに属し、特に17は「H」字型の区画がなされる。第102図9～13は2類jに属し、蛇行沈線文を特徴とする。第104図11～15は3類eに属し、この種の文様は、ほぼ口縁部付近に限られるようである。第105図4は3類fに属するものと考えられ、3ヶ所に有孔のある突起である。第105図11は、一応本群に含めて考えた。器種は注「土器か壺形」；器であろう。

#### 第Ⅴ群土器（第52図4、第106図6～16）

第52図4は、口縁部から底部へ反り気味にすぼまる形態の深鉢形土器である。2類bに属する。口縁上部に刻目のある隆帯がめぐり、さらに3個の円形刺突文を有する継位の隆帯が貼付される。胴上部と中ほどにある1条沈線で区画された文様帶には、平行する2条の沈線が斜位に施され、幾何学的文様が展開している。さらに沈線間はL R繩文により充填されている。第106図6～9は2類に属する。6は壺形土器の肩部と考えられる。10～13は3類に属する。11は沈線により菱形、12は四角形を基調とする文様を構成している。13の破片の上部には刻目のある隆帯が貼付され、下位には横位、斜位の磨消繩文帶と三角形を基調とする文構が構されている。14は4類、15・16は5類に属する。

#### 第Ⅵ群土器（第106図19）

19は2類に属する深鉢形土器と考えられる。

#### 第Ⅶ群土器

##### 11a層出土土器（第52図3、第53図2、第54図、第107～113図1～10）

第52図3、第53図2、第107図1～3・5～8は1類aに属する。第52図3は波状口縁で、口

縁部から底部へ向けて強くすぼまる深鉢形土器である。底部は木葉痕（平行脈）である。第53図2は、自然に開いて行く深鉢形土器である。底部は網目である。第107図4は1類bに属する。9・10は1類cに属する。10の内面の格子状沈線は他に比し浅くなっている。第108図1～6は2類に属する。7・8は3類に属する羽状繩文である。第54図1、第108図9～13、第109図は4類に属する。原体が細かく密なもの（第109図3）、粗なもの（第108図12）、太くて比較的密なもの（第109図9）など施文のされ方は多様である。第110図1～9は5類に属する。1～5・7～9が菱形の網目を呈するのに対し、6は目の細かい、しかもほぼ正方形の網目状撚糸文が施されている。第111図1は6類a-1に属する。2は6類a-4に属する。3～10は6類b-1に属する。第112図1・2は6類b-2に属し、3・4は6類b-4に属する。この類も撚糸の種類によって種々に表現される。5～12は7類aに属し、第113図1・2・4は7類b-1に属する。3・5は7類b-2に属し、流水文風櫛描文が施される。6は注口部、7～10は8類に属するものである。

#### 11b層出土土器（第57図2、第115図8、9、10）

第57図2、第115図8は4類aに属する。9・10は8類に属し、10は内面口縁部に一条の沈線がめぐる。

#### 11c層出土土器

この層から第Ⅸ群土器は出土していない。

#### e. 層位不明土器（第117図1～9、第118図1～5）

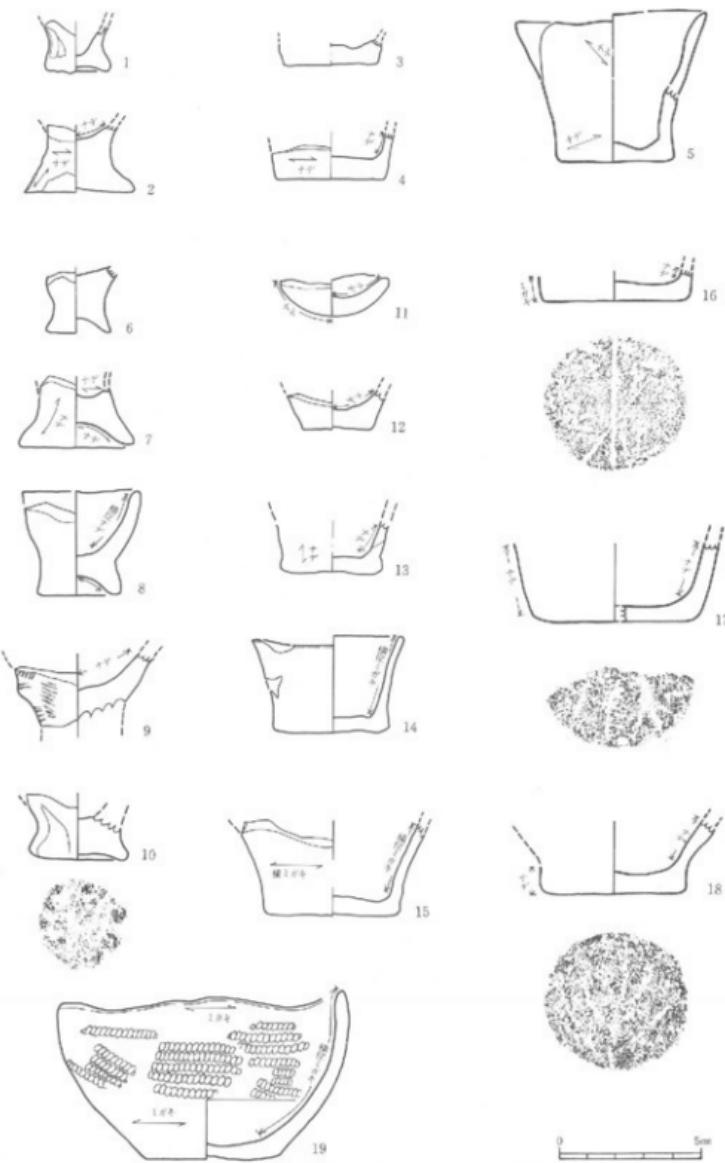
第117図1は第Ⅱ群3類に属する深鉢形土器で、充填繩文である。2は、第Ⅲ群に属するものであろうか。3・9は第Ⅵ群6類に属する。4・6・7は、第Ⅶ群土器である。5は、第2群3類に属するキャリバー形の深鉢形土器であろう。第118図1は、第Ⅷ群2類に属する壺形土器である。2は第Ⅷ群5類、3・4は同9類に属する深鉢形土器である。5は2類に属し、平行沈線間に細かな斜位の刻目が施される。

#### f. 小形土器・ミニチュア土器

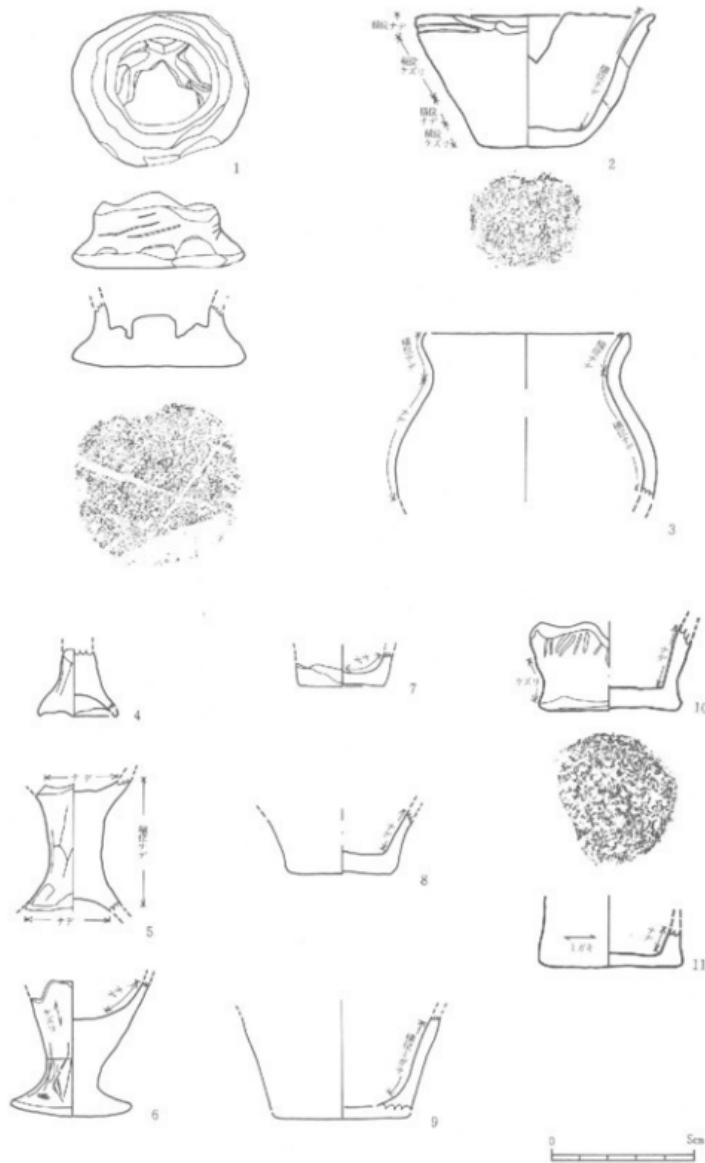
小形土器及びミニチュア土器については、本来明確な定義が必要である。今回は、法量の相対的な差によって分離した。今後、この問題については、さらに検討が必要である。

#### ① 小形土器

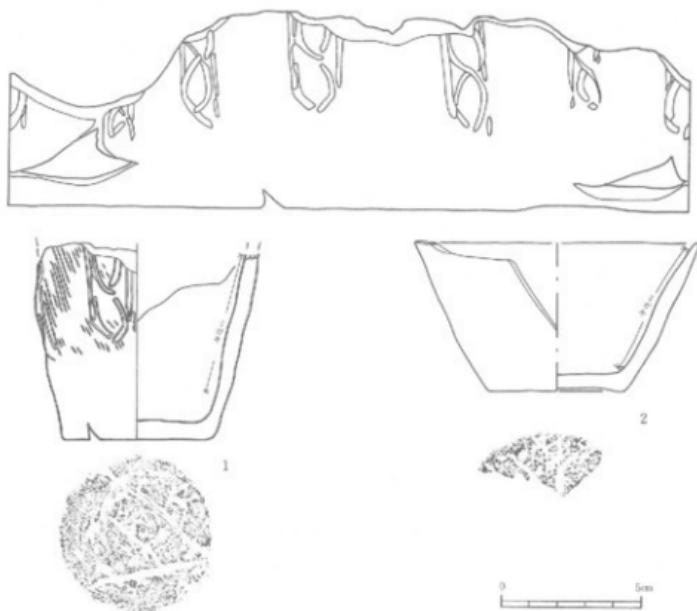
小形土器には、鉢形・深鉢形・壺形・碗形・皿形の器形が存在する。これらは8層から10層まで各層より出土している。8層出土土器は第42図4の第Ⅸ群8類に属する皿形土器がある。この土器は対角線上に2対の切り口が存在する。外面はミガキが施され、赤色顔料の付着が認められる。また、内面にはナゲが施される。10層出土土器は第119図19、第120図2・3がある。19は第Ⅸ群1類bに属する碗形土器である。土器の内面及び外面の口縁部が胴部下半には、ミ



第119図 第8層・第10層出土ミニチュア・小形土器



第120図 第10層・第11層出土ミニチュア・小形土器



第121図 第11層出土・小形土器

ガキが施される。口縁部はゆるい波状を呈する。2は第Ⅸ群8類に属する鉢形土器である。口縁部に一条の沈線を施すが、この沈線は連続せず一部で途切れる。外面はケズリの後ナデを施し、内面は荒いナデが施される。3は第Ⅸ群8類に属する壺形土器である。内外面ともナデが施される。11層出土土器は第121図の1、第122図12・13がある。1は鉢形土器の底部である。底部内面は中央が肥厚しひび割れが観察される。底部外面には2条の沈線が認められる。12は第Ⅶ群2類bに属する深鉢形土器である。底部には羽状脈の木葉痕がある。13は第Ⅸ群8類に属する鉢形土器で、内面にはミガキが施される。また底部には羽状脈の木葉痕がある。

### ② ミニチュア土器

ミニチュア土器には、鉢形・ワイングラス形・皿形の3器種がある。

#### 1) 8層出土土器（第119図1～5）

1、3～5は鉢形土器であり、1はあげ底である。2は裾の張ったワイングラス形の土器であろう。

#### 2) 10層出土土器（第119図6～18）

6・7・9はワイングラス形土器と考えられ、9にはRの繩文が施される。8は台付の鉢形

土器である。11は手捏ねによる皿形土器である。10・12~18は鉢形土器で10は上げ底である。また、比較的大形のものは、すべて底部に木葉痕があり、16は平行縫であり、竹類の葉を2枚重ねたものようである。

### 3) 11層出土土器（第120図4~11）

4~6はワイングラス形土器であり、6は裾付近に縦位の条線文を施し底部は平底である。7~11は鉢形土器であり、10はⅡ群1類aに属する。この土器の底部には網代痕が認められるが明瞭ではない。

#### (ii) 土製品

##### a. 円盤状土製品（第122~127図 図版30）

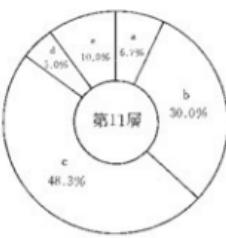
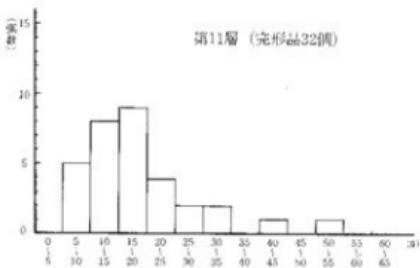
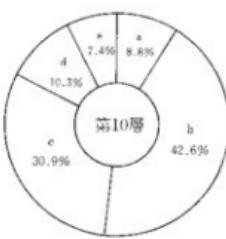
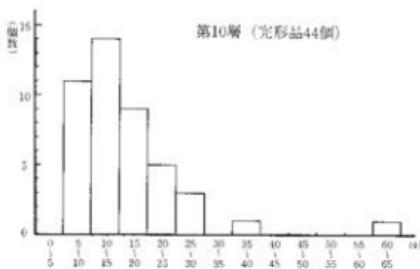
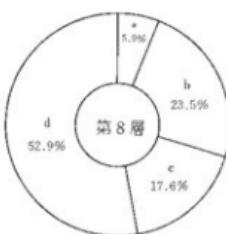
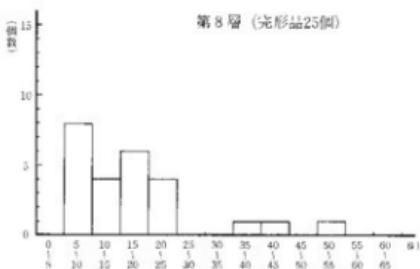
円盤状土製品は、8層、10層、11層より出土し、9層では出土していない。この種の土製品は土器破片を再利用することが最も特徴的であると言えよう。円盤状土製品は、総数167個（遺構4個・表採品5個を含む）出土し、このうち8層では34個、10層では64個、11層では59個を数える。総数に対する完形品の出土率は極めて高く、8層では25個で約73.5%、10層では44個で約68.8%、11層では32個で54.2%を示す。したがって、破損品を破棄したのではなく、使用を停止した時に破棄された可能性が高い。重量は、第11表に示すごとく、8層では5~10g、15~20gに、10層では5~15g、11層では10~20gに集中する。各層ともほぼ類似した重量分布を示し、ある程度の規格があったことを予想させる。また、少量ではあるが、各層には平均的な重量の2倍以上の重さをもつものが存在する。これは用途の差違を示すものであろうか。円盤状土製品は、土器片を加工して完成品となるが、加工工程を示すと下記のようになるであろう。



本遺跡の資料を観察すると、およそ5種類に分類できる。

- すなわち、a. 周辺を打ちかくが、1部が未加工のまま残るもの。
- b. 周辺をきれいに打ちかいたもの。
- c. 周辺をきれいに打ちかき、1部を研磨するもの。
- d. 周辺を打ちかき、周縁の50%以上を研磨するもの。
- e. 周辺を打ちかくが、土器の接合面や口縁部をそのまま利用しているもの。

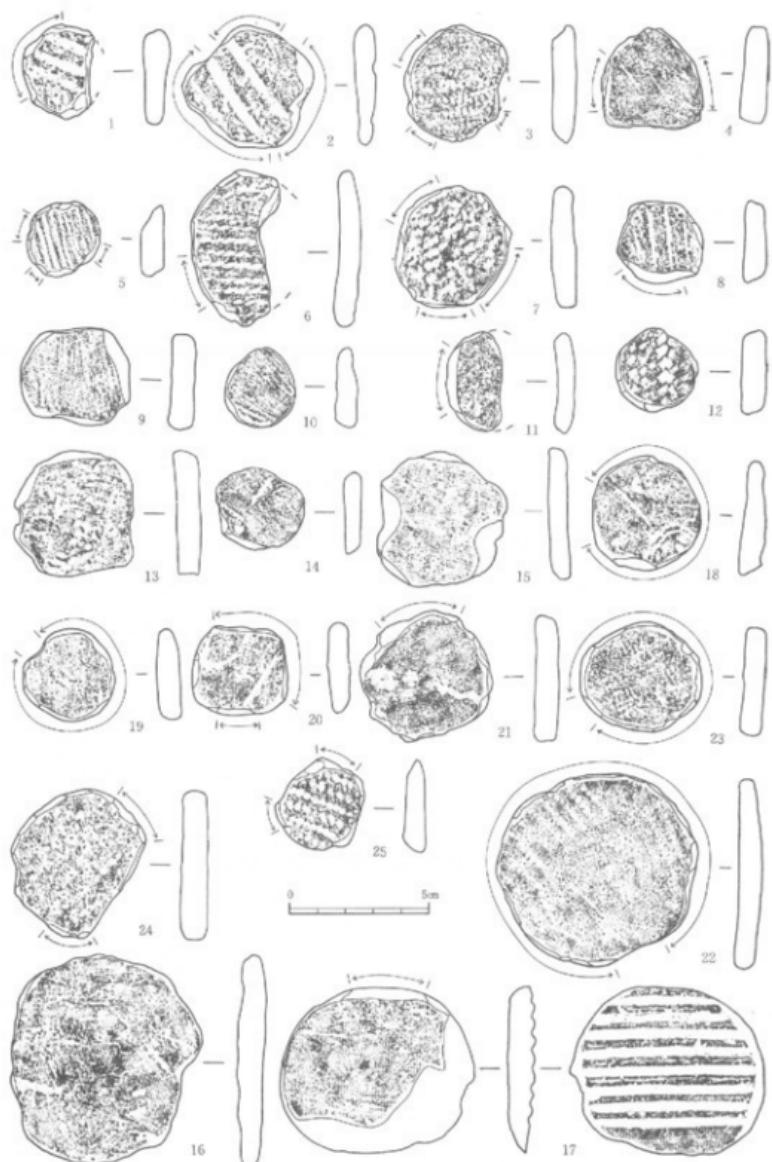
このうちaについては未完成品か、製作工程を簡略したものと思われる。dの資料中縁辺を80%以上研磨している例は、11層で6点、10層で5点、8層で8点にすぎず、全周を研磨して



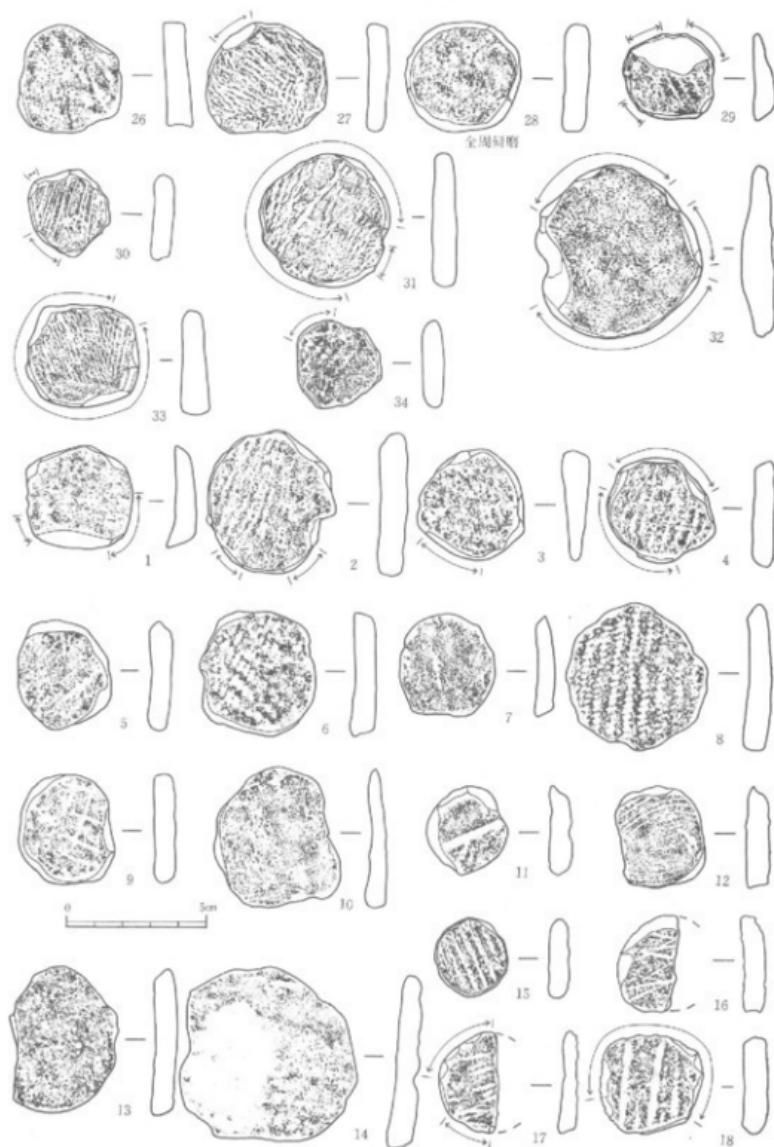
第11表 円盤状土製品の重量分布と加工度比率

いるものは8層中にわずか1点のみ存在する。

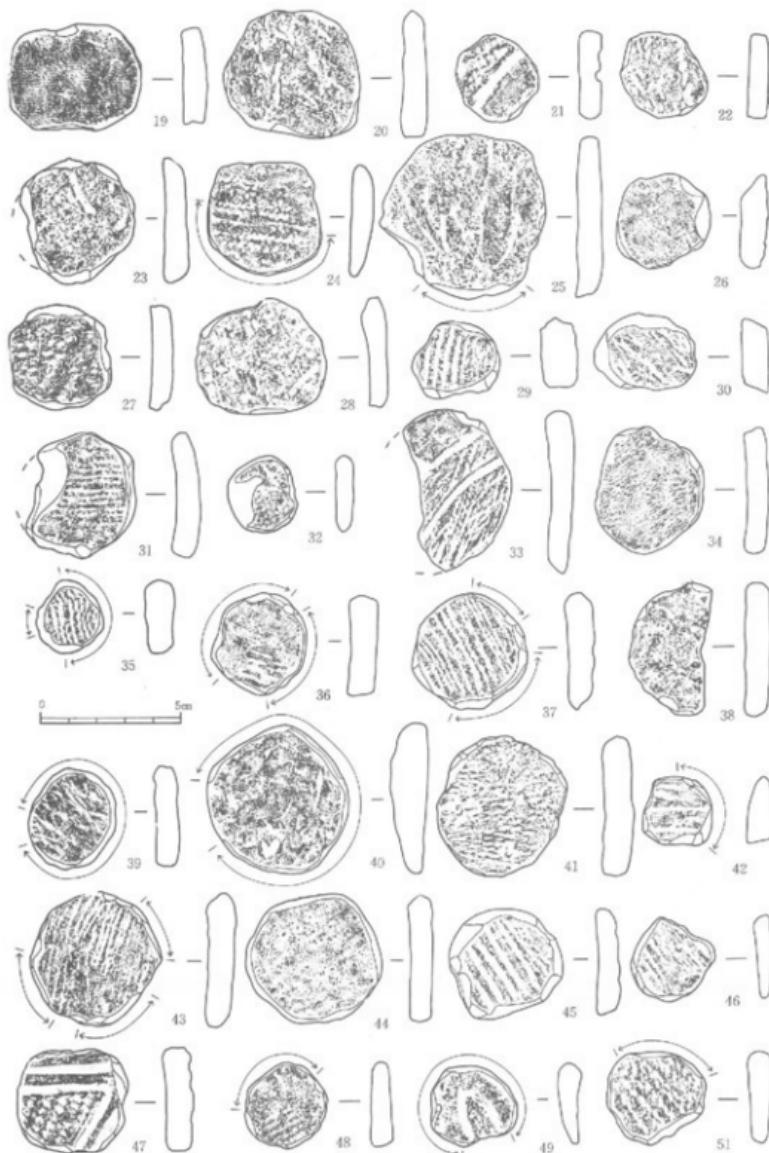
さて、各層毎に加工度を第11表の円グラフに示した。このグラフをみると、11層では、cの工程を示すものが約50%近くを占め、bがこれに次ぎ、他は少ない。10層では、bとcがほぼ類似した値を示している。dは、11層に比較すると約2倍に増大している。8層では、dが50%以上を占め、10層の約5倍に増大し、逆にb、cはそれぞれ10層の方に減少している。これは古い時期には、製作工程における研磨の重要度は低かったと考えられ、さらに、研磨が使用痕であることの傍証資料にはならないようである。時代が下落するにしたがって、dが急激に増大することは、完成度が高まったか、用途の多様化を示すものではないかと推測される。換



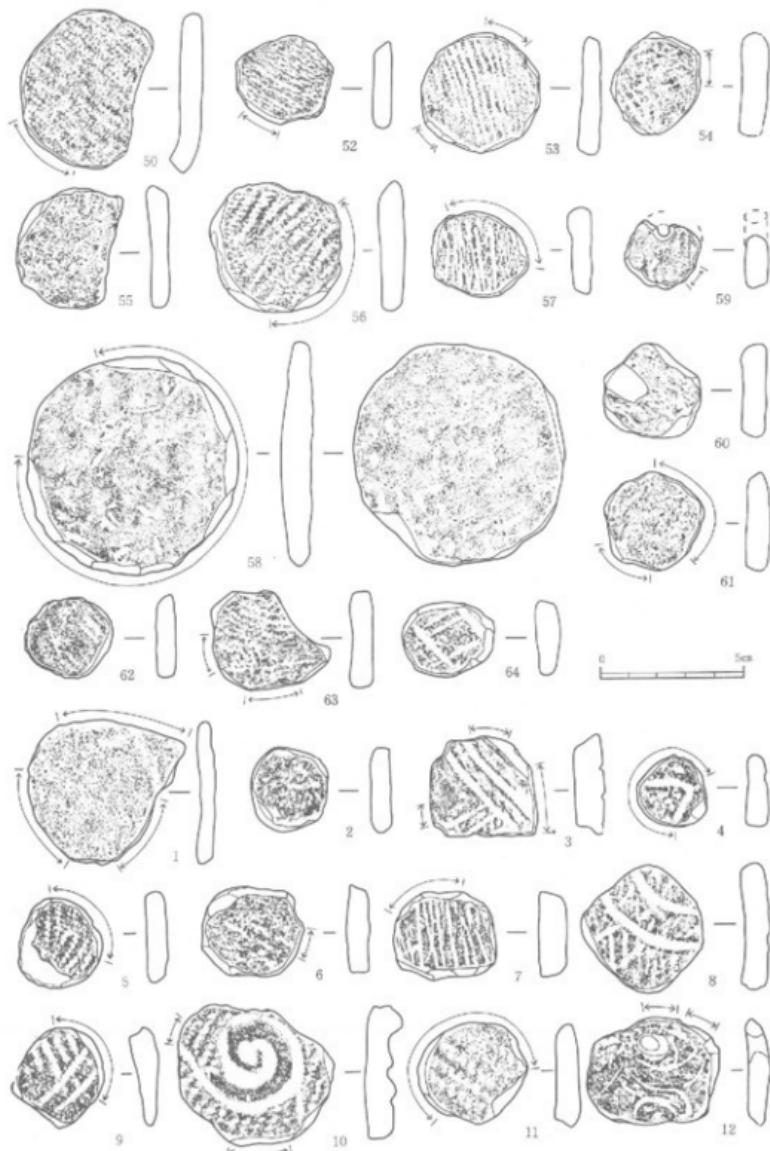
第122図 第8層出土円盤状土製品(1)



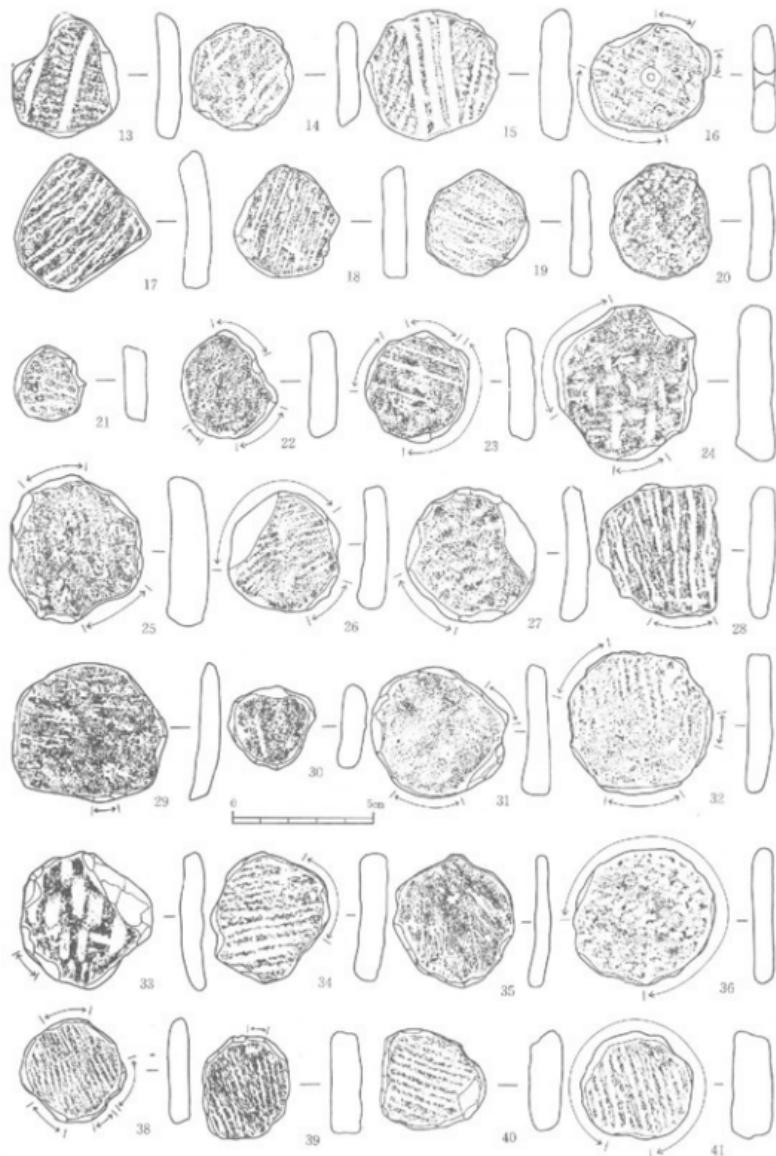
第123図 第8層・第10層出土円盤状土製品(2)



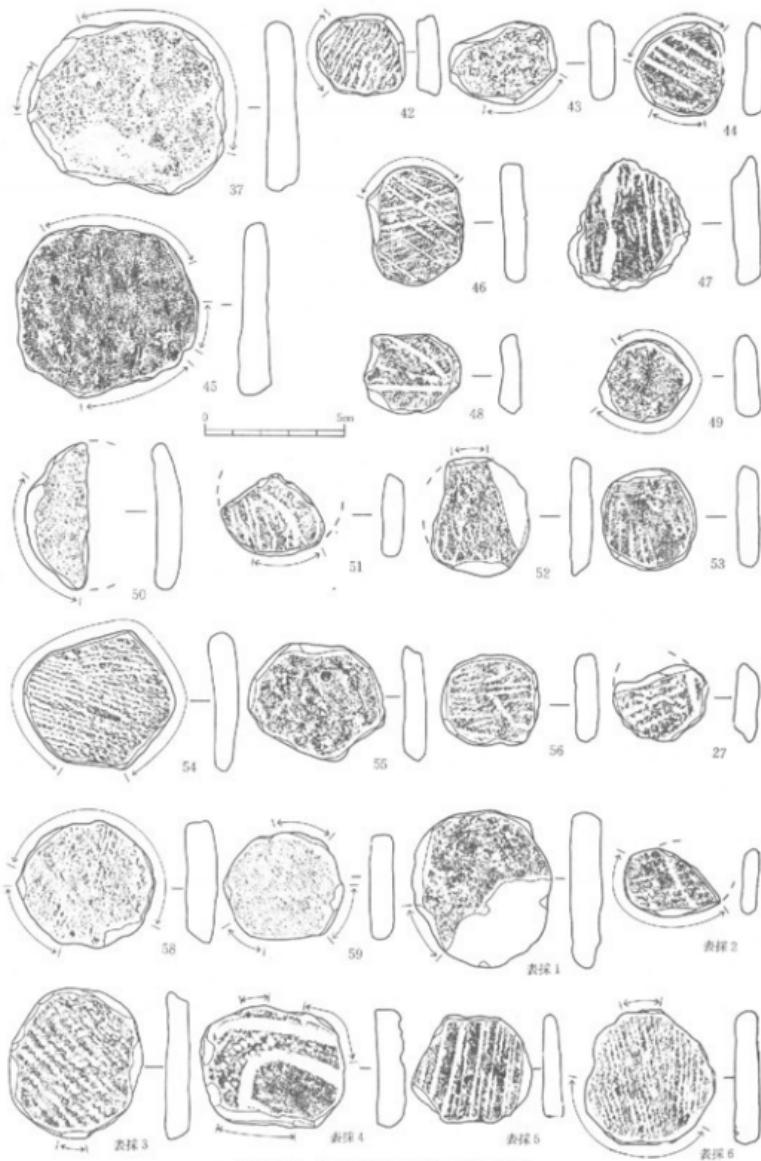
第124図 第10層出土円盤状土製品(3)



第125図 第10層・第11層出土円盤状土製品(4)



第126図 第11層出土円盤状土製品(5)



第127図 第11層出土円盤状土製品(6)

言すれば、b や c 段階で十分にその機能を果していたと考えられよう。a は、各層いずれもほとんど変化がなく、e についても同様で、8 層では存在しない。a については、未成品もわずかに存在するが、むしろ製作者の個人差ではなかろうか。

円盤状土製品は大部分が上器の胴部を利用し、口縁部や底部を利用するものは、全体で 10% 前後である。この口縁部や底部を利用するものは、11 層出土のものが最も多い。また、円盤状土製品として利用される上器片は、粗製土器が大半を占める。11 層出土の資料中に、明らかに中期に属するものが 4 点（大木 10 式 2 点、大木 8 b 式 2 点）含まれ、他は後期に属するものと思われる。また 11 層より円盤状石製品 1 点（第 145 図 53）出土しているが、これは円盤状土製品と類似した製作工程を示し、形態もよく類似している。重量も 20.8g と、土製のものとほとんど変わりない。したがって、単に素材の差違によるものかもしれない。この円盤状石製品は晩期に至って盛行するが、今後、円盤状土製品との関連について検討する必要があろう。

#### b. 土偶（第 128 図 1～3 図版 29-8・11・12）

土偶は 10 層より 3 点出土している。いずれも破棄されたような状態で出土した。

1 は腕の破片であり、沈線による渦巻文を特徴としている。腕は、棒状の粘土塊に薄く粘土を貼り付けて成形している。残存長約 3.7cm、残存幅約 2cm を測る。明確な所属時期は判断できないが、おそらく第 VI 群土器に伴った可能性が考えられる。本例は、第 2 トレンチより出土したが、位置が不明である。

2 は、F-15 区より出土した胴部上半の破片で、頭部・両腕・胴部下半を欠いている。また、左乳房が剥離しているが、意図的な剥離か否かは不明である。本例は、胴が偏平で、痩せた文様のない裸体像であろう。残存高は約 4.8cm、体幅は最大 1.6cm を測る。胴部表面は、ナデが施されている。胎土には、細砂・白色針状物質を含む。焼成は良好である。所属時期は、後期前葉と考えられる。

3 は、E-11 区より出土した立体的な土偶である。本例は、頭部・胴部上半・両脚を欠いている。下腹部には粘土を貼り付けて妊婦を表現している。そのためか、へそは大きく表現されている。残存高約 6.4cm、体幅は約 2.7cm（腹部 3.3cm）を測り、胴部断面はほぼ円形を呈する。文様は残存部位ではなく、裸体像であったと考えられる。表面は調整のためのナデが施され、胎土の砂粒は少なく、焼成は良好である。妊婦を表現した例は、後期中葉以降に盛行する点（本堂寿一：1980）で、本例も 1、2 より後出の可能性が考えられる。所属時期は、VII 群あるいは VIII 群土器に伴うものであろう。

#### c. イノシシ形土製品（第 128 図 4 図版 29-17）

イノシシ形土製品は、E-13 区 10 層より 1 点出土した。この土製品は、頭部および左側の前足と後足を 1 本ずつ欠いている。現存体長 7.75cm、体高 3.45cm、体幅 2.65cm を測る。足は、粘

土を貼付けて製作しており、左側の前・後足のつけ根は、剥離した痕跡が明瞭に残る。また、残存している右側の前足の裏には4ヶ所の刻目のような痕跡があり、後足の裏には1ヶ所刺突がみられる。前足と後足の長さが異なる。胴部は、首から背にかけて次第に高まり、やや尖った尾に連なっているが、「たてがみ」の表現はみられない。左側の肩部から胴部にかけて4ヶ所の刺突、胸部に4ヶ所の刺突がそれぞれ認められる。貝鳥貝塚（草間・金子編：1971）出土のイノシシ形土製品中に刺突文によって体毛を表現したと考えられる例が存在するが、本例は体毛を表現したとは考えにくい。足の裏の刺突についても説明がつかない。

この刺突について示唆に富む指摘がなされている。その指摘（上肥孝：1981）によれば、貝鳥貝塚出土の刺突文のあるイノシシ形土製品は、特に心臓部付近の刺突が強く突き刺されており、「ヨーロッパの狩猟民族の遺物の中にも見られる『急所表現法』で、その点、明らかに貝鳥貝塚人は、狩猟民の共通する表現法をもっていた」という。この指摘が正しいとすれば、本例はまさにこの「急所表現法」を示した例である可能性が考えられる。所属時期については明確にしがたく、後期前葉と考えられる。

#### d. スプーン形土製品（第128図5 図版29-19）

本例は、F-13区10層中より1点出土した。名称については、岩手県貝鳥貝塚「小皿形土製品」（草間・金子編：1971）、青森県水木沢遺跡「スプーン状皿形土製品」（青森県教育委員会：1976）、岩手県小田遺跡「スプーン形土製品」（大迫町教育委員会：1979）がある。ここでは、小田遺跡例にならない、スプーン形土製品と呼ぶことにした。皿部は、平面形態が橢円形を呈し、底部は丸底である。柄の部分は、上方に曲げて製作され、極めて特徴的である。法量は、最大長11.6cm、最大幅5.4cm、皿部長9cmを測る。文様の施文はなく、内外面ともにナデが施され、特に皿部内面は丹念に施されている。外面には小さな凹凸がみられ、皿部の口唇部が不揃いな点などを考慮すれば、成形は手捏ねによつたものと思われる。本例は、他の類例と比較して大形に属し、形態もよく整つた例と言える。時期は、後期前葉であろう。

#### e. 粘土塊（第128図6 図版29-13）

本例は、E-11区10層より出土した。色調は明褐色を呈している。他に図示しなかったが2点出土している。

#### f. 異形土製品（第128図7、8 図版29-9-14）

形態を明確にしがたい土製品を扱つた。

7は、F-13区8層より出土し、スタンプ形土製品とも類似するが、茎の形に近い形態を呈している。文様はなく、手捏ねによって成形がなされている。片面には、つまみ状の突起が存在するが、先端を欠いている。最大径約3.6cmを測る。

8は、F-15区8層より出土した。本例は、円柱状の形態を示し、上端は両側から切り込み

を入れ、二股に成形している。二股部分の一方を欠いている。また、基部は欠いているため、本来どのような形態を示す土製品であったかは不明である。表面はナデが施され、胎土には細砂を含む。

g. 蓋形土製品（第128図9 図版29-18）

本例は、E-11区11層より出土した。口径は約6.25cm、天井部径約2.8cm、器高3.2cmを測る。表面は、内外ともにナデが施されている。胎土は粗砂、白色針状物質を含み、用途については不明な点が多いが、蓋ではないかと考えられる。

h. 管状土製品（第128図10 図版29-15）

本例は、E-12区10層より出土した。平安時代以降に一般的に出土する土鍤と形態が極めて類似する。最大長6.1cm、最大径約1.15cm、孔径0.3cmを測る。有孔部には磨耗痕が認められ、孔に紐を通したものと考えられるが、貝鳥貝塚出土の土鍤例（草間・金子編：1971）とは形態が大きく異なる。本例のような土製品の類例はないようである。したがって、その用途については、垂飾品あるいは土鍤のいずれかが考えられるが、前者を支持したい。時期は、後期前葉である。

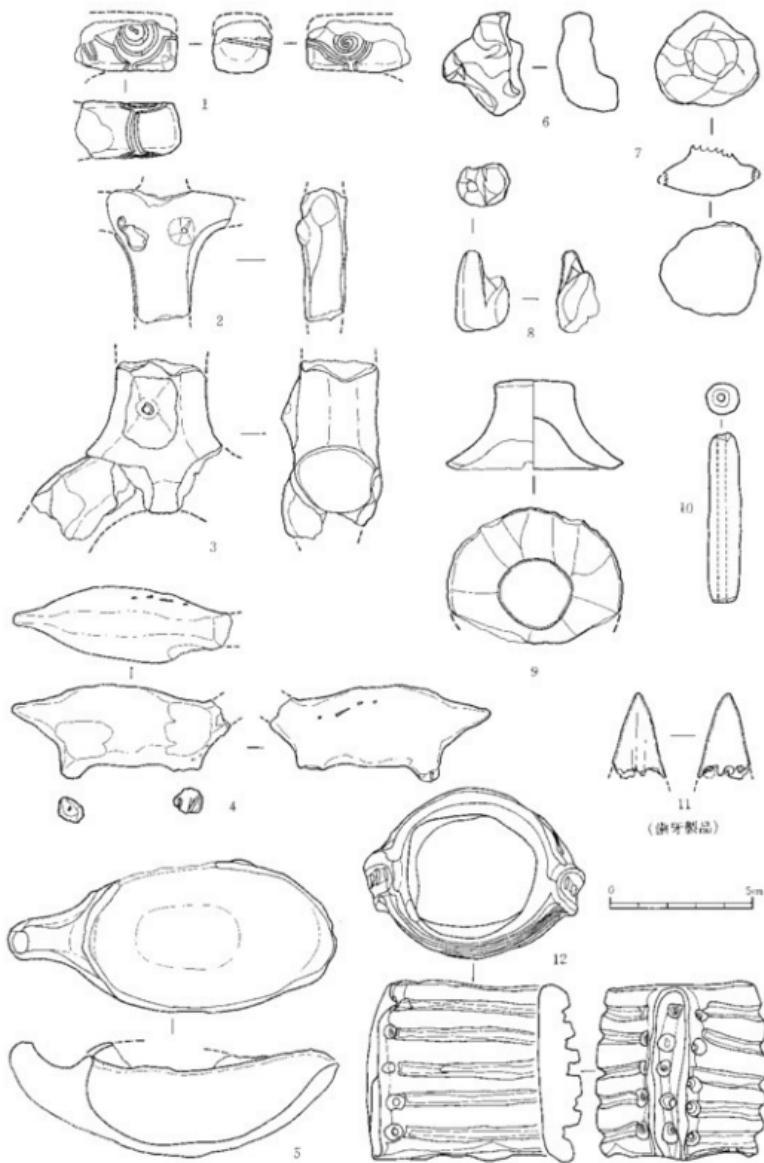
i. 齒牙製垂飾品（第128図11 図版29-10）

本例は、F-14区11層より出土したサメ類の歯を加工した垂飾品である。形態は形のよい二等辺三角形を呈する。歯冠部のみ残存し、歯根部は消失している。本来は歯根部が存在していたものと思われる。大きさは、歯冠高30.5mm、歯冠長推定約20.0mm、最大厚6.5mmを測る。歯冠基部はかなり破損を受けているが、この部位に3ヶ所の穿孔が認められる。このうち右側の径の小さいものは未貫通である。

本例のような貝塚を伴わない遺跡からサメ類の歯による垂飾品の出土例は極めてまれであり、東北では九年橋遺跡（北上市教育委員会：1980）について2遺跡例であろう。サメ類の歯を垂飾品に加工した例は、貝塚出土のものが多く、金子浩昌の集成（北上市教育委員会：1980）によれば、岩手県貝鳥貝塚、宮城県沼津貝塚・長根貝塚、福島県寺脇貝塚の出土例が知られている。本例は、明確な所属時期を明らかにすることはできないが、おそらく第Ⅳ群土器に伴った可能性が強い。

j. 輪輪形土製品（第128図12 図版29-16）

本例は、E-16区11層より出土した。最大径は、縦位の隆帯部にあり、7.9cmを測る。内径4.8cm、幅6.4cmを測る。成形は輪積みによってなされ、2ヶ所に縦位の隆帯を2条ずつ貼り付けている。さらに外側はミガキが加えられ、横位沈線文を5条施し、最後に縦位の連続する円形刺突文（竹管による）が施されている。このうち、横位沈線文は、粘土の接合部を補強するように施文されている。内面はナデが施される。胎土には粗砂を含み、焼成は良好である。



第128図 各種の土製品

従来、岩手県貝鳥貝塚や青森県十腰内遺跡（今井・磯崎：1967）で「環状土製品」として扱ってきたものである。また、最近報告がなされた岩手県立石遺跡（大迫町教育委員会：1979）では、他の環状土製品と区別がつきにくいと指摘がなされ、「腕輪形土製品」と呼称している。したがって、本例も立石遺跡例にならない、腕輪形土製品と呼称した。本遺跡や十腰内遺跡などのように1～数点しか出土しない遺跡と立石遺跡（38個体分）、八幡原No.30遺跡（約50個体分）註(1)のように多量出土する遺跡の2つの傾向がみられる。また、東北北部出土の資料は文様のバラエティに乏しいようである。八幡原No.30遺跡出土例は、本例と類似した文様をもつものが多い。用途については、立石遺跡の報文中に装飾品説と器台説が指摘されている。が、出土例中には内側が小さく、幅の大きいものも存在するため、棍棒頭等の他の用途も考えられよう。

註1 米沢市教育委員会の手塚孝氏の御好意により、筆者らが実見した。

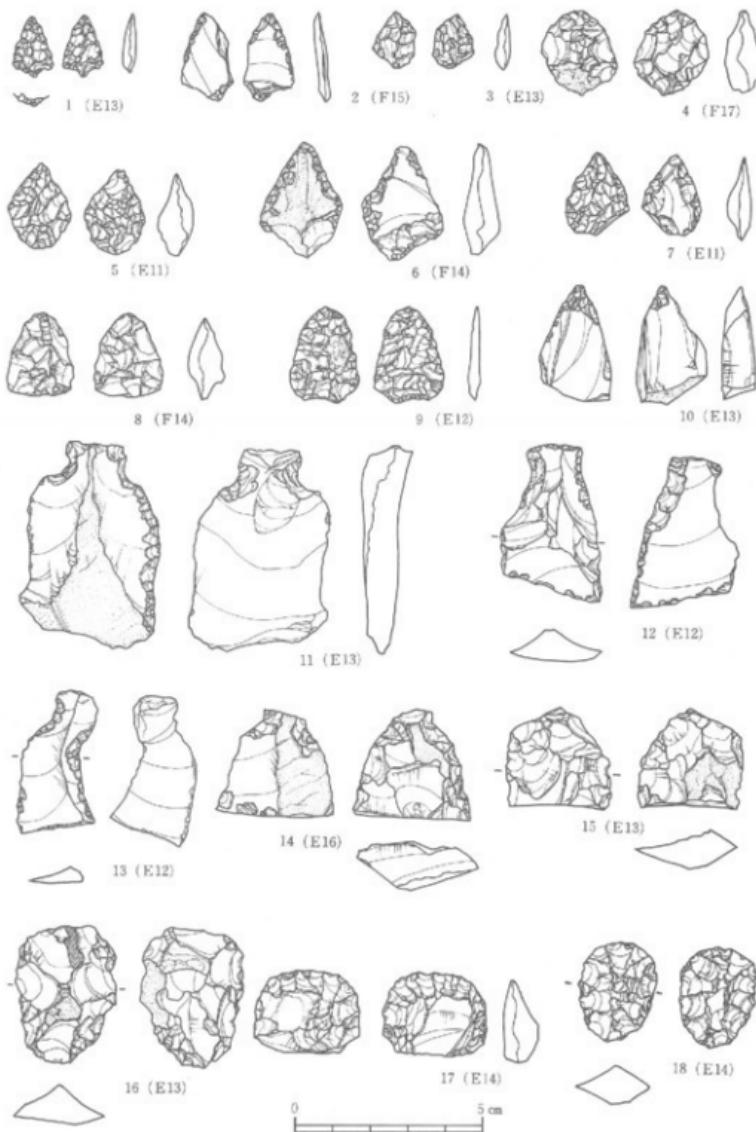
#### 参考文献

- 本堂寿一編 1980 「岩手県に於ける北上川流域の土偶」 北上市立博物館  
江坂輝弥 「土偶」 校倉書房  
草間・金子編 1971 「貝鳥貝塚 一第4次調査報告一」 岩手県花泉町教育委員会 岩手県文化財愛護協会  
土肥孝 1981 「動物土偶の発見例からみた狩猟と動物祭祀」 アニマ3月号 平凡社  
P19～21  
青森県教育委員会 1976 「水木沢遺跡」  
大迫町教育委員会 1979 「小田遺跡発掘調査報告書」 大迫町埋蔵文化財報告第4集  
金子浩昌 1980 九年橋遺跡第6次調査報告書 北上市教育委員会 第5節 魚類遺存体  
P58～62  
中村良幸 1979 「岩手県御賀郡大迫町立石遺跡 昭和52年・53年度発掘調査報告書」 大迫町教育委員会  
今井富士雄・磯崎正彦 1967 「十腰内遺跡」 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 岩木山刊行会

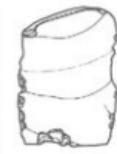
#### (Ⅲ) 石器

##### a. 第8層出土の石器（第129図～第132図 図版32・33）

1～9は石鏃である。1、2がIa類、3～6がIb類、7、8がII類、9がIII類に属する。3、7は欠損している。1の基部にはアスファルトの付着が認められる。2は周辺加工によって、形が整形されている。Ia類は、両面加工によって製作されるのが普通であり、周辺加工によって製作されているのは、この1例のみである。4、6、8、9は他に比べて大形の一群であり、尖頭部もしくは製作途上で放棄されたものである可能性が高い。9は全面に火熱痕



第129図 第8層出土の石器実測図(1)



19 (E12)



20 (E13)



21 (E13)

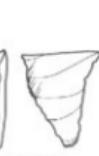


22 (E13)

0 5 cm



23 (E14)



24 (E13)



25 (E14)



26 (E13)



27 (E11)

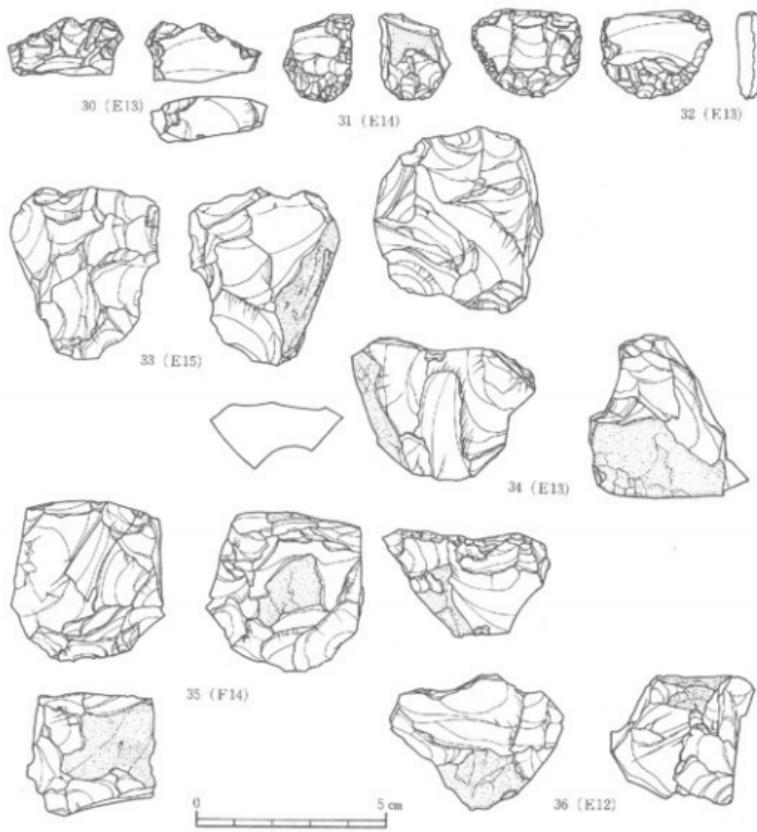


28 (E F · 17 · 18)



29 (E12)

第130図 第8層出土の石器実測図（2）



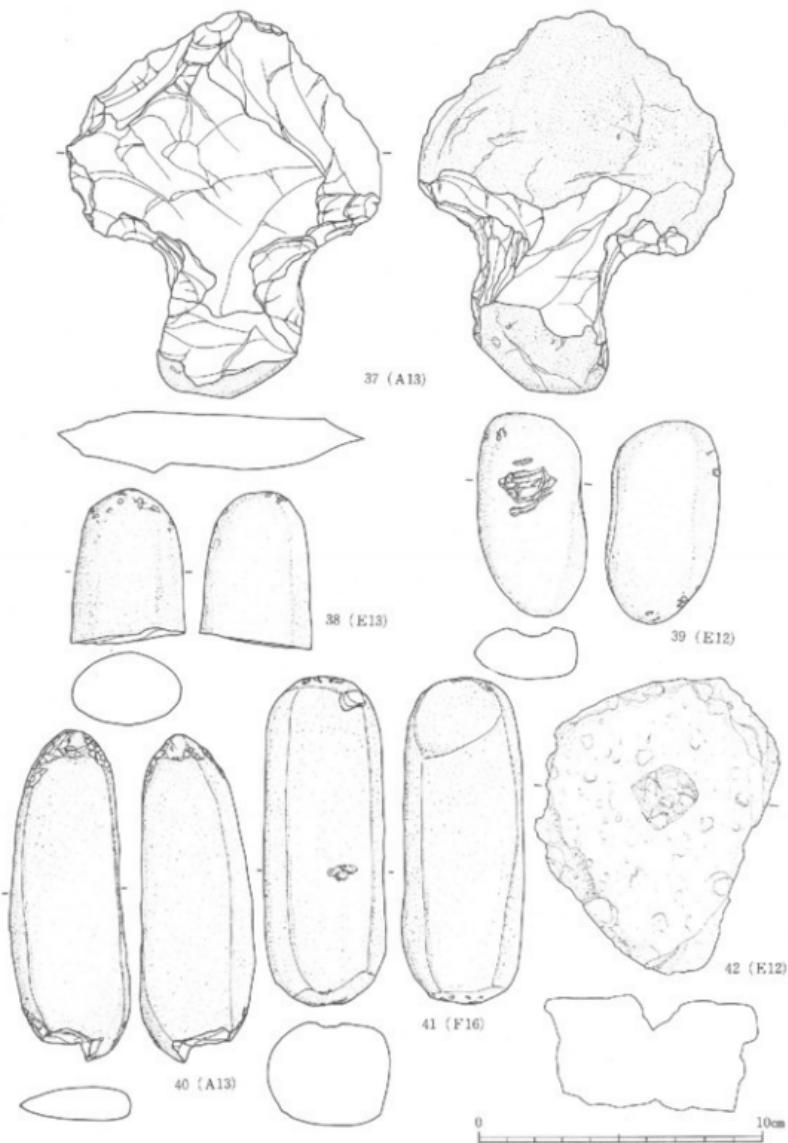
第131図 第8層出土の石器実測図（3）

が認められ、変色し、器面の一部にハジケが認められる。

10は石錐Ⅱb類に属する。剥片の一側刃を折断し、その後、先端部に調整をくわえ、尖頭部を形成している。

11～14は石匙である。13、14は下部欠損している。いずれも縦長剥片を素材としている。13のつまみ部は左右ともに、腹面→背面の加撃によって形成されている。このような例は本遺跡出土の石匙の中でも唯一のものである。14は破損後、さらに二次加工がくわえられている。

15～18は不定形石器Ⅰ類である。15、17は欠損している。15、16は周辺部から散漫な加工がくわえられているのに対し、17、18は剥離面も規格的で、より定型化しているといえる。



第132図 第8層出土の石器実測図 (4)

19~24はスクレイバーⅠ類である。23、24の小形の一群と19~22の大形の一群がある。19、20、22、24は欠損している。19は欠損後、折面にさらに二次加工がくわえられている。21は他のものと異なり、背面→腹面の加工によって刃部が形成されている。

25~27はスクレイバーⅡ類である。25には、先端部の他に基部にも加工が施されている。26には先端部の他、側辺部にも加工が施されている。

28、29はスクレイバーⅢ類である。28は欠損している。28には剝片の末端部に背面→腹面の加工がくわえられ、凹形の刃部が作られている。29には剝片の末端部に背面→腹面の加工が施され、1個の凹形の刃部が形成されている。

30はスクレイバーⅣ類である。剝片の打面側に調整をくわえることによって、鋸歯状の刃部が形成されている。折面には更に二次加工がくわえられている。

31、32は全体の形状が明らかでないため未分類とした。

33~36は石核である。33は剝片を石核の素材として、打面と作業面を交互に入れかえ、剝離が進行している。34~36は、作業面と打面を多方向に転移しながら作業が進行している石核である。

37は核石器である。従来「扇形扁平打製石斧」と呼ばれたものに類似する。自然面を背面に残す、大形な扁平な剝片を素材に、両面から加工をくわえ、抉り部を形成し、全体の形状を扇形に仕上げている。

38は下部が欠損して、全体の形状は不明である。使用痕は打痕のみで、その特徴から、敲石類に分類される可能性が高い。

40、41は敲石Ⅱ類に属する。40には打痕のみが、41には、打痕と凹痕がみられる。

42は凹石Ⅰ類である。多孔質で軟質不整形の礫に、一個の凹痕が認められる。

#### b. 第10層出土の石器（第133図~第138図 図版34~36）

1~9は右鍛である。1はⅠa類、2~4はⅠb類、5、6はⅡ類、7~9はⅢ類に属する。1は全面に火熱痕が認められ、基部、先端部が破損している。1、3、7は全面に加工がくわえられているが、他のものには素材の面が残されている。先端部が素材のどの部位にくるかを見ると、打面側、末端側、横とバラエティーがあり、一定の傾向は認められず、類との相関もない。Ⅲ類の中でも、7、8と9の間には凹部の作り出しに大きな違いがある。7は全面に火熱痕が認められ、器面の一部にはハジケが認められる。

10~15は石錐である。10、11がⅠ類、12、14がⅡa類、13がⅡb類、15がⅢ類に属する。10は剝片の周辺を両面から調整することによって、尖頭部を形成している。11は小形の細長い素材の先端部に調整を加え、尖頭部を形成している。素材は、その形、剝離面の特徴をみるとピエス・エスキューの碎片であった可能性が高い。13は、剝片の一端に小さな剝離をくわえ、

尖頭部を形成している。剝離は錯向剝離となっている。錯向剝離は石錐の先端部断面形を菱形にするために有効であったものと考えられる。15は一部が破損している。剝片の周辺部に両面から剝離を加えることによって、二ヶ所の尖頭部を形成している。

16～18は石匙である。いずれも縦長剝片を素材とする。16、17は、剝片の打面側に、18は剝片の末端につまみが形成されている。つまみは、背面→腹面、腹面→背面の加工が組み合わさって、形成されるのが普通である。ただし、16の背面右側の抉りは、背面→腹面の加工のみで形成されている。

19～22はポイントである。19は横長剝片を素材に周辺から剝離がくわえられ、木葉形に仕上げられている。20は、周辺部から角度のない剝離が施され、尖頭部が形成されている。これらは尖頭部がさほど尖銳でなく、製作過程の途上で、放棄されたものかもしれない。21、22は上半部が欠損している。その形状からポイントの基部と考えられる。

23、24は不定形石器I類である。23は、周辺からの剝離によって、ほぼ四角形に仕上げられている。側辺部の加工は人念であるが、図上縁の加工は大きく散漫で、収斂しない。24は上部欠損している。破損面から、さらに一面ではあるが、加工がくわえられている。

28、29は不定形石器II類である。29は下部欠損している。縦長剝片を素材に、側辺部に急角度の剝離が施され、先端部はにぶく尖がる。この種の石器は、10層の2点のみで、他の層からの出土はない。

25～27は不定形石器III類である。剝片を折断し、形を整形し、一側辺に連続的な二次加工をくわえ、刃部を形成している。25、26には、折断面にさらに調整がくわえられている。25は火熱を受け、器面にハジケが認められる。

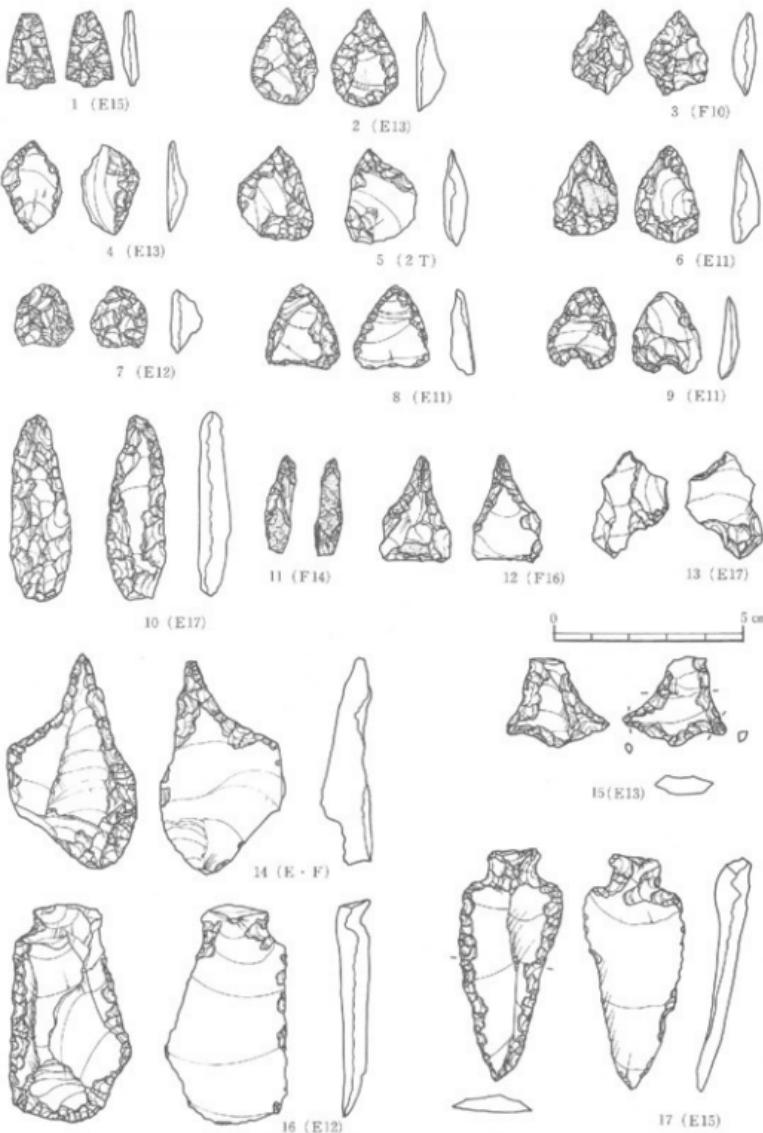
30～36は、スクレイパーI類である。30、31、33は欠損している。いずれも縦長剝片を素材とする。31は腹面側にまず、比較的大きな平坦な剝離を施し、それを打面に背面側に刃部を形成している。このような手法は、27、第140図19などと共通する特徴的なものである。刃部は一側辺に形成されるもの(30、31、36)と両側辺に形成されるもの(32、33、34、35)がある。

37、38はスクレイパーII類である。いずれも剝片の末端に、円弧状の刃部を形成している。

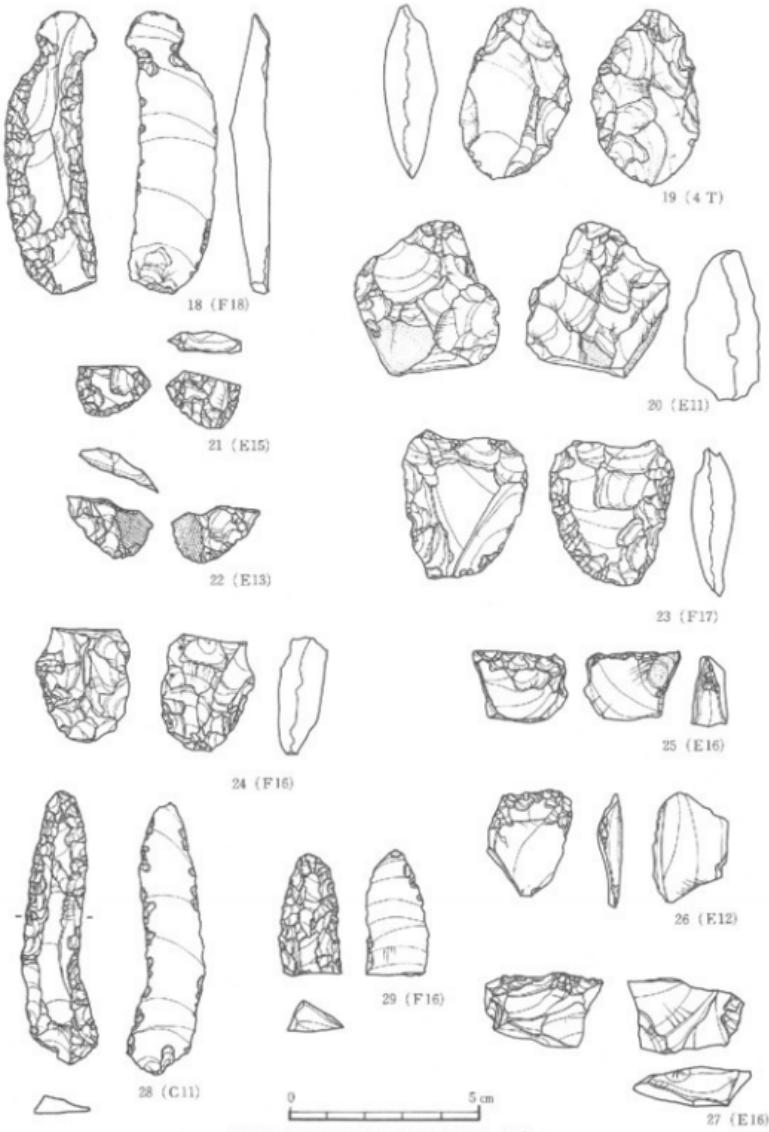
39、40はスクレイパーIII類である。39は、剝片の側辺部に一個の凹部を形成したものである。40は、剝片の末端部に両面から剝離をくわえ、凹部が形成されている。火熱の痕跡が認められ一部にハジケが認められる。

41はスクレイパーIV類である。剝片の腹面側に平坦な剝離をくわえ、それを打面として背面側に鋸歯状の刃部が形成されている。

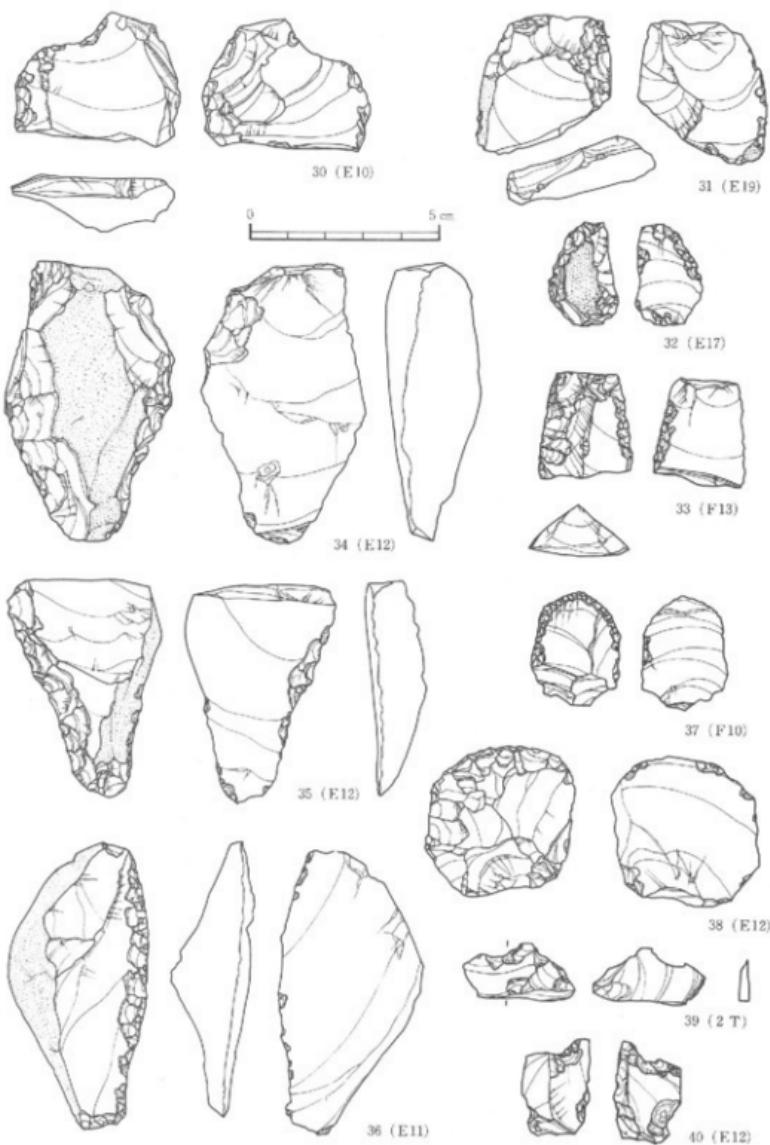
42は小形の剝片を素材に、周辺部に小さな剝離をくわえることによって、ほぼ四角形に整形された石器である。



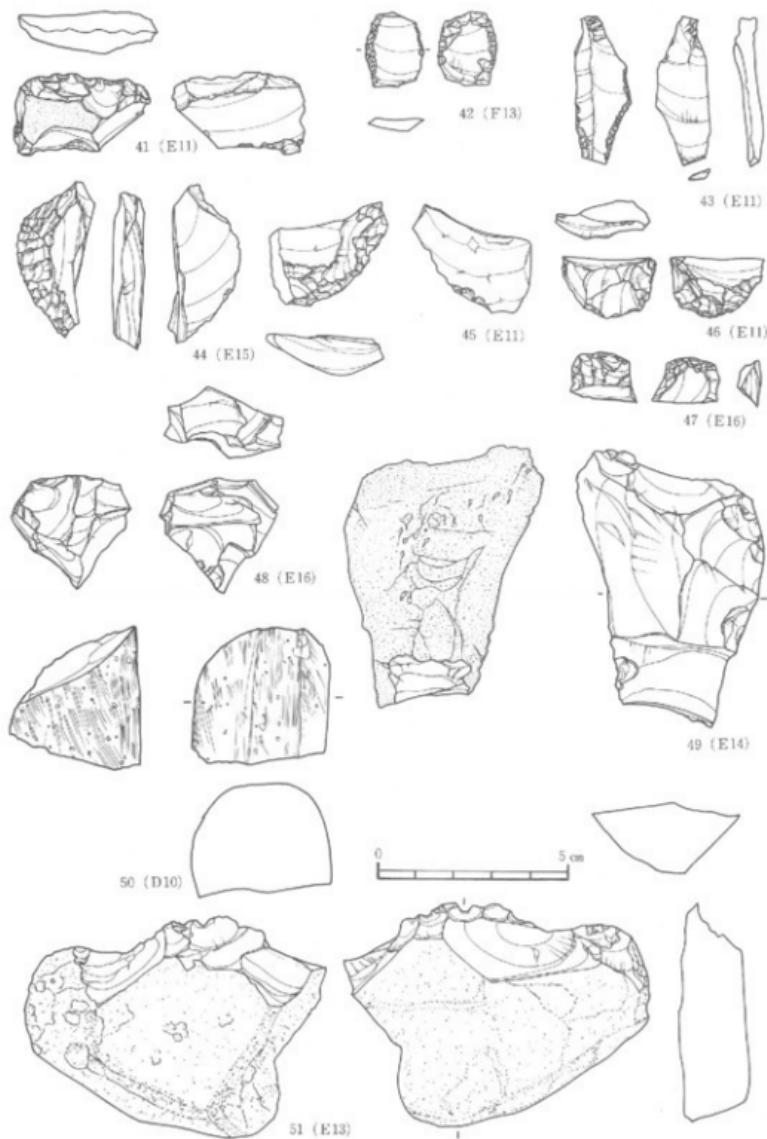
第133図 第10層出土の石器実測図（1）



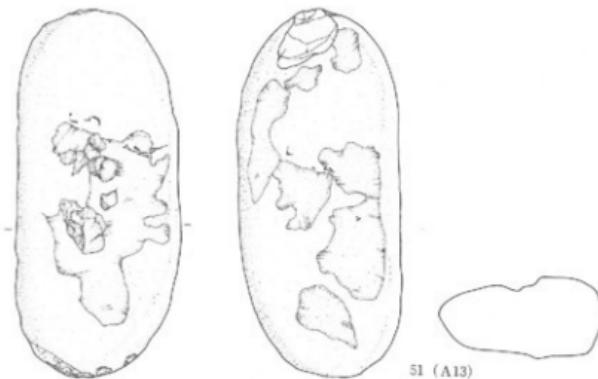
第134図 第10層出土の石器実測図 (2)



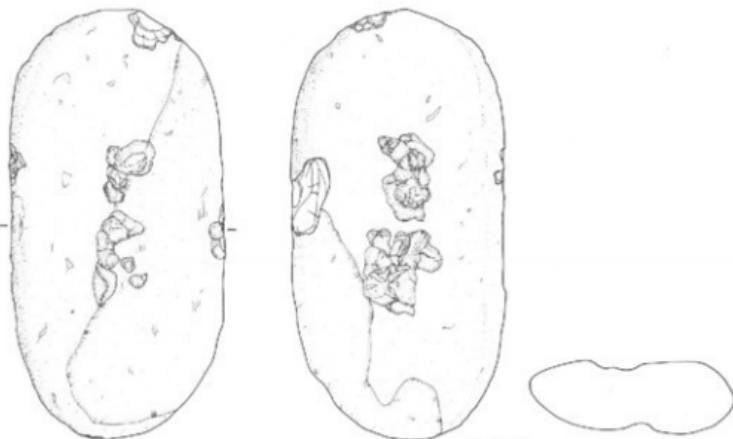
第135図 第10層出土の石器実測図（3）



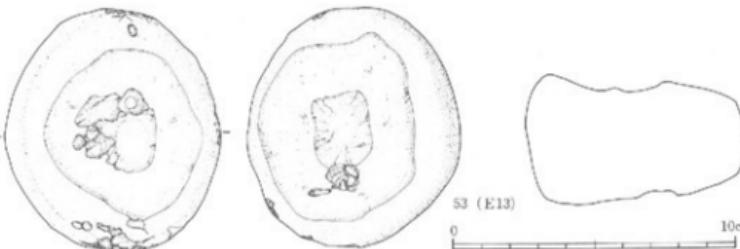
第136図 第10層出土の石器実測図（4）



51 (A13)



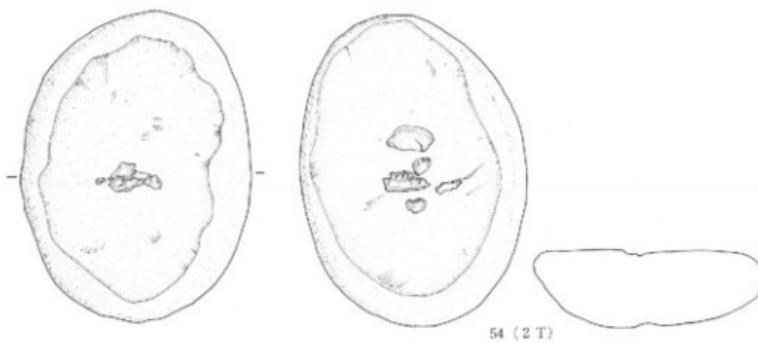
52 (E14)



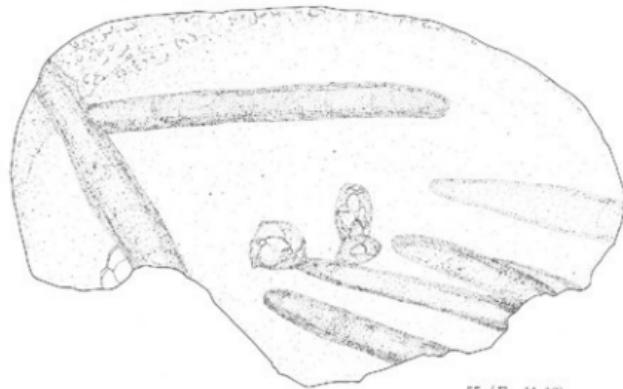
53 (E13)

0 10cm

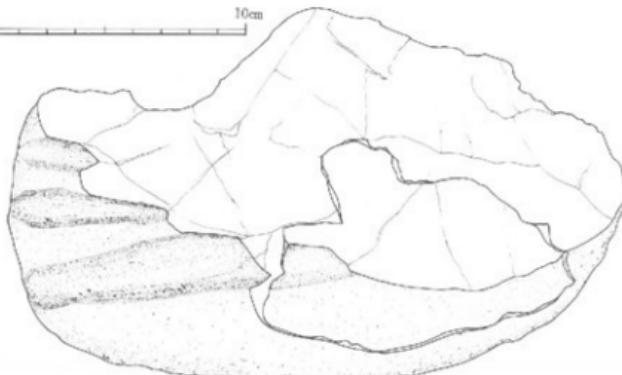
第137図 第10層出土の石器実測図 (5)



54 (2 T)



55 (F・II 12)



第138図 第10層出土の石器実測図 (6)

43は縦長剥片を素材に、両側辺に急角度な加工が加えられている。この加工はナイフ形石器の刃溝し加工（プランティング）に極めて類似する。本遺跡出土の石器で、このような加工が認められるのは、この一例のみである。

44～47は破損しており、全体の形状は不明である。

48、49、51は石核である。48は剥離面の観察から、打面と作業面が、多方向に転移された痕跡を残している。49は、背面が自然面でおおわれた縦長剥片を石核の素材として、自然面を打面に、腹面側を作業面に横長の剥片を得ている。51は扁平な礫を石核の素材としている。その一侧辺に、打面と作業面を交互に入れかえて、剥離が進行している。

50は石棒である。上下大半は欠損し、全体の形状は不明である。

51、52は敲石Ⅲ類である。51には、磨痕が両面に認められ、さらに片面に凹痕が、両端に打痕が認められる。これらの使用痕の他に、散漫ではあるが、赤色の顔料（ベンガラと考えられる）の付着がみられる。52には、磨痕、凹痕、打痕のいずれも認められる。打痕は先端部のみでなく、側辺部にも剥離面状の痕跡がみられる。また、磨痕は通常、平坦部の中央部にあるが、この例では、表裏とも、側辺部に片寄っており、必ずしも凹痕と重複しない特異な例である。

53、54は磨石Ⅰ類である。53には、磨痕、打痕、凹痕、54には、磨痕、凹痕が認められる。

55は砥石Ⅱb類である。大形の軟質の礫に、十条の溝状の痕跡が認められる。また全面に磨痕がみられる他、一面には深い凹痕がある。

#### c. 第11層出土の石器（第139図～第145図 図版37～40）

1～8は石鎚である。1、2がⅠa類、3、7がⅠb類、4、5がⅡ類、6、8がⅢ類に属する。2の基部には散漫ながらアスファルトの付着が認められる。1は先端部が、6は基部が欠損している。加工状況を見ると、1、2、5は両面加工である。その他のものについては、器面のいずれかに素材の段階の面を残している。特に4、8は明確な周辺加工である。加工の状態と形態（基部の形態）に明確な結びつきは認められない。このことは、加工の種別をこえて、基部形態が強く意識されていたことを示すものであろう。

9～13は石錐である。9～11が2a類、12、13は2b類に属する。10、11は基部が欠損している。13を除けば、いずれも剥片の末端側に尖頭部を形成している。

14～16は、ビエス・エスキューである。14、15には上下1対、16には上下、左右1対ずつの潰れ状の刃部が形成されている。いずれも剥片を素材とする。

17～19は不定形石器Ⅱ類である。17は、剥片の両側辺を折断し、一侧辺に折断面から更に加工がくわえられるとともに、末端部に連続的な二次加工が加えられ、刃部が形成されている。外面形はほぼ三角形を呈する。18は、剥片の末端部を折断し、それに対応する部位は打面となっている。外面形は三角形を呈し、一辺の腹面側に連続する二次加工を加え、刃部を形成して

おり、この刃部形成の剝離が折断面を切っている。19は、剝片の両端（上下）を切断し、素材としている。その腹面側に比較的大きな平坦な剝離をくわえ、それを打面として、背面側に連続的に急角度の剝離が、施されている。外面部は、ほぼ三角形を呈する。

25～28はスクレイパーⅠ類である。すべて縦長剝片を素材とする。26は上部が欠損している。26、27は大形で一側面に加工が加えられているが、26、28は比較的小形で、両側面に加工が施されている。

20～24はスクレイパーⅡ類である。石器の長軸に直交する一辺に連続的な二次加工をくわえることで共通する。21、22、23、24は石器の側辺部にも加工がくわえられており、スクレイパーⅠ類の特徴も合わせもつものとも考えられる。

29はスクレイパーⅢ類である。剝片の末端部、側辺部に剝離をくわえ、一個の凹部を形成している。

33は、スクレイパーⅣ類である。背面に自然面を残す部厚い剝片を素材に周辺に加工をくわえ、鉤状の刃部を形成している。

30、31は破損しているために、全体の形状は不明である。

32は、剝片を素材に、背面側にはスクレイパー類の加工に似る剝離が、腹面側には、より平坦な剝離が、ほぼ、器面全体をおおっている。スクレイパーⅠ類に分類されるかもしれないが、腹面側の加工の性格が、不明のため、ここでは未分類としておきたい。

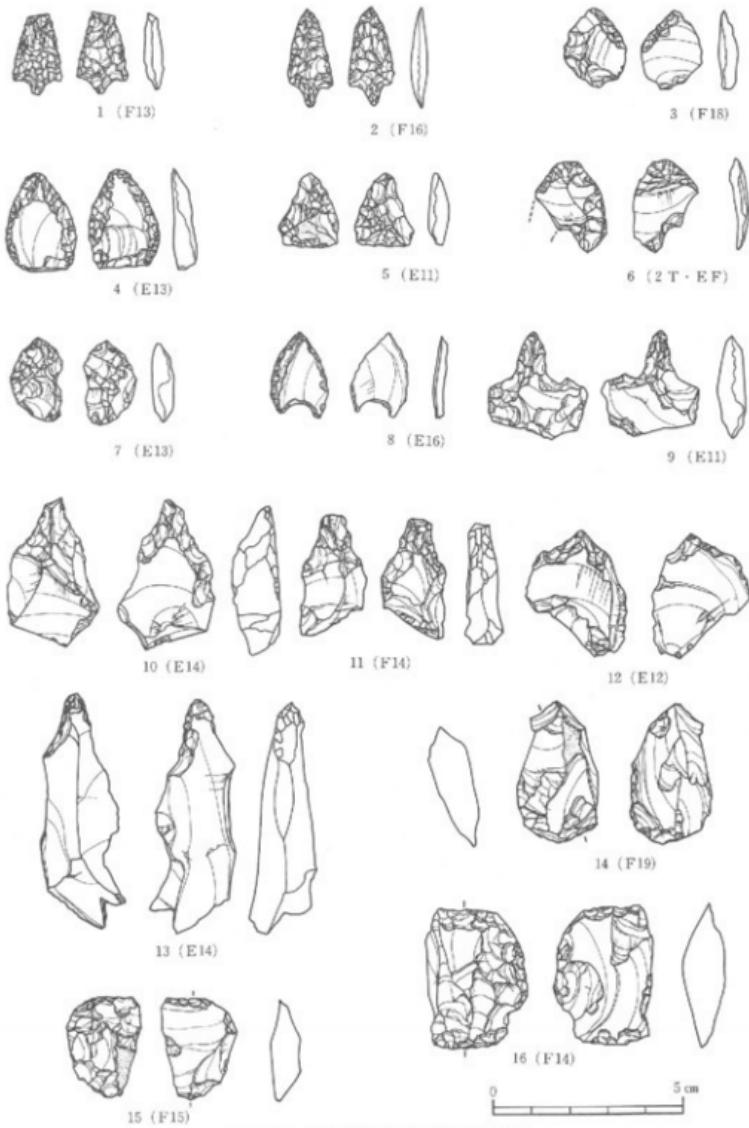
34は石核である。扁平な角疎を素材に、一面に打面を形成し、その逆側を作業面に剝離が進められている。剝片は5枚程度得られているにすぎず、最終的段階まで作業が進行しているとは考えられない。

35～37は磨製石斧である。35は基部側が破損している。36は全面が火熱を受けて、変色している。上下両端が欠損しており、全体の形状は明らかではない。37は比較的全体の形状を残している。先端部には、交叉剝離によってジグザグの刃部が形成されている。これは、破損した刃部の再生という意味をもつものであろう。磨製石斧の出土は11層のこの3例に限られる。しかし、すべて本来の姿を残しておらず、数量も少なく、細かな形態のまとまりには言及できなかつた。

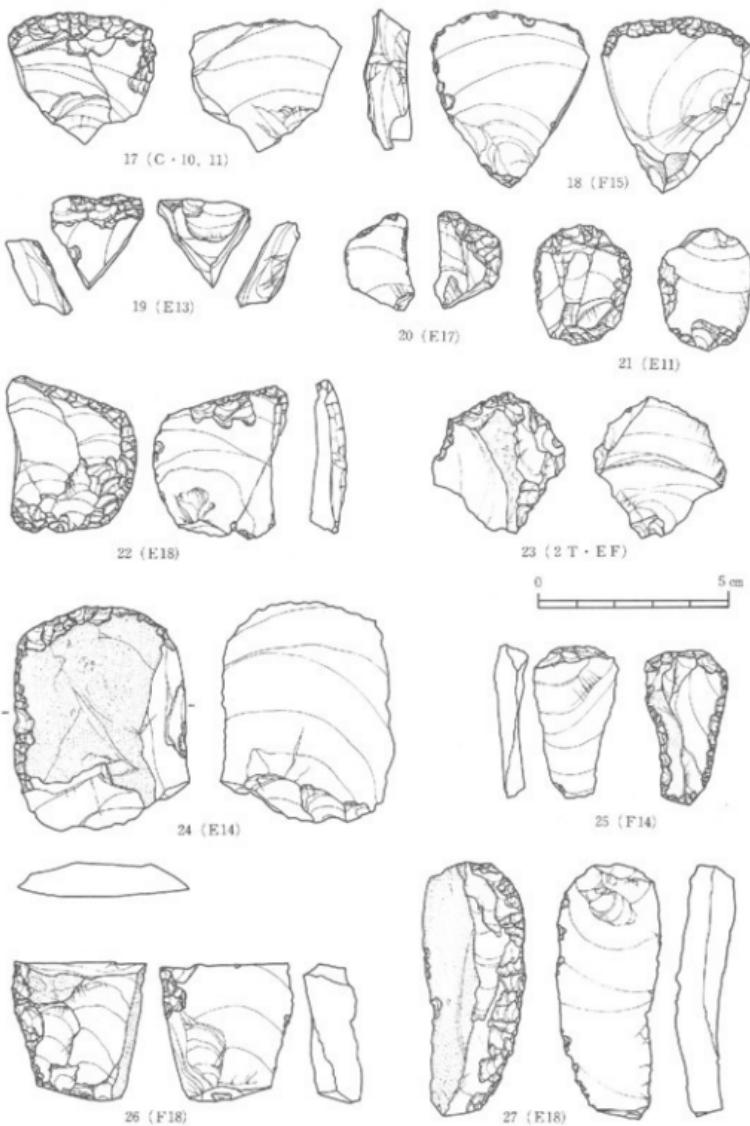
38、39は敲石Ⅴ類である。38は角柱状の自然疎の側辺部に打痕が認められる。39の下部は、破損し、剝離面状の打痕が認められる。

40は下半部が欠損し、全体の形状は明らかではないが、その特徴から敲石に分類されるものと思われる。側辺部に溝状の打痕が、一方の平坦部に同じく溝状の凹痕が認められる。折面には腐耗痕が顕著に認められ、破損後、再利用されたことをうかがわせる。

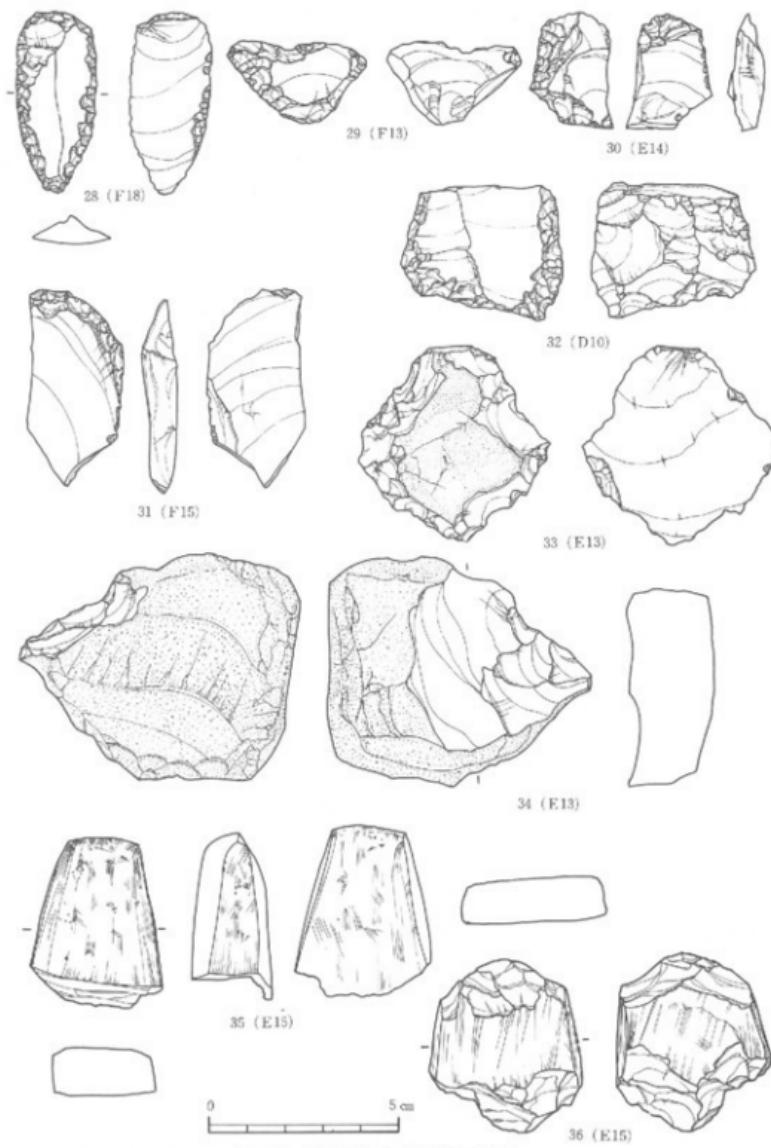
41は敲石Ⅵ類である。下半部が欠損している。大形で薄く扇形の自然疎を素材としている。



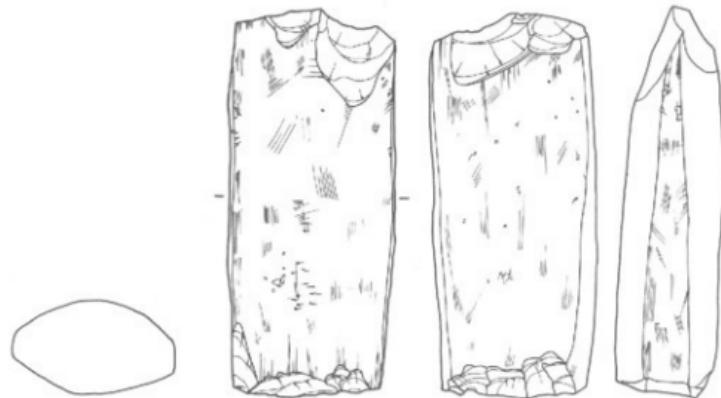
第139図 第11層出土の石器実測図（1）



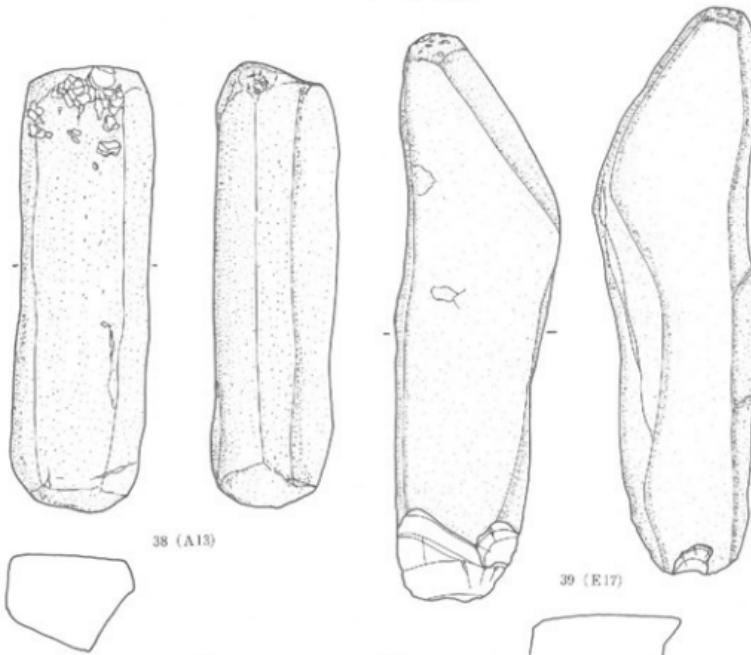
第140図 第11層出土の石器実測図 (2)



第141図 第11層出土石器実測図（3）



37 (A14)

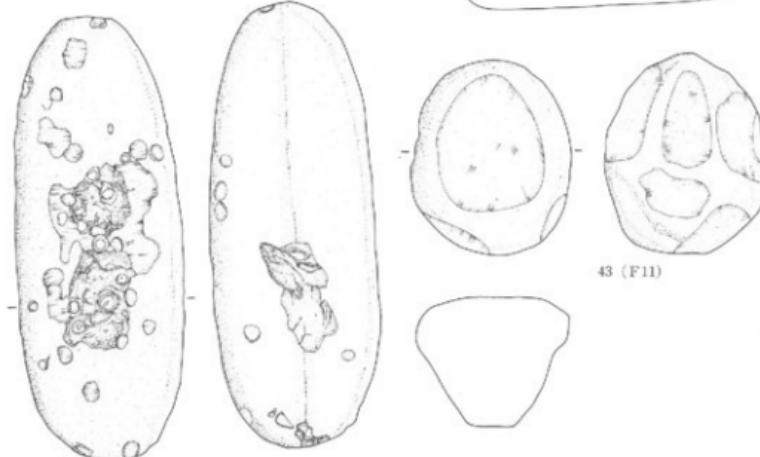
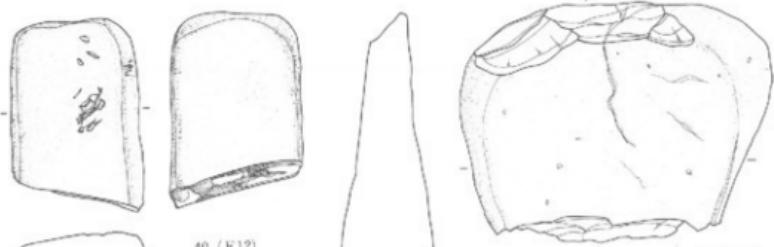


38 (A13)

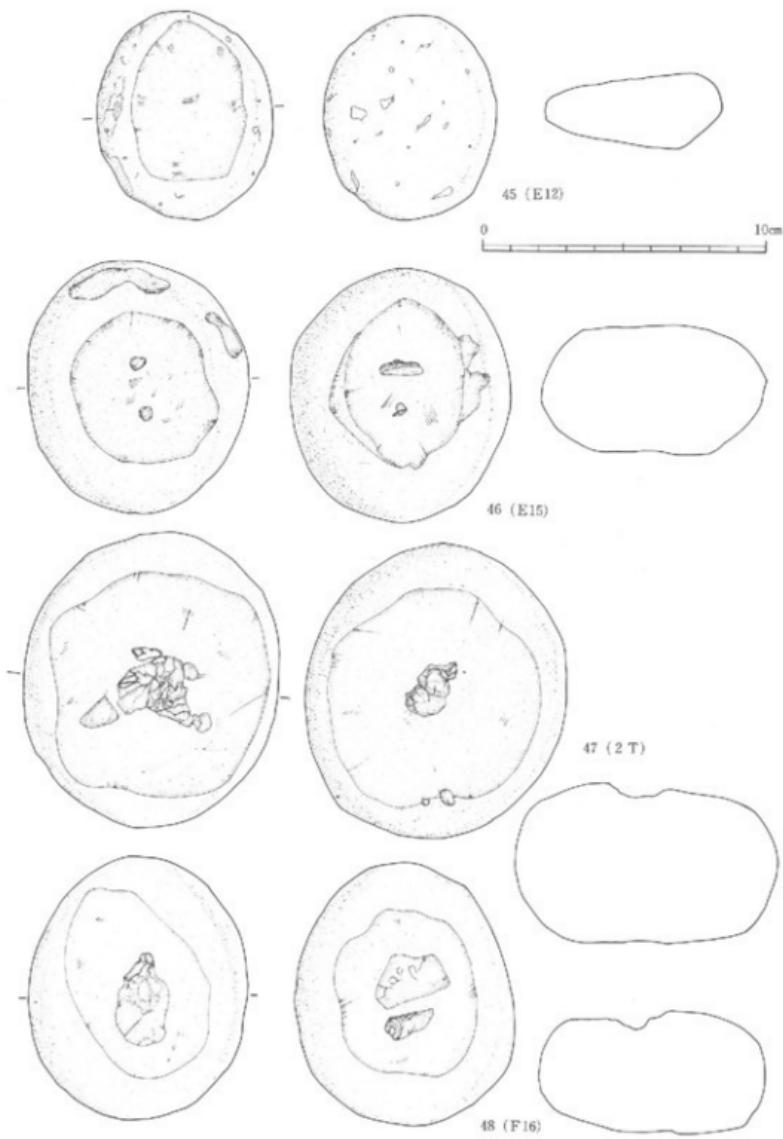
39 (E17)



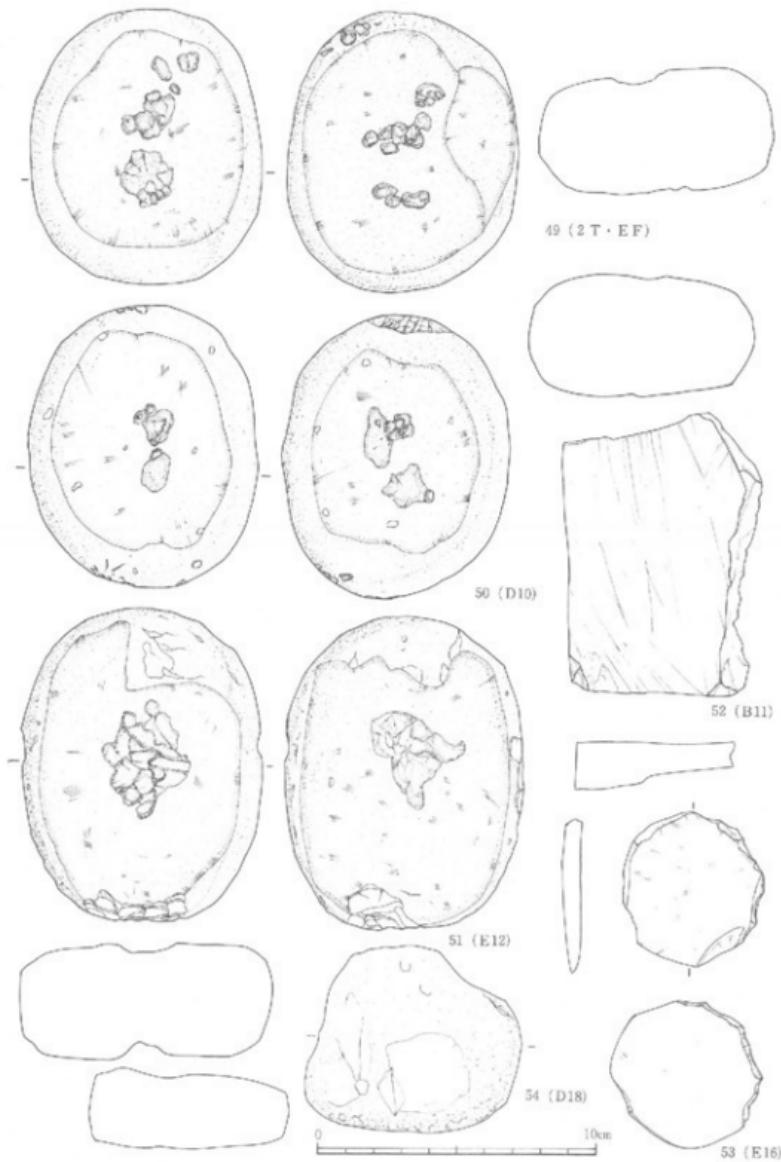
第142図 第11層出土の石器実測図 (4)



第143図 第11層出土の石器実測図（5）



第144図 第11層出土の石器実測図（6）



第145図 第11層出土の石器実測図（7）

最大幅のある方の縁辺に剥離面状の打痕が認められる。このような形態のものは、他に1例存在し、いずれも11層出土のものである。

42は敲石Ⅳ類に属する。表裏に二ヶずつの凹痕、末端部に打痕、さらに岡の左面に磨痕が認められる。特に注目されるのは、平坦面に認められる使用痕のかたちである。円形、もしくは格円形の凹形の痕跡が器面にまんべんなく認められ、凹痕の中央部にも存在する。また、それらが重複したり、力が一点に集中しない場合には、磨痕の形状となって、あらわれるようである。これらの痕跡は從来「パンチ・コーン」と呼ばれていたものに類似し、一点に集中して、強力な加壓がなされたことを示すものであろう。本遺跡の出土品の中で、このような痕跡をとどめるものは他にくなく、特異な使用痕といえる。

43は磨石Ⅴ類である。磨痕のみが認められ、磨痕の面によって、礫の形が、かなり変形されており、多面体に近い形となっている。

44~51は磨石Ⅰ類に属する。44、45には、磨痕のみが、46~48には、磨痕と凹痕が、49~51には、磨痕、凹痕、打痕が認められる。磨板は、表裏いずれにも認められるのが普通であり、凹痕と重複する。磨痕のみが認められるもの(44、45)は、他のものよりも小形の傾向がある。しかし、数量的に少ないためか、先に述べたように、他のものから分離することは不可能である。今後の課題として置きたい。

52は、砾石Ⅰ類である。角礫の平坦面に擦痕が認められる。

53は円盤状石製品である。平坦面をもつ、薄い壁を打ち欠いて、ほぼ円形に仕上げたのち、平坦面、周辺部を、さらに磨いている。

54は砾石Ⅱa類である。不整形で軟質な礫の一面に数条の線状痕が認められる。

#### 4) 土器の製作技術について

##### a. 土器の製作

土器が完成品となるまでは、およそ、以下の工程が考えられる。



これらの製作工程については、まだ不明な点が多い。以下は、土器の観察によってある程度理解できる工程について言及してみたい。

##### 胎土

土器の製作は、粘土の選定から開始される。当然、一定の空間をもつ集落の内部や周辺の採集地があったものと思われる。また、時期や地域によっても、粘土の選択に個性がある。これ

については、「集団の好みや流行として解釈すべき部分が多いようである。」(小林達雄: 1966)と言えよう。しかし、好みや流行以前に、地域ごとの土壌に左右されることは言うまでもないことであろう。

砂粒については、石英・長石・光沢のある黒色不透明粒(角閃石?)等が目につくが、雲母などはほとんど見られないようである。また、本遺跡では、時期別や粗製土器と精製土器の差によって砂粒が区別されるということはない。砂粒の量は、肉眼からの判断では、縄文時代中期の土器が多く、第1群土器では粗粒のものが、第2~第8群土器では細粒のものが目立つ。第7群土器は、器面調整が丁寧であるためか砂粒は比較的目立たない。

#### 成形

##### (粘土帯)

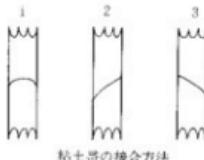
成形については、完全な土器を観察しなければならないが、大半の土器は成形の良く観察できるものではない。

したがって、破片の観察によって解決する方法を取らざるを得ない。

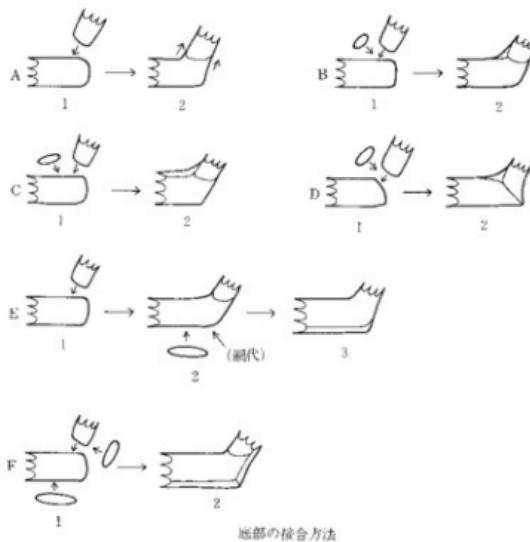
本遺跡では、接合面が明瞭に剥離した土器片長は2~3cmおよび4~6cmのものが多い。

のことより粘土帯の幅は最小が2~3cmであると考えられる。したがって幅が4~6cmのものは粘土帯2段分で割れていることになる。さらに接合面で明瞭に剥離していない破

片でも、その長さが2~3cm、4~6cmのも



粘土帯の接合方法



底部の接合方法

第146図 肩部・底部接合方法模式図

のが多いことは、前述した粘土帯の長さが妥当なものであることを示すものであろう。また、大形品と考えられる破片を観察してみると、粘土帯2段分で明瞭に剝離しているものが多いことが看取される。このことから、積み上げ段階にある程度の乾燥工程が存在したことが予想される。口縁部付近のものが胴部に比して、粘土帯の幅の狭いものが存在する。粘土帯の幅には、地域差や製作者の個人差があるであろうし、器形によっても異なるであろう。しかし、本遺跡では、それらの差異は看取し得なかった。

ミニチュア土器は、手探ねによるものが主体的であり、わずかに鉢型のものに輪積みと思われるものが存在する。

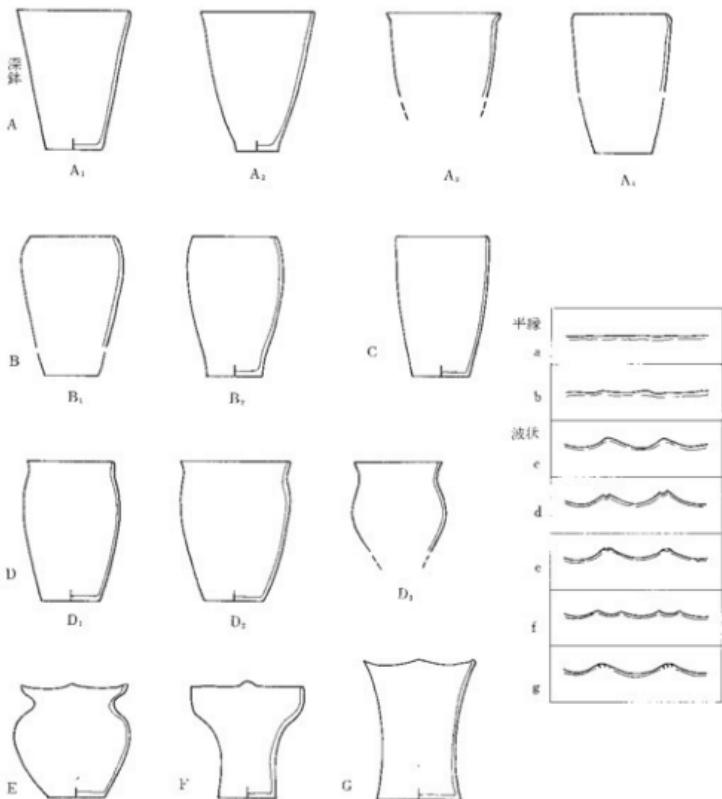
#### (接合)

胴部の接合には、第146図に示したとおり、3種類の方法が存在する。1、2の方法が主体的であり、3の方法は僅少である。1の方法によるものの中に上端に刻みを施したもののが2例(図版31)認められた。1の方法については、図のような均整のとれた例は少なく、左右どちらかに偏るものが多いようである。

底部の接合では、底部円盤に胴部の粘土を接合し、さらに底部調整が行なわれる。これに関しては、第146図に示した6種類の方法が確認できた。統計的処理は行なえなかつたが、観察の結果では、A及びBが最も多く、他は少ないようである。A及びBは、主に第10層・第11層の土器においてみることができた。Bは、Aにさらに粘土を補強した例である。Cは、E-15区、第11層より1点確認された。Bと同様の方法であるが、補強粘土は、底部内面すべてに及ぶものと考えられる。Dは、Bと同様であるが、接合する部位に違いがみられる。すなわち、Bにおいては、底部円盤上で接合するのに対して、Dは、底部円盤の先端部に接合し、内面に粘土を補強している。Eは、Aの方法を基本とし、底部外間に粘土を補強しているが、工程2の段階で網代がつき、その後に粘土を補強している。Eの方法は、第8層中の資料にみることができる。

#### 調整(整形)

土器成形が終了すると、次の工程として調整が行なわれる。この工程では、土器の機能や用途に重要な関わりを示す。また、文様の施文との関わりにおいても重要な条件となろう。調整には「ケズリ」「ナデ」「ミガキ」が存在し、最初の工程として「ケズリ」あるいは「ナデ」の調整があり、次いで「ナデ」あるいは「ミガキ」が存在する。これらの調整は、内面において顕著であり、わざわざ化粧土を付加し「ミガキ」を加えるものもあり、そこに、機能を果すべく、多大な努力が払われているといえよう。最終調整が「ケズリ(弱い)」で終わるものはほんとなく、大半は「ナデ」あるいは「ミガキ」である。器形や大きさによって調整方法が異なる傾向は認められない。さらに、精製土器と粗製土器の差によって、調整方法の差異も認められ



第147図 後期の縄文土器器形分類模式図

ないようである。また、粗製土器においては、調整方法の精粗の差が存在し、機能差を反映したものであろう。

一方、調整には、文様施文後に行なうものが存在する。口唇部付近や胴部下半に地文を消す形で認められる「ナデ」「ミガキ」がそれである。しかし、これらは「磨消し」とは目的を異にするようである。これらの調整は後期の土器に多くみることができる。

#### 施文

施文には、地文として繩文と撚糸文が主体的に用いられる。他に、柳歯状工具、半截竹管、棒状工具、そして、ヘラ状工具を突き刺して1本1本描く沈線文が存在する。これらは、およそ施文工程の第1段階として用いられる。この段階では、装飾性に乏しい。施文工程の第2段階として、様々な沈線文や隆起線文、そして磨消や突起等によって加飾され、より装飾性の高いものに仕上げられる。特に後期以後に、第1段階と第2段階の差が明瞭となり、数量的にも第1段階で終了するものの比率が増大していく。これは、機能や用途が多様化・固定化することを推測させる。逆に、中期のものは、第2段階までの工程を示すものが多く、段階の差は未発達である。

また、本遺跡では、後期以後の上器で第1段階で施文が終了し、しかも装飾性の乏しいものを粗製土器とし、第1段階で終了するものでも装飾性の豊かなものや、第2段階以上のものを精製土器として区別した。この粗製と精製の区別の問題は、種々議論のあるところであり、本来、胎土や調整等の他の土器の持つ属性や機能を含めた分析を通して、総合的な判断に基づかなければならぬが、本遺跡では、便宜上、文様の施文工程によって区別した。本遺跡では、粗製土器の出土量が極めて多い。

#### b. 器形（第147図）

##### ① 深鉢形土器

第Ⅰ群～第Ⅳ群土器については破片が多く、全体を知りうるものはほとんどない。わずかに第Ⅱ群土器の中に、胴部が大きく張る深鉢形土器（第55図1、第56図1）があり、第Ⅳ群土器にやや肩の張る深鉢形土器があるにすぎない。

ここでは、比較的資料の多い後期の土器について分類を行った。

Aは、底部から口縁部にかけて聞く深鉢形土器である。

A<sub>1</sub>はゆるやかに外傾するもの（第53図2）。

A<sub>2</sub>はA<sub>1</sub>と同様であるが、底部付近が密むもの（第48図2）。

A<sub>3</sub>は胴部がやや開き、口縁部は外傾するもの（第45図2）。

A<sub>4</sub>は直立ぎみに立ち上がり、口唇部付近が内傾するもの（第54図1、第71図5）。

このうち、A<sub>1</sub>はVI群上器、VII群1類・4類土器などに存在する。A<sub>2</sub>はIX群1類・4類土器な

どに存在し、A<sub>3</sub>はⅨ群6類土器中などにわずかに存在する。A<sub>4</sub>は内傾するものがわずかにⅨ群4類土器に、内反するものがⅦ群土器などに存在する。

Bは内湾する深鉢形土器である。

B<sub>1</sub>は、底部から胴部にかけて緩やかに膨らみ、口縁部付近で内湾するもの（第45図1、第54図3）

B<sub>2</sub>はB<sub>1</sub>と同様であるが、胴部下半が堅むもの（第28図2）

B<sub>3</sub>、B<sub>4</sub>はⅨ群4類土器にわずかに存在する。

Cは底部から口縁部にかけて緩く開き、口縁部付近でほぼ直立する深鉢形土器である。

このタイプはⅨ群1類・4類・5類・6類・9類などに存在する。

Dは口縁部付近がくびれる深鉢形土器である。

D<sub>1</sub>は口縁部付近がほぼ直立するもの（第51図2）

D<sub>2</sub>は口縁部付近が外反するもの（第41図2）

D<sub>3</sub>はくびれの大きなもの（第44図2）

D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>は第Ⅸ群1類・4類・6類・7類などの粗製土器に多くみられ、D<sub>3</sub>は現在のところ第Ⅸ群7類にみられる。

Eは胴部が張り、頸部が大きくくびれる深鉢形土器である。

このタイプは第48図2が代表例であり、ほぼ第Ⅷ群土器特有の器形である。特に文様もある程度限られるよう、1類のb～dの口縁部にf・i・kなどの胴部文様が施文される。器形と文様が対応する傾向が認められる良い例であろう。

Fは第52図3にみられる器形で他に例がない。

Gは、関東の堀ノ内Ⅱ式土器の器形と共通する例で、第52図4が好例である。他のⅧ群は完形品がないけれど、破片観察でも器形の差が認められる。

この土器は器形及び文様、さらに胎土が異なることから搬入品である可能性が高い。

## ② 壺形土器

壺形土器は完形品がなく、復元実測ができたものについて分類した。その結果、4種類の形態が判明した。

Aは口縁部が「く」の字状に外反するもの（第44図1）

Bは口縁部が緩く外反するもの（第42図2）

Cは口縁部がほぼ直立するもの（第42図1）

Dは口縁部が緩く外傾するもの（第42図3）

Aは第Ⅸ群6類b～4、Bは第Ⅶ群2類、Cは第Ⅶ群5類、Dは第Ⅷ群1類にそれぞれ属する。

この他に塊形（第19図19）、皿形（第42図4）、高环形（第42図5）の器種が認められる。

### c. 土器底部について

第2次調査区内における底部破片は、主に時間的制約から、すべての破片について集計・分析はできなかったが、図示した土器を含めて、総数約592片について観察した。この個数は全体の9割以上を示める。もちろん、破片の中には、接合しなかった同一個体の破片が含まれていると考えられるため、観察した底部破片の比率は高くなり、また、出土土器の個体数は少なくなると思われる。

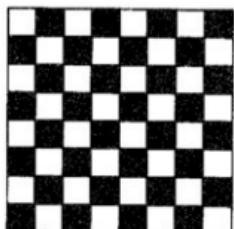
底部について観察すると、網代痕・木葉痕があり、また、無文底における底部調整として、ミガキ・ナデ・ケズリが存在する。これらは、それぞれ全体の35.1%・13.3%・11.3%・5.1%・16.1%となる。また、分類不明のものは、19.1%存在する。層位別の集計は、第12表に示したとおりである。この表をみると、網代底がおよそどの層においても高い出土比率を示し、8層・10層・11層では、いずれも30%以上を占める。無文底のナデやケズリについては、磨耗したものが多く、土器の使用も考慮すれば、表に示した数字は流動的である。木葉痕は、羽状脈のものが大半を占め、平行脈のものは極めて少ない。平行脈は、竹類の葉と考えられる。

網代底は、A～Lまで12種類存在し、第13表・第148回に示したとおりである。編み方は、E・Fが多く、この2種類で全体の約63%を占める。これらは、関東や東北南部では、最も普及した編み方であり、福島県小川貝塚や三貴地貝塚においても、この2種類で50%以上を占め、同様の傾向がうかがえる（荒井ヨシ：1970）。逆に、岩手県崎山弁天遺跡（岩手県大槌町教委：1974）では、本遺跡のAとした平織の例が50%以上を占め、E・Fの例は少なく、東北南部とは異なる傾向を示している。

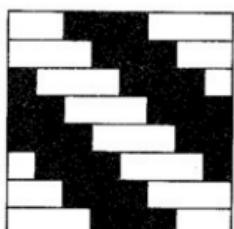
特殊な編み方としては、I～Lとして示したものがある。これらは、 $\frac{A_2+B_2}{B_1+A_1}$  1本送りの編み方を基調としている。Iは、3段（条）毎に縫線を1本ずつずらして編んでいる。また、J・Kでは、3段毎の単位がくずれ、不規則となる。Jでは、 $\frac{A_2 \cdot B_2}{(B_2-A_2)}$  が、Kでは、 $\frac{A_2+B_2}{(B_2+A_2)}$  が付加される。Lは、 $\frac{A_2+B_2}{B_1+A_1}$  1本送りの編み方を示し、3段（条）毎に1本ずらし、 $\frac{A_2-B_1}{(B_2-B_1)}$ 、 $\frac{A_2-B_2-B_1-A_2}{A_1-B_1}$  1本送りが付加される。いずれにしても、

層位	種類	網代	木葉	無文底			不明	計
				ミガキ	ナデ	ケズリ		
8 層		58	22	7	6	28	26	147
9 層		2	—	—	—	—	—	2
10 層		77	29	28	9	33	42	218
11 層		44	18	13	7	19	20	121
11c 層		2	1	7	—	3	1	14
透構		8	3	3	2	4	6	29
表記及び層位不明		18	6	9	6	8	18	65
計		209	79	67	30	96	113	593
%		35.1	13.3	11.3	5.1	16.1	19.1	100

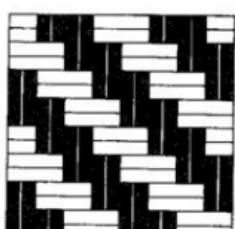
◆第12表  
底部分類表



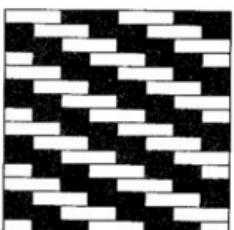
A



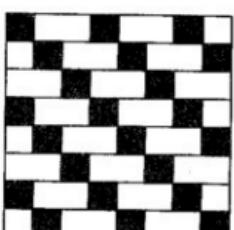
B



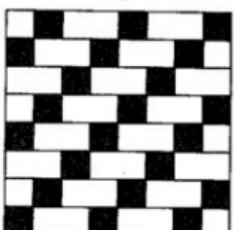
C



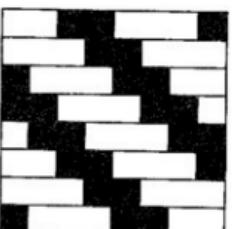
D



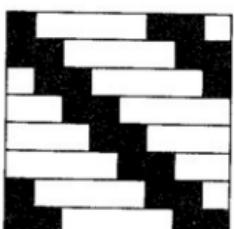
E



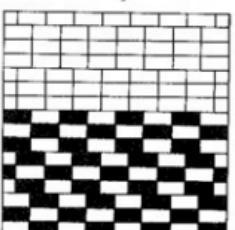
F



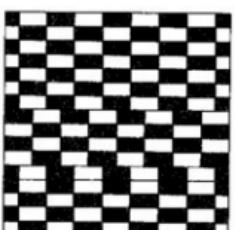
G



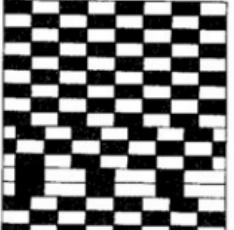
H



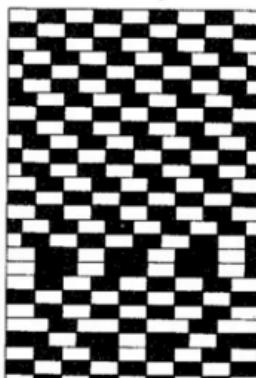
I



J

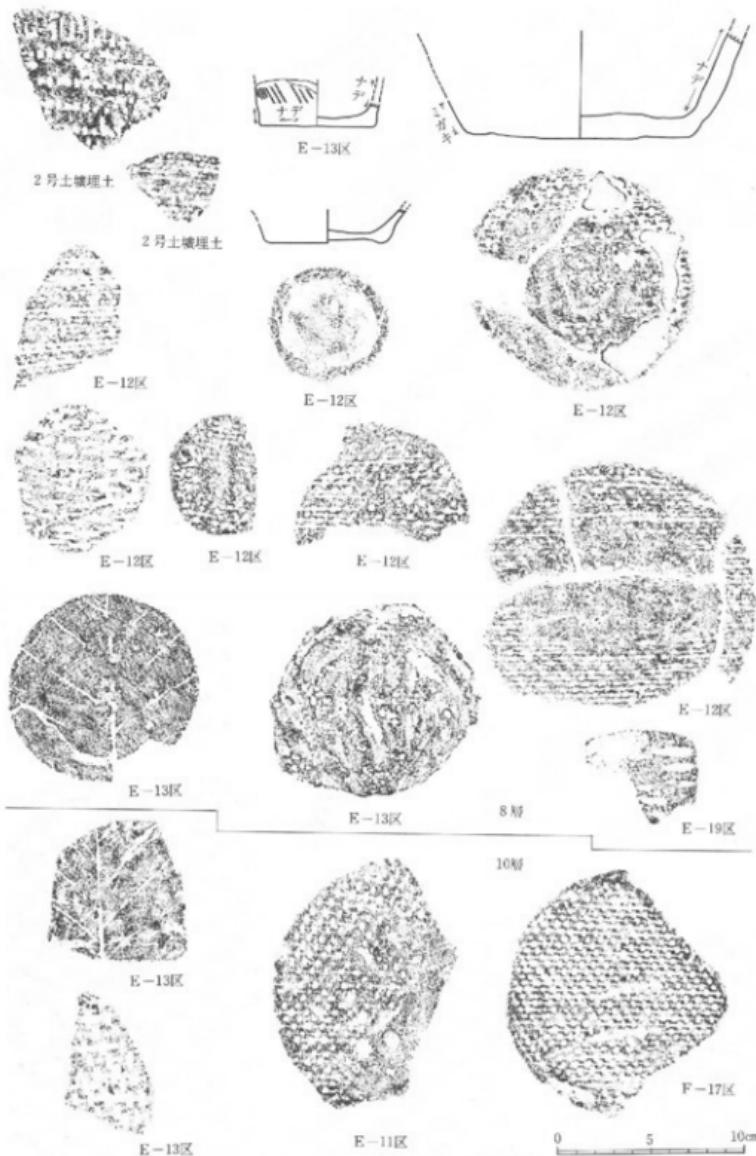


K

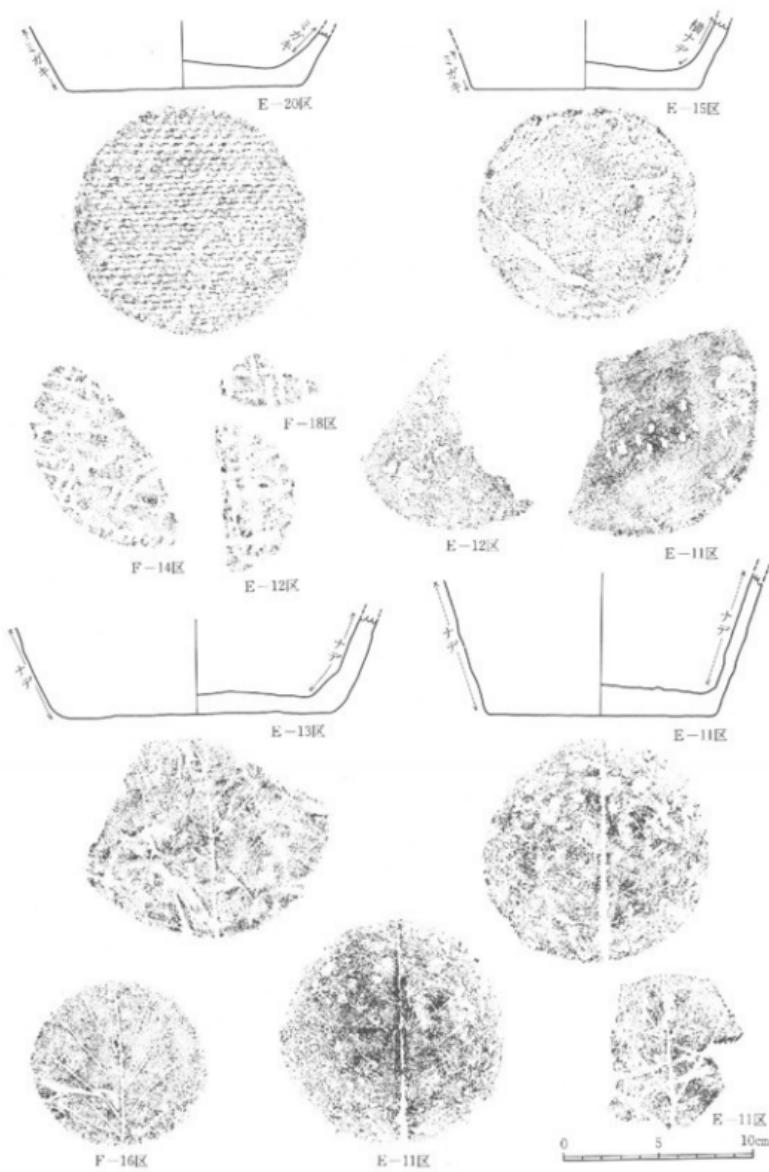


L

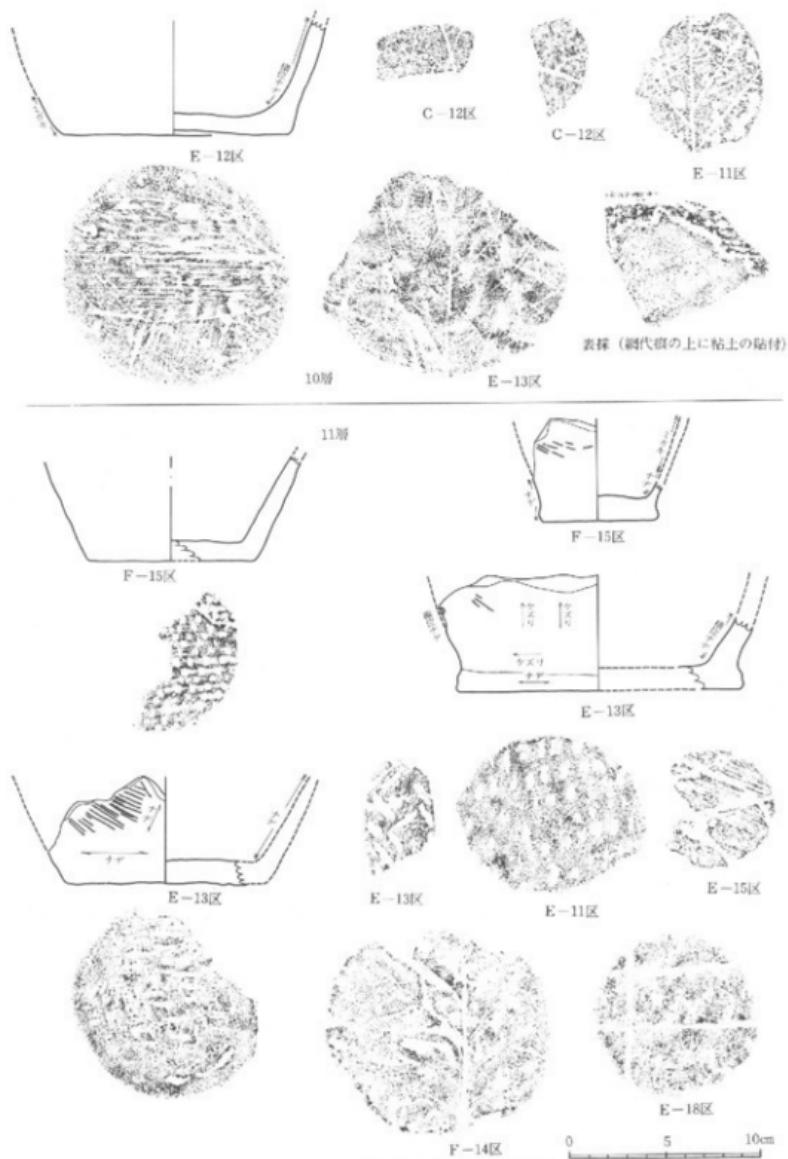
第148図 網代分類模式図



第149図 第8層・第10層出土土器底部



第150図 第10層出土土器底部



第151図 第10層・第11層出土土器底部

第13表 網代分類表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	分類不明	計
8 縞					11	32					1	1	11	56
9 縞		1			1									2
10 縞	1?				23	29	1	1					21	76
11 縞		2	1		12	10							28	53
11b 縞										1			1	2
遺構	1					4							3	8
既往び縞は不明					5	4			1				2	12
計	2	1	2	1	52	79	1	1	1	1	1	1	66	209

1～Lについては不規則で、明確に編み方の単位のくり返しをつかむことができない。

網代の材料については、粘土で陽型をとってみると、偏平で角張っており、おそらく竹で編んだものと思われる。このことは、木葉痕の中に竹葉と思われるものが含まれていることからも、より蓋然性の高いものと言えよう。植物のツル等で編んだような丸みをもつ例は、確認できなかった。纖維の軸は、2～6mmのものが存在し、3～4mmのものが多い。

網代痕については、中央部付近やほぼ全面を磨消したもののが存在する。関東地方等では、加曾利E式～堀ノ内I式の時期に網代の磨消が盛行する(荒木：1970)が、本遺跡では、11層より出土した6点が最も多く、10層で2点、8層で1点出土している。したがって、中期か後期でも古い時期ほど多くなる可能性を考えられよう。

実測可能な土器での網代痕は、粗製土器に8点、精製土器は小形深鉢に1点認められる。他については、いずれも底部破片であるため詳細は不明であるが、胎土に砂粒の多く含むものに多いことや胴部が残存している例から判断して、大半は粗製土器であった可能性が高い。また、網代痕にさらに粘土を貼付けて底部成形を行なった例が2点存在することから、網代の出土率及び精製・粗製の比率も変わるべき可能性が考えられる。

#### 引用・参考文献

荒木ヨシ 1968 「縄文式時代の網代編み」 物質文化12号

同 上 1970 「東日本縄文時代後・晚期の網代編みについて」 物質文化15号

同 上 1971 「縄文式時代の網代編み」 物質文化19号

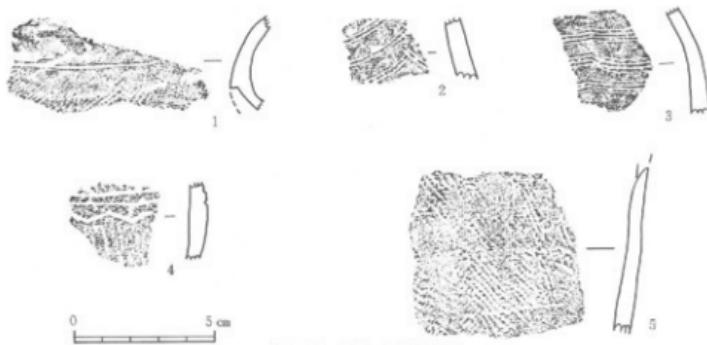
草間俊一編 1974 「崎山弁天遺跡」 岩手県大槌町教育委員会

#### (2) 弥生時代の遺物 (第152図1～5 図版42-3～7)

弥生時代の遺物は、明確な包含層や遺構は確認されず、5点の土器片が各層より出土したにすぎない。

1は、A-15区第5層より出土した、口縁部付近の破片である。地文に単節縄文(L.R?)を施し、横位沈線文が一条認められる。本例は、枠形回式に比定されるものであろう。

2は、D-3区河川2層より出土した胴部破片である。文様は、2条の平行沈線文を弧状に連続施文する。本例は、桜井I式に比定されるものであろう。



第152図 弥生土器拓影図

3は、D-10区の第11層出土の縄文土器水洗時に検出された。しかし、層位的に矛盾があり、混入品であると思われる。本例は、3条の平行沈線文を弧状に連続施文する胴部破片であり、桜井II式に比定される壺形土器の破片であろう。

4は、D-3区河川2層より出土した胴部破片である。本例は、地文に縄文(R.L.)を施し、2条の横位沈線文及び波状沈線文を施文する。また、これらの沈線文内には、部分的に赤色顔料の付着が認められる。本例は、天王山式に比定されるものであろう。

5は、A-15区第5層より出土した粗製の深鉢形土器の破片であろう。地文にL.Rの縄文を施文する。時期は不明である。

本遺跡の弥生土器の胎土は、全般に砂粒は少なく、針状物質は認められない。焼成は良好なものが多い。

### (3) 古墳時代以降の遺構と遺物

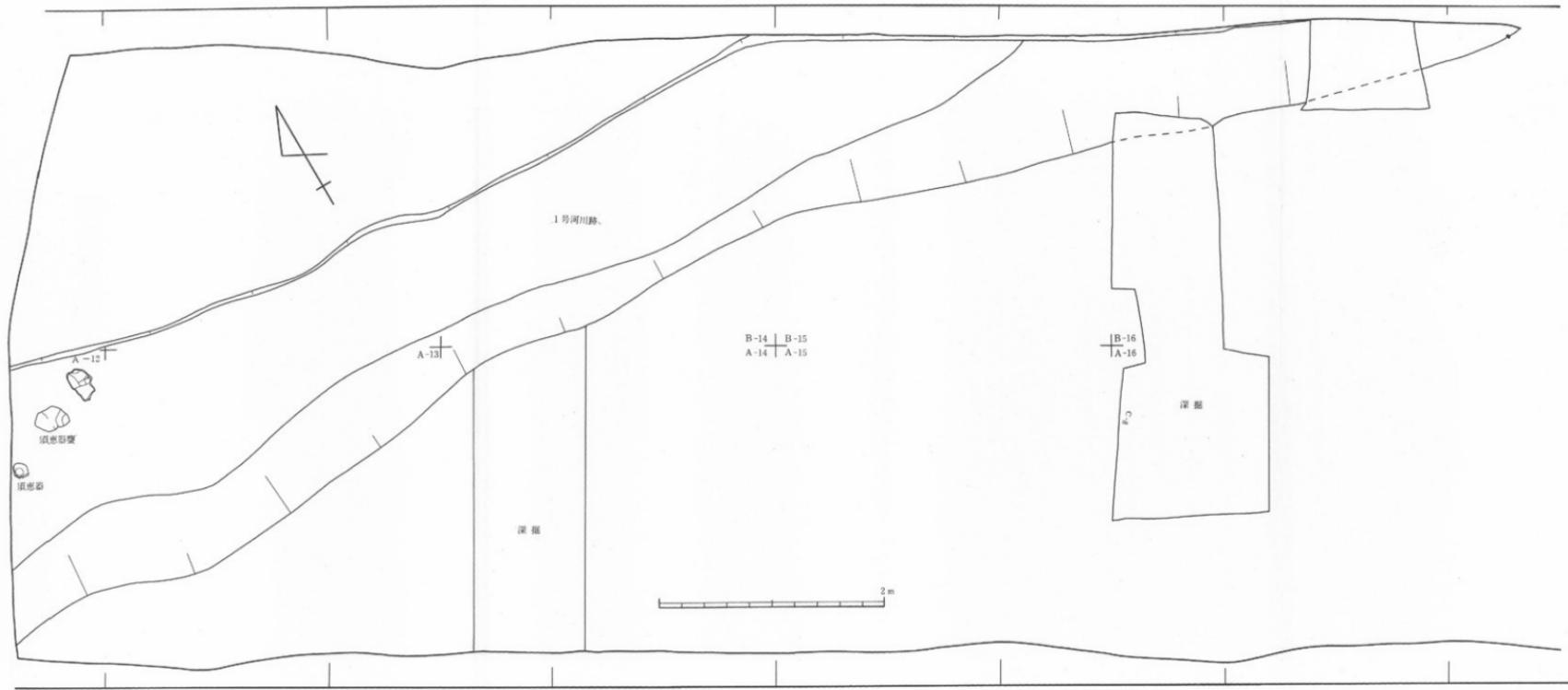
#### 1) 遺構

##### a. 河川跡 (第153図、第154図、図版10-2・3、図版11-1)

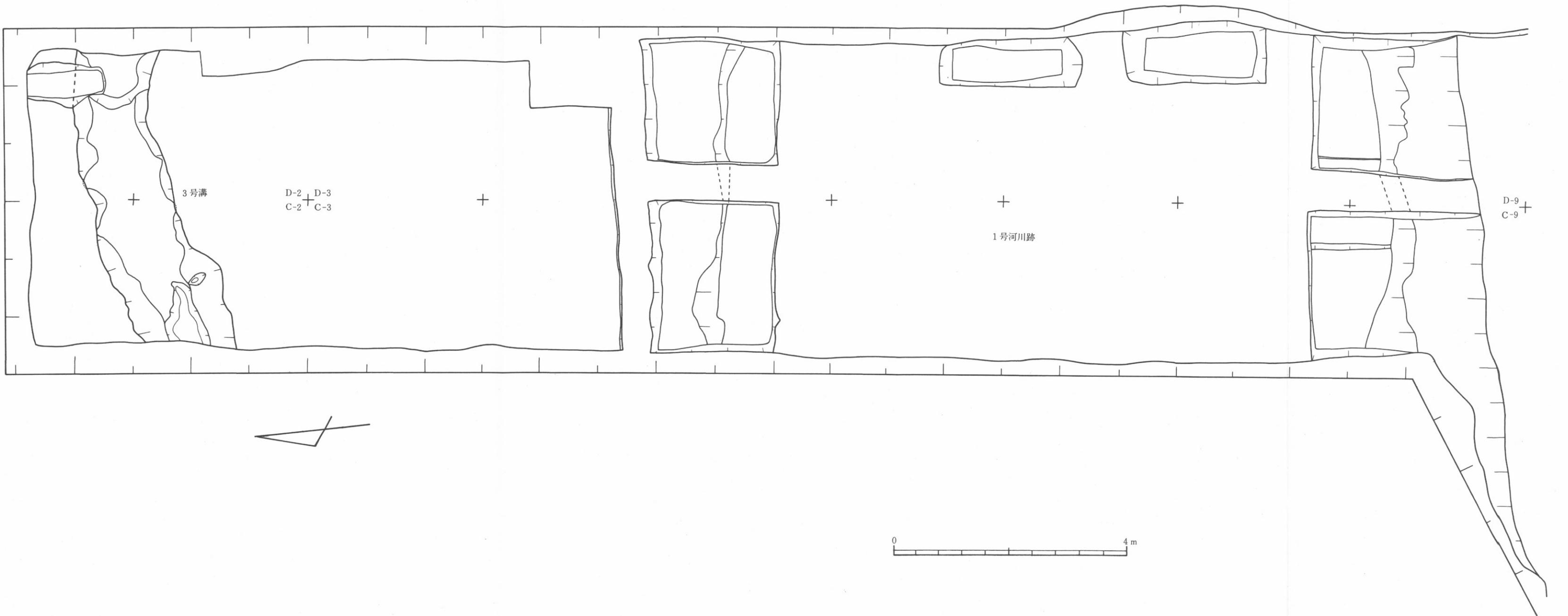
本遺跡では、第1トレンチおよび第3トレンチにかけて確認された1号河川跡と第2トレンチで確認された2号河川跡の計2ヶ所の旧河道が存在する。遺構ではないが、ここで扱う。

1号河川跡は、第3トレンチの調査結果では、川幅約15.30m、深さ1.9mを測る。2号河川跡についても、深さ約1.7mまで確認できたが、おそらく、1号河川跡と同様の規模をもつものと考えられる。また、いずれの河川跡も、幅約20mに渡って堆積層に影響を与えている。1号河川跡では、複雑な堆積層を示し、遺物も川床まで出土しており、土師器・須恵器・木製品・獸骨・植物遺体が出土しているが、土器の器形の推定できるものはほとんどない。これに対し、2号河川跡では、遺物はほとんど出土していない。

1号及び2号河川跡は、層位的にはほぼ同一時期のものと判断されるが、河道の位置の差は、



第153図 第1トレンチ1号河川跡平面図



第154図 第3トレンチ平面図（平安時代）

流路を変えた結果なのか、あるいは分流していたものか判断できない。また、1次調査区より確認された旧河道との関連についても判断できない。

少なくとも、1号河川跡については、1号住居跡を含む集落と密接な関連があったことは、指摘できるであろう。これらの河川跡は、名取川の自然堤防を浸食しつつ東流する平安時代の古荒川であろう。

#### b. 1号住居跡（第155図、図版11-2）

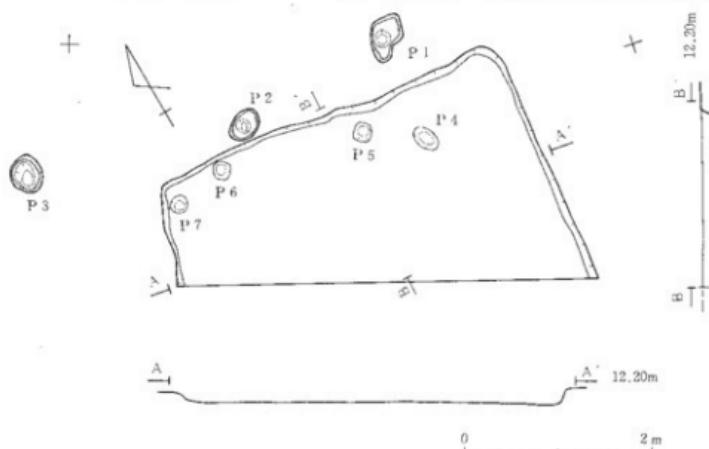
調査区中央部のA-17区・C-12区にかけて位置し、4層上面で確認された住居跡である。住居跡は、北側約15mが確認されたにすぎず、南側は調査区域外になるため、住居跡の規模や、カマド等の付属施設についてはまったく不明である。わずかに、北壁3.73mを確認したに留った。壁高は、12~21cmを測る。住居跡本来の規模は、1辺約4m前後の方形プランではないかと予想される。埋土は単層で、10YR 8/4 黄褐色の粘土質シルトである。北壁付近の床面上には、4個のピットが存在するが、いずれも浅く、柱穴とは認めがたい。また、住居跡の北側には、3個のピットが確認された。いずれも、埋土は黒褐色粘土質シルトであり、これらのピットと住居跡との関連については、明らかではない。

第14表 1号住居跡ピット一覧表

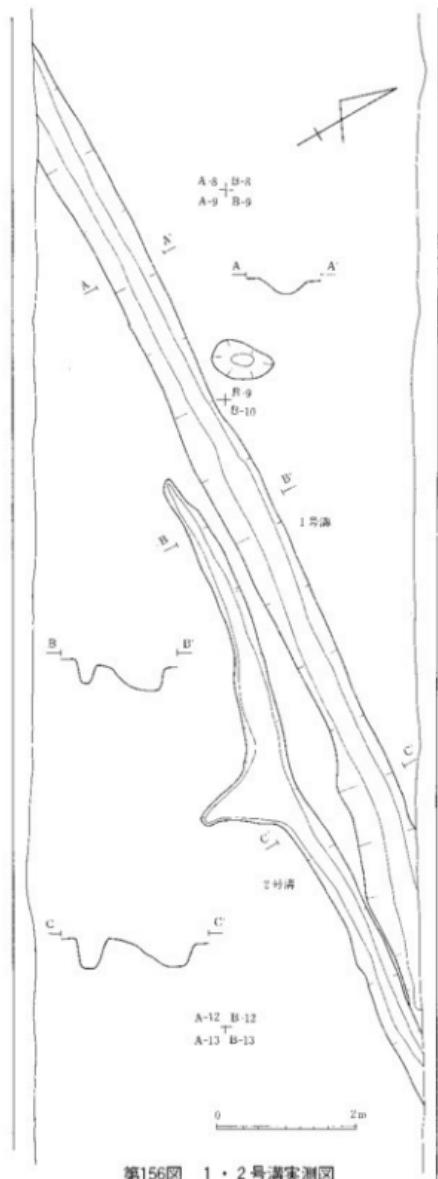
番号	規格(cm)	深さ(cm)	備考
P <sub>1</sub>	40×34 (19×16)	14	黒褐色粘土質シルト
P <sub>2</sub>	37×27 (16×14)	16	黒褐色粘土質シルト
P <sub>3</sub>	40×34 (30×19)	18	黒褐色粘土質シルト
P <sub>4</sub>	30×20	6	黄褐色粘土質シルト
P <sub>5</sub>	19×18	4	褐色粘土質シルト
P <sub>6</sub>	19×18	14	黄褐色粘土質シルト
P <sub>7</sub>	18×18	13	褐色粘土質シルト

#### c. 1号溝（第156図、第157図、図版11-3、図版12-2）

第1トレンチ中央部から、第3トレンチ南部に位置し、4層上面より確認された溝である。



第155図 1号壁穴住居跡実測図

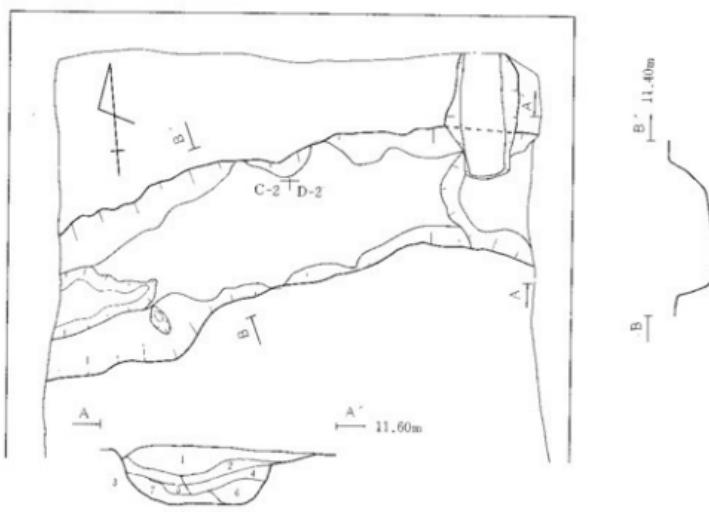
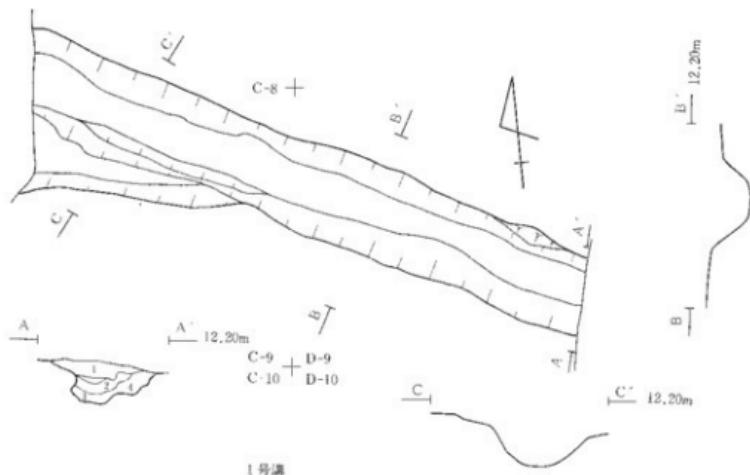


第156図 1・2号溝実測図

溝は、第1トレーニチから第3トレーニチにかけてゆるい弧状を呈し、東西に伸びる。しかし、第2トレーニチでは確認されないことから、溝の方向が変化するか、あるいは消滅したものと考えられる。規模は、第1トレーニチでは、幅0.54~0.8m、深さ21~33cmを測り、第3トレーニチでは、幅0.85~1.0m、深さ40~57cmを測る。東側ほど幅が広く深くなる傾向が指摘できる。また、第3トレーニチ西側では、溝に段差があり、この部分で幅約1.6mを測る。壁はゆるく立ち上がり、溝底はほぼ平坦である。遺物はほとんど出土しておらず、わずかに土師器細片と、C-9区・D-9区より須恵器長頸壺と、A-12区より砥石1点が出土している。B-9区の溝の北側には、規模0.86×0.52m、深さ17cmの橢円形ピットが確認されたが、伴出遺物もなく、性格不明である。

#### d. 2号溝 (156図、図版11-3)

第1トレーニチ中央部から東部にかけて、1号溝の南側に平行するように位置する。溝は、4層上面より確認され、1号溝との新旧関係は明確にしがたいが、1号溝より古いものと考えられる。第3トレーニチでは検出できなかった。溝の両端は徐々に浅くなり消滅する。断面形態はほぼU字形を呈する。溝の中央部では、南方向に突出部が存在するが、さらに南に連続する溝ではないものと考えられる。規模は、幅約30~



第157図 1号・3号溝実測図



40cm、深さ約30~40cmを測り、突出部付近の深さは、約50cmを測る。遺物は出土していない。

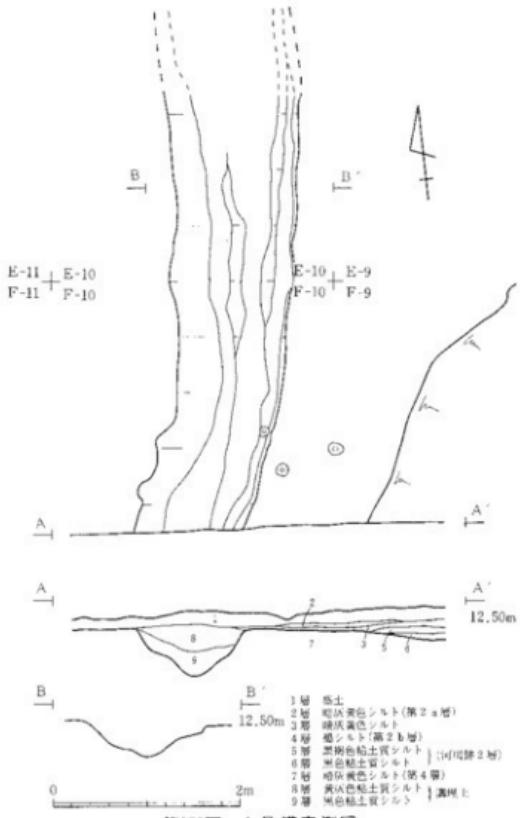
e. 3号溝 (第153図、図版12-3)

第3トレンチC-3区・D-3区を中心に位置し、第8層上面より確認された。本來は、断面観察の結果、6層より掘り込まれていることが判明した。規模は、確認面では幅1.2~1.7m、深さ30~46cmを測るが、本來は、幅1.5~1.7m、深さ60~75cmを測る。溝は、東西に弧を描くように伸びているが、他のトレンチでは確認できない。溝底は、トレンチ内の東西端で1段低くなっている。また8層・10層を掘り込んでいる。埋土は、第3トレンチ東壁では、7層で構成されている。溝に伴う遺物は出土しておらず、わずかに溝底より繩文土器の細片が出土しているにすぎない。伴出遺物が出土していないため、所属時期を明確にすることはできないが、層序関係から判断すると、およそ古墳時代から平安時代の年代幅の中で把握することが

できよう。

f. 4号溝 (第158図、図版12-1)

第2トレンチE-10区・F-10区に位置し、4層上面より確認された溝である。この溝は、ほぼ南北に伸びており、第1次調査区内のいずれかの溝と接続する可能性が考えられる。規模は幅1.0~1.45m、深さ26~55cmを測る。溝の北側では壁が2段になっており、徐々に浅くなる。これに対し、南側では段が消滅し、徐々に深くなる。溝底は、北側では比較的平坦であるが、南側ではゆるいV字形を示す。遺物は、土師器細片がわずかに出土したにすぎない。層位や伴出遺物から判断して、平安時代に属する溝と考えられる。



第158図 4号溝実測図

## 2) 遺物

### a. 土師器 (第159・160図、図版43・44)

調査によって出土した土師器は平箱にして約4箱で、多くは磨滅した小破片である。これらは1号河川跡、1号住居跡、第Ⅲ層～第Ⅴ層中より出土しているが、大半は1号河川跡より出土した。器形は壺・高台付壺・甕・壺・小形手探土器・瓶がある。

#### ① 壺 (第159図1～11)

壺には、製作に際しロクロ未使用のものとロクロ使用のものがあり、前者をA類、後者をB類に分けられる。

〈壺A類〉 製作に際しロクロ未使用のもので、底部は丸底のものである。体部の段の有無により細分され、段のあるものをA I類、ないものをA II類とする。

A I類 固化できた1点だけが出土した。1は体部下端にわずかな段を形成するもので、底部は丸底である。器面調整は外側が段の上ではヨコナデされ、段から底部にかけてヘラケズリされている。内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。1号河川跡より出土した。

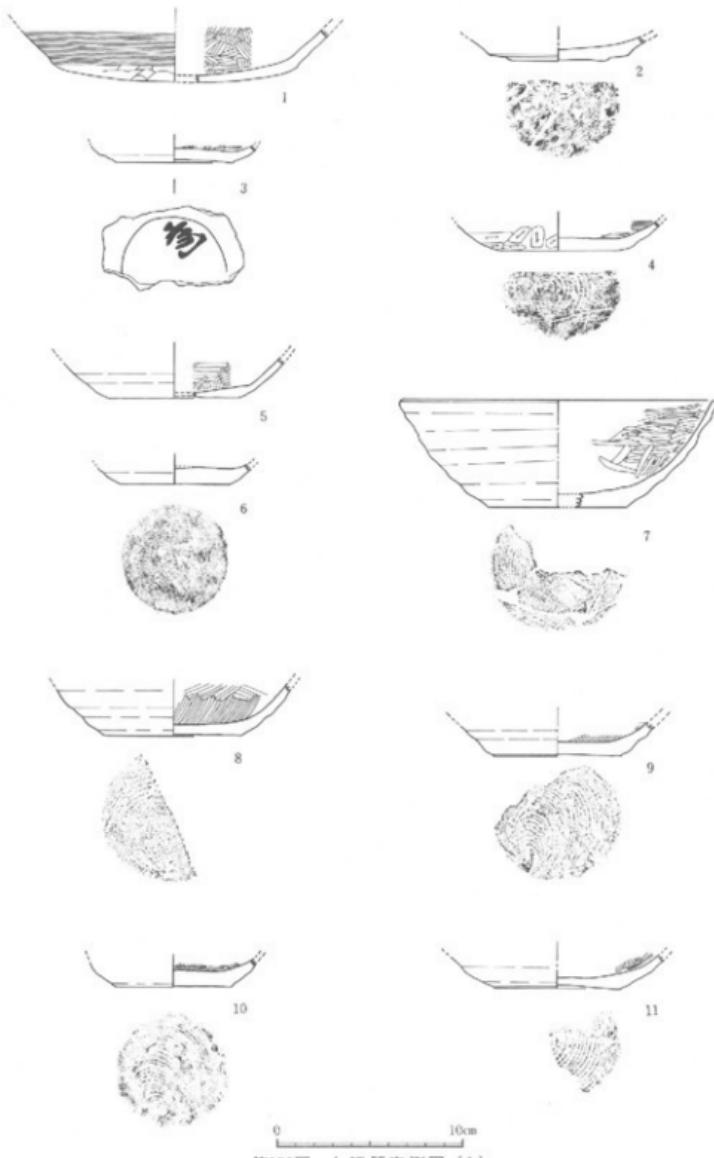
A II類 小破片のため固化できないが、2点出土した。体部に段、沈線がなく、底部は丸底のものである。外側の器面調整は口縁部がヨコナデ、口縁部近くから底部までヘラケズリされている。内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。

〈壺B類〉 製作に際しロクロ使用のもので、底部は平底である。底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整の有無により細分される。再調整のあるものをB I類、ないものをB II類とする。

B I類 底部切り離し技法が回転糸切りで、再調整されるものである。また、底部に手持ちヘラケズリされるものをB I a類、体部下端と底部に手持ちヘラケズリされるものをB I b類、底部にヘラミガキされるものをB I c類とする。

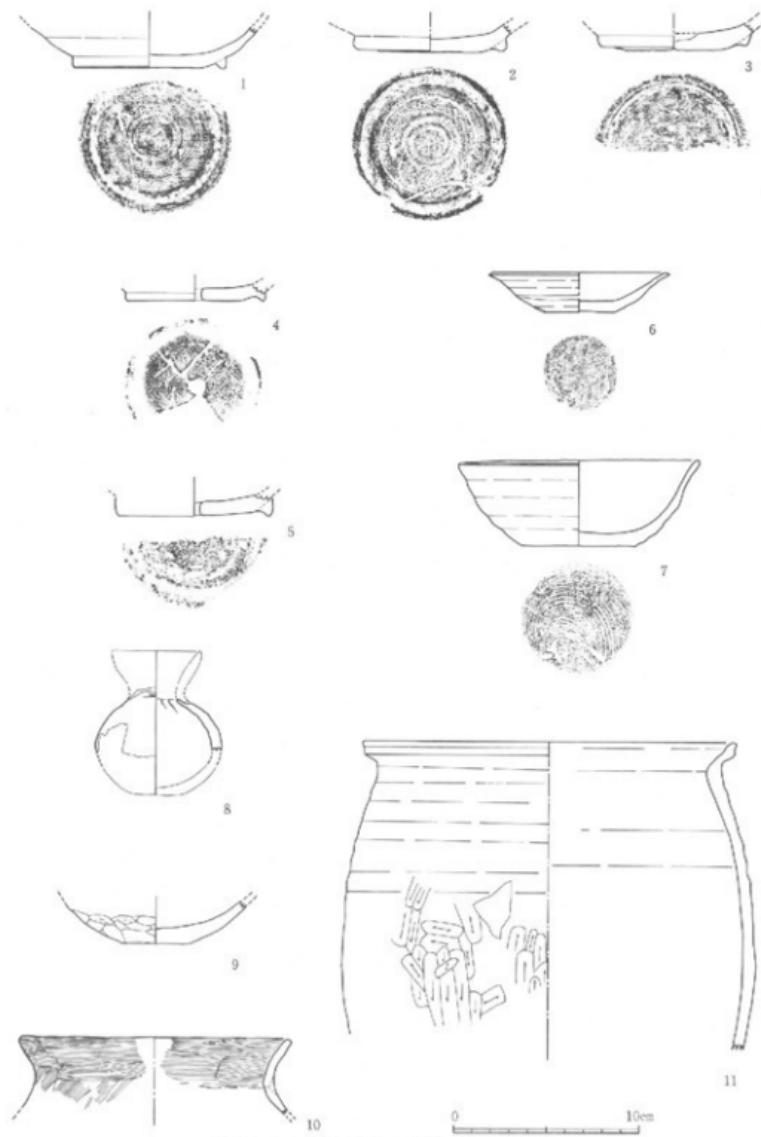
B I a類は全体がわかるものではなく、底部片7点が出土した。内面の調整はいずれもヘラミガキされ、黒色処理が施されている。底部は再調整されているがわずかに回転糸切り痕が残存する。墨書き2点が出土し、3の底部は「物」と判読される。2点とも1号河川跡より出土した。B I b類も全体がわかるものではなく、底部片8点がある。B I c類は7だけで、1号河川跡より出土した。口径16.7cm、底径7.4cm、器高5.7cmを測る。底部切り離し技法は回転糸切りで、その後一方向にわずかにヘラミガキされている。内面の調整は全面にヘラミガキされ、口縁部から体部中央付近までは横方向のヘラミガキ、体部下端から底部は放射状のヘラミガキである。黒色処理が施されている。

B II類 底部切り離し技法は回転糸切りで、無調整のものである。これに属するものは比較的多く出土しているが大部分小破片であり、全体のわかるものはない。いずれも内面の調整



第159図 土師器実測図(1)

0 10cm



第160図 土師器（2）・赤焼土器実測図（2）

はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。8はその中でも残りがよく、底径7.2cm、残存高2.5cmを測る。1号河川跡より出土した。

#### ② 高台付坏（第160図1～5）

すべて破片のため全体の器形は不明である。体部下端から底部の破片で、6点が出土した。高台は短く、断面形が約三角形を呈するものを張り付けている。この中には、底部より高台端部が上面に位置するものもある。底部切り離し技法は回転糸切りで、高台を張り付ける際にロクロナデ調整によって糸切りの痕跡を部分的に消している。内面の調整はヘラミガキで、黒色処理されている。4と5は底部中央に径8mmの小孔があり、焼成後あけている。

#### ③ 罐（160図10・11）

製作に際しロクロ未使用のものとロクロ使用のものがあり、前者をA類、後者をB類に分けられる。

（罐A類）　すべて小破片のため全体の器形は不明である。図化できたものは1点である。10は第1トレンチ第V層中より出土した口縁部片である。外面の調整は口縁部がハケメ後ヨコナデ、体部はハケメである。内面はヨコナデされている。

（罐B類）　すべて小破片であるため図化できたものはない。11は山口遺跡の東側道路工事中に採集されたものであるが調査区内よりこれと同様のものが出土している。最大径は体部にあり、口縁部から体部中央付近はロクロ調整で、体部中央付近から下は縦位のヘラケズリが施されている。口縁部は外反し、さらに上方へ折り曲げられ、端部は丸くおさめられている。

#### ④ 壺（第160図9）

体部から底部にかけての破片が1点出土した。器形は不明であるが小形の壺と考えられる。底部は平底で径3.4cmを測る。外面の調整は体部から底部までヘラケズリされている。内面は荒れているため不明である。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。

#### ⑤ 小形手捏土器（第160図8）

第1トレンチA-13区第V層中より出土した1点だけである。口縁部と底部は欠損しているが壺形を呈するもので、体部は球形である。外面の調整はヘラミガキされ、内面はナデである。

#### ⑥ 瓢

底部の小破片1点が出土したが全体の器形は不明である。単孔のもので、調整は内外面とも横方向のヘラケズリである。

#### ⑦ まとめ

調査によって出土した土師器は壺・高台付壺・壺・壺・小形手捏土器・瓢の各器形があるがほとんど1号河川跡の堆積土中より出土したものが多く、遺構に伴って出土したものはなく、分類された土師器の共伴関係についても不明である。

これらを東北地方南半の土師器の編年(氏家和典 1955)、その後の土師器の検討(同1967)に位置づけると環A類は国分寺下層式(奈良時代後半)、環B類・高台付环・甕B類は表衫ノ入式(平安時代)に相当するものである。

小形手捏土器は体部が球形を呈する壺形のもので、南小泉式の壺を小形化したもので南小泉式に相当するものと考えられる。

甕A類はロクロ未使用のもので、体部は比較的球形に近いものと推察され、古墳時代に属するものである。

高台付环は多賀城跡の調査(宮城県多賀城跡調査研究所・1975・1978・1979)でも同様の高台のものが須恵器上器と共に出土しており、表衫ノ入式でも新しい時期に位置づけられている。したがって、調査区より出土の高台付环も平安時代でも新しい時期に属する。

今回の調査では古墳時代・奈良時代のものは若干出土しただけで、大部分は平安時代に属するものである。

#### b. 赤焼土器(第159図6・7、図版43-1・2)

製作に際しロクロ使用のもので、内外面ともロクロ調整され、底部切り離し技法は回転糸切り無調整のものである。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されていない。器形には皿・环がある。

6は第3トレンチD-3区の1号河川跡第2層より出土した皿で、口径9.6cm、底径3.8cm、器高2.1cmを測る。器形は底部より直線上に外傾し、口縁部はわずかに外反する。色調は内外面とも黒褐色ないし褐色を呈する。

7は山口遺跡の東側道路工事中に採集された环で、口径12.7cm、底径6.0cm、器高4.6cmを測る。器形は底部よりやや内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。色調は内外面とも黒褐色ないし明褐色を呈する。

#### c. 須恵器(第161~163図、図版43・44)

調査によって出土した須恵器には环・高台付环・蓋・長頸蓋・甕の各器形があり、平箱にして約1箱が出土したが大部分甕の破片である。

##### ① 环(第161図1~9)

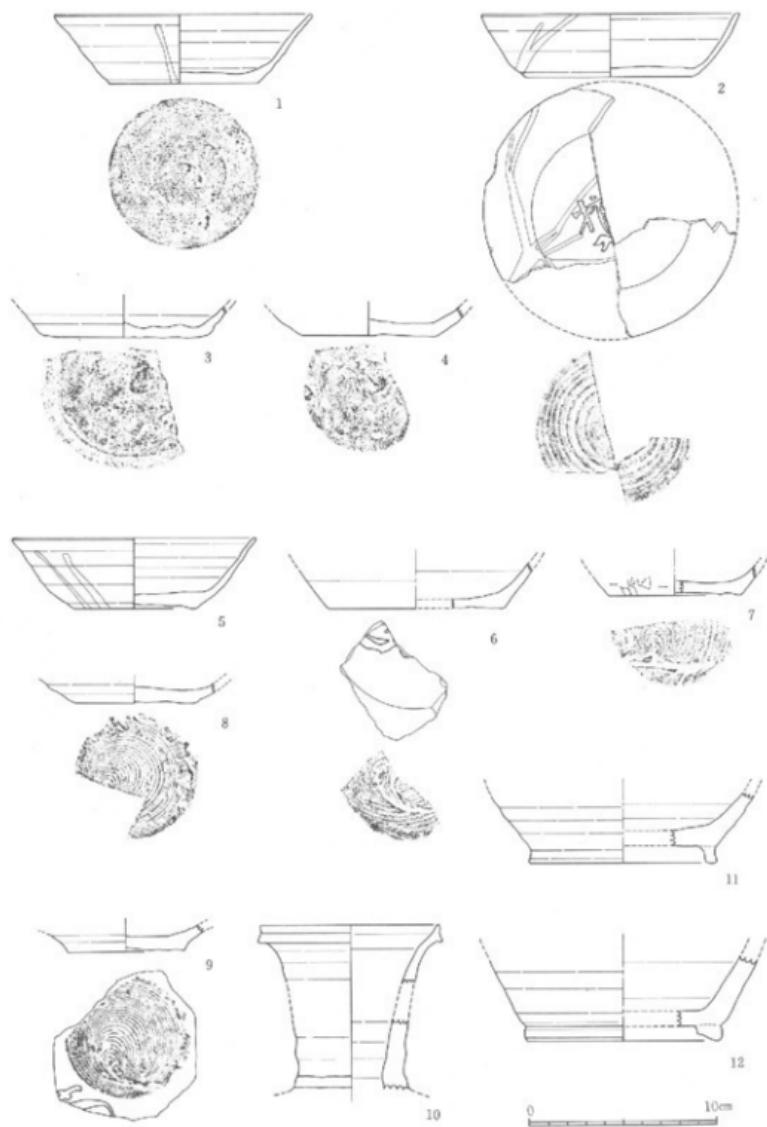
底部の切り離し技法によって3種類に分けられる。

A類…底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、再調整のないもの。

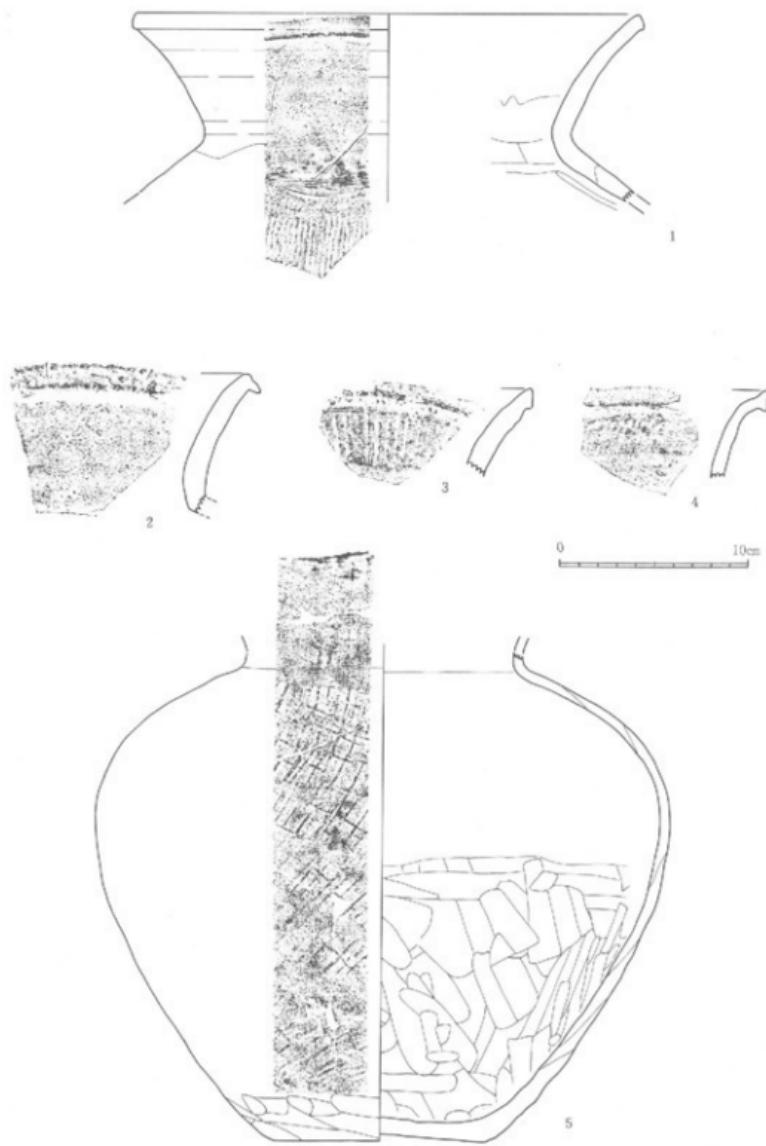
B類…底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整のないもの。

C類…底部切り離し技法は不明で、底部全面に手持ちヘラケズリされるもの。

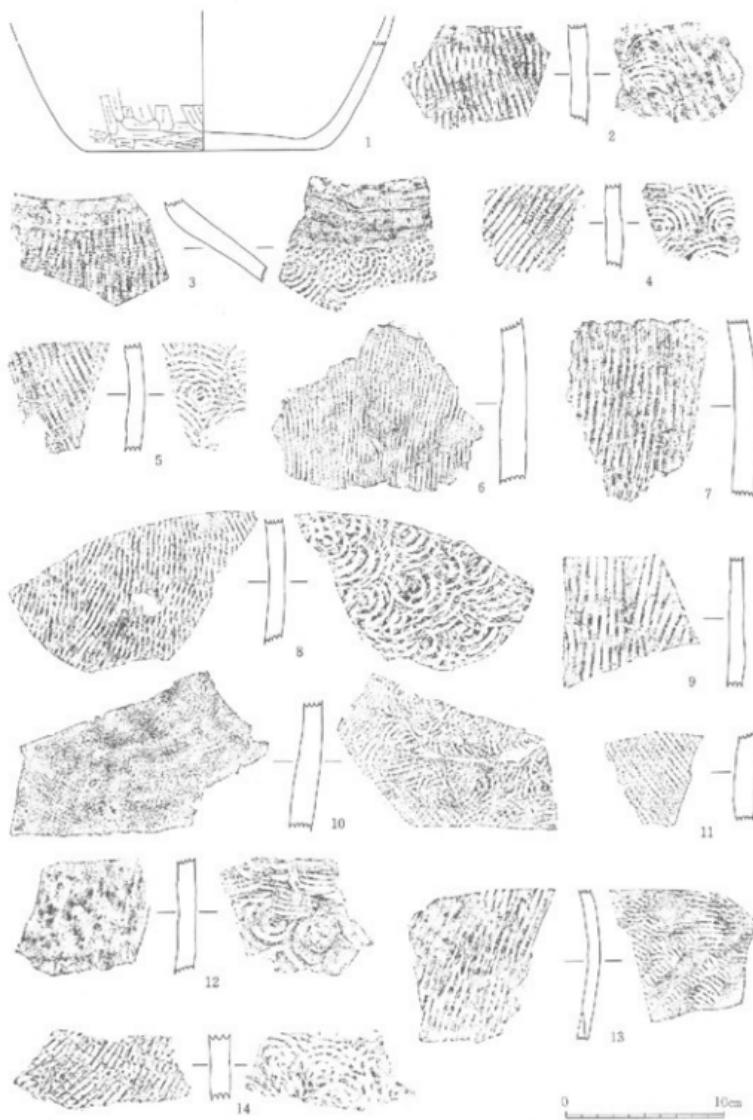
〈环A類〉 図化できたものは4点である。1は口径13.6cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。器形は底部より直線上に外傾し、口縁部に至る。内外面に火だしき痕が見られる。第1ト



第161図 須恵器実測図(1)



第162図 須恵器実測図 (2)



第163図 須惠器実測図（3）

レンチA-11区の1号河川跡第9層より出土した。2は口径13.8cm、底径8.7cm、器高3.4cmを測る。器形は底部より直線上に外傾する。内外面に火だすき痕が見られる。底部に墨書があるが判読できない。第4トレンチC-12区より出土した。

（环B類）すべて小破片のため全体の器形は不明である。図化できたものは4点で、いずれも底部破片である。6と9は底部及び体部に墨書があるが欠損しているため不明である。

（环C類）第2トレンチの2号河川跡より出土した第161図5だけである。口径13.0cm、底径6.5cm、器高3.8cmを測る。器形は底部より直線上に外傾し、口縁部に至る。内外面に火だすき痕がある。

### ② 高台付坏

底部の小破片が1点出土したのみである。底部切り離し技法は回転糸切りである。高台は2mm程の短いものである。第1トレンチB-7区第IV層上面より出土している。

### ③ 壺

天井部から口縁部にかけての小破片1点が出土したのみである。天井部はほぼ平坦で、口縁部は下方に短く折り曲げられ、端部の断面は三角形に近いものである。

### ④ 長頸壺（第161図10～12）

図化できたものは3点で、全体のわかるものはない。10は第3トレンチC・D-9グリッドの1号溝より出土した。口径9.4cm、残存高8.8cmを測る。11と12は底部片で9mmの高台が付く。共に第3トレンチC-3区・6区より出土した。

### ⑤ 壺（第162・163図）（岡版46参照）

調査区より出土の須恵器の中では最も多く出土したが、ほとんど小破片である。図化できたものは19点である。第162図の5は中形の壺で、口縁部は欠損している。残存高26.2cm、残存最大径は体部中央付近にあり、径30.4cm、底径11.4cmを測る。第1トレンチA-11区の1号河川跡第9層より須恵器壺（第161図1）と共に出土した。体部外面は叩き目後体部上端がヨコナデ、体部下端から底部までヘラケズリ調整のため叩き目が消されている。内面は全面に横方向、縦方向のナデが行われている。叩き目文は比較的幅の広い長方形の格子目状のものである。同1は第1トレンチA-12区、1分号河川跡出土のもので、口径27cmを測る。体部外面に平行叩き目文がある。同3・4は口縁部の破片で、平行叩き目後ロクロナデ調整を施している。第162図の1は底部片で、底径15cmを測る。外側の調整は体部がナデ、体部下端から底部全面にヘラケズリされている。内面はヨコナデされている。

第163図2～14は体部の破片である。叩き目文の種類によって4類に分けられる。木目をそのまま生かしたいわゆる格子目ふうの叩き目文のもの（2～5、11）、平行叩き目文のもの（6～9）、長方形の格子目状叩き目文のもの（14）、叩き目をすり消しているもの（10・12）があ

る。内面には同心円文のものが多く、またすり消しているもの（6・7・9・11）もある。

#### ⑥まとめ

調査区より出土した須恵器は环・高台付环・蓋・長頸壺・甕の各器形がある。共伴関係については不明である。

東北地方における須恵器の編年はまだ確立されていないが、环形土器の底部技法により一つの試論（岡田茂弘、桑原滋郎、1974）がなされている。それによると环A類としたものは6—a類に類似するもので、多賀城の第Ⅲ期に相当する。环B類は9類に類似するもので、多賀城の第Ⅳ期に相当する。

よって本遺跡の須恵器はほぼ平安時代に位置づけられるものであろう。

#### d. 灰釉陶器（図版44—7・8）

調査区内より灰釉陶器は3点出土したが、すべて小破片である。器形は、皿・瓶を呈するものと考えられる。

皿形のものは、1号河川跡より出土した底部片1点だけで、長さ7mm程の高台が張り付けられ、端部は丸くおさめられている。釉は体部と高台の部分に見られる。

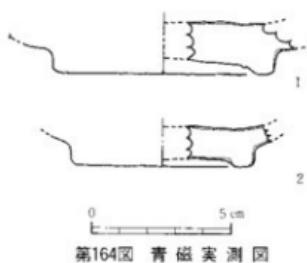
他の2点は、瓶か壺形の体部小破片である。釉は外面にかけられており、そのうち1点は釉が剥がれている。2点とも第3トレーニングのC—3区、D—4区の1号河川跡第2層より出土している。

#### e. 青磁（第164図、図版44—5・6）

青磁は第3トレーニング、1号河川跡第1層より、2点出土したが、2点とも底部の小破片である。器形は、碗形を呈するものと考えられる。

1は復元高台径7.2cmを測り、高台部分は削り出しである。内外面ともオリーブ灰色の釉がかけられ、光沢をもつ。底部内面には、線刻文がわずかに見られる。胎土は良好で、明緑灰色を呈する。底部外面に重ね焼きの痕跡がある。

2は復元高台径6.0cmを測り、高台部分は削り出しである。内外面ともオリーブ灰色の釉がかけられ、貫入、光沢がある。胎土は良好で、明緑灰色を呈する。



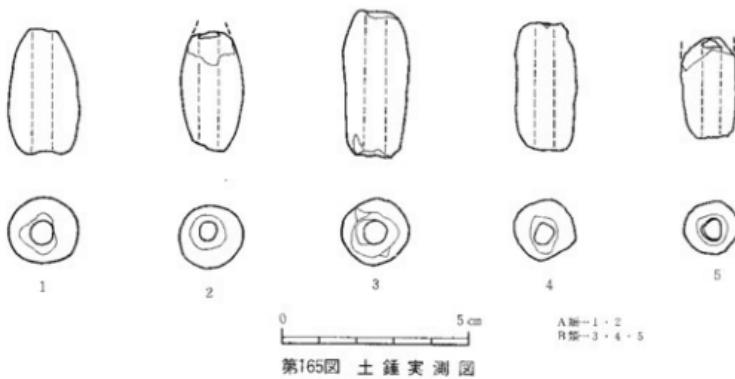
第164図 青磁実測図

#### f. 土錘（第165図、図版45）

調査区内より土錘は5点出土した。完形のものは3点である。すべて土師質の焼きである。大きさは、長さ3.3～4.0cm、幅1.5～1.8cm、孔径は約5mm、重量は8.0～11.5gを測る。

形状により2つに分けられる。

A類…中央部がやや脹んでいるもの



第165図 土錘実測図

B類…円筒状を呈するもの

A類は1・2、B類は3～5である。これらはすべて第3トレンチC・D-3区の1号河川跡第2層より出土した。

#### g. 石器・石製品

##### ① 石錐

第4トレンチD-10区第2層より出土したもので、石錐Ⅰ類に属する。先端部が欠損する。二次加工はほぼ周辺部全線から両面に加えられ、一部では対辺からの剥離が交叉する。形態的な特徴及び製作技術より本来的には縄文時代に属するものであろう。

##### ② 砥石

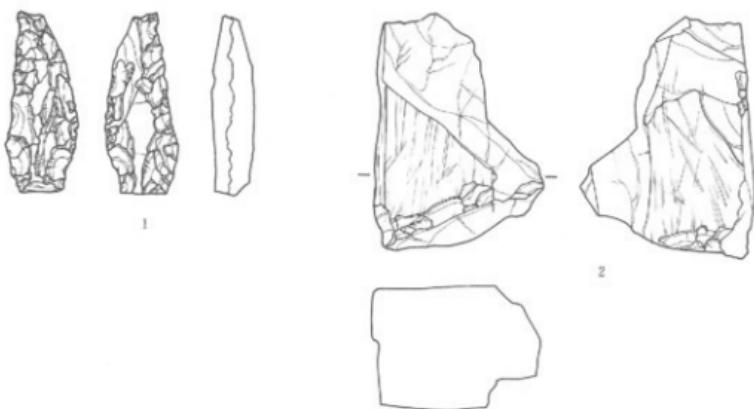
第1トレンチ1号溝A-12区より出土したもので砥石Ⅰ類に属する。破損して全体の形状は明らかではない。原形はほぼ角柱状の形態であったと考えられる。残存部では3面に長軸に沿う擦痕が認められる。また性格は不明であるが、周辺部に剥離が加えられている。

#### h. 木製品(第167図)

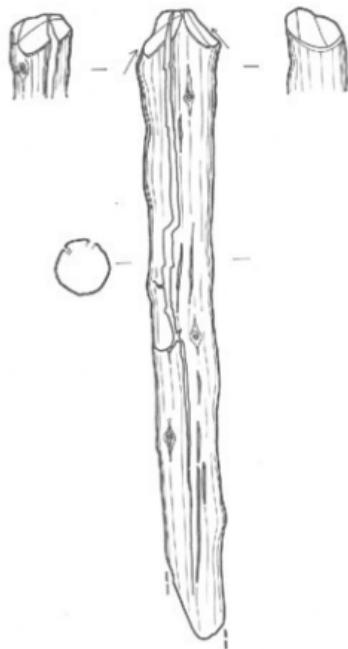
本例は、第3トレンチ、C-5区の1号河川跡第8層上面より出土し、先端部を鋭角にするため二方向から斧状の工具によって削り取られた杭状木製品である。残存長は44.7cmを測る。最大径は加工痕のある先端部付近で約6cmを測り、平均径は約4cmを測る。また棒状の部位表面にも加工痕が認められ、この痕跡は樹皮を剥いだ時にできたものと考えられる。ただ、この加工痕は稜線が極めて不明瞭である。

#### i. 炭化種子について

本遺跡第2次調査区の第3トレンチ1号河川跡2層中より採集した炭化種子について報告する。1号河川2層は、1号河川跡が、第4層の堆積によって完全に埋没後、依然として、崖地



第166図 石器・砥石実測図



第167図 木製品実測図

として残った部分に堆積した黒色シルトである。この層は、第1トレンチでも確認されており、川幅内に納まるが、かなり普遍的な層としてとらえることができる。なお、2層は、伴出土器から判断して、平安時代後半に形成された層であり、炭化種子も同時時のものと判断される。出土状況は、C-3区・D-3区にまたがって約40×40cmの範囲より出土した。これらを土壤ごと取り上げ、水洗選別した。

炭化種子の同定は、東北大学農学部作物学研究室教授星川清親氏にお願いした。心よりお礼申し上げる次第である。

植物種子はすべて炭化したもので、総数316片を探集した。このうち、比較的形態の保存のよいもの109片について同定した結果は、第15表に示したとおりである。また、個体数の判明したものが109個あり、マメ科では、アズキまたはツルアズキが45粒出土し、全体

第15表 炭化種子同定表

種類	学名	全体数	個体数	比率(%)	平均長(mm)	平均幅(mm)	持続期	備考
1 マメ (ツルアズキ)	<i>Vigna angularis</i> (WILLD.) OHWI & OHSI <i>Phaseolus radiatus</i> L. var. <i>brevior</i> MATSUM.	90	45	41.3	5.43	3.67	9月	すべて子葉片
2 リョクトウ	<i>Vigna radiata</i> (L.) R. WILCZEK	20	18	16.5	4.60	2.87	10月	
3 グサ科	<i>Glycine max</i> (L.) MERILL	1	1	0.9			10月	破損
4 イネ科 オムギ	<i>Hordeum vulgare</i> L. var. <i>temulentum</i> LAMARK	30	30	27.5	5.63	2.73	7月	皮変?
5 ゴムギ	<i>Triticum aestivum</i> L.	3	3	2.8	5.40	3.00	7月	
6 イネ科	<i>Oryza sativa</i> L.	12	12	11.0	4.73	2.70	10月	日本型中粒
計		156	109	100				
不規		160						全体の50.6%

の41.3%を占め最も多い。これらはすべて種皮が失われ、子葉片となっている。したがって、子葉片数に0.5を乗じて粒数とした。リョクトウは18粒出土し、全体の16.5%を占める。これらは、比較的完形のまま炭化したものが多い。また、リョクトウやノマメよりもはるかに大きい粒長をもつと思われるダイズの破片が、わずか1片出土している。比率も全体のわずか0.9%にすぎない。イネ科では、オムギが30粒で最も多く、全体でもアズキに次いで多く27.5%を占める。これらは、おそらく皮変であると思われる。コムギは3粒出土し、全体の2.8%を占める。イネは12粒出土し、全体の11.0%を示める。いずれも日本型の中粒のものであり、水稲と判定される。また、鑑定の困難な破片は160片で出土総数の50.6%を占めるが、大部分はアズキ・リョクトウ・オムギの破片と考えられる。したがって全体としてアズキ・リョクトウ・オムギの比率は、第15表より高くなることが予想される。

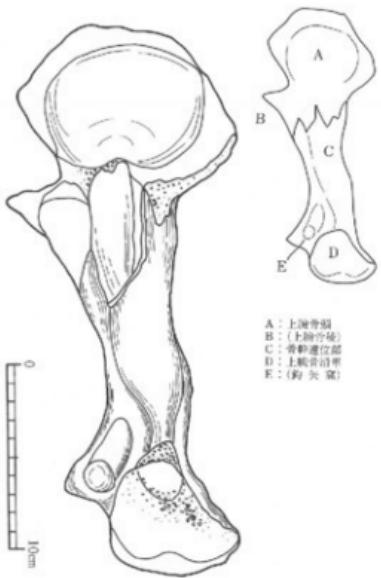
以上をまとめてみると、これらの炭化種子はいずれも栽培された穀物であり、アズキ・オムギ・リョクトウの出土比率が高い。これらは現生種と比較しても、その特徴に大きな差異は認められない。火ぶくれもほとんど認められない。ところで、アワやヒエ、そして水田や畑地に伴う雑草の種子も当然出土してよいと考えられるが、これらは検出できなかった。さらに、出土した穀物は、それぞれ収穫時期が異なることも看過できない。これらの状況や河川2層の形成から判断すると、収穫を終えた穀物を一旦倉などに貯蔵し、改めて運搬する際にこぼれ落ちたか、あるいは破棄されたものと考えることもできるが、推論の域を出ない。

いずれにしても、1号河川2層が形成された時期に本遺跡周辺には、後背湿地を中心に水田、自然堤防上には畑地が存在していたことが考えられる。こうした土地利用のあり方は、近年までの耕地と共に点が少くないといえよう。

最後になってしまったが、十分な鑑定や分析の時間が取れなかつたことについて、改めて星川先生にお詫び申し上げる次第である。なお、これらの資料は現在も分析を継続している。

### 1. 植物遺存体

1号河川跡より多量の植物遺存体が検出された。河川跡(C-9区、D-9区)の12層・13層・15層・18層が主な有機物の包含層である。これらは常に水面に浮く状態にあり、帰属層位



第168図 C-5区出土獸骨

～3はすべて馬の下顎臼歯である。5は、1号河川跡層より出土した馬の上腕骨であろう（第168図）。出土時にはヒビ割れしていたものの、比較的原形を留めていた。部位は、A上腕骨頭・C骨幹遠位部・D上腕骨滑車であり、Bは上腕骨稜、Eは鈎矢窓であろうと思われる。ただ、上腕骨であれば、Bは大きすぎる。また、近位端A-Bと、遠位端D-Eの関係に疑問が残る。6は、2号河川跡2層より出土した馬の臼歯である。

獸骨は、不明確な4を除けば、他はすべて馬であり、農耕用に使用されたものであろう。また、馬の臼歯はすべて下顎のものであることは留意すべきであろう。

#### 参考・引用文献

氏家和典（1957）「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯

第16表 獣骨同定表

資料番号	出土区	層位	備考
1	D-3	河川2層	馬の臼歯、左下顎P <sub>1</sub> （第一前臼歯）、あるいはP <sub>2</sub> 。 馬の臼歯（外側部）、やや小型
2	D-3	河川2層	不明
3	D-3	河川2層	馬の臼歯、下顎M <sub>1</sub> （第二後臼歯）、あるいはM <sub>2</sub> 、左・右不明
4	D-3	河川2層	草食性の臼歯断面（馬）
5	C-5	河川2層	1号河川跡、馬上顎P <sub>1</sub> （第一前臼歯）、左・右不明
6	2号河川跡	河川2層	馬臼歯、左下顎M <sub>1</sub> （第三後臼歯）、あるいはM <sub>2</sub> 、やや小型 馬臼歯、下顎（右側）

を明確にすることは困難であった。植物遺存体は、東北大学農学部教授星川清親氏に同定をお願いした。心からお詫申しあげるしだいである。なお、現在、河川2層出土の炭化種子とともに分析中であり、今回は指摘だけに留めておきたい。オニグルミ、ヒメグルミの堅果、モモ類の核、アンズ類の核、カヤの果実、トチの果皮、イバラの種子、ムクノキの種子、ブナの果実・種子、コナラの種子・殼斗、カシワ（？）やミズナラ（？）の堅果などが出土している。

#### k. 獣骨

獸骨は、D-3区河川2層出土のものが最も多く、他に1号河川跡、および2号河川跡から出土している（第16表）。

D-3区出土の獸骨は、4を除いて1

～3はすべて馬の下顎臼歯である。5は、1号河川跡層より出土した馬の上腕骨であろう（第168図）。出土時にはヒビ割れしていたものの、比較的原形を留めていた。部位は、A上腕骨頭・C骨幹遠位部・D上腕骨滑車であり、Bは上腕骨稜、Eは鈎矢窓であろうと思われる。ただ、上腕骨であれば、Bは大きすぎる。また、近位端A-Bと、遠位端D-Eの関係に疑問が残る。6は、2号河川跡2層より出土した馬の臼歯である。

獸骨は、不明確な4を除けば、他はすべて馬であり、農耕用に使用されたものであろう。また、馬の臼歯はすべて下顎のものであることは留意すべきであろう。

- 氏家和典 (1967) 「陝奥國分寺跡出土の丸底壺をめぐって—奈良・平安期土器の諸問題—」 柏倉亮吉教授還暦記念論文集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1975) 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1974多賀城跡一昭和49年度発掘調査概報」
- タ (1978) 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1977多賀城跡一昭和52年度発掘調査概報」
- タ (1979) 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1978多賀城跡一昭和53年度発掘調査概報」
- 岡田茂弘・桑原滋郎 (1974) 「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」 多賀城跡調査研究所 研究紀要 1
- 星川清親 (1978) 「栽培植物の起源と伝播」 二宮書店

### 第Ⅲ章 考察とまとめ

#### 1. 縄文時代の土壤について

本遺跡より検出された土壤は、13基を数える。これらは、確認面を異にするが、いずれも後期に属する土壤であると考えられる。土壤の形態は、平面形や断面形によって類型化が可能である。

- a. 平面形や断面形が不定形のもの。
  - b. 平面はほぼ円形を呈し、断面が鍋底状を呈するもの。
  - c. 平面はほぼ円形を呈し、断面はオーバーハングし、フラスコ状を呈するもの。
- aは、1号・2号土壤が該当し、いずれも内部に段を有する。1号土壤は、多量の遺物が出土したが、2号土壤はほとんど遺物が出土していない。
- bは、3～9号、11号、12号土壤が該当する。なお、6号や12号土壤は攪乱を受けているが一部bに含めた。このタイプの土壤は、一般に出土遺物が少ない。ただ、例外的に9号土壤では比較的遺物が多く出土し、特に刻線文様のある石製品は注目される。

cは、10号・13号土壤が該当する。10号及び13号土壤は焼土を伴い、13号土壤の底部付近には白色粘土がみられる。出土遺物も豊富で、土器の他に、加工痕のある鹿角や獸骨（特に、粉失してしまったが鳥類の骨1点が含まれていた）、そして炭化物粒子を多く含んでいる。

これら土壤群は、明確な時期の判定は困難であるが、ほぼ同時期に存在した可能性が考えられる。土壤群が同時期に存在したと仮定すると、タイプごとに異なる遺物の出土状況を示す

傾向が看取される。こうした傾向は、土壤の形態差が機能や用途の差を反映するかどうかを判断する重要な資料となるであろう。また、これらの土壤群は、集落跡と密接な関連が考えられるが、狭い調査範囲では、集落跡との関連は明らかにすることができない。したがって、今後の何らかの機会に、この問題が明らかにされることを期待したい。

## 2. 山口遺跡出土の土器について

### 第Ⅰ群土器

本群は、大木8a式に比定されるものを一括した。1・2類としたものは、層位や出土区を異にするが、胎土や色調、文様の施文など極めて類似していることから、同一個体の深鉢形土器である可能性が考えられる。器形は、胴部がほぼ直立し、口縁部は大きく開くものと考えられる。胎土に金属性を多く含む現象は、他の土器群にはほとんど認められないことから、この時期の特徴であろう。口縁部文様帶は、平行沈線文・波状沈線文・縦位の撚糸圧痕文で構成され、青島貝塚（加藤孝・後藤勝彦他：1975）第6類土器と類似する。また、長者原貝塚（阿部恵・遊佐五郎：1978）において1類とされた大木8a式土器とは、様相を異にする。長者原貝塚の出土例は、青島貝塚第6類土器より古いという指摘がなされており、本群土器も大木8a式でも古い時期のものであろう。

### 第Ⅱ群土器

本群は、大木8b式に比定されるものを一括した。本群は、土器全体を知りうる資料に乏しいため、詳細を明らかにすることはできない。が、全般に渦巻文が盛を極める。この渦巻文（及び他の文様）は、隆沈文（宮城県教育委員会：1978）と沈線文による表現が存在し、前者が圧倒的多数を占めている。本群には、口縁部文様帶と胴部文様帶を分離できるものはほとんどなく、文様は渦巻文を中心表面全面に表現されるものが多い。この中で、第55図1は特異な印象をもつ。口縁部文様帶が特徴的であり、胴部の隆帶による文様は極めて簡略化されている。また、第95図2、4も類似資料であると考えられる。これらと類似する出土例は、県内では小菅遺跡・宇賀石遺跡・荒井遺跡（後藤勝彦：1976）などが存在する。これらは、大木8b式土器における地域差あるいは時期差なのか検討をする。第37図1の壺形土器は、沈線文によって胴部文様を表現しているが、この沈線文による文様表現をする資料についても今後検討が必要であろう。第56図1は、モチーフが縦位に表現され、大木9式と共通する点が多いが、渦巻文の退化は見られない。本例は、大木8b式の新しい時期に属するものであろう。

### 第Ⅲ群土器

本群土器は、大木9式に比定される土器群である。第72図1は、上深沢遺跡（宮城県教育委員会：1978）I B類と類似する。したがって、大木9式でも古い時期に属すると考えられる。第95図6は、口縁部が無文で、上深沢遺跡 I C、I D類と共通するが、口縁部に段を有する点

で異なっている。本例は、大木9式に属するものであろうと考えられる。第117図2は縦位不明であり、胸部の文様も不明であるが、口縁部が無文となる大木9式土器ではないかと考えられる。

#### 第Ⅳ群土器

本群土器は大木10式に比定される土器を一括した。大きな特徴は、磨消繩文帶によって文様モチーフが構成される。このモチーフの区画には、隆沈文や沈線文が用いられるが、器形やモチーフに大きな差は認められない。本遺跡では、「U」「U」形のモチーフが多用されるようである。また、第96図5は複雑なモチーフを示すようであるが、その全体像は明らかではない。磨消繩文帶に円形の刺突文が施文させるものについては、わずか1点の出土にすぎず、詳細を明らかにすることはできない。埋蠟跡に使用された土器は、「J」形のモチーフを基調とし、器形についても、肩がやや張っている点で、他の土器の器形とは異質である。本群土器は、西ノ浜貝塚（後藤勝彦・齊藤良治：1967）例のような連続刺突文を施文する例がないことから、大木10式でも古い様相を示すものであろう。

#### 第V群土器

本群は、後期初頭から前葉の時期にかけての土器と考えられるが、いずれも細片で数量も少なく、詳細は明らかではない。

#### 第VI群土器

本群は破片を主体とし分類を行ったため、かなり繁雑な分類となった。それぞれの文様要素によって類型化を試みたが、類型間どおしの関連が明確ではない。したがって、ここで改めて大きく類型化を試みてみたい。本群土器は、全般に文様は縦位の変化を示すものが多いが、これらを大別してみると次のようになる。第47図2などに代表される沈線文を集中させて多用するもの。第58図11や第76図1・2などのように、比較的簡素な沈線文によって極めて曲線的な表現をするもの。そして、第98図26・27、第71図5、第121図12などのように、沈線文によって縦の変化を強調するものである。つまり、本群には、大局的にみると3種類の要素が認められることになる。個々の上器片は、これらの要素のパラエティとして把握される。今回は充分な検討を行えなかったが、今後は器形との関連や他の遺跡との比較的が必要である。また、他の文様要素をもつ土器が認められるが、これらについて充分な資料がなく類型化が困難である。本群は、宮戸I式に比定されよう。

#### 第VII群土器

本群は、宮戸IIa式に比定され、関東の堀ノ内II式、東北北半の上腰内I式、大湯式に併行する土器群である。本群の特徴は、横位、斜位に施される平行沈線により、三角形や四角形を基調とする幾何学的文様や、曲線的な文様を横位に展開することである。

第52図4の土器は、本群に分類されるものだが、具体的な文様構成、胎土、形態から、本群との異質性が看取され、関東地方の堀ノ内II式により近いもの、或いは、関東方面からの搬入品と考えられる。このような土器の報告例はほとんどなく、現時点では北限とみなされる。

本土器群に併行する土器群は、岩手県貝鳥貝塚(草間・金子編1971)、崎山弁天貝塚(草間編1974)、宮城県青島貝塚(加藤・後藤1975)、西ノ浜貝塚(後藤・斎藤1967)などに類例がみられるが、公表された資料は未だ数少ないので現状である。

#### 第Ⅳ群土器

本群上器は、宮戸IIb式や宝ヶ峯式に併行するものであろう。本群は、平行する沈線文で文様が構成されることが最大の特長である。第63図9~15は壺形土器、第82図1~5は浅鉢形土器である。第63図1~8や第82図7~9などは深鉢形土器であろう。2類や1類の土器は、関東地方の加曾利B式と極めて類似する。しかし、出土量が少なく、本群土器の詳細については不明な点が多い。

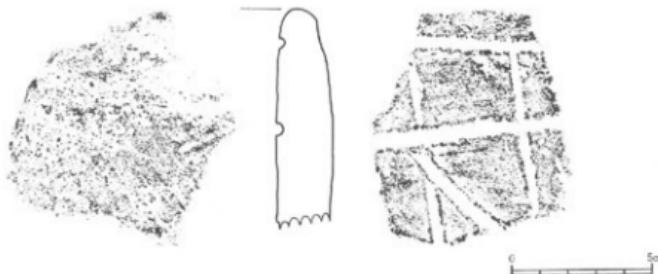
#### 第Ⅴ群土器

本群土器は、およそ第Ⅵ群~第Ⅸ群土器に伴なう粗製土器を一括した。1類は、縄文を施したものであるが、その内容はかなり複雑なようである。すなわち、斜位の縄文は少なく、横位や縱位の縄文が多い。原体も、単節や複節に限らず2段3条や複々節などの例もみられる。撫糸文についても、縄文の条の変化と同様に縦横に変化するものが多い。また、撫糸文は縄文より多用される傾向が指摘でき、しかも原体Rの撫糸文が多い。さらに、1類cや4類bとした内面に格子状沈線文をもつ例が存在し、極めて特徴的である。この土器については、さらに後述する。その他にも、6類や7類土器も、この時期の特徴的な粗製土器であろう。

### 3. 内面に格子状沈線文をもつ土器について

本遺跡において第Ⅴ群1類c、4類bとした土器(第43図2、第48図1、2など)は、内面に格子状沈線文を施すという特異な特徴をもっている。これらは外面の縄文や撫糸文の地文の差は存在するものの、多くの共通する属性を備えている。すなわち、これらはすべて粗製土器であり、精製土器にはみられない。器厚は厚手のものが多く、第48図1は最も厚く1.3~1.5cmを測る。また、内外面の調整は非常に粗い。本遺跡では、10層出土資料が最も多い。

このような、内面に格子状沈線文をもつ例は、県内では、谷地遺跡(後藤:1976)、金取遺跡(小野寺洋一郎:1980) 第二群上器、沼津貝塚(注1) 富田上野遺跡(注2)などが知られる。県外では、山形県神矢田遺跡粗製土器第17類(刷毛目文土器)(佐藤鎮雄:1972)、土生田南沢遺跡(注3)などに出土例が存在する。神矢田遺跡では、これらの土器は、堀内II式・十腰内II式に併行すると指摘されており、本遺跡例と矛盾はない。したがって、この第9群1類c、4類bはおよそ第7群土器に伴う粗製土器であろうと考えられる。このことは、第7群土器に



参考資料(石黒伸一朗氏採集)

第52図4の堀え内Ⅱ式土器そのものと考えられる土器が共伴していることからも納得できよう。

注1. 丹羽茂氏の御教示による。

注2. 石黒伸一朗氏の表採資料中に存在し、挿図は氏の了解を得て掲載した。

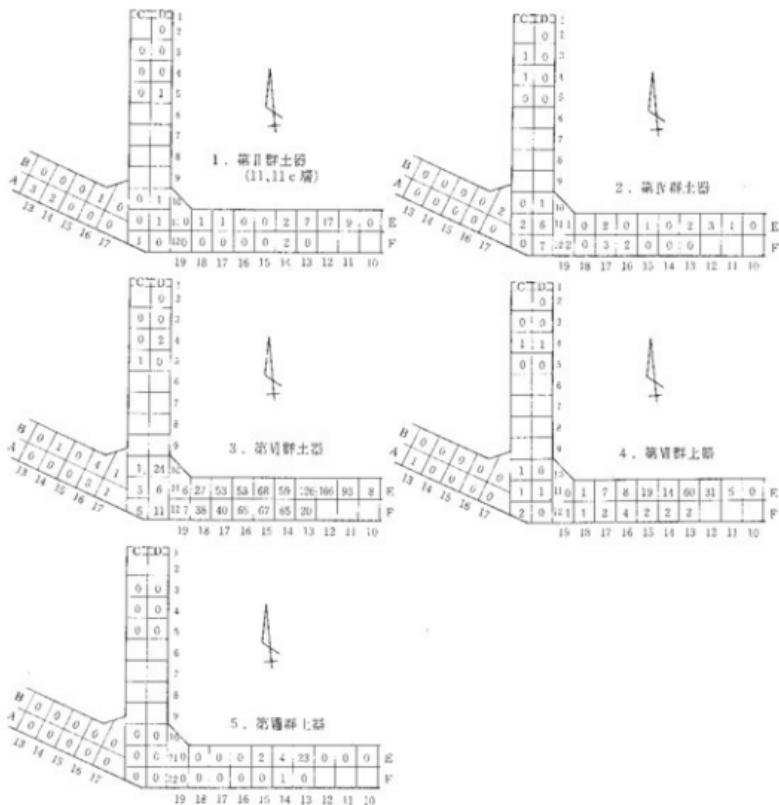
注3. 「神矢田遺跡」の報文中にその指摘がある。

#### 4. 土器群の垂直分布と平面分布について

各土器群の時間的変化の実態を量的に把握するため、層別別の増減を示したのが第17表6である。各層において常に主体となるのは第Ⅳ群土器次いで第Ⅶ群土器となり、両者で約8~9割を占める。各層における他の土器群の割合は、11c層の第Ⅱ群土器を除き、ほぼ1割以下と小さいものになっている。第Ⅵ群土器は11c層から11層にかけて倍増し、上層に行くに従い徐々にではあるが減少する傾向を示す。また第Ⅲ群土器は上層に行くにつれ減少、第Ⅶ・Ⅷ群土器は増加する傾向がうかがえる。

以上のことから、本遺跡の主体となる土器は各層とも第Ⅳ・Ⅴ群土器であることが指摘される。第Ⅵ群土器は宮戸I式にはば比定されることから、縄文時代における本遺跡の主要な時期は、後期前葉ということになる。また第Ⅳ群土器に前後する土器群が微量ながら出土しているが、古い時期のものはより下層に、新しい時期のものはより上層に偏る傾向が指摘される。

前述した第17表6から各土器群の比較的出土量の多い層（1~2層）について、各土器群の平面分布をグリッドごとに個体数で示したのが第17表の1~5である。この表より、第Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ群土器はE・Fグリッド、とくにE12・13グリッドに集中する傾向が看取される。一方量的保証に欠けるが、第Ⅱ・Ⅳ群土器は多少異なった分布を示す。第Ⅱ群土器は、他の群ではなく分布のないA13・14グリッドに分布し、第Ⅳ群土器は他と異なりD11・12グリッドに最も集中する。調査区が6m幅の細長いトレンチであることから、遺物集中区の全体像は把握で



6. 各群の層別出土数と割合

層別 区分	各層の層別出土数と割合									
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII		
8層	0	3	0	1	1	132	44	30	226	437
		0.7		0.2	0.2	30.2	10.1	6.9	51.7	100.0
9層	0	0	0	0	0	1	1	1	9	12
						8.3	8.3	8.3	75.0	99.9
10層	0	15	1	15	5	253	26	26	255	1546
		10.0	0.1	10.0	0.3	35.8	4.9	1.7	55.3	100.0
11層	10	26	0	34	2	474	38	2	538	1124
	0.9	2.3		3.0	0.2	42.2	3.4	0.2	47.9	100.0
11c層	0	19	0	2	0	14	0	0	36	65
		29.2		3.1		21.5			46.2	100.0
計	10	63	1	52	8	4174	159	59	1656	3184

(注) 各欄下は%

7. 第Ⅶ群土器各類型の層別出土数と割合

層別 区分	各層の層別出土数と割合								
	1	2	3	4	5	6	7	8	
8層	92	1	6	43	0	54	47	75	338
	27.2	0.5	1.8	18.6		16.0	13.9	22.2	100.0
9層	0	0	0	4	0	0	0	0	4
				100.0					100.0
10層	49	12	0	73	5	21	43	14	217
	22.6	5.5	0	33.6	2.3	9.7	19.8	6.5	100.0
11層	10	4	0	26	4	9	27	1	81
	12.3	4.9	0	32.1	4.9	11.1	33.3	1.2	99.8
11c層	0	0	0	3	0	0	0	2	5
				60.0				40.0	100.0
計	151	37	6	149	9	84	117	92	645

(注) 各欄下は%

第17表 各群グリッド別出土点数

きない。したがって、E・Fグリットの集中部分が全体のどのような位置を占めるか、またA 13・14グリット、D11・12グリットの分布がE・Fグリットと同様な集中区であるかは不明である。故に分布の違いを指摘するに留めたい。

### 5. 層別にみた第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器が出土土器の約半分を占めることは既に述べた。そこで、この第Ⅳ群土器が層位別にどう変遷するかを検討してみたい。分析対象として量的保証のあるE12・13グリットを選んだ。第Ⅳ群土器を層別・分類別に示した表が第17表7である。

この表より、上層に向かうに従い、1・6・8類增加、4・5・7類減少の傾向が指摘される。時期の比定できる土器の主体となるのは第Ⅱ群土器であることから、この第Ⅳ群土器は第Ⅲ群土器に伴う粗製土器と考えられる。しかし、上層から第Ⅶ・Ⅷ群土器が微量ながらやや増加することを考えあわせれば、前述した傾向性は、粗製土器の時間的な変化を示している可能性が指摘されよう。

### 6. 土器胎土における白色針状物質について

山口遺跡の土器胎土中には、時代や時期の区別なくほとんど白色針状物質が混入している。それは、縄文土器に限らず、土師器・須恵器にまで及び、土器・土製品の9割以上を占めている。最近、関東地方においてこの物質に関する報告がなされている（中島・1974、河野他・1975など）。また、この物質に関する分析も行なわれている（宇津川・上條1980）。この分析によれば、この白色針状物質は、鉱物反応ではなく、海綿動物骨針（Sponge Spicules）であるという。この物質は、土器製作時に混和材として入れたものではなく、粘土採集段階すでに土壤中に混入していたものと判断される。

また、他の遺跡について観察した結果、六反田遺跡の縄文土器・土師器・須恵器、今泉城の土師器・土埴、南小泉遺跡の弥生土器の胎土中にみることができる。また、最近調査した仙台市茂庭住宅団地内の嶺山C遺跡の縄文土器や土師器胎土中にもこの物質が観察され、先の3遺跡を上回る含有率を示している。また、表形ノ入式の斐形土器の表面に付着した焼土中にも、この物質を確認することができた。

この物質が検出される遺跡の分布をみると、いまのところ名取川の扇状地や中流域に集中しており、また、Sponge Spiculesであれば、海成産の土壤を使用して土器を製作したことになる。この物質の起源を求めるに、第Ⅱ章の「地質」において指摘した茂庭層・旗立層中の化石がその起源である可能性が考えられよう。このことは、この物質が茂庭の嶺山C遺跡の土器胎土中に高率で包有されることや、土壤中からも検出されることにより傍証されるであろう。また、嶺山C遺跡出土の須恵器には、観察した資料である限りでは、この物質の混入が認められない（注）。須恵器については、この物質によって、生産地と供給先の関係、他の土器について

は、在地のものと搬入品との関係に手がかりを与えることが可能であろう。今回は、科学的な分析などの手続きを踏んでいないため、指摘だけに留めておきたい。

注 筆者の実見による。

## 7. 石器群の分布と石器組成について

各層の石器の絶対数を比較すると、第10層>第8層>第11層となり、石器類では、第11層>第10層>第8層となっている。まず、それらの分布を検討する。

剝片について、各グリッドの出土数と、割合を示したのが第18表である。これらから以下のことことが読みとれる。

(1) 第8層の剝片が最も分布が集中し、E・Fトレンチ以外の出土のものは、CII区の1例の

第18表 剥片類グリッド別出土数

1. 8層出土の剝片の分布

(総数 254)

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11	1 (0.4)		8 (3.2)			
12			46 (18.5)	21 (8.4)		
13					17 (5.1)	1 (0.3)
14			21 (8.4)	13 (5.2)		
15			10 (4.0)	9 (3.6)		
16			5 (2.0)	8 (3.2)		
17			11 (4.4)	6 (2.4)		
18					3 (1.2)	
19						3 (1.2)

2. 10層出土の剝片の分布

(総数 334)

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10					3 (0.9)	1 (0.3)
11					1 (0.3)	65 (19.5)
12			1 (0.3)	1 (0.3)		37 (17.1)
13	1 (0.3)				17 (5.1)	1 (0.3)
14					12 (3.6)	31 (9.3)
15					41 (12.2)	35 (10.5)
16					20 (6.0)	15 (4.5)
17					3 (0.9)	17 (5.1)
18					10 (3.6)	8 (2.4)
19						

3. 11層出土の剝片の分布

(総数 99)

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3					3 (3.0)	
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10					3 (3.0)	
11						11 (11.1)
12					3 (3.0)	2 (2.0)
13						20 (20.2)
14			2 (2.0)			5 (5.1)
15	1 (1.0)					3 (3.0)
16						5 (5.1)
17	2 (2.0)					2 (2.0)
18					1 (1.0)	2 (2.0)
19						3 (3.0)

第19表 石器類、グリッド別出土数

## 1. 8層出土石器類の分布

(総数 46)

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11					3 (6.5)	
12				1 (2.2)	10 (21.7)	
13			15 (33.6)	1 (2.2)		
14			9 (10.9)	2 (4.3)		
15			1 (2.2)	4 (3.7)		
16			1 (2.2)	1 (2.2)		
17			1 (2.2)	1 (2.2)		
18						
19						

## 2. 10層出土の石器類の分布

(総数 59)

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10					2 (3.4)	3 (1.7)
11		1 (1.7)	1 (1.7)		7 (11.9)	
12				1 (1.7)	8 (13.6)	
13	1 (1.7)				6 (10.2)	2 (3.4)
14					2 (3.4)	2 (3.4)
15					4 (6.8)	4 (6.8)
16					4 (6.8)	2 (3.4)
17					3 (5.1)	3 (5.1)
18						1 (1.7)
19					1 (1.7)	2 (3.4)

## 3. 11層出土の石器類の分布

(総数 96)

	A	B	C	D	E	F
1						
2						
3		1 (1.0)		1 (1.0)		
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10					2 (3.1)	3 (3.1)
11				2 (2.1)	11 (11.5)	1 (1.0)
12					2 (2.1)	5 (5.2)
13	1 (1.0)				5 (5.2)	3 (3.1)
14					6 (6.30)	5 (5.2)
15					10 (10.5)	8 (8.4)
16					5 (5.2)	2 (2.1)
17	2 (2.1)				6 (6.2)	2 (2.1)
18					5 (5.2)	7 (7.4)
19					2 (2.1)	3 (3.0)

みである。

(2) 第10層出土のものは、分布が拡大し、CDトレンチから約2%の剝片が出上している。第11層になると、分布は、さらに拡大し、ABトレンチからも約5%の剝片が出上している。このことは、最初、広い範囲に分布していた石器群が、しだいに集中する傾向と認識できる。

(3) 最も剝片を大量に出土するグリッドは、E13(11層-20.2%)、→E11(10層-19.5%) →E12(8層-35.5%)と移行する。しかし、これらはいずれも近接し、さらに、その周辺部のグリッドからの出土が、各層ともに多いことを考えると、分布の中心は、移動しているとはいいがたい。

本遺跡の調査は6mのトレンチを設定したものであり、遺物群のまとまりの全体像は明らか

第20表 各層の石器組成(1)

層	8	10	11
石 器	10	9	9
石 器	1	2	4
ホ イ ン ト	0	4	0
石 器	4	3	0
ビ ニ ス ・ エ ス キ ー ス	3	4	7
不 定 形 石 器	4	2	0
石 器	0	2	0
石 器	0	3	3
ス ク レ イ バ ー 丁	6	7	4
石 器	3	2	5
石 器	2	2	1
石 器	1	1	1
その他の剥離石器	2	6	3
無形扁平打製石器	1	0	9
磨 製 石 器	0	0	3
石 器	0	1	0
敲 石	4	5	14
磨 石	6	7	45
研 石	1	4	3
石 器	2	2	7
石 器	0	1	2

る。第8層のものがEFトレーンチに集中し、第10層から第11層にかけて、分布は拡大する。また、分布の中心も、移動しているとはいえない。これらのデータは基本的には、剥片の分布のあり方と矛盾しない。

本遺跡の出土石器類を分類基準にのっとり、器種ごとにその数量を示したのが第20表である。量的な保証が得られないため、各層の組成に意味付けを行なうことは困難である。しかし、特に注意を引くのは第11層における敲石、磨石の割合である。敲石、磨石の全石器群中に占める割合は、第8層では20%、第10層では16.7%である。これに対して第11層におけるその割合は、53.2%に達する。その数量は、石鍬の6倍以上にある。さらに類型ごとに組成を示したのが第21表である。第11層出土の敲石は各類型に、まんべんなく分散する。それら類型のおのおのを第8層、第10層出土のものに比較すると、さほど顕著に第11層出土のものが多いとはいえない。逆に、磨石I類は第11層から40点の出土があり、第8、10層からの出土数の6~7倍に達している。第11層出土の石器群の中で、礫器類、特に磨石I類が特殊な位置を占めており、それに關わる作業が強く反映されている可能性が高い。その他の組成について明確な特殊性を及することは数量的に危険である。

## 8. 昆虫の圧痕について (図版42-1)

土器の実測中に昆虫の圧痕のある資料を検出した。昆虫の圧痕のある上器は、全国的に見ても、希少のものであり、東北地方では初見であろう。調査結果を以下に報告するものである。

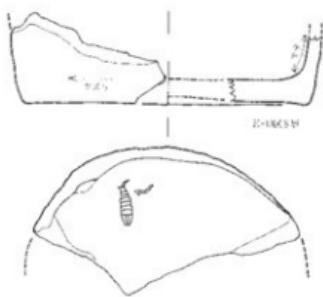
なお、昆虫の同定は、岩手大学人文社会学部生物学教室教授、小野泰正氏にお願いし、また

第21表 各層の石器組成(2)

層	8	10	11
石 器	4	1	2
I b	3	3	2
II	2	2	2
III	1	3	3
石 器	0	2	0
II a	0	2	3
II b	1	2	1
III	0	1	0
敲 石	2	0	1
II	0	0	2
III	0	4	4
IV	2	1	5
V	0	0	2
磨 石	6	7	40
II	0	0	1
III	0	0	4
田 石	1	3	2
II	0	1	1
敲 石	0	0	1
II a	2	2	4
II b	0	0	2

ではない。したがって、EFトレーンチの遺物集中地域が一つのまとまりのどの部分であるのか、あるいは、AB、CDトレーンチ出上の遺物群がEFトレーンチの集中と同一のまとまりとして捉えられるのかどうかといった問題には言及できない。

各器種別の分布は数量的に乏しいため、有意性をひきだすことができない。したがって、ここでは石器類を一括して分布をみる。第19表は、各グリッドごとの石器類の数とその割合を示したものである。



昆虫の压痕

氏を介して、築波学園都市農林省農業技術研究所、農林省東北農業試験所にも御協力を賜った。心よりお礼申し上げる次第である。

昆虫の压痕のついた土器は、調査区第2トレンチ内のE-13区、第8層上部より出土した底部破片である。焼成は良好で、色調は橙色および灰白色を呈する。胎土は砂粒が多く含み骨針状の白色物質をわずかに含む。時期は、底部片であるので明確な時期判断はできないが、第8層中の他の土器資料より判断すると、縄文時代後期前半か

ら中葉に属するものと思われる。

昆虫の压痕は、土器底部外面に認められる。同定結果は、次のとおりである。

#### 革翅目 (DERMAPTERA) ハサミムシ科 (Psalididae) ハサミムシ類

本資料は、ハサミムシ類の特徴をそなえているが、種・属までは明確にし得ない。ハサミムシ類の背面压痕で、腹部は末端背節から6節までは確認できるが、翅鞘にかけて不明瞭となる。翅が存在したかどうかも不明瞭である。压痕の先端部は、おそらく、翅鞘に相当する部位と思われる。また、先端部にある触角状の压痕や右側の細長い压痕（後頭節、第1後跗節？）は、いずれも後肢であると思われる。鉗子の压痕も明瞭に残っており、鉗子間は狭い。尾節の有無は確認できない。現存長は、翅鞘から鉗子端まで14mm、腹部幅は最大約4.2mmを測る。ハサミムシ類は、扁平な細長いカンボデア型の昆虫で、黒褐色のものが多い。習性は、夜間活動性のものが多く、地上の湿氣のある腐葉等の下に生活し、雜食性である。ハサミムシ類は年1回または2回発生し、卵性である。春から秋にかけて活動し、冬季は休眠する。

ハサミムシ類の压痕は、体節等が明瞭に残っていることから、土器製作時しかも粘土が乾燥する以前の段階で土器底部の下敷きになったものと思われる。したがって、ハサミムシ類の活動期と土器製作時期がある程度の幅をもってほぼ一致する。最近、ダニやヤスデ等の压痕が発見され、土器の製作時期も、より客観的な推定の可能性が出てきたと言えよう。今後、より活動時期の狭い動物の発見を期待したい。

#### 9.まとめ

今回の調査で以下のことが判明した。

1. 山口遺跡は、名取川が形成した扇状地内の自然堤防上に立地する。
2. 出土遺物は、縄文時代は中期中葉（大木8a式）から後期中葉（宮戸IIb式）、弥生時代、古墳時代、平安時代のものが出土し、主体となるのは縄文時代後期の遺物である。
3. 遺跡の分布でみたように、山口遺跡の所在する仙台市南部の名取川扇状地及び周辺の丘陵部には、各時代・各時期の遺跡が連續と存在することを確認した。また、この遺跡の分布から縄文時代の後期には、山口遺跡や六反田遺跡を中心とする扇中央部に所在するグループと高田上野遺跡や山山上ノ台遺跡などの所在する扇頂部周辺のグループ、そして金剛寺貝塚などの名取市高館山東麓のグループを抽出することができた。
4. 名取川扇状地が古くから安定した地盤を形成し、大木8a式土器の出土によって、縄文時代中期より人間活動の場として利用されていたことが理解される。平野部の沖積面に立地する遺跡としては、東北地方では現在のところ最古であろう。
5. 本遺跡では、縄文時代後期前葉の遺物が豊富で、特に第VI群・第VII群・第VIII群土器が多く、後期前葉の精製土器と粗製土器の関係について理解を深めることができた。また、第VII群土器に伴ったと考えられるいわゆる抛ノ内II式土器を検出できたことは意義深い。
6. 平安時代については、住居址と河川の関連が窺え、今後この周辺の遺跡の調査に際して指標となる結果が得られた。
7. 花粉分析の結果、平安時代における森林破壊の過程を判断するための貴重な成果が得られた。
8. 縄文時代における希有な昆蟲の圧痕や加工痕のある鹿角の検出、また、平安時代における作物類や獸骨（家畜）、そして植物遺存体の検出は、山口遺跡の自然環境や生活環境を知る上で貴重な資料となった。

#### 引用・参考文献

- 加藤孝・後藤勝彦他 1975 「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」 南方町史資料編所収 南方町
- 阿部恵・遊佐五郎 1978 「長者原貝塚」 南方町教育委員会
- 宮城県教育委員会 日本道路公団 1978 「上深沢遺跡」
- 後藤勝彦 1976 「白石市周辺出土の遺物紹介」 白石市史 別巻考古資料編所収 白石市
- 宮城県教育委員会 1978 「上深沢遺跡」 「東北自動車道遺跡調査報告書1」
- 後藤勝彦・斎藤良治 1967 「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」
- 後藤勝彦 1974 「縄文後期宮戸Ib式周辺の吟味」 東北の考古歴史論集
- 小林達雄 1966 「多摩ニュータウン遺跡調査報告書Ⅱ」 多摩ニュータウン遺跡調査会
- 草間俊一編 1974 「崎山弁天遺跡」 岩手県大槌町教育委員会
- 草間俊一・金子浩昌編 1971 「貝鳥貝塚」 花泉町教育委員会

- 小野寺祥一郎 1980「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集
- 佐藤鎮雄 1972「神矢田遺跡」遊佐町教育委員会
- 中島利治 1974「下新田遺跡・荒神脇遺跡・能野遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会
- 河野喜映他 1975「鳴尾遺跡」神奈川県文化財調査報告書 7
- 宇津川徹・上條朝宏 1980「土器胎土中の動物珪酸体について(1)」考古学ジャーナルNo180
- 宇津川徹・上條朝宏 1980「土器胎土中の動物珪酸体について(2)」考古学ジャーナルNo184

## 第IV章 仙台市山口遺跡の泥土の花粉分析

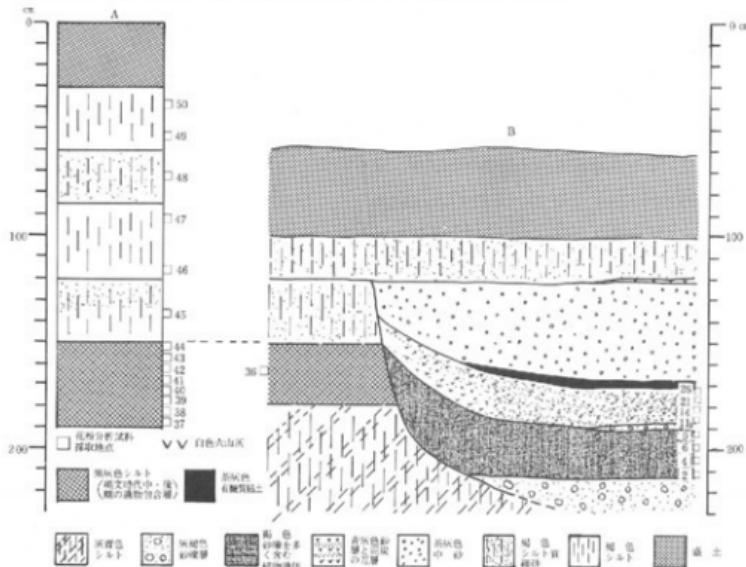
安田喜憲

### I. はじめに

山口遺跡は名取川の左岸の自然堤防上に立地する縄文時代中期・後期～歴史時代の遺跡である。遺跡がいとなまれた当時の古環境を復元するために、遺跡から採取した泥土の花粉分析を実施した。

### II. 試料の採取と層序

花粉分析試料採取地点の模式的層序は、第169図に示す如くである。



第169図 山口遺跡の模式的層序

A地点（C-4区西壁）の層序は以下の如くである。

下位より

黒灰色シルト層…………層厚40cm前後、縄文時代中期・後期の遺物を含む。

褐色シルト層…………層厚15cm前後、無遺物層。

褐色シルト質細砂層…………層厚15cm前後、無遺物層。

暗褐色シルト層…………層厚30cm前後、バミス混り、古墳時代の遺物を含む。

褐色シルト質細砂層…………層厚25cm前後、水酸化鉄の沈着、平安時代以降の遺物を含む。

褐色シルト層…………層厚30cm前後、水酸化鉄とマンガンの沈着、旧耕土。

盛土…………層厚100cm前後。

B地点（C-9区西壁）は自然堤防堆積物を切る旧河道の堆積物であり、河道の辺には、縄文時代中期・後期の遺物包含層に対比されると考えられる黒灰色シルト層がみとめられた。B地点の旧河道内の層序は下位より、

褐色砂礫層…………層厚10cm以上、最大礫径10cm、一般に2～3cmの亜円礫が多い。

褐色植物遺体の集積層…………層厚20cm前後、砂・礫を多く含み、葉片・枝・木片・種子等を多く含む。

褐色砂礫層…………層厚3～4cm前後、部分的にみとめられ、連続性が悪い。

青灰色砂と泥炭の互層…………層厚20cm前後、厚さ1cm前後の泥炭と砂層の互層からなっている。

茶灰色有機質粘土層…………層厚5～7cm前後、有機物を多く含む。

茶灰色中～粗砂層…………層厚30cm前後。

白色火山灰層…………層厚2cm前後、部分的にレンズ状に認められる。

褐色シルト質細砂層…………層厚20cm前後、旧水田耕土。

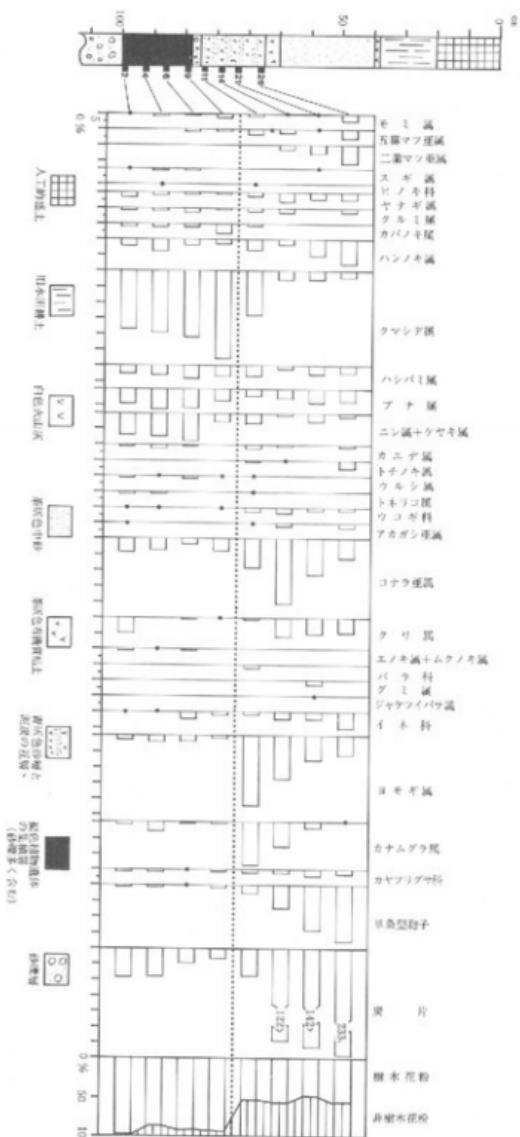
盛土…………層厚20～40cm前後。

花粉分析の試料はトレンチの壁面から直接採取し、ポリ袋に密封して、実験室に持ち帰った。

### III. 花粉分析の方法

花粉分析の方法は、KOH処理（10%水酸化ナトリウム溶液にて、15分間湯せん）—水洗（蒸留水にて上ずみ液が透明になるまで、2000回転／分にて遠心分離）—比重分離（70%の塩化亜鉛溶液、比重2.1～2.2にて、遠心分離）—浮上した花粉をスポットで集めて水洗—水洗（1%HCl溶液にて水洗）—花粉が比重分離にて浮上しなくなるまで、この作業をくり返す—酢酸処理（水酢酸にて脱水）—アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液を加え、3分間湯せん）—酢酸処理—水洗—マウントの順に行った。検鏡は400倍で行い、必要に応じて1000倍を使用した。また検鏡にさいしては、樹木花粉200個以上同定することに努めた。主要な花粉・胞子については写真撮影も同時に行った。

第170図 山口遭跡の花粉ダイアグラム（出現率は樹木花粉を基数とするパーセント）



第22表 山口遺跡の花粉・孢子出現率表

	No. 2	No. 4	No. 6	No. 8	No. 10	No. 11	No. 14	No. 21	No. 26
	個	個	個	個	個	個	個	個	個
Picea	1個 0.2%	61 36							
Abies	1 0.2	4 1.3	2 0.5	6 2.0	3 1.6	1 0.5	1 0.6	3 4.7	
Tsuga								2 1.2	
Pinus (Haploxyylon)			2 0.5	2 0.6	10 3.3	5 2.5	1 0.6	4 6.3	
Pinus (Diploxyylon)						6 3.0	10 6.1	8 12.6	
Cryptomeria		1 0.3		3 1.0	2 0.6		1 0.6		
Cupressaceae		1 0.3			1 0.3				
Salix	15 3.3	6 2.0	3 0.7	3 1.0	7 2.3	18 6.5	7 4.2	3 4.7	
Juglans	2 0.5	3 1.0	13 3.3	2 0.6	9 3.0	7 3.5		2 3.1	
Betula	7 1.8	5 1.7	8 2.0	18 6.2	4 1.3				
Alnus	17 4.3	22 7.6	9 2.3	7 2.4	19 6.4	7 3.5	18 11.0	10 15.8	
Carpinus	143 36.5	112 30.0	165 42.5	161 56.0	83 28.0	12 6.0	10 6.1	3 4.7	
Corylus	21 5.3	17 5.9	32 8.2	20 6.9	21 7.0	4 2.0	9 5.5	3 4.7	
Fagus	36 9.2	28 13.2	50 12.8	22 7.6	15 5.0	12 6.0	15 9.2	5 7.9	
Ulmus	26 6.6	19 6.6	32 8.2	5 1.7	8 2.7		1 0.6	1 1.5	
Zelkova	28 7.1	24 8.4	39 10.0	11 3.8	15 5.0	4 2.0	9 5.5	1 1.5	
Acer	6 1.5	7 2.4	3 0.7	2 0.6	10 3.3	4 2.0		1 1.0	
Aesculus					3 1.0	1 0.5	10 6.1		
Rhus	5 1.2	1 0.3	8 2.0	1 0.3	1 0.3				
Fraxinus	5 1.2	2 0.6			1 0.3				
Araliaceae	1 0.2	1 0.3							
Cyclanthaceae	1 0.2				1 0.3	5 2.5		2 3.1	
Quercus	34 8.6	21 7.3	14 3.6	22 7.6	57 19.2	82 41.6	38 23.8	8 12.6	
Castanea	39 9.9		2 0.5	1 0.3	4 1.3	26 13.1	18 11.0	6 9.5	
Celtis-Aphananthe	4 1.0	2 0.6	2 0.5						
Oleaceae					1 0.3		1 0.6		
Rosaceae					7 3.5				
Prunus	1 0.2	1 0.2			1 0.3				1 1.5
Vitis									
Elaeagnos							5 3.0		
Weigela							1 0.6		
Lonicera									
Hedera			1 0.2						
Mallotus			1 0.2						
Ericaceae			1 0.2						
Styrax					1 0.3				
Tilia							1 0.6		
Symplocos							1 0.6		
Cassiopeina					1 0.3				
Total AP	391	287	385	287	296	197	163	63	
Gramineae	1 0.2	1 0.3	16 4.1	6 2.0	4 1.3	10 5.0	8 4.9	7 11.1	
Compositae			1 0.2				1 0.6	1 1.5	
Artemisia	12 3.0	11 3.8	16 4.1	4 1.3	132 44.5	56 28.4	27 16.5	8 12.6	
Patrinia						1 0.5			
Cyperaceae	2 0.5	4 1.3	1 0.2	2 0.6	8 2.7	5 2.5	8 4.9	2 3.1	
Polygonaceae		1 0.3				1 0.5	3 1.8		
Umbelliferae	2 0.5				3 1.0	1 0.5			
Chenopodiaceae		1 0.3		1 0.3	1 0.3			1 1.5	
Labiatae	1 0.2				1 0.3				
Humulus	6 1.5	16 5.5	2 0.5	2 0.6	82 27.7	30 15.2	6 3.6	1 1.5	
Ranunculaceae		4 1.3	9 2.3			2 1.0		1 1.5	
Sparagnum			1 0.2						
Curculionidae			1 0.2						
Liliaceae			1 0.2						
Leguminosae				1 0.3					
Viola				1 0.3			2 1.2		
Myriophyllum					1 0.3				
Menyanthes						1 0.5			
Nymphaea						1 0.5			
Lonicera						1 0.5			
Rumex						3 0.6			
Plantago			2 0.6			1 0.6			
Trichosanthes						1 0.6			
Cariophylaceae							1 1.5		
Type									
Monolete spore	3 0.7	4 1.3	2 0.5	5 1.7	17 5.7	29 14.7	46 28.2	23 36.5	
Trilete spore						1 0.5	4 2.4		
Osmundaceae		1 0.3				1 0.5		1 1.5	
Moss spores	1 0.2								
Total NAP	15	43	36	22	249	140	175	48	
Total AP+NAP	406	330	424	309	545	337	338	131	
ΣAP/ΣNAP	96.3/4.3	86.9/15.1	91.5/8.5	92.8/7.2	54.3/45.7	38.4/41.6	48.2/51.8	56.7/43.3	
Charcoal	77 19.6	52 18.1	40 10.3	19 6.6	55 18.5	241 122.3	233 142.9	141 233.8	

表 No.36~45、No.47~50は花粉%。

#### IV. 分析結果

分析結果は第22表に示す如くである。またB地点の分析結果については、第170図の花粉ダイアグラムに主要な花粉・胞子それに炭片の出現率を図示した。また、図版47、48には主要な花粉の顕微鏡写真を示した。

A地点の泥土の花粉分析からは、花粉・胞子の出現数が少なく、良好な結果を得ることができなかった。とくに仙台平野の自然堤防上に立地した縄文時代中期・後期の環境を復元するためには、この遺物包含層から有効な結果を得る必要があり、同一の試料について、2回の分析をこころみたが、花粉粒は検出できなかった。1ccという少量の分析では花粉が検出されないのか、それとももともと花粉が含まれていないのか、今後さらに検討を加えたい。

B地点の旧河道の泥土の中からは、多量の花粉・胞子それに炭片が検出された。その結果は第22表と第170図に示す如くである。

花粉ダイアグラム（第170図）では、最下部の褐色の植物遺物の集積層（試料No 2、4、6、9）において、クマシデ属の花粉が最も高い出現率を示すのが特徴的である。この他、ニレ属・ケヤキ属・ブナ属・コナラ属・ハシバミ属などが高い出現率を示す。この旧河道は、縄文時代中期・後期の遺物包含層を切っており、縄文時代後期よりは新しい。この花粉ダイアグラムの下部に示された花粉フローラは、仙台平野に水田耕作農業とともに人々が開拓を行う以前の原生林を示しているとみられる。クマシデ属とニレ属・ケヤキ属が、当時の沖積平野の自然堤防帯に成立した森林の主要な構成種であったのであろう。

一方、厚さ5cmにみたいうすい砂礫層をはさんで、その上位の青灰色の砂と泥炭の互層に入ると（試料No 11、14、21、26）、クマシデ属・ニレ属・ケヤキ属が減少し、かわってコナラ属・クリ属が増加し、また二葉マツ属も上方に増加する。これに対しハシバミ属・ブナ属・カエデ属などはあまり出現率を変化させない。さらに草本花粉では荒地に生育するヨモギ属・カナムグラ属が急増し、また単条型胞子も急激に増加する。これとともに、特徴的なのは炭片の著しい増加である。こうした青灰色の砂と泥炭の互層に入ってからの花粉フローラの変化は、明らかに人間の火をともなったシデやニレ・ケヤキの森林の破壊を物語っている。そのあとに、コナラ属・クリ属など、木の実を食料にできる花粉が増加することは、人間が意識的にこれらの木を栽培したのかもしれない。ヨモギやカナムグラの生育する荒地が拡大し、周辺が人間の居住地となつたことを物語る。しかし、イネやソバの栽培作物の花粉は検出されず、明確な農耕活動の痕跡を知ることはできない。

#### V. 結論

山口遺跡の泥土上の花粉分析の結果、名取川左岸の自然堤防帯では、人間が水田耕作農業などをともなって沖積平野に進出する以前の植生は、クマシデ属・ケヤキ属・ニレ属などを中心と

した森林であったことが明らかとなった。沖積平野の自然堤防帯の植生が、人類によって破壊される以前に、どのようなものであったかは、これまで不明の点が多かった。この山口遺跡の分析結果では、この点について、若干の解明の糸口が得られた。

そして、こうした自然堤防上のクマシデ属、ニレ属、ケヤキ属を中心とする森林は、人類によって破壊され、ヨモギ属やカナムグラ属の生育する草原が拡大した。それとともに、コナラ垂属やクリ属など、食料にできる木の実のなる木の花粉が増加し、自然堤防帯の森林破壊後の利用形態を知る上で、興味深い事実が明らかとなった。

## 付章 第1次、第3次調査

### 1. 第一次調査の概要

#### (1) 調査の方法と経過

計測水路にそって、幅5m、長さ50mに調査区を設定した。調査時にわいても農業用水路として活用されているものであり、水路を西側で堰止めて調査を行なった。幸い3月という用水が不用の時期で流れはなかったが、若干の生活排水と、雨と雪どけ水により再三冠水して調査区が完全に水没する状況もあった。

長さ50mの調査区をW15からE35までの10区に便宜上分け、バックホーで1層を排除し、調査区は西側から1区、2区、3区……と呼称することにした。調査区の幅は5mに設定したが、北側が個人所有の盛土の厚い畝となっており、南側が道路となっていることから、北側に多く傾斜をつけたり、段掘りを実施しなければならず、実際調査できたのは約180m<sup>2</sup>である。

以上のような状況から、断面は南壁で観察せざるを得なかった上に、道路等による搅乱や、笊川がすぐ南側を流れていることなどから、不变的な層位の確認は困難であり、後述する基本層位も、搅乱のないところで代表せざるを得なかった。

調査は3月1日から31日まで実施したが、雨の影響が多く、調査日数の半分は排水作業という状況であった。

#### (2) 基本層序 (第171図)

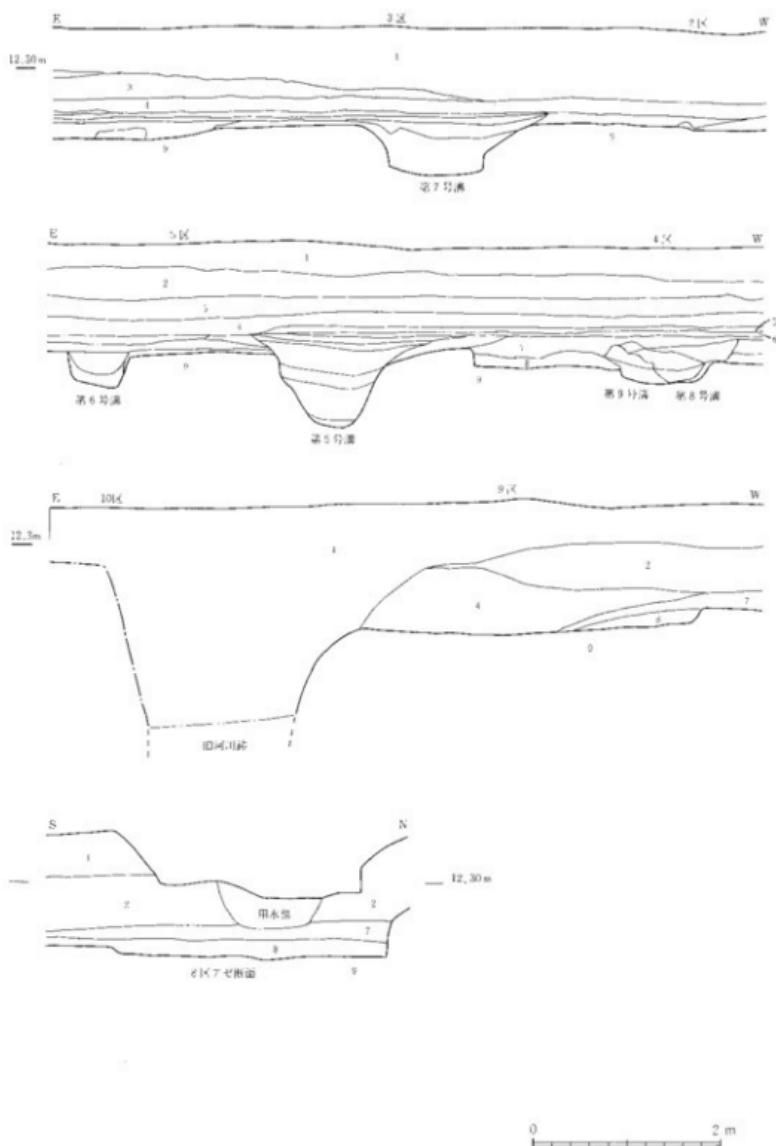
I層①：道路建設時の盛土であり、大小の石がぎっしり敷きつめてある。

②：橙色砂質シルトのきれいな層であり、縄文土器片、土師器片、須恵器片を含んでいる。

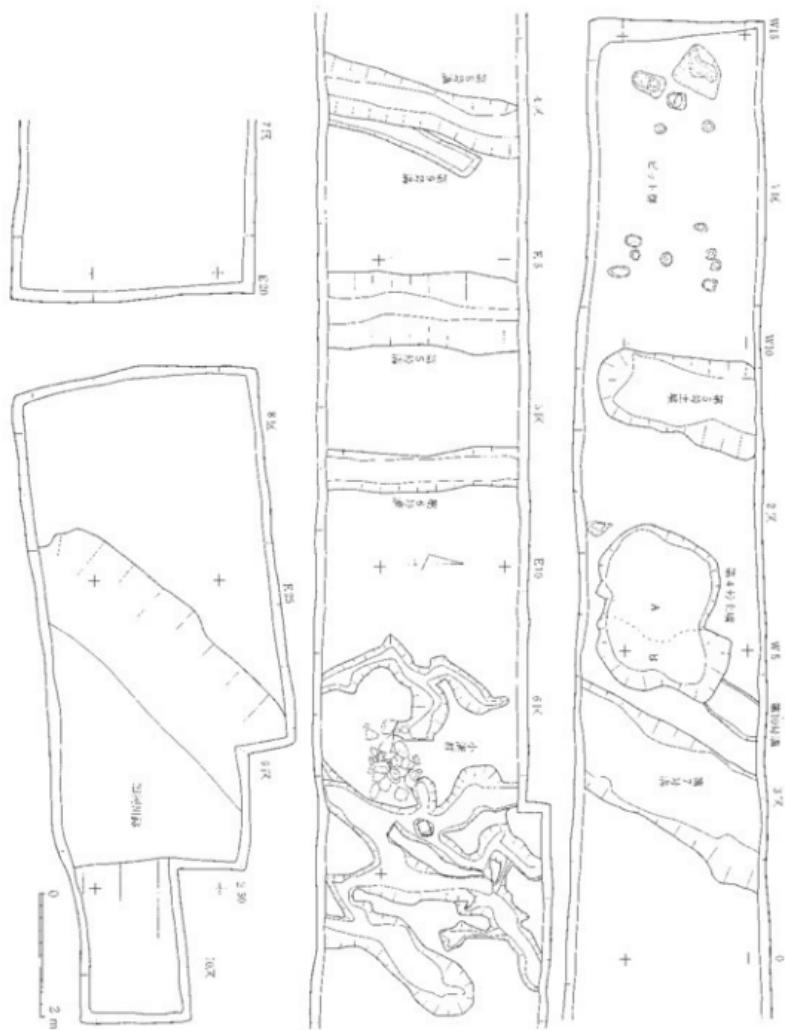
道路になる前は畑地であったことから、耕作土の層と考えられる。

II層③：灰褐色シルトでマンガンの黒斑が少し見られる。また遺物の細片を若干含む。

III層④：にぼい褐色シルト。黒斑、黄褐色の岩粒や小石が混入している。水による堆積の様相である。



第171図 第1次調査断面図



第172図 第1次調査 トレンチ平面図

IV層⑤：褐灰色粘質シルトで黒斑がみられる。遺物が今回の調査で一番多く出土し、遺構もこの面で検出されている。

V層⑥：黒褐色粘土で黒斑が見られる。遺物片も若干見られる。

VI層⑦：褐灰色粘土で黒斑が見られる。

⑧：褐灰色粘質シルト。⑦～⑨の漸移層として把えられる。

Ⅷ層⑨：褐灰色砂質シルト。⑨の下面是川底の砂利層になる。⑨の上から下にいくにつれて、砂質度を増す。下面是①の上面から約2m下である。

これらは基本的な層位であり、9、10区の旧河川跡が検出されているところや、溝などの遺構が検出されているところ、攪乱が及んでいるところなどは層を異にする。また1、2区の方は、かって地盤が高かったらしく、I①層の下がすぐIV⑤層になっており、砂利層が①上層から約1.5m下で出ている。

### (3) 検出遺構 (第171図)

#### 〈ピット群〉

1区第IV層⑤上面で検出された。直上には第I層①がきている。第IV層上面では焼土、炭の散布も見られたが、ごく薄く、また旧用水路で切断されていることもあり、その広がりは把握できなかった。

第IV層⑤は平安時代の遺物を含む層であるが、直上層が攪乱されているので、ここで検出されたピットも平安時代のものとは言いきれない。また各ピットとも不定形であり、柱痕と思われるものがなく、遺構としての把握が適当かどうかという問題もある。一つのピットには磨製石斧が落ち込んでいた。

#### 〈土壤〉

調査中に発見された土壤にはすべて番号を付していったが、次に記載するものは遺構として捉えたものであり、攪乱によるものは除外してある。

##### (1) 第4号土壤

A、B二つの土壤が切り合っていて、AをBが切っている。埋土はにぶい黄橙色粘質シルトに褐灰色粘質シルトがブロック状に混入するもので、一度に埋められたようである。ただBの方が褐灰色粘質シルトの混入度合が多い。七頭器片、須恵器片が若干含まれている。

ここでは第IV層⑤がなく、にぶい橙色シルトに褐灰色シルトがブロック状に混入している層に掘り込まれている。土壤の深さはA、Bとも約65cmである。

##### (2) 第5号土壤

第IV層⑤に掘り込まれている。深さ約87cmで、第4号土壤同様いっしきに埋められている様相である。埋土は褐灰色粘質シルトに、にぶい黄橙色シルトがブロック状に混入したものであり、

土師器片、須恵器片が若干含まれている。

#### 〈溝〉

溝も土壤同様、検出したものすべてに番号を付していった。以下に説明するものは遺構として確認したものであり、調査区西側から東側へ順次記載していく。

##### (1)第10号溝

幅約60cm、深さ約20cmの底平な溝で、第4号土壤によって切られている。埋土は灰黄褐色シルトで遺物は含まれていない。

##### (2)第7号溝

第10号溝同様、北東→南西の方向をもつ。幅1.5m、深さ約10cmで底平である。埋土は灰黄褐色シルトで、その中に土師器、須恵器の細片が若干含まれている。

##### (3)第8号溝

幅約70cm、深さは30~40cmのU字形の溝である。ここは基本層位と異なり、若干細かな層をなすところで、8号溝は灰黄褐色粘質シルト層に検出されている。埋土は褐灰色シルトで砂質であり、遺物は土師器、須恵器の小片が若干出土した。

##### (4)第9号溝

幅約35cm、深さは灰黄褐色シルトの検出面から約10cmであり、8号溝で切られている。埋土は褐灰色粘質シルトで、出土遺物はない。

##### (5)第5号溝

褐灰色砂質シルト面に検出される。幅約1.1m、深さは65cm位である。ほぼ南北の方向をもつ。埋土は3層に分けられ、上層は灰黄褐色砂質シルトで黒斑があり、若干遺物を含んでいる。中層は褐灰色粘質シルトで黒斑が見られ、また下層は黒褐色粘質シルト層である。

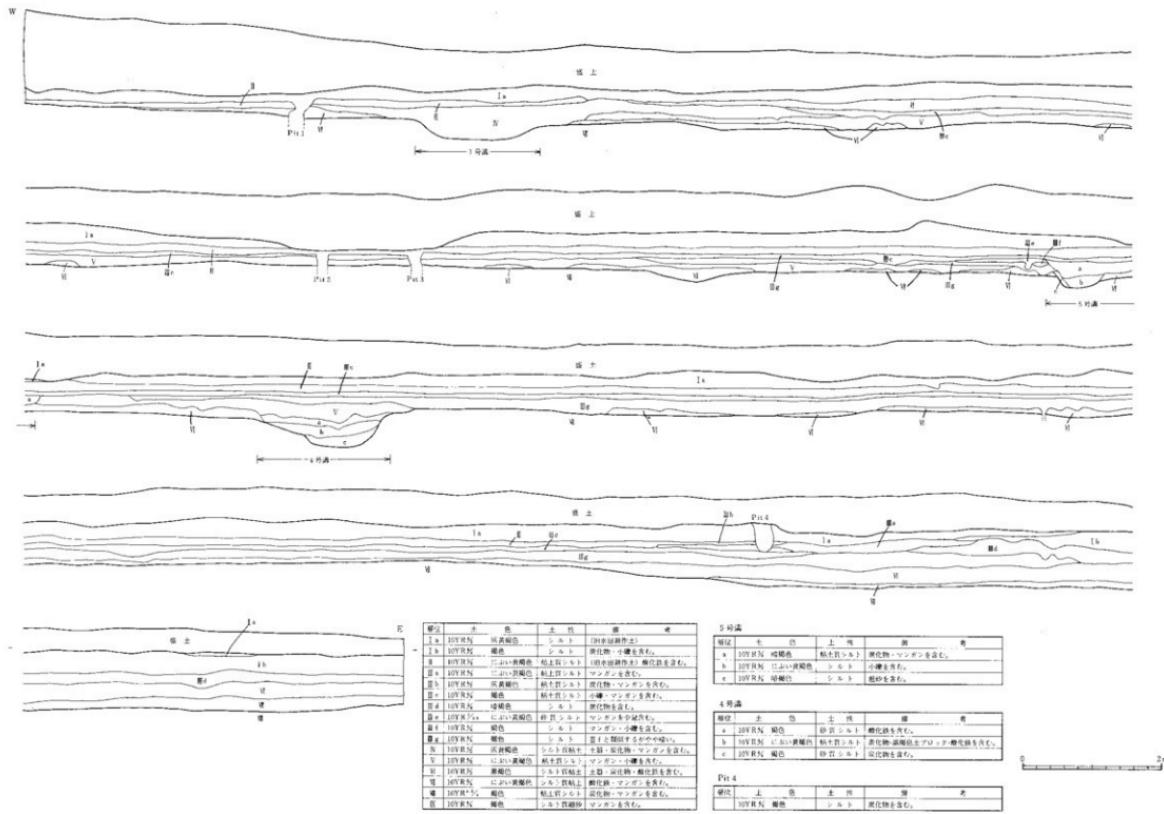
##### (6)第6号溝

灰黄褐色粘質シルト面に検出され、幅約60cm、深さ約30cmのU字形の溝である。埋土は2層に分けられる。埋土上層は褐灰色粘質シルト、黒褐色粘質シルトが下層の埋土である。遺物は上層から土師器、須恵器の細片が若干出土している。

##### (7)小溝群

非常に粘性が強く、湧水性がある。埋土は黒褐色粘土及び褐色粘質シルトであり、深さは約25cmである。検出面は丁層②に続く擾乱層である。これらの溝には規則性が見られず、人為的な施設とは考えにくい。最近の擾乱によるものか、湧水のために出来たものと思われる。遺物は埋土中に含まれていない。

また、この小溝群中に河原石が集中して検出されたが、溝の上にのるものであり、擾乱層中にあることから、古代の遺構の一部とは考えにくい。



第173図 第3次調査トレンチ北壁面セクション

#### 〈旧河川跡〉

第10区で確認され、1層①と同様に砂利が埋め込まれている。この確認面付近は砂が厚く堆積している。

#### (4) 出土遺物

遺物は縄文土器片、土師器片、須恵器片を合わせて平箱2箱分出土している。縄文土器片が1層中にのみ見られることは、隣接する柵を以前にバックホーで天地がえししていることから考えてみると、周囲の縄文包含層が搅乱され混入したためと考えられる。土師器片、須恵器片の出土地区は第6号溝以西の1~5区が主で、その中でも1、4、5区に多量に出上している。

土師器の多くは壺片で、壺片は少数である。壺の底部は平底で、回転糸切りである。須恵器はほとんどが壺の破片である。1、2点、裏面に青海波文の当て具痕を残すものもある。

#### (5)まとめ

- (1) 今回の調査箇所は笊川のはん温原であり、遺構、遺物の残存状況は悪い。
- (2) 縄文土器片、土師器片は小片で磨耗しているものがほとんどである。須恵器も小片が多く、形を復元できるものはない。
- (3) 縄文時代後期（約3,500年前）の遺物が採集されることから、この付近にそのころの生活面があることが推定される。
- (4) 土師器、須恵器は約1,000年前の平安時代のもので、今回検出された溝や土壤もその時期のものと考えられる。
- (5) 裏面に青海波文を残す須恵器片は古墳時代～奈良時代前半の位置付けがなされるものであり、付近にはその時期の生活面も存在することが想像できる。
- (6) (2)において基本層②を扱ったが、調査箇所は笊川の流路にあたったり、度々のはん温にあったり、畑地の天地がえしなどで異なる層位を示す部分が多い。
- (7) 遺物の出土状況からみて、また西側に若干地盤が高くなることからみて、今回調査区より北西方向に遺跡の中心があると思われる。

### 2. 第三次調査の概要

#### (1) 調査の方法と経過

第三次調査は、第二次調査区の南西約100~140m付近の笊川北岸の道路敷部分の調査である。6m幅の道路に74mの調査区を設定した。グリットの設定は、道路中央線に6m間隔にポイントを設定し、西側から1区・2区と呼称した。調査区には、0.4~1mの盛土がなされており、これをバックホーで除去した。本調査も一次・二次調査同様、雨天時にはたびたび冠水し、調査が困難な状況であった。

#### (2) 基本層序（第175図）

盛土：土地区分整理の道路建設に伴なう盛土である。

I層：灰黄褐色シルト、酸化鉄を多く含み、旧耕作土（畑地）である。

II層：にぶい黄褐色粘土質シルト、マンガンを含む。

III層：褐色シルト質細砂、小礫・マンガンを含む。

IV層：灰黄褐色シルト質粘土。

V層：にぶい黄褐色粘土質

シルト、炭化物・マンガン・小礫を含む。

VI層：黒褐色シルト質粘土、土器（平安時代）、炭化物・酸化鉄を含む。

VII層：にぶい黄橙色シルト質粘土、酸化鉄・マンガンを含む。

VIII層：褐色粘土質シルト、炭化物・マンガンを含む。

IX層：褐色シルト質細砂

これらは基本層序であるが、特に3層は複雑な堆積状況を示している。

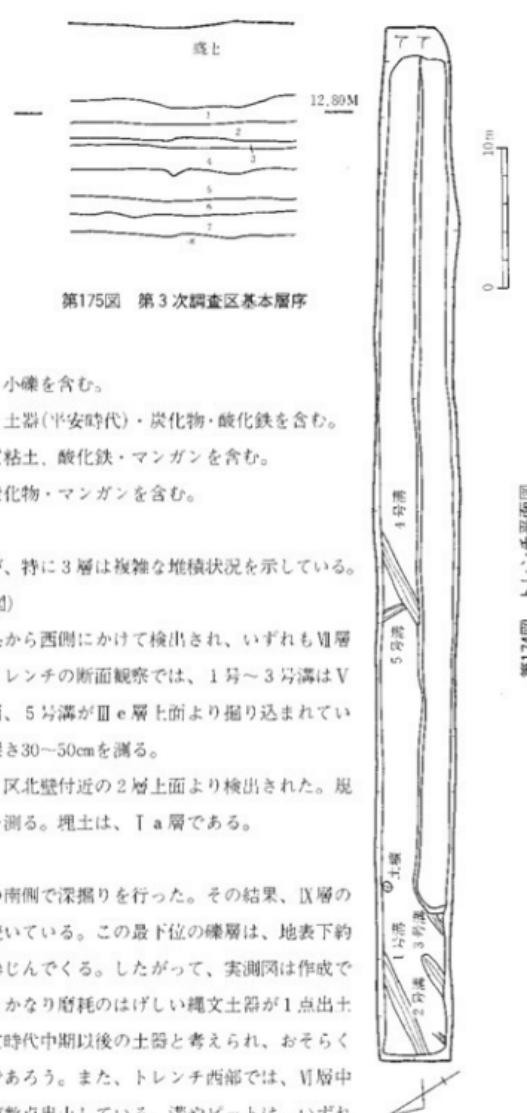
#### (3) 検出遺構 (第174図)

〈溝〉溝は、調査区中央から西側にかけて検出され、いずれもV層上面で明確に捉えられた。トレントの断面観察では、1号～3号溝はV層上面で、4号溝がV層上面、5号溝がIIIe層上面より掘り込まれている。いずれも幅2m前後、深さ30～50cmを測る。

〈ピット〉ピットは、3区北壁付近の2層上面より検出された。規模は70×80cm、深さ約60cmを測る。埋土は、Ta層である。

#### (4)まとめ

本調査区では、トレントの南側で深掘りを行った。その結果、IX層の下位には、砂礫層・礫層と続いている。この最下位の礫層は、地表下約3m付近にあり、常に水が滲じんでくる。したがって、実測図は作成できなかったが、この層中よりかなり磨耗のはげしい縄文土器が1点出土している。この土器は、縄文時代中期以後の土器と考えられ、おそらく上流より流されてきたものであろう。また、トレント西部では、V層中よりロクロ土師器・須恵器が数点出土している。溝やピットは、いずれも平安時代以後のものである。



第175図 第3次調査区基本層序  
第174図 レンチ平面図

第23表 土器観察表

区	No.	出土区	層位	器形	分類	試験文様	色調	備考
第26回	1	B15	II層	深鉢	I-3,d	内面: カギ(横) L.R.模文→錐形底文	外面: 没調子 D.Y.R.系 内面: + 7.5YR系	
第27回	1	1号土塚	想	深鉢D-a,b	IX-1	内面: ケギリ(横・凹)	外面: 从属 7.5YR系	網代玉
+	2	+	埋1	深鉢(底凸)		内面: ナガ	内面: 灰 7.5YR系	
+	3	+	埋	深鉢	IX-1	内面: ナガ	外面: 从属 7.5YR系 内面: 洗貝文 7.5YR系	本縄目
+	4	+	埋	深鉢	+	内面: ナガ 外面: ケギリ→カギ	外面: 白 7.5YR系 内面: ケギリ 7.5YR系	
第28回	1	+	理	深鉢A-a,A-i,R	IX-1	内面: ナガ(横・凹)	L.R.模文	
+	2	+	理	深鉢B,c	IX-4	内面: ナガ(横・凹)	L.R.模文	
第37回	1	8号土塚	理	鉢	II-2	内面: カギ(横)	L.R.模文→試験底線文	
第38回	1	10号土塚	堆5	深鉢C-a	IX-4	内面: ケギリ・ナガ	山地縞文, 阪底承文	
+	2	+	不明		IX-4	内面: カギ(横)	L.R.模文	
第41回	8	13号土塚	埋4	深鉢D-a,a	IX-6,b-4	内面: 台脚部, ナガ	白頭R模文, 高頭R模文	
第42回	1	E-14	8号	蓋C	見	外面: 脊部+カギ(横)	波板文→L.R.模文→織	
+	2	A-13	+	蓋D,口頭部	VII-1	外面: ナガ 内面: ナガ	無格底文, 从属底線文→豎消	外面: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	3	E-13	+	蓋B	VII-4	内面: ナガ	L.R.模文→沈継(3点)	外面: 灰 7.5YR系
+	4	F-13	+	台付皿	見	内面: ナガ		外面: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	5	E-11	+	皿I	VII-1	内面: ナガ	L.R.模文→横幅の底線文→側消	外面: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	6	E-12	+	深鉢	VII-2	内面: ナガ	内面: 2重の長脚状の底線文	外面: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
第43回	1	E-13	+	深鉢C-a	IX-4,a	内面: ナガ	R.模文	外面: 1.5V-5V模文 5YR系 内面: + 7.5YR系
+	2	E-14	+	深鉢A-a,a	IX-1,b	内面: ナガ	内面: 扇子文模文	外面: 5YR系 内面: + 7.5YR系
+	3	E-12	+	深鉢A-a,c	IX-4	内面: カギ(横・凹)	R.模文	外面: 黒褐色 内面: 黑褐色 7.5YR系
+	4	E-12	+	小切鉢	IX-8	内面: ナガ 外面: カギリ→ナガ	R.模文	外面: 1.5V-5V模文 10YR系 内面: 灰 7.5YR系
+	5	A-13	+	深鉢D	IX-6,b-4	内面: ナガ	R.L.模文, 繩文	外面: 1.5V-5V模文 10YR系 内面: 灰 7.5YR系
第44回	1	E-12	+	蓋A	IX-6,b-4	内面: ナガ	R.模文	外面: 黒褐色 10YR系 内面: + 7.5YR系
+	2	E-13	+	深鉢D-a	IX-7,b-2	内面: 脊部+カギ	腰部下端に絞形底線文	外面: 1.5V-5V模文 10YR系 内面: 灰 7.5YR系
+	3	E-13	+	深鉢A-a,c	IX-8	内面: ナガ	透水文底のくじ模文	外面: 1.5V-5V模文 10YR系 内面: + 7.5YR系
+	4	E-12	+	深鉢A-a,a	IX-8	内面: ナガ 外面: カギリ→ナガ		外面: 灰 7.5YR系
第45回	1	E-13	+	深鉢B-a	IX-7,a-2	内面: ナガ	編紐のくじ模文	外面: 灰 7.5YR系 内面: 黑褐色 10YR系
+	2	E-13	+	深鉢D-a	IX-6,a-4	内面: ナガ→ナガ	R.L.模文, 繩条底件模文	外面: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
第46回	1	E-13	+	脚部~底部	IX-7,a	内面: ナガ 内面: ナガ	なし	外面: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	2	E-14	+	脚部~底部	IX-7	内面: ナガ	なし	外面: 没調子 7.5YR系 内面: 黑褐色 7.5YR系
+	3	E-13	+	脚部~底部	見?	内面: ナガ 内面: ナガ	底綻文	外正: 1.5V-5V模文 10YR系 内面: + 7.5YR系
+	4	E-12	+	深鉢A-a,a	IX-8	内面: ナガ		外正: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
第47回	1	E-13	+	深鉢B-a	IX-7,a-2	内面: ナガ	編紐のくじ模文	外正: 1.5V-5V模文 10YR系 内面: + 7.5YR系
+	2	E-13	+	深鉢D-a	IX-6,a-4	内面: ナガ→ナガ	R.L.模文, 繩条底件模文	外正: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	3	E-15	+	深鉢A-a	IX-1,a	内面: ナガ 外面: カギリ→ナガ	R.L.模文	外正: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
第48回	1	F-13	+	深鉢A-a	IX-1,c	内面: ナガ 内面: カギ(横)	内面: 扇子文模文 外面: L.R.模文	外正: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	2	F-15	+	深鉢A-a	IX-1,c	内面: ナガ 内面: カギ(横・斜)	内面: 扇子文模文 外面: L.R.模文	外正: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系
+	3	E-11	+	深鉢	IX-1,b	内面: ナガ 内面: カギ(横)	L.R.模文	外正: 灰 7.5YR系 内面: + 7.5YR系

図 No	出土区	層位	器形	分類	調 整	文 样	色 調	備 考
第49回	1 E-15	10層	深鉢(底部)	II-1	内面 2ヶ所(縫)	RL織文	外壁 明赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	
*	2 F-16	*	鉢	II-1	内面 ナデ	L.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	内面 暗赤褐色 2.5YR5/6 外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	3 E-15	*	深鉢	II-4	内面 ナデ	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	内面 暗赤褐色 2.5YR5/6 外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	4 F-14	*	深鉢	II-4	内面 2ヶ所(縫)	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所(縫)	内面 2ヶ所(縫)
第50回	1 E-17	*	底部	II-1	内面 2ヶ所	不明織文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 *	内面 *
*	2 E-15	*	底部	II-8	内面 ナデ	-	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	内面 暗赤褐色 2.5YR5/6 外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	3 F-13	*	深鉢	II-4,a	内面 ウスリ→ミガキ	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 深赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 深赤褐色 2.5YR5/6
*	4 E-14	*	深鉢 A-c	II-4,b	内面 ナデ(横・斜・綱)	内面 織子文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	5 E-12	*	深鉢 A-c	II-4,b	内面 ナデ(横)	内面 織子文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
第51回	1 E-15	*	深鉢 A-c	II-4,a	内面 2ヶ所	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
*	2 E-14	*	深鉢 D-a	II-7,b-1	内面 ウスリ	C.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
第52回	1 D-11-12 11a層	II層部	I	-	内面 ナデ	西山式文、平行弦文、波状弦文、	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	
*	2 E-13	*	深鉢 E-c	II-1,c	内面 2ヶ所(縫)、ナデ	山形模 無刻、乳状波状文 外壁 2ヶ所(縫)	外壁 明赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	
*	3 E-14	*	深鉢 F	II-1,a	内面 ウスリ→ミガキ	LR織文、L.唐文	外壁 小暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	木造瓦(平 面) 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	4 E-13	*	深鉢 G	II-2,b	内面 ナデ(横)→ミガキ(縫)	ミガキ→沈没区面→L.唐文(先端)	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
第53回	1 E-12	*	深鉢 A-c	II-7	内面 2ヶ所(縫)	織子文(く)留文→残模文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
*	2 D-5	*	深鉢 A-c	II-1,a	内面 ナデ	R.L織文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
第54回	1 A-17	*	深鉢 A-c	II-4,a	内面 2ヶ所	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
*	2 F-13	*	底部	II-8	内面 ナデ	-	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	3 E-12	*	深鉢	II-4	内面 ナデ	不明織文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
*	4 E-11	*	底部(深鉢)	II-1	内面 ナデ(横) 外壁 ナド	R.L織文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 2ヶ所
第55回	1 E-11-12 11c層	深鉢	II-3,b	内面 2ヶ所(縫)→カギ、斜 面部ナデ	山形模→内折の突 柄模(小)後藤一利川根模群 路井上→R.L.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	木造瓦(平 面) 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	2 E-12	*	深鉢	II-3,b	内面 ナデ	LR.L織文→山形模・曲折模 R.L.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
第56回	1 E-12	*	深鉢	II-3,a,b	内面 2ヶ所(縫・斜) 外壁 ナド	R.L.唐文→山形模・残模 R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	2 E-12	*	深鉢	II-3,b	内面 2ヶ所(縫・斜)	R.L.(ア)織文→残模状の背景	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
第57回	1 E-12	*	深鉢	II-3,a	内面 ナデ(縫)	R.L.R織文→露版状の背景	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	2 C-11 11b層	深鉢	II-4	内面 ナデ	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	
第58回	1 E-13	10層	塊	II-1	内面 ナデ(縫)	R.L.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
第59回	2 E-11	10層	小形鉢	II-3,b	内面 ナデ(縫・斜) 外壁 ナド・ナデ	R.L.(ア)織文→残模状の背景	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	3 E-17	10層	小形鉢	II-8	内面 ナデ(縫) 外壁 ナド	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
第60回	1 E-11	11層	小形深鉢	II-2,k	内面 ナデ	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6
*	2 F-15	11層	ミニチュア	II-8	内面 ナデ 外壁 ナズリ・ニコテ	-	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 *	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 *

第24表 円盤状土製品属性表

## 遺構内出土

持因番号	地點	上層部位	状 況	出土地点	相 承	持因番号	出土部位	上層部位	重 量(g)	状 況	相 承	持因番号
Q5019	1号地点	別 游	9.3	下 大	*	第50回	10 层	2号地點	25.1	大形出張脚切削	b	
*	2	口凹	18.0	中等	R.L.唐文	*	10	2号地點	7.2	充 制	b	
第59回	2 E-11	10層	小形鉢	II-3,b	内面 ナデ(縫・斜) 外壁 ナド・ナデ	R.L.(ア)織文→残模状の背景	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6					
*	3 E-17	10層	小形鉢	II-8	内面 ナデ(縫) 外壁 ナド	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6					
第60回	1 E-11	11層	小形深鉢	II-2,k	内面 ナデ	R.唐文	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 暗赤褐色 2.5YR5/6					
*	2 F-15	11層	ミニチュア	II-8	内面 ナデ 外壁 ナズリ・ニコテ	-	外壁 暗赤褐色 2.5YR5/6 内面 *					

特征	出土地点	上层地层	重砂量(%)	状 泱	加工场	標 級	特征番号	出土地点	土层特征	重砂量(%)	状 泱	加工场	標 級	特征
第12.23号	F-12	E-25	6.1	光 形	b	K-4	第12.23号	E-14	泥 土	16.5	光 形	d	第-3	
*	6	*	14.9	月 欠	d	K-4	*	21	*	22.4	*	c	第-5	
*	7	*	29.2	光 形	a	K-1	*	22	*	31.7	*	d	第-1	
*	8	*	9.7	*	b	M-2	*	23	*	17.0	*	d	第-1	
*	9	*	16.0	*	d	L-1	*	24	E-15	26.7	月 欠	c	第-5	
*	10	E-13	6.0	*	d	L-4	*	25	*	8.4	完 整	b	第-1	
*	11	*	6.0	半 欠	d	K-8	第12.23号	E-18	*	15.8	*	c	第-5	
*	12	*	8.3	光 形	d	砂	*	27	*	14.4	*	c	第-4	
*	13	*	21.2	*	a	-般夾層	*	28	*	15.8	*	d	第-4	全夾層
*	14	*	6.3	*	b	K-4	*	29	*	7.6	- 滲水	d	第-4	
*	15	*	15.3	月 欠	b	*	*	33	*	7.1	光 形	b	第-7	
*	16	*	27.1	*	c	*	*	31	F-14	20.2	*	d	第-4	
*	17	100番	43.2	光 形	d	M-2	*	32	F-17	38.8	*	d	第-4	
*	18	E-14	14.0	*	d	L-8	*	33	* 34	37.7	*	d	第-4	
*	19	*	10.1	*	d	P-8	*	34	*	8.9	*	b	第-1	

## 10表

特征	出土地点	上层地层	重砂量(%)	状 泱	加工场	標 級	特征番号	出土地点	上层地层	重砂量(%)	状 泱	加工场	標 級	特征
第12.24号	A-10	泥質下半	13.6	光 形	a	第12.24号	E-15	飼 頭	*	22.3	半 欠	d	第-2	
*	2	B-11	27.1	*	c	K-1	*	34	*	16.6	完 整	d	第-1	
*	3	*	16.3	*	c	K-8	*	35	E-14	6.4	*	c	第-4	
*	4	U-17	17.6	*	c	K-4	*	26	*	13.9	*	b	第-4	
*	5	C-15	16.7	*	a	K-8	*	37	*	17.7	*	c	第-4	
*	6	E-15	21.6	*	a	K-1	*	38	*	13.6	半 欠	b	第-8	
*	7	*	9.0	*	a	K-8	*	39	*	11.0	光 形	c	第-4	
*	8	*	32.1	*	c	K-1	*	40	* 41	37.7	*	c	第-4	
*	9	*	12.4	*	d	N-5	*	11	* 42	26.6	*	c	第-4	
*	10	*	15.1	-般X	c	K-8	*	42	E-17	5.2	*	c	第-3	
*	11	*	8.2	光 形	b	M-1	*	43	*	23.6	*	c	第-4	
*	12	*	11.7	*	c	K-7	*	45	*	21.6	*	d	第-4	
*	13	*	19.5	半 欠	c	K-8	*	42	*	15.8	*	c	第-4	
*	14	*	39.0	-般X	b	K-8	*	46	*	5.0	*	c	第-4	
*	15	*	5.3	光 形	d	K-4	*	47	*	19.5	*	b	第-1	
*	16	E-12	6.8	半 欠	b	K-7	*	48	*	7.4	*	c	第-1	
*	17	*	7.1	*	d	K-4	*	49	E-17	7.4	-般X	c	第-3	
*	18	*	13.3	光 形	e	M-1	第12.24号	*	50	26.6	半 欠	c	第-3	
第12.25号	*	*	20.2	*	b	K-8	第12.25号	*	51	10.0	光 形	b	第-4	
*	20	*	19.5	*	b	K-2	第12.25号	E-16	*	7.6	*	c	第-4	
*	21	*	8.8	*	c	M-1	*	53	*	18.2	*	c	第-4	
*	22	*	7.4	*	b	K-8	*	54	E-19	13.8	*	b	第-5	
*	23	*	24.8	-般X	b	M-1	*	55	F-14	11.4	半 欠	a	第-8	
*	24	*	15.2	光 形	c	K-1	*	56	*	24.8	光 形	c	第-1	
*	25	*	27.6	-般X下	b	K-8	*	57	*	16.8	*	b	第-4	
*	26	*	12.8	光 形	b	K-8	*	58	* 59	63.4	*	c	第-4	
*	27	*	13.2	*	b	K-4	*	59	F-15	5.6	半 欠	b	第-1	
*	28	*	17.0	*	b	K-5	*	60	F-16	11.7	光 形	b	第-4	
*	29	*	10.9	-般X	e	M-3	*	61	*	22.8	*	c	第-8	
*	30	*	10.9	*	b	K-4	*	62	*	7.5	*	d	第-2	
*	31	E-23	18.6	*	b	K-4	*	63	F-17	13.9	-般X	b	第-2	
*	32	*	4.9	*	b	K-1?	*	64	*	8.9	光 形	d	第-4	光形

## 11表

特征	出土地点	上层地层	重砂量(%)	状 泱	加工场	標 級	特征番号	出土地点	土层特征	重砂量(%)	状 泱	加工场	標 級	特征	
第12.26号	B-18	飼 頭	9.1	失 故?	a	K-8	第12.26号	E-13	泥 土	23.5	光 形	c	不定-1		
*	2	C-4	7.7	光 形	c	K-1?	*	18	*	15.9	*	c	第-7		
*	3	C-16	17.9	-般X	e	M-1	*	19	*	11.7	*	c	第 4		
*	4	D-10	8.1	-般X	c	K-3	*	20	*	12.9	*	b	第-1		
*	5	D-1	5.2	迷走河床	d	M-1	*	21	*	4.6	-般X	b	第-5		
*	6	*	10.9	光 形	b	K-4	*	22	E-14	12.5	*	c	第 5		
*	7	*	15.9	-般X	b	K-7	*	23	*	14.7	光 形	c	第-7		
*	8	F-11	20.5	光 形	e	M-2	*	24	* 25	43.1	*	b	第-4		
*	9	E-12	10.2	*	e	V-1	*	25	* 26	解 部	*	b	第 1?		
*	10	*	28.5	半 欠	e	K-1?	*	27	*	21.3	*	b	第-4		
*	11	*	13.0	光 形	c	K-1?	*	28	*	21.3	*	b	第-2		
*	12	E-13	27.0	*	e	M-2	*	28	E-15	21.3	-般X	c	第-4		
第12.27号	*	飼 頭	5.4	-般X	b	M-1	*	29	* 30	27.2	光 形	a	第 5		
*	14	*	12.9	光 形	b	K-7	*	30	* 31	1.5	24.6	*	b	第-4	
*	15	*	25.9	*	b	J-1?	*	31	* 32	22.2	*	c	第-8		
*	16	*	14.4	*	c	瓦 壓 1	*	32	*	22.2	*	c	第 1		

地図番号	出土場所	土器部位	断面形	状況	断面形	調査者	神社番号	出土場所	土器部位	断面形	状況	地図	地名	
第125回33	E-16	底 部	20.3	一部欠	b	新代	第127回47	F-14	側 面	20.8	一部欠	a	村2	
+	34	側 部	17.4	丸 形	b	新一	+	15	*	9.7	*	c	村3?	
+	35	口 横部	13.1	*	b	新2	+	49	*	9.6	丸 形	c	村3	
+	36	側 部	19.3	*	c	新3	+	52	F-15	10.0	丸 形	c	村2	
第125回37	+	*	59.9	*	c	新4	+	52	*	13.9	側 面	b	村4	
第125回38	E-17	*	11.9	*	c	新4	+	52	*	13.2	丸 形	c	村4	
+	39	*	16.6	*	b	新4	+	53	*	13.2	丸 形	c	村4	
+	40	*	19.9	一部欠	c	新4	+	54	F-16	25.7	*	c	村4	
+	41	E-17,18	*	22.3	丸 形	c	新4	+	56	*	18.0	丸 形	c	村4
第125回42	b	13	*	9.6	c	新4	+	56	*	32.9	丸 形	c	村4	
+	43	*	12.2	丸 形	b	新4	+	57	*	9.5	丸 形	b	村1	
+	44	*	9.9	一部欠	c	新4	+	58	*	15.0	丸 形	c	村4	
+	45	*	50.1	*	c	新4	+	59	*	23.7	*	c	村4	
+	46	*	13.8	*	c	新4	+	61	*	30.8	*	c	村4	

書類

地図番号	出土場所	土器部位	断面形	状況	地工状況	周 围	地図番号	出土場所	土器部位	断面形	状況	地工状況	周 围
第125回1	—	底 部	35.5	底欠	c	新4-8	第127回44	—	新 4	27.3	丸 形	*	村1
+	2	b	6.0	半 欠	d	新4-4	+	5	—	16.4	*	a	村2
+	3	*	30.2	丸 形	b	新4-1	+	6	—	*	*	c	村4

第25表 石錐属性表

(注) 表記に\*が付されているものは研削しているため、残存部位のみで計測したものである。

出土区段番	石 锌	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	付 装 物	火熱痕	破 構	石材打点位置	加工状況	分類	実測箇所
E13 8	メノウ	15.2	9.8	3.1	無	アスファルト	基	—	良	II	第129回1
E15 6	黄 鉄	16.2	12.4	2.6	—	—	先端・側面	—	良	IV	第129回3
F16 8	メノウ	19.8	10.9	3.2	—	—	—	—	良	IV	—
F15 8	黄 鉄	23.6	13.2	2.3	—	—	—	—	良	IV	第129回2
F15 10	メノウ	19.8	12.2	3.6	—	—	先端・側面	—	良	IV	第133回1
F13 11	メノウ	21.2	12.8	4.0	—	—	先 端	—	良	IV	第139回1
F16 11	黄 鉄	26.2	11.8	3.7	墨跡アスファルト	—	—	—	良	IV	第129回2
F17 8	メノウ	22.2	20.4	8.7	—	—	基 部	—	良	IV	第129回4
E11 8	メノウ	22.5	16.7	9.7	—	—	—	—	良	IV	第129回5
F14 8	黄 鉄	30.1	21.2	9.8	—	—	—	—	良	IV	第129回6
E13 10	メノウ	26.0	17.3	7.1	—	—	—	—	良	IV	第133回2
F15 10	メノウ	22.2	15.9	5.8	—	—	—	—	良	IV	第133回3
E13 10	メノウ	24.1	15.3	3.8	—	—	—	—	良	IV	第133回4
E18 11	メノウ	20.8	15.1	4.0	金 屋	—	—	—	良	IV	第139回4
E13 11	メノウ	22.1	13.2	5.2	—	—	—	—	良	IV	第139回7
E11 8	黄 鉄	24.5	15.8	5.0	—	—	—	—	良	IV	第129回7
F14 8	黄 鉄	22.2	18.1	9.2	—	—	—	—	良	IV	第129回8
2 T 8 10	メノウ	25.5	18.2	5.1	—	—	—	—	良	IV	第139回6
E13 10	鉛 砂	23.2	14.0	4.9	全 面	例 造	—	手前面	良	IV	—
E11 10	メノウ	23.4	17.2	6.2	—	—	—	—	良	IV	第133回6
E13 11	黄 鉄	26.0	18.4	4.7	—	—	—	—	良	IV	第139回4
E11 11	メノウ	19.2	16.0	5.1	—	—	—	—	良	IV	第139回5
E12 8	黄 鉄	21.0	18.2	2.9	全 面	—	—	—	良	IV	第129回9
E13 10	メノウ	16.0	15.1	7.3	—	—	—	—	良	IV	第133回7
E11 10	メノウ	21.4	17.8	2.8	—	—	—	—	良	IV	第133回8
E11 10	黄 鉄	21.8	19.0	3.1	—	—	—	—	良	IV	第133回9
E11 11	黄 鉄	27.0	16.3	4.2	—	—	—	—	良	IV	—
E-F 11	黄 鉄	24.6	18.6	4.1	下 部	上 端	—	—	良	IV	—
E16 11	メノウ	22.1	14.8	2.1	—	—	—	—	良	IV	第139回8

第26表 石錐属性表

出土区段番	石 锌	高さ	幅	厚さ	先端部	先端部	付 装 物	火熱痕	破 構	加工状況	分類	実測箇所
D10 4	黄 鉄	43.0	16.2	9.3	—	—	—	先端・側面	手 前 面	—	II	—
E17 10	*	49.2	15.6	7.2	—	—	—	—	—	—	III	第133回10
F14 10	メノウ	25.2	5.6	4.1	△	先端部	—	—	—	—	III	第133回11
1号1層 1	黄 鉄	42.0	21.2	5.1	23.0	12.6	△	—	—	—	II	—
F16 10	流紋岩	28.1	18.2	6.2	17.2	15.8	△	—	—	先端部・周辺	II	第133回12
E11 11	*	28.3	23.2	6.4	13.3	7.6	△	—	—	先端部・周辺	II	第133回9
E-F 10	黄 鉄	56.7	35.2	7.1	26.2	27.5	△	—	—	先端部・周辺	II	第133回14
E14 11	黄 鉄	40.0	24.2	11.3	14.5	18.1	△	—	—	先端部	II	第133回10
F14 11	黄 鉄	32.1	15.5	8.8	13.0	8.0	△	—	—	先端部	II	第133回11
1号1層 2	黄 鉄	19.4	14.8	5.3	4.2	5.0	□	—	—	先端部・周辺	II	—
E13 8 上	黄 鉄	31.2	17.1	7.9	—	—	—	—	—	先端部・周辺	II	第129回10
E17 10	黄 鉄	27.3	19.2	4.2	6.9	9.3	△	—	—	先端部・周辺	II	第133回13
E12 10	黄 鉄	33.1	28.9	5.4	6.3	14.6	△	—	—	先端部・周辺	II	第133回12
E14 11	メノウ	62.8	19.0	14.2	15.4	11.8	△	—	—	先端部・周辺	II	第133回13

出上区別	石材	長さ	幅	高さ	先端部長	先端部幅	先端部厚	直角物	六角物	楕円物	圓柱状物	分類	表面状況
下石器	石	39.8	35.4	16.1				○				目	
上石器	石	24.6	27.3	6.0				○				目	第133回15

第27表 尖頭器属性表

出上区別	石材	長さ	幅	高さ	先端部長	先端部幅	先端部厚	直角物	六角物	楕円物	圓柱状物	分類	表面状況
D 10 10	真 石	46.5	28.8	10.7				上	下			目	第134回19
E 11 10	真 石	43.7	40.8	20.3				上	下			目	第134回20
E 15 10	真 石	15.8×	19.2×	4.1				上	下			目	第134回21
F 13 10	ア ノウ	25.5	27.2	9.2				上	下			目	第134回22

第28表 石匙属性表

出上区別	石材	長さ	幅	高さ	先端部長	先端部幅	先端部厚	直角物	六角物	楕円物	圓柱状物	分類	表面状況
C 13 8	真 石	33.8	35.8	10.4				上	下			目	第129回11
E 12 8	真 石	40.0	25.9	10.1				上	下			目	第129回12
E 12 8	真 石	39.3	17.1	6.2				上	下			目	第129回13
E 16 8	真 石	28.2	31.2	10.9				上	下			目	第129回14
E 12 10	真 石	37.9	32.2	8.1				上	下			目	第133回16
E 15 10	真 石	62.4	26.7	8.0				上	下			目	第133回17
F 18 10	真 石	74.5	20.2	8.8				上	下			目	第134回18

第29表 砥石器属性表

出上区別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形	刃	口	頭	側	刃	頭	側	表面状況
F14 8	b	44.8	35.1	13.7	500	束縛	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	I
E11 11	b	49.8	29.5	10.8	30	内縫	ハハ	目						
E12 8	a	73.5	25.7	12.0	120	未端有	田字	目						
F15 11	b	86.8	111.8	22.8	510	束縛	ハハ	目						
F18 11	b	147.8	125.8	43.8	1035	束縛	ハハ	目						
E12 10	b	192.0	142.0	96.0	3065	束縛	ハハ	目						
E17 11	b	243.0	175.0	111.2	3040	束縛	ハハ	目						
F12 8	e				380									IV
F12 8	d				160									IV
F19 10	e				1835									IV
E15 10	e				380									IV
E12 10	e				150									IV
E12 11	e				90									IV
上石器	a	134.6	84.8	51.4	660	直端	口	口	口	口	口	口	口	V
F12 8	b	77.5	67.5	46.2	243	直端	口	口	口	口	口	口	口	V
E13 8	b	112.3	89.8	65.3	620	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F15 8	a	101.3	53.3	44.2	495	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
D12 8	b	95.0	79.8	63.2	470	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E12 8	b	123.5	87.8	47.3	715	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F13 8	b	95.2	55.2	19.2	250	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E12 8~10	b	125.4	97.3	44.3	680	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F13 8~10	d	85.2	60.8	44.8	395	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F17 10	b	76.0	68.9	66.8	370	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
B11 10	b	113.7	68.8	56.3	360	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
D 3 10	a	119.0	79.8	73.2	390	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F15 10	d	124.1	72.7	27.6	300	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E13 10	b	87.1	74.3	53.8	460	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
G12 10	b	112.4	80.6	34.0	460	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F12 10	b	108.4	81.6	50.6	660	先端八	口	口	口	口	口	口	口	目
E 4 11	b	89.0	85.6	61.2	745	先端口	口	口	口	口	口	口	口	目
D12 11	b	79.5	71.3	42.0	370	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E12 11	b	114.4	96.4	38.1	700	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E15 11	b	112.2	86.4	46.7	670	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E14 11	b	89.2	87.9	41.1	450	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E12 11	b	97.2	78.9	56.3	645	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E17 11	b	86.2	51.8	23.0	120	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E16 11	a	114.8	75.3	39.4	490	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
F11 11	a	58.3	89.4	45.2	44.5	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E11 11	b	111.0	71.8	27.3	485	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E12 11	b	111.3	76.6	35.7	435	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
A17 11	d	111.8	71.7	45.0	490	直端	口	口	口	口	口	口	口	目
E15 11	b	72.9	62.6	44.8	340	先端八	口	口	口	口	口	口	口	目
F16 11	b	116.7	59.3	30.5	434	先端口	口	口	口	口	口	口	口	目
E17 11	b	114.3	91.5	58.3	990	先端口 直端近口	口	口	口	口	口	口	口	目
F17 11	s	115.5	106.9	41.8	795	直端	口	口	口	口	口	口	口	目

出土地位置	石 特	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	材 质	特 性	回 带	形 様	系 列
E15 11	b	62.1	56.2	59.3	275	周辺 ハ	二 面 周 囲	II	V	
F15 11	b	127.2	114.5	68.3	1135		二 面 周 围	II	V	
E17 11	d	128.9	87.9	57.3	810		二 面 周 围	II	*	
F18 11	b	111.1	73.1	41.0	430	表面 粗?	二 面 周 围	II	*	
E18 11	b	104.5	75.6	45.7	490		二 面 ハ	II	*	
E13 11	b	129.0	68.2	35.9	495		周 围	II	*	
A19 11	a	111.9	89.5	38.8	370	側面 ハ	周 围	II	*	
E19 11	b	95.7	77.2	39.9	320		二 面 周 围	II	*	
F16 11	b	120.8	76.1	41.2	430		二 面 ハ	II	*	
D12 11	b	119.2	74.0	35.9	330	端 面	II	II	*	
E13 11	b	108.9	84.6	45.1	385	端 面	II	*	*	
F15 11	b	124.3	83.3	44.8	780		二 面 周 围	II	*	
C11 11	b	122.2	72.8	43.8	568	端 面	周 围	II	*	
F16 11	b	106.9	76.8	60.0	740		二 面 周 围	II	*	
F17 11	b	89.8	77.7	28.4	280	周 ハ	II	*	*	
F15 11	b	87.4	65.4	21.8	235	周 ハ	II	*	*	
E19 11	b	106.8	67.4	33.0	370		II	*	*	
D10 11	b	100.9	81.1	49.7	580	周辺 ハ	II	II	*	第15回50
F.F 11	a	98.0	82.9	51.2	620	一端 ハ	II	II	*	第145回49
E15 11	b	89.2	78.3	50.7	505		II	*	*	第144回16
F16 11	b	93.8	78.1	47.8	460		II	*	*	第144回48
2.T 11	b	155.6	93.1	79.8	840		II	*	*	第144回47
F16 11	b	67.2	63.2	44.0	290		二 床	II	*	第144回44
E18 11	b	74.7	61.0	37.0	190		二 床	II	*	第144回45
E11 11	b	136.9	86.7	36.2	610	周辺 ハ	周 围	II	*	
不 無	b	73.7	72.6	66.2	440	周辺 ハ	II	*	*	
不 無	b	94.0	82.3	50.2	349		二 面 周 围	II	*	V
1.岩上 砂	c	54.9	37.1	29.0	70	先端 ハ	二 面	II	V	
9.岩上 砂	c	68.8	55.9	35.8	130	先端 ハ	II	*	V	
E14 11	c	124.0	91.2	60.3	915	周辺 ハ	II	*	*	
E15 11	b	82.1	56.2	50.3	275	周辺 ハ	二 面 周 围	II	*	
E17 11	b	93.7	84.8	79.1	970		II	*	*	
F11 11	b	72.6	58.0	55.7	320		II	*	*	第132回13
1.弓 扇	a	95.6%	56.2	34.7	275	一端 ハ	II	*	*	
F15 10	b	130.4	54.6	37.4	445	周辺 ハ	II	*	*	
F14 10	a	122.8	58.2	19.1	220	周辺 ハ	周 辺	II	*	
E14 10	b	152.5	57.9	31.2	560	先端 ハ	周 围	II	*	第137回62
A13 10	b	122.7	74.5	29.1	270	周 围 ハ	II	*	*	第137回51
E15 11	a	109.2	56.1	40.4	305	先端 ハ	II	*	*	
D10 11	b	111.7	56.8	41.5	380	周 围	II	*	*	
C.3-4 11	b	168.4	94.0	31.8	695	周 围	II	*	*	
F13 11	b	112.6	55.9	42.1	360	周 围	II	*	*	
E.5 11	b	110.6	47.7	28.3	195	周辺 ハ	周 围	II	*	
E.5 11	c	149.2	70.8	49.2	400	周辺 ハ	周 围	II	*	
F15 11	c	194.0	81.2	51.5	690	(一端 ハ) ?	(四面) ?	II	*	
1.弓 扇	b	116.8	46.6	39.2	320	(一端 ハ) ?	(一端 ハ) ?	II	*	
A13 8	a	118.3	39.7	20.9	160	周 辺 ハ	周 围	II	*	第132区66
E13 8	a	95.0%	37.4	33.6	170	周 辺 ハ	II	*	*	
F14 11	a	143.2	56.4	41.2	325	一端 ハ	周 辺 ハ	II	*	
F17 10	a	178.0	64.3	37.2	670	周 围	II	*	*	
F18 11	b	158.2	59.6	36.2	420	周 围	II	*	*	
E18 11	b	166.2	64.5	41.7	485	周 围	II	*	*	
F11 11	b	179.9	68.8	44.9	140	周 辺 ハ	周 围	II	*	第143回62
F16 8	a	116.8	12.6	37.8	360	周 辺 ハ	II	*	*	第132区61
F.7-F.17-84 8	a	93.6	47.3	26.7	270	周 辺 ハ	II	*	*	
F.19 11	a	110.4	32.8	25.8	160	一端 ハ	II	*	*	
A13 11	a	119.5	35.6	33.8	260	周 围	II	*	*	第137回38
E12 8	a	53.2%	40.3	22.2	190	先端 ハ	周 围	II	*	
7.弓 扇	a	54.2%	48.8	26.1	75	周 围	II	*	*	
F12 11	a	69.0%	46.4	24.7	125	周 辺 ハ	II	*	*	第143回40

(注) 石材 a. 粒子が細かく極めてかたいもの b. やや多孔質でかたいもの c. 粒子が粗かくやわらかいもの

d. 多孔質でかたいもの e. 多孔質でやわらかいもの

打痕 イ. 滅状の痕跡 ロ. 円形もしくは略円形の渦状の痕跡 ハ. 斜離面

凹痕 オ.  ブ.  ヨ.  ハ. 

図版1

1. 遺跡遠景  
(高館山より望む)



2. 遺跡近景  
(東→西)

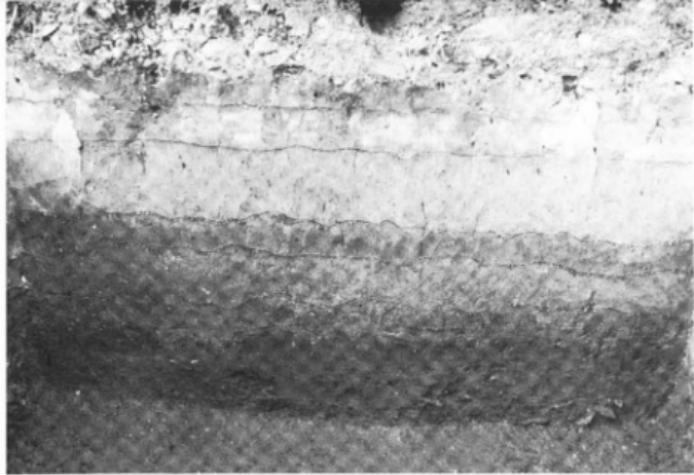


3. 第3・第4トレンチ  
調査前の状況  
(南→北)

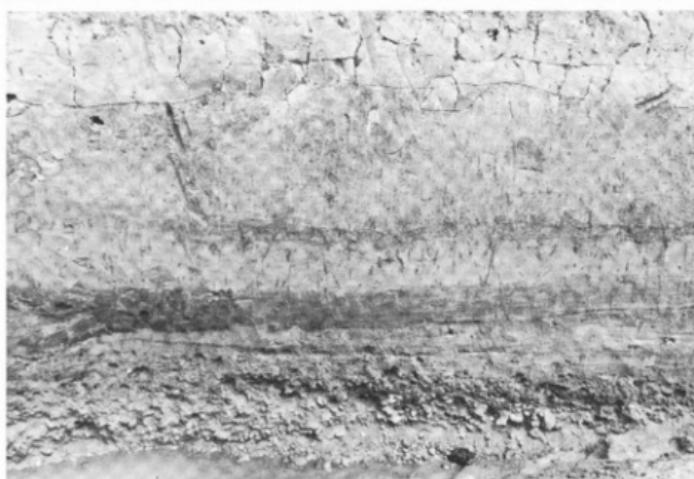


図版2

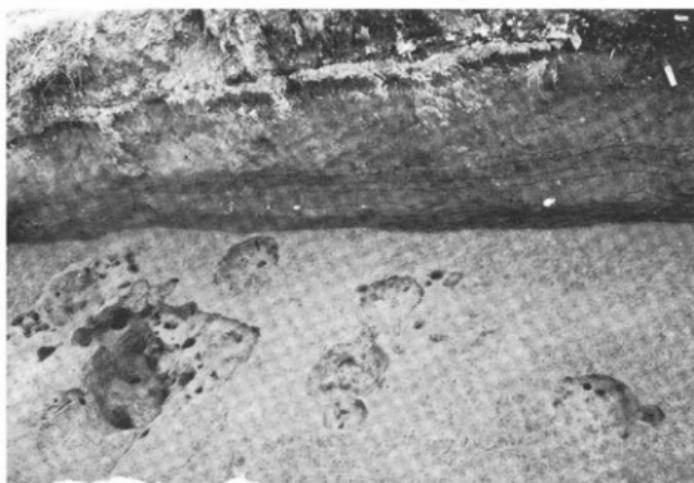
1. 基本層位



2. 1号河川跡断面  
(B-17区北壁)

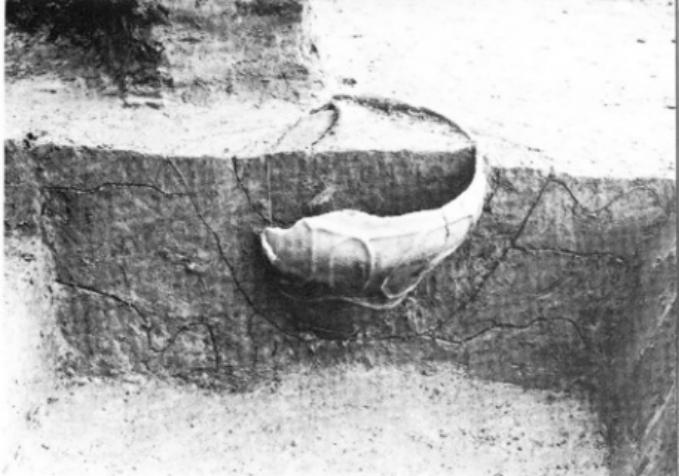


3. 第2トレンチ土壤群  
(北→南)

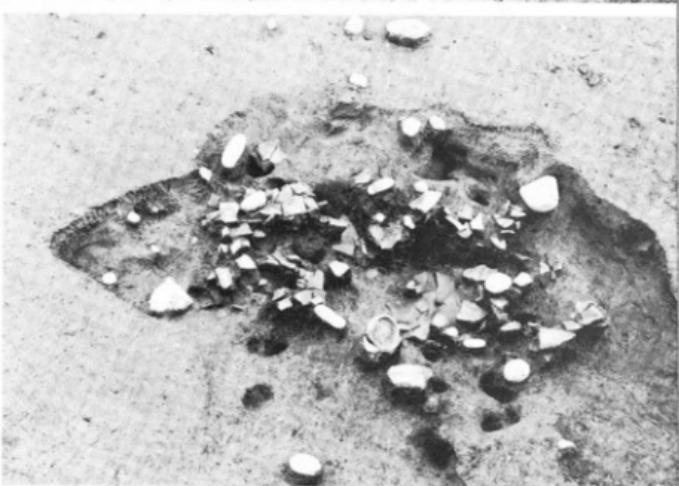


図版3

1. 第1トレンチ埋甕跡



2. 1号土壤遺物出土状況  
(南→北)



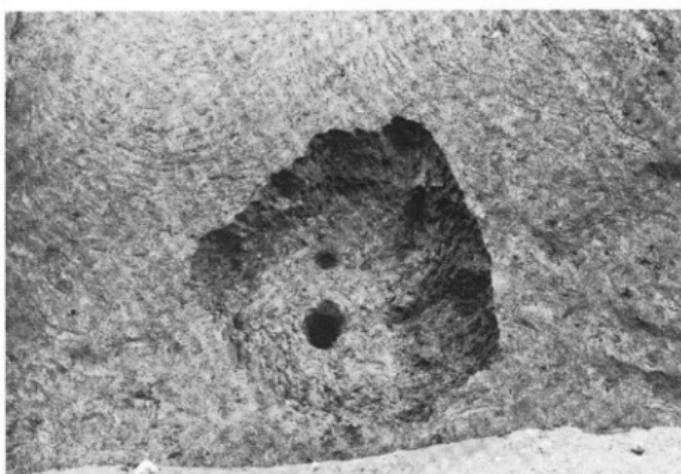
3. 1号・2号土壤全景  
(南→北)



1. 3号土壤全景  
(北→南)



2. 4号土壤全景  
(南→北)



3. 5号土壤全景  
(南→北)



图版5

1. 6号土壤全景  
(东→西)



2. 7号土壤全景  
(北→南)



3. 7号土壤石制品  
出土状况



図版6

1. 8号土壤全景  
(西→東)



2. 9号土壤全景  
(西→東)

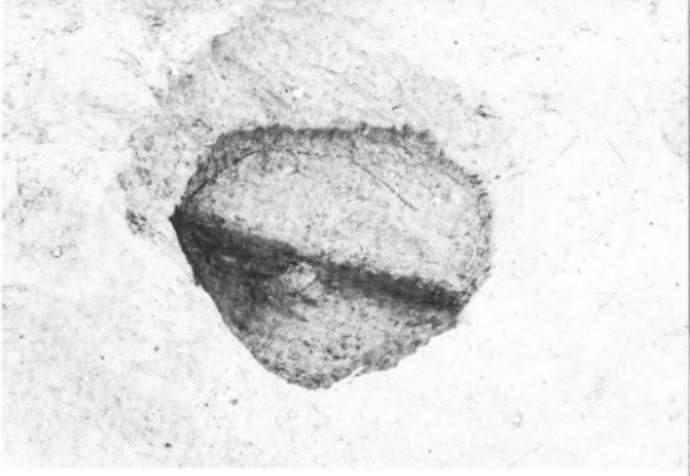


3. 10号土壤全景  
(南→北)



図版7

1. 11号土壤全景  
(西→東)



2. 13号土壤全景  
(南→北)



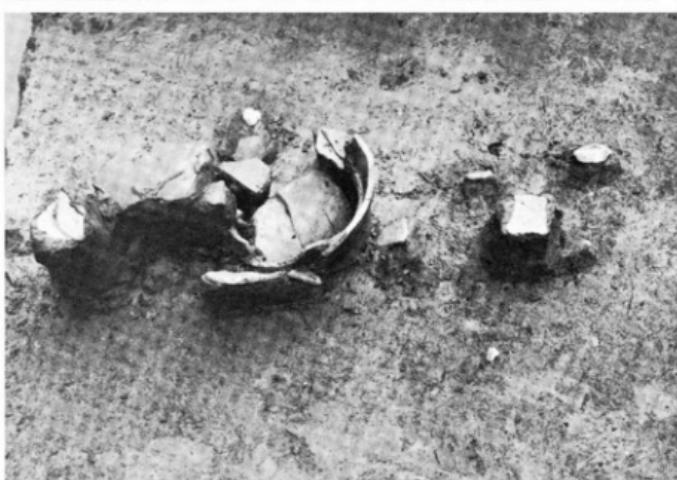
3. 第2トレンチ遺物  
出土状況  
(南→北)



1. E-14区第8層出土  
深鉢形土器



2. D-5区第11層出土  
土器



3. E-14区第11層出土  
土器



図版9

1. E-12区第11c層出土  
土器



2. E-13区第10層出土  
イノシシ形土製品



3. F-13区第10層出土  
スプーン形土製品



1. E-13区第8層出土  
壺形土器(行方不明)



2. 第1トレーナー1号河川跡南岸検出状況  
(西→東)



3. 第3トレーナー1号河川跡  
南岸検出状況

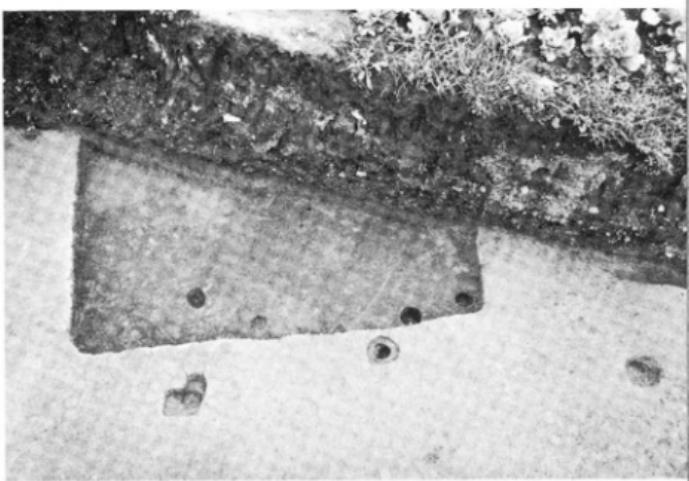


図版11

1. 第3トレンチ1号河  
川跡北岸検出状況



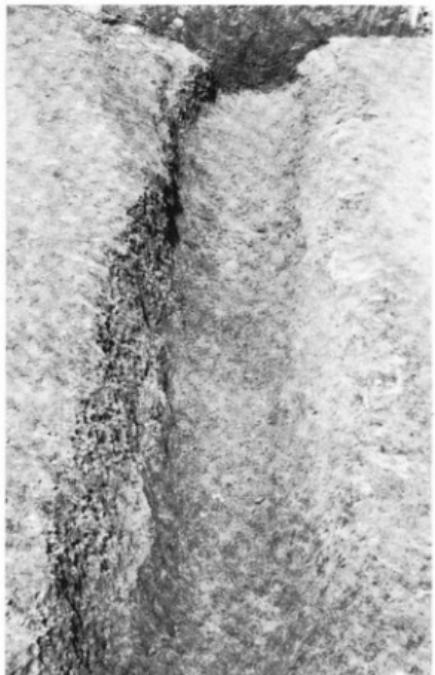
2. 第4トレンチ1号住  
居跡全景（北→南）



3. 第1トレンチ1号・  
2号溝全景（東→西）



1. 第2トレンチ4号溝  
全景(南→北)



2. 第3トレンチ1号溝全景(東→西)



3. 第3トレンチ3号溝全景(東→西)

図版13

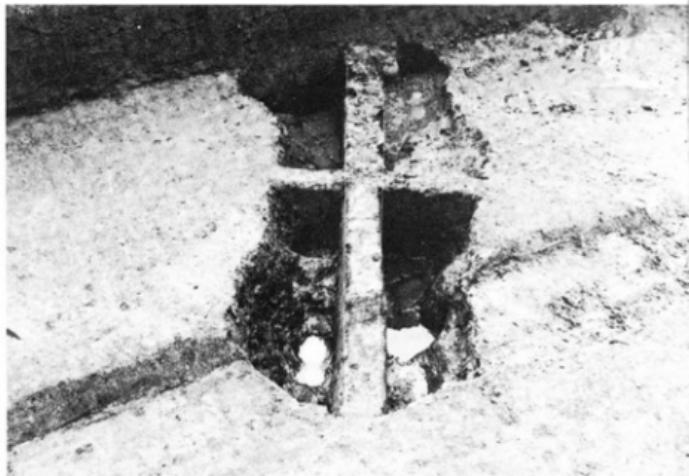
1. 第1トレーンチ1号河  
川跡出土須恵器壺



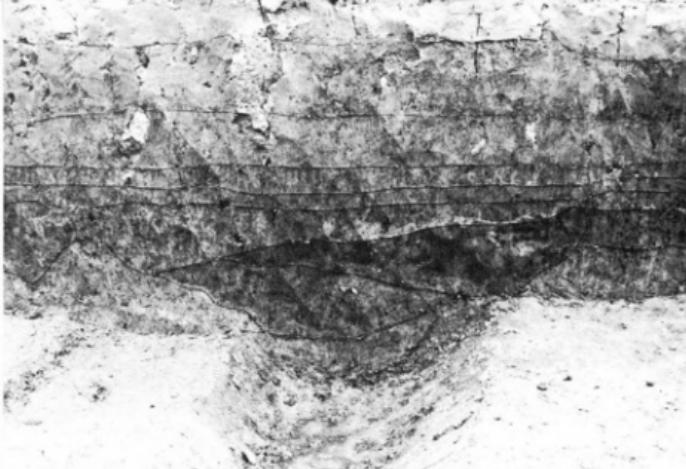
2. 第1次調査  
遺構確認状況  
(1~7区)



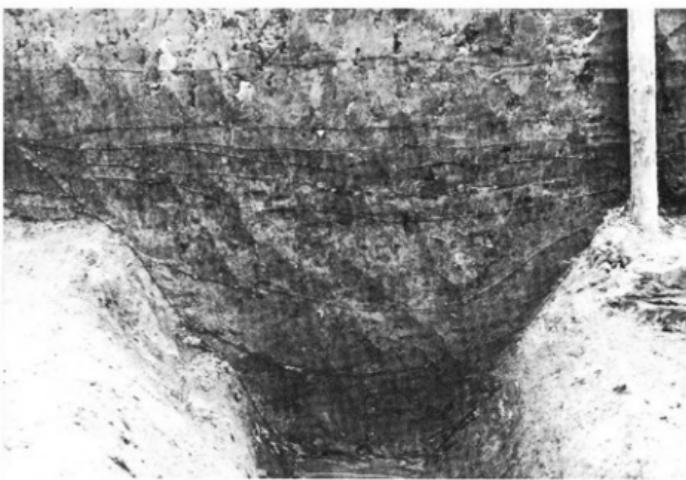
3. 第1次調査  
W10付近5号土壤  
(2区)



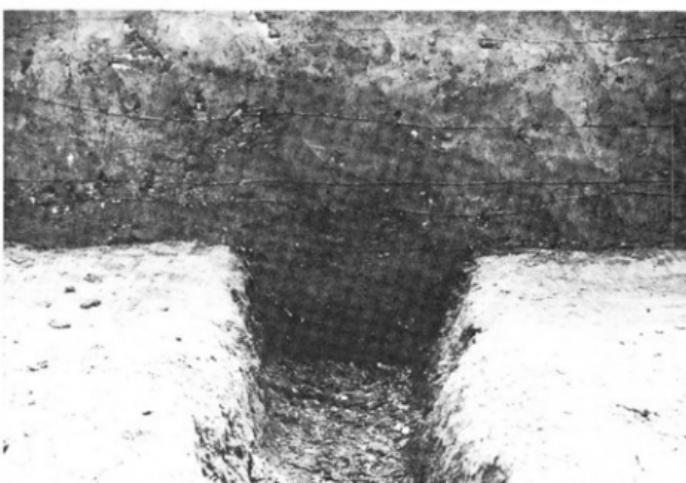
1. 第1次調査  
8号・9号溝断面(4区)



2. 第1次調査  
5号溝断面(5区)

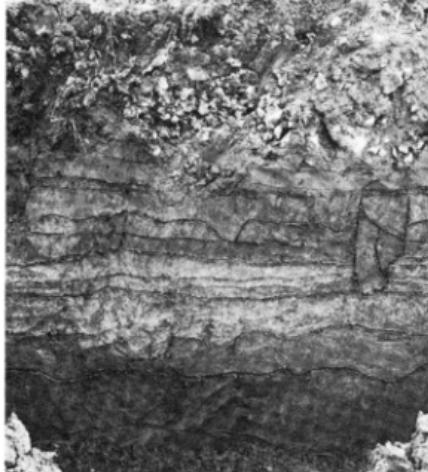


3. 第1次調査  
6号溝断面(5区)



図版15

1. 第3次調査トレンチ  
北壁断面



2. 第3次調査  
1号溝全景



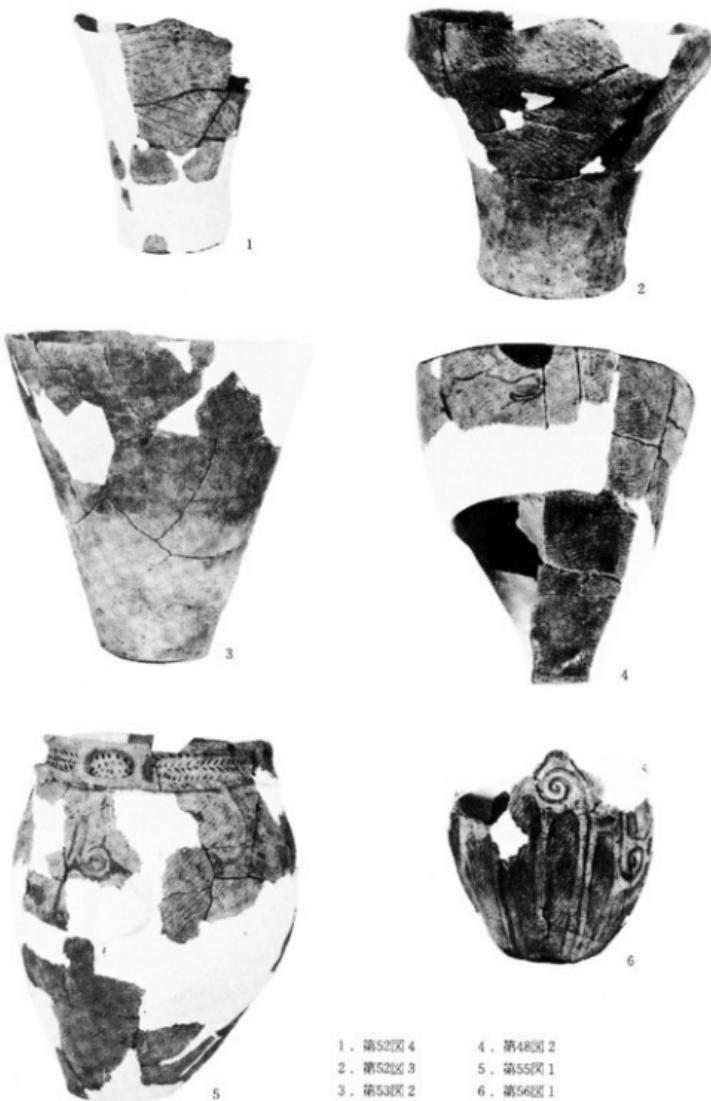
3. 第3次調査  
3号・4号溝全景



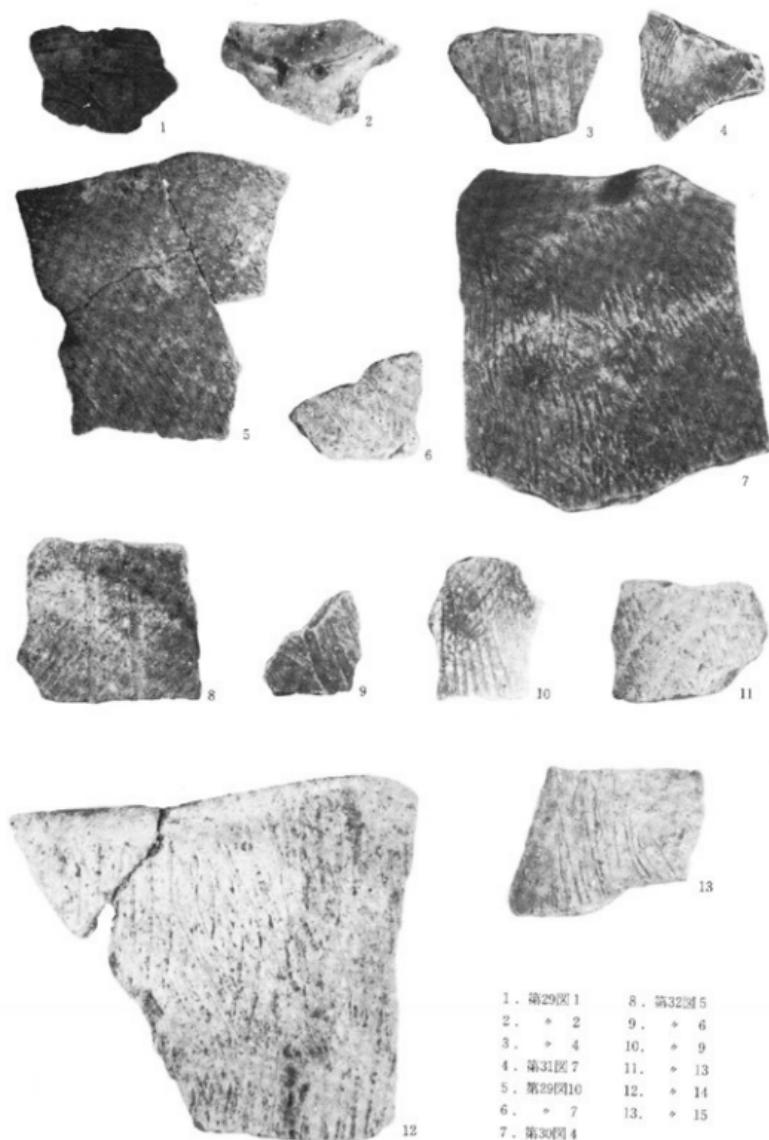


1. 第26図            2. 第27図1  
3. 第42図6        4. 第47図2  
5. 第51図2        6. 第51図1

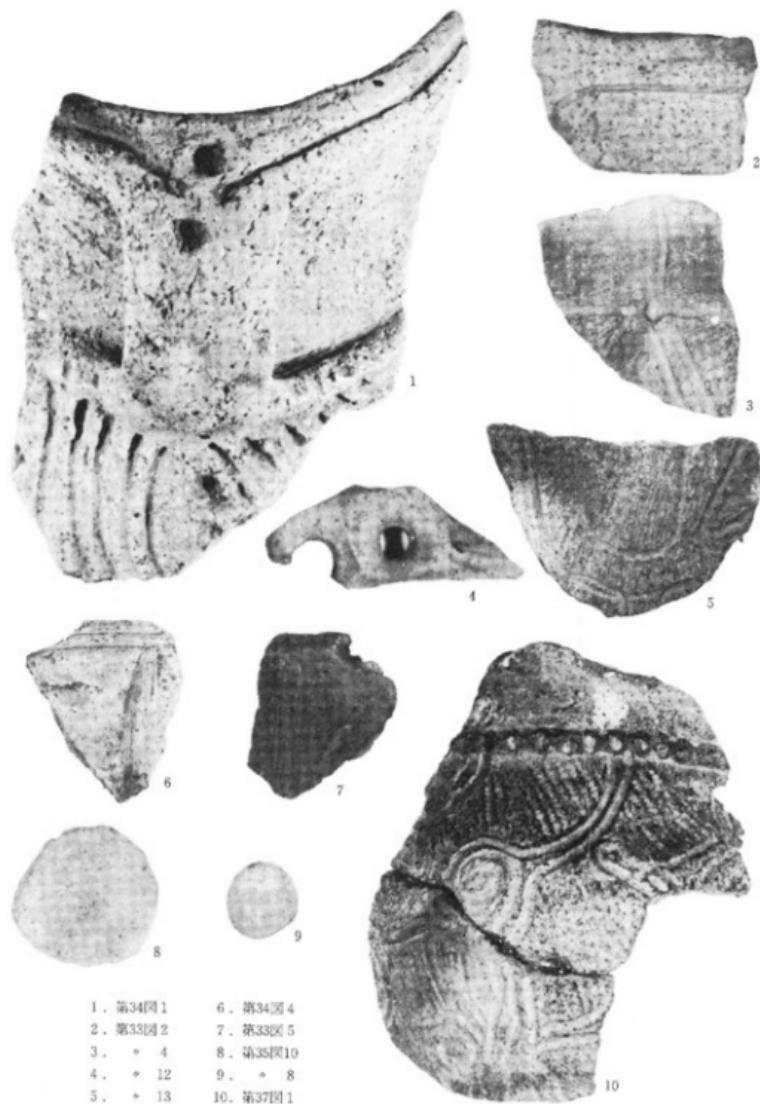
図版16 繩文土器(1) (縮尺不同)



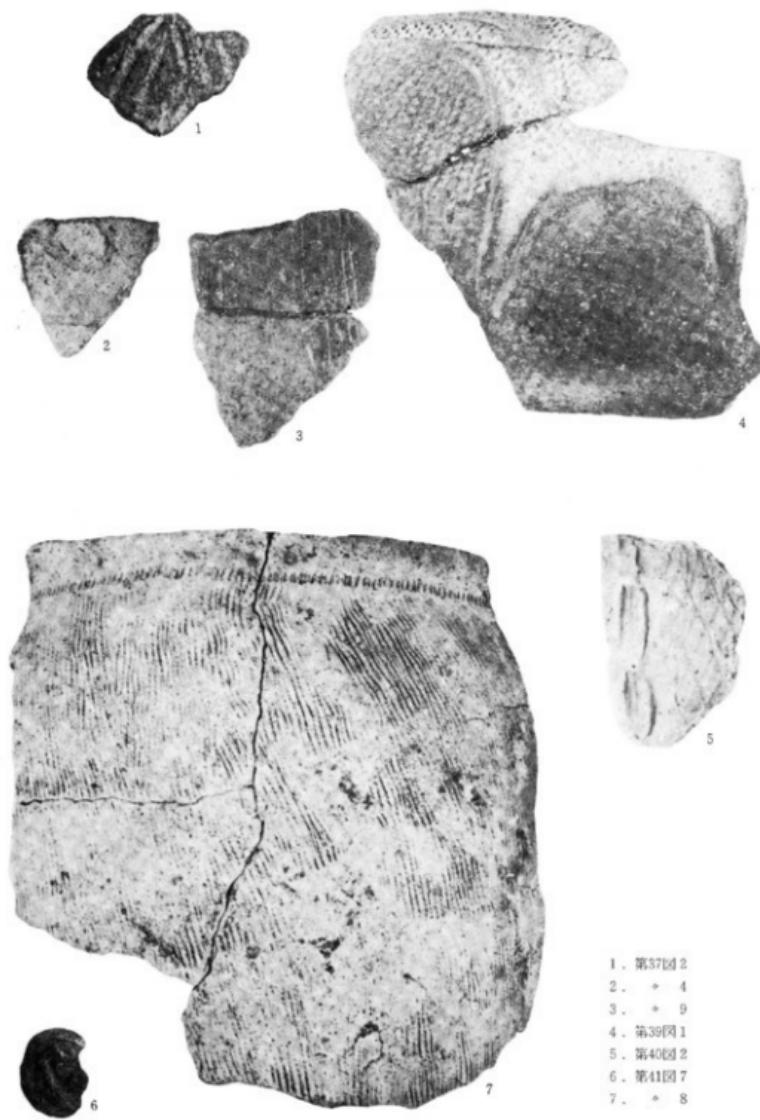
図版17 繩文土器(2)(縮尺不同)



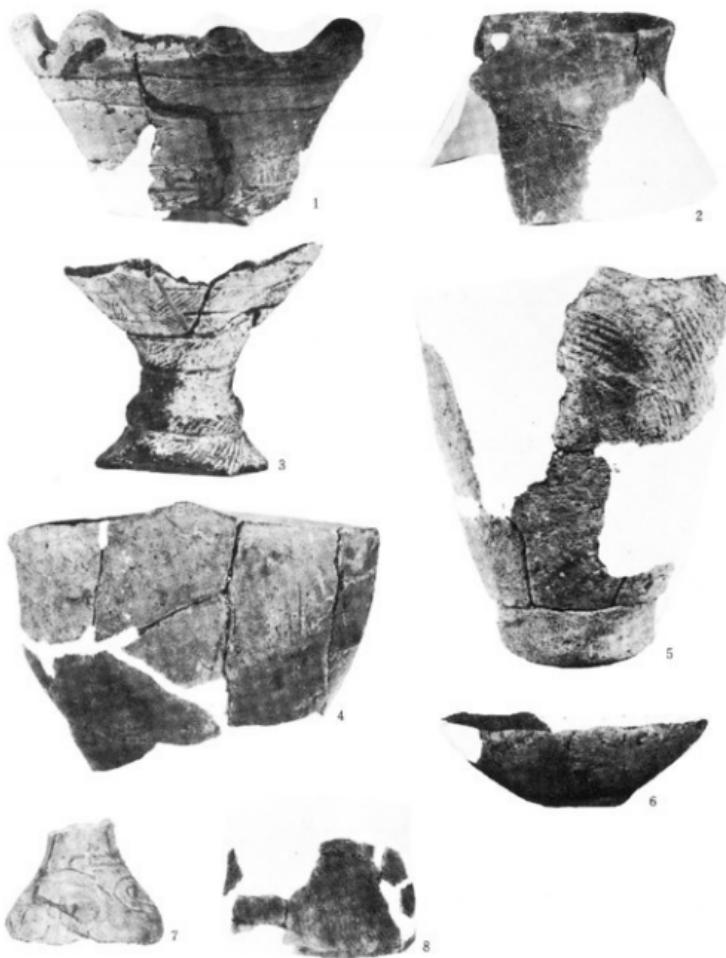
図版18 繩文土器(3)(縮尺不同)



図版19 繩文土器(4)(縮尺不同)

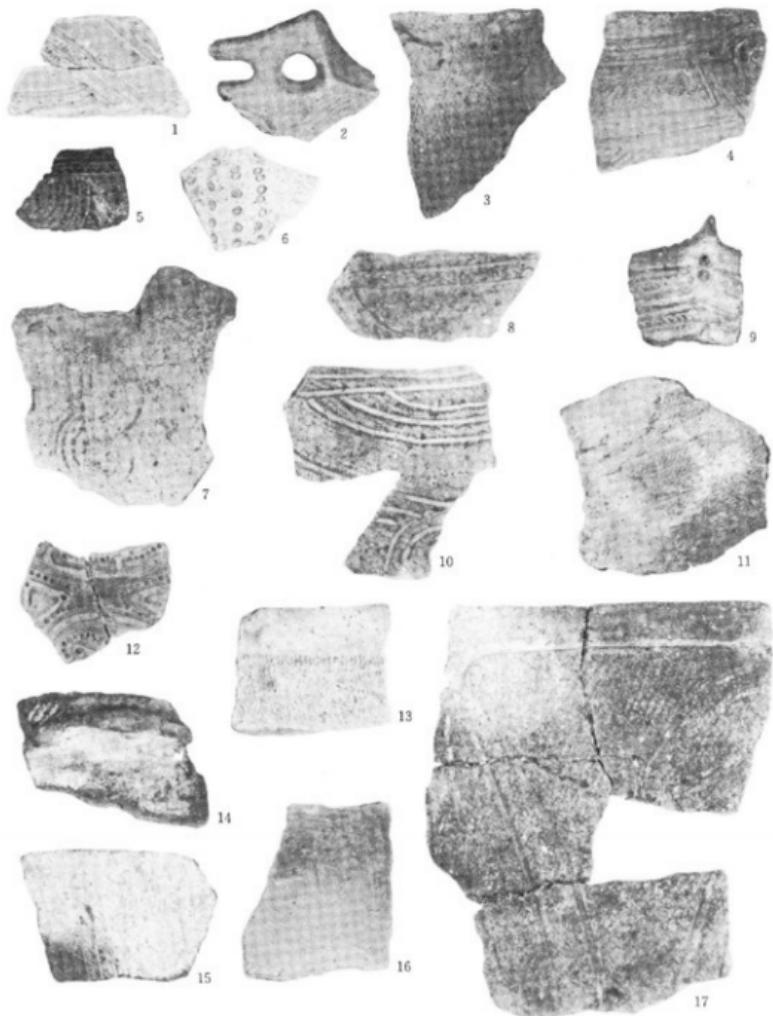


図版20 繩文土器(5)(縮尺不同)



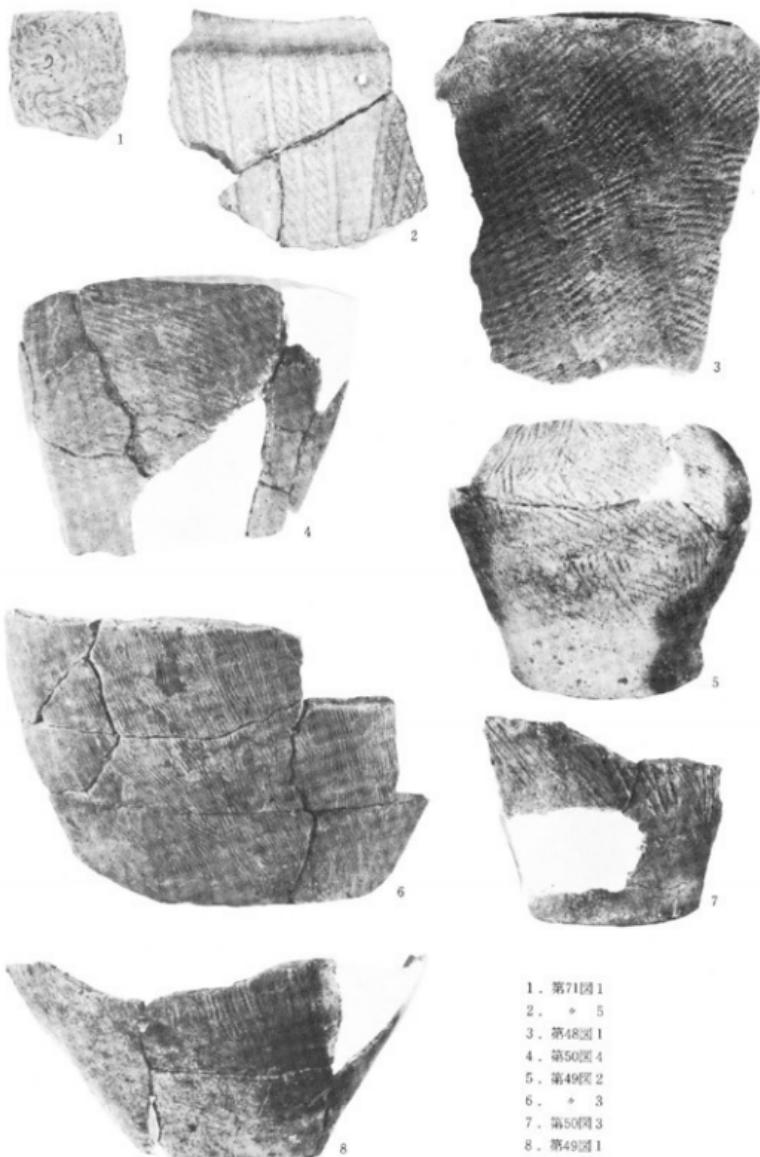
1. 第42圖2  
 2. 第44圖1  
 3. 第42圖5  
 4. 第44圖3  
 5. 第43圖3  
 6. 第42圖6  
 7. 第42圖1  
 8. 第43圖5

図版21 第8層出土遺物(1)(縮尺不同)



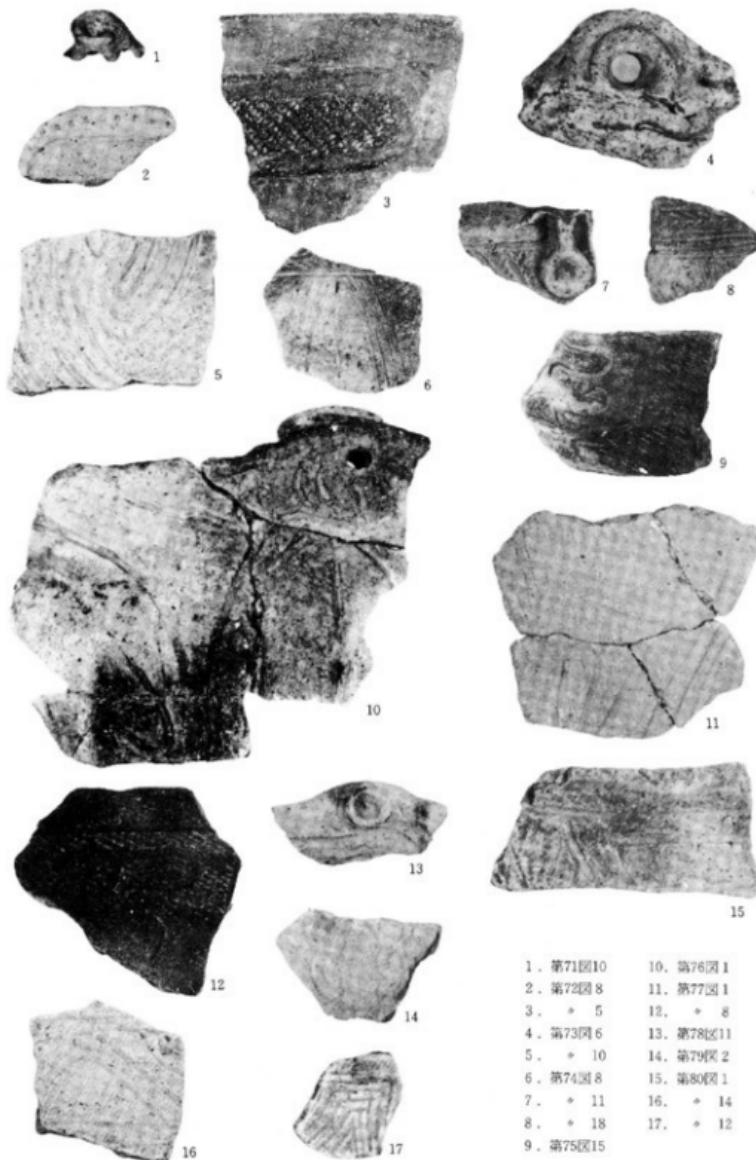
- |          |           |            |
|----------|-----------|------------|
| 1. 第58图5 | 7. 第60图8  | 13. 第68图7  |
| 2. 第59图4 | 8. 第61图16 | 14. 第64图4  |
| 3. " 8   | 9. 第63图1  | 15. 第67图2  |
| 4. 第60图1 | 10. 第62图1 | 16. 第70图5  |
| 5. " 5   | 11. 第63图6 | 17. 第58图11 |
| 6. " 4   | 12. 第64图1 |            |

图版22 第8层出土遗物(2)(缩尺不同)

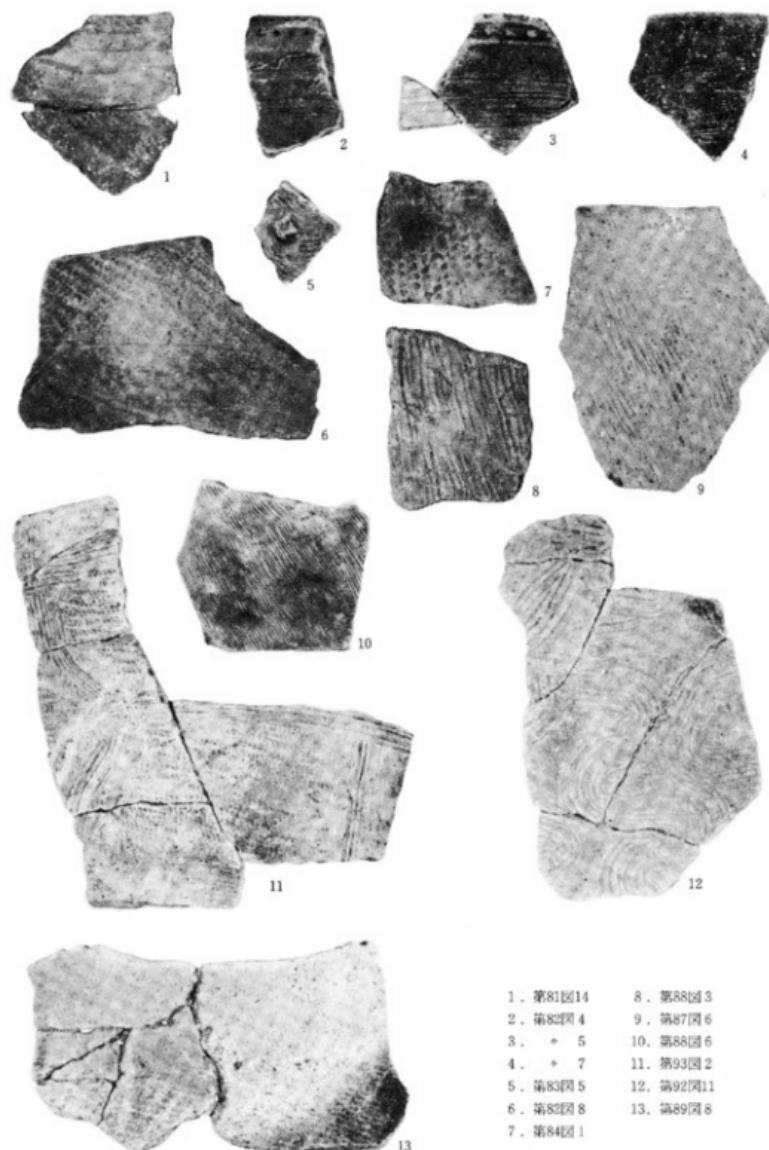


図版23 第9・第10層出土遺物(1)(縮尺不同)

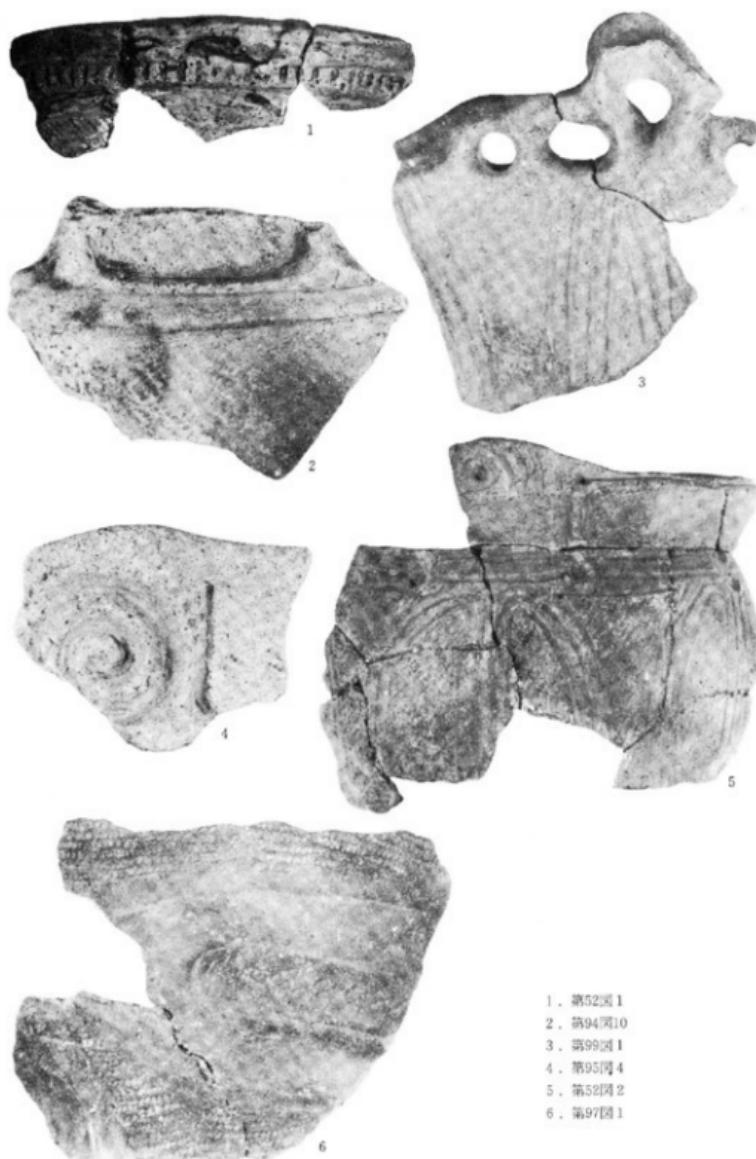
1. 第71図1
2. \*
3. 第48図1
4. 第50図4
5. 第49図2
6. \*
7. 第50図3
8. 第49図1



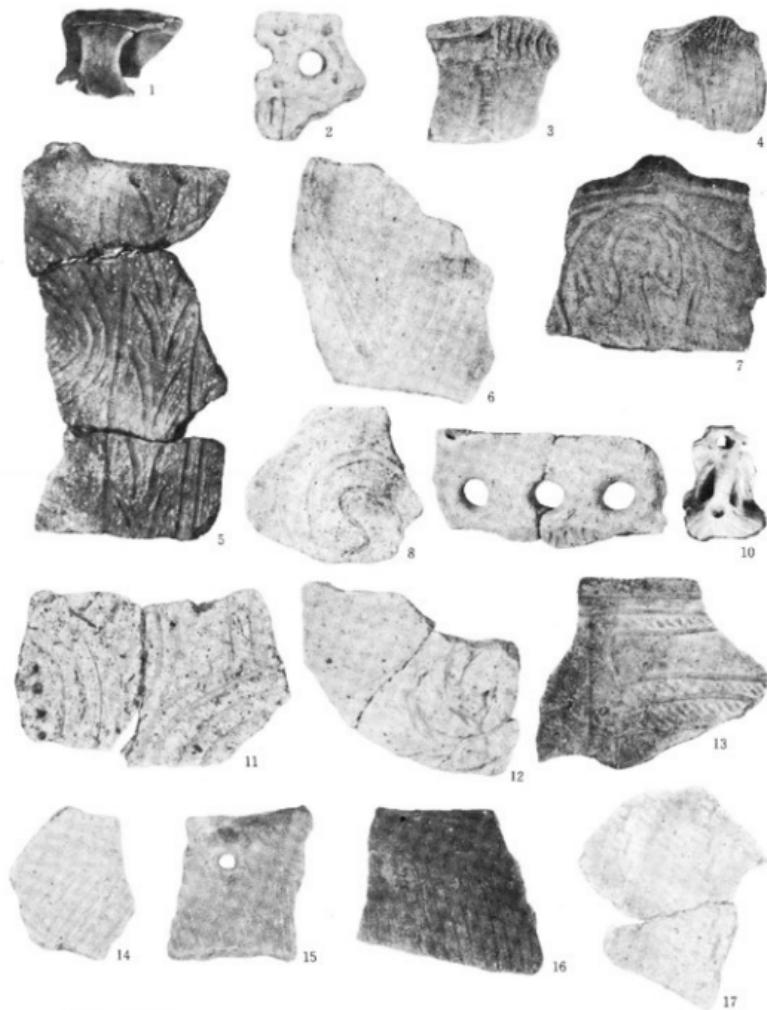
图版24 第10层出土遗物(2)(缩尺不同)



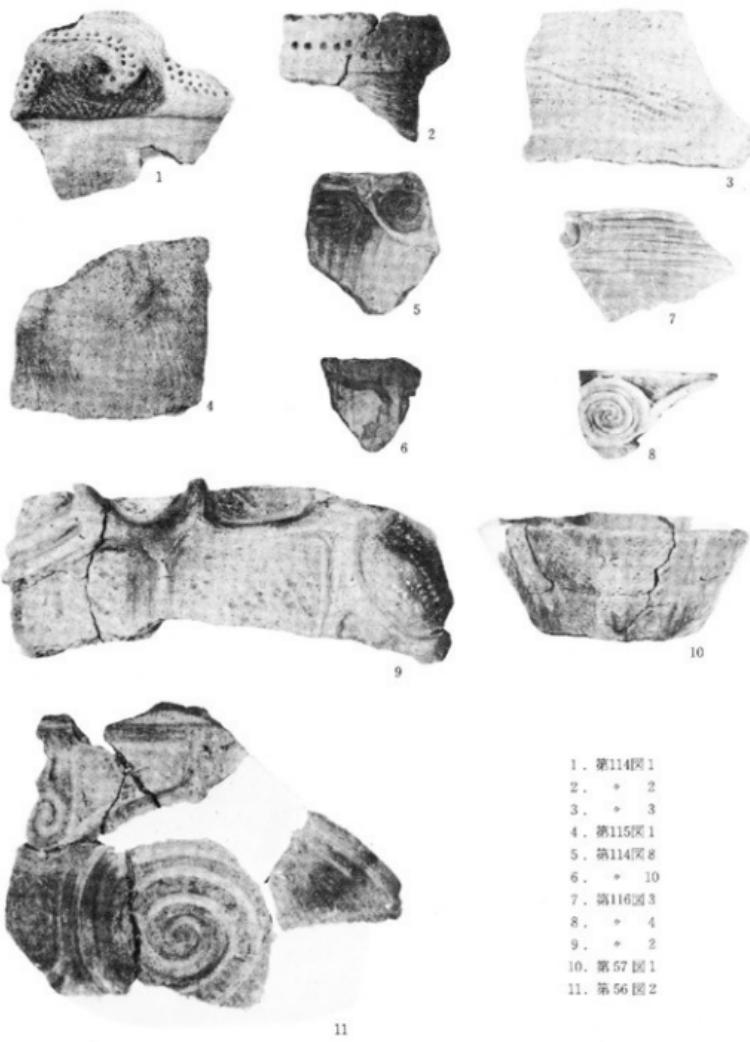
図版25 第10層出土遺物(3)(縮尺不同)



図版26 第11a層出土遺物(1) (縮尺不同)



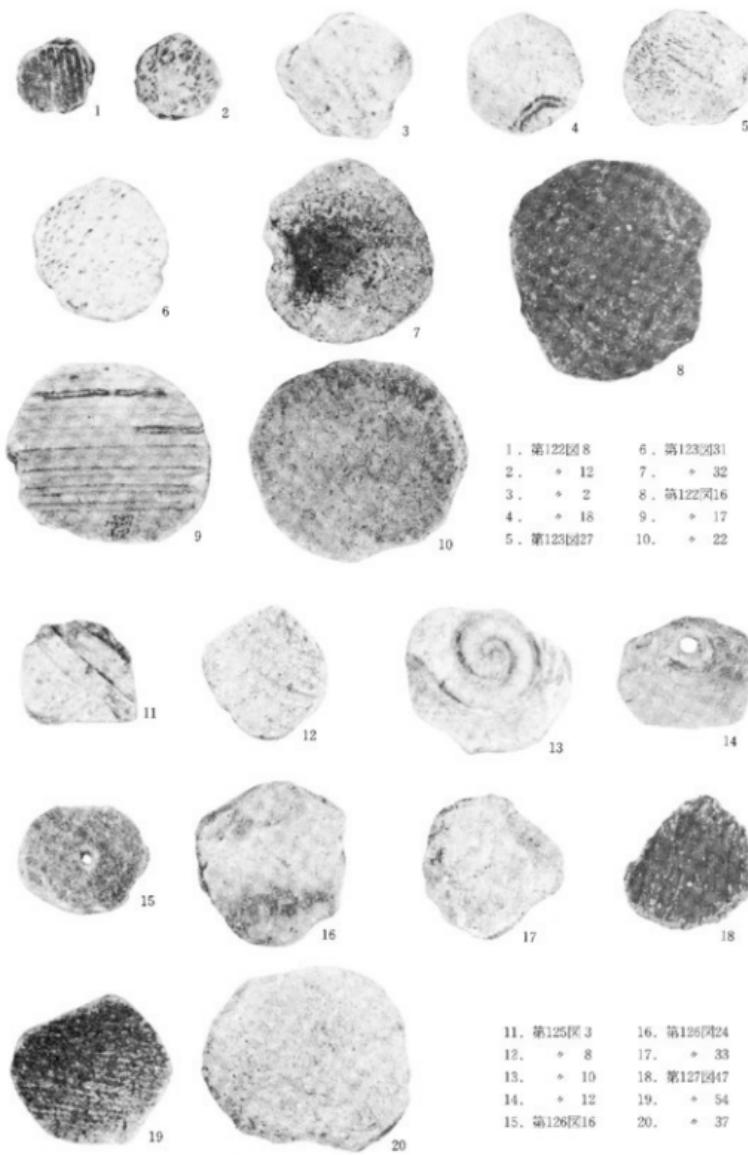
图版27 第11a层出土遗物(2)(缩尺不同)



図版28 第11b・11c層出土遺物（縮尺不同）



図版29 ミニチュア土器と土製品(縮尺不同)



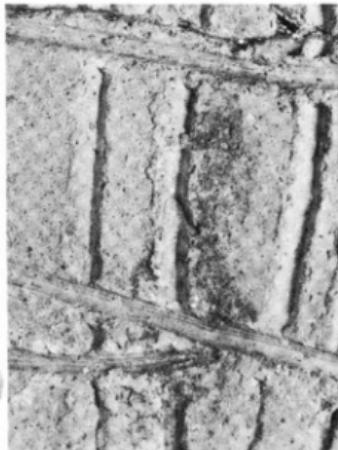
図版30 円盤状土製品(縮尺不同)



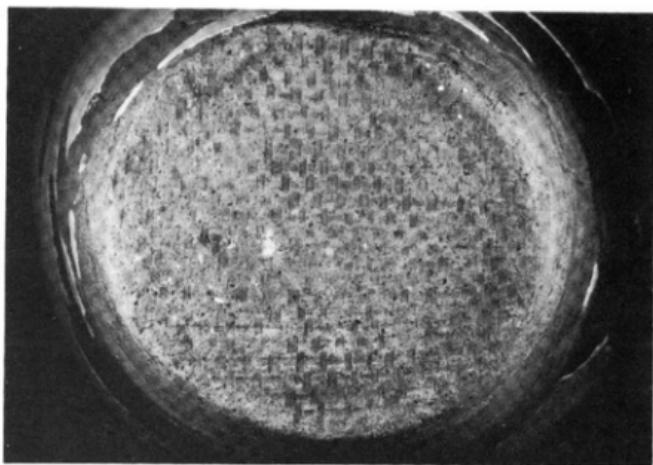
土器接合面例(1)



土器接合面例(2)

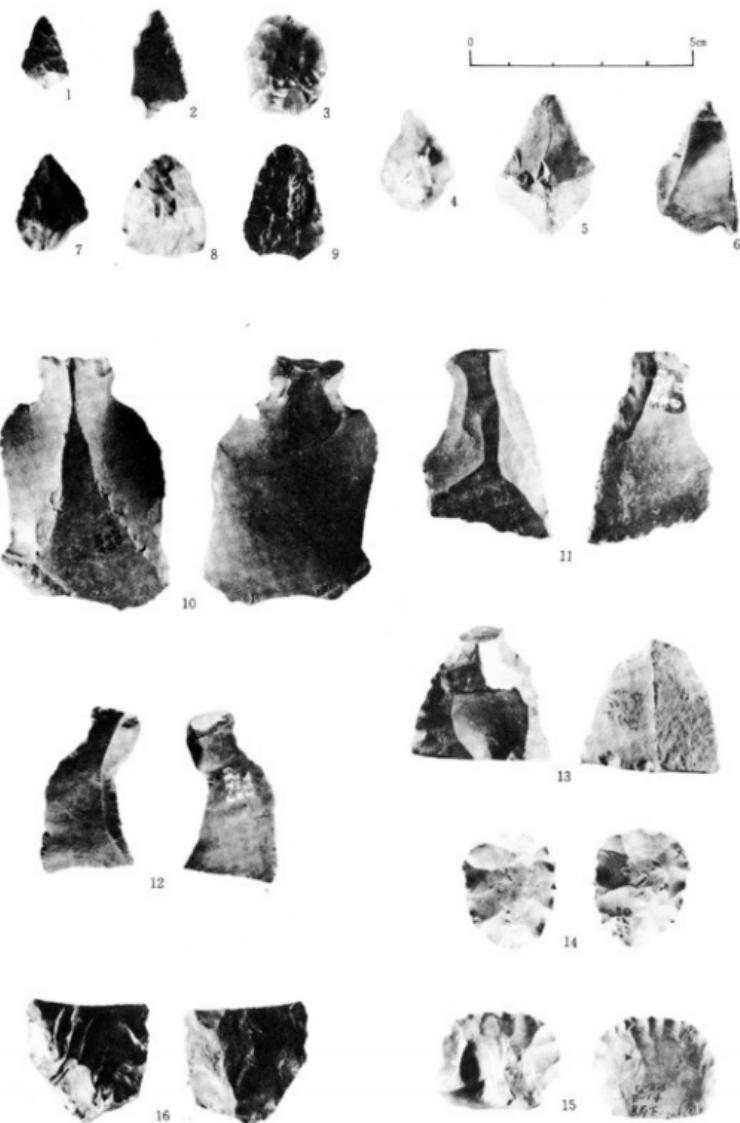


内面格子状沈線

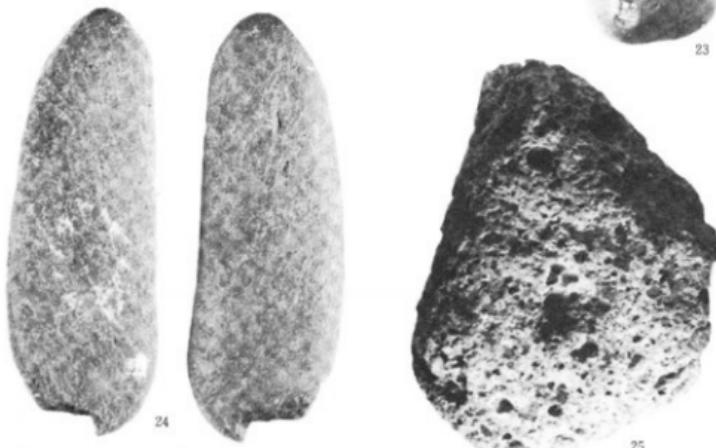
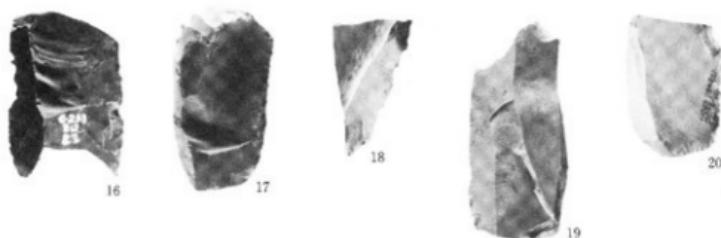


網代(第52図3)

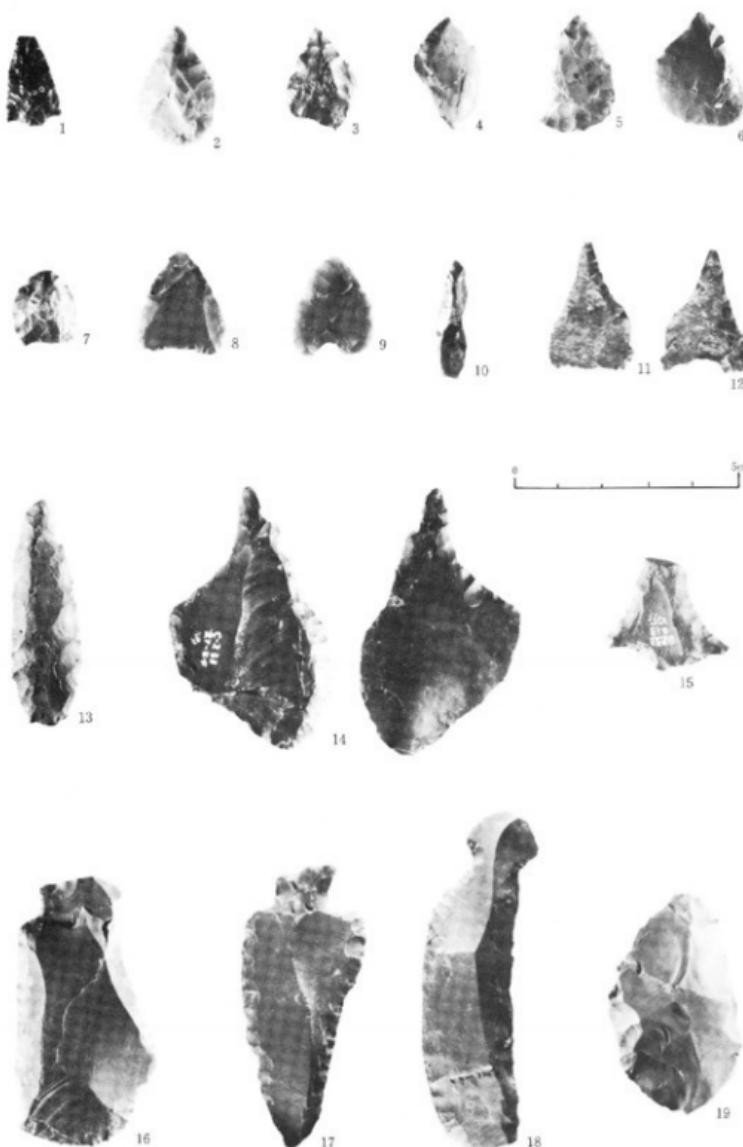
図版31 土器接合面の刻目と網代(縮尺不同)



図版32 第8層出土の石器(1)



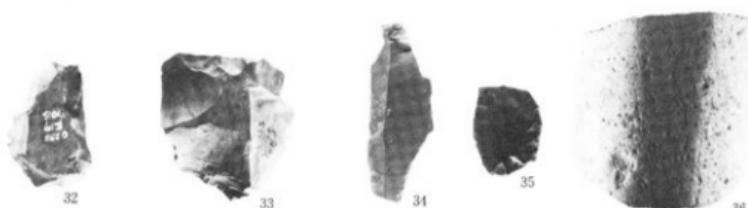
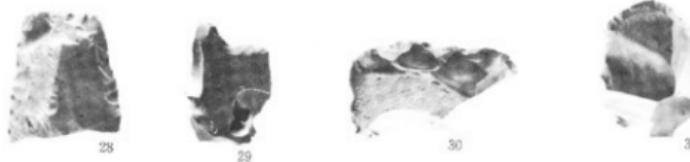
図版33 第8層出土の石器(2)



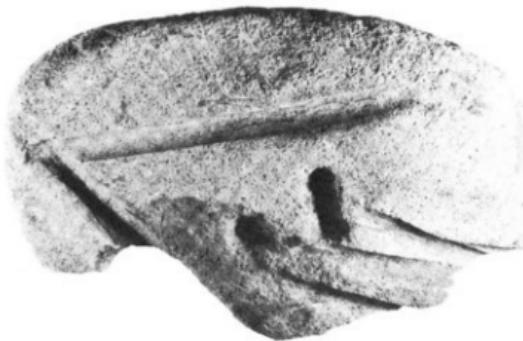
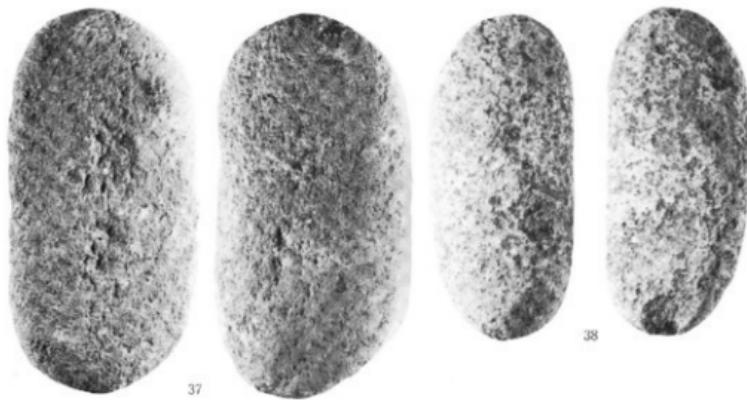
図版34 第10層出土の石器(1)



0 5cm

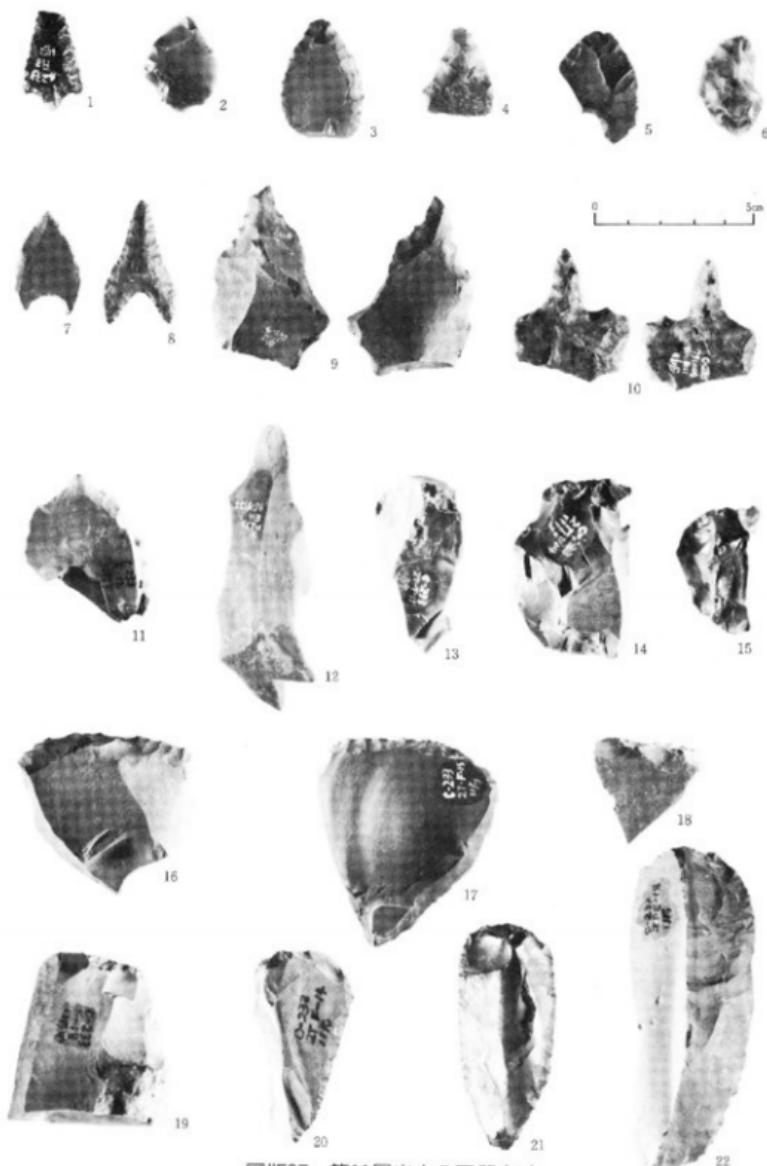


図版35 第10層出土の石器(2)

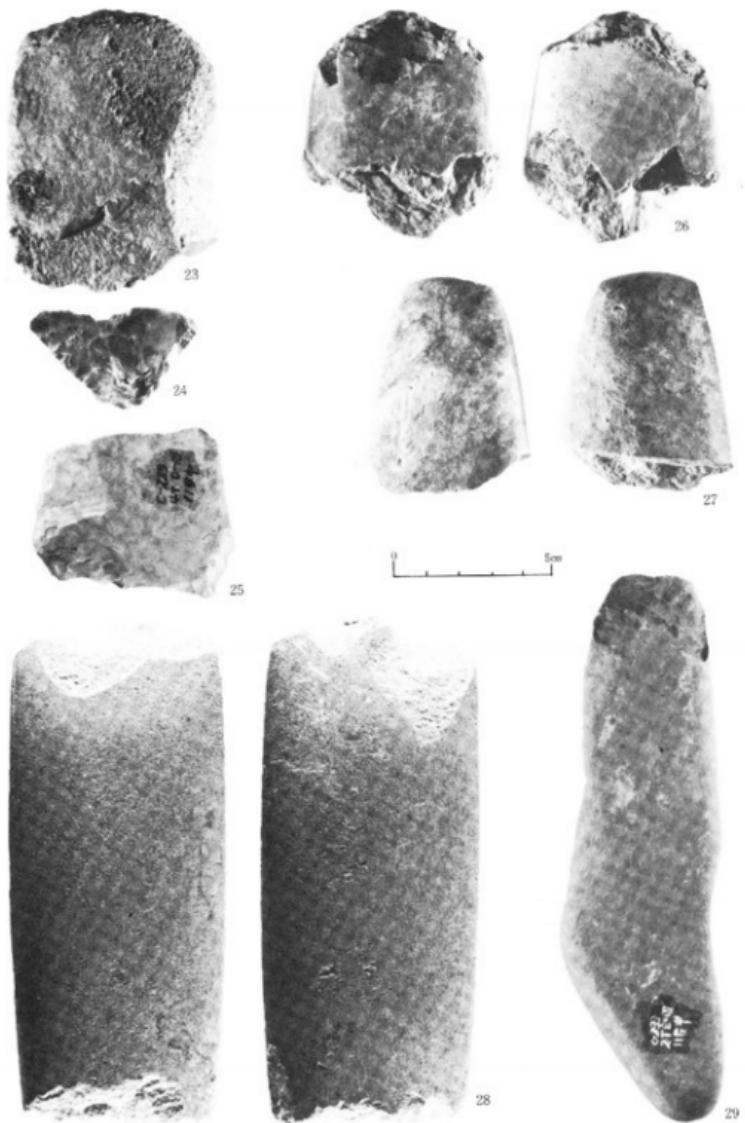


0 5cm

図版36 第10層出土の石器(3)



図版37 第11層出土の石器(1)



図版38 第11層出土の石器(2)

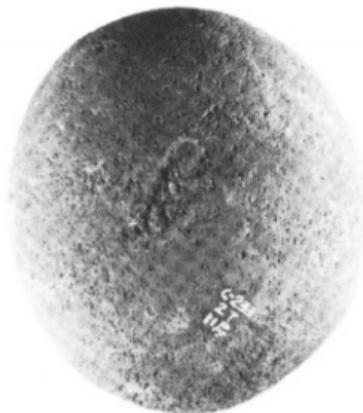


30

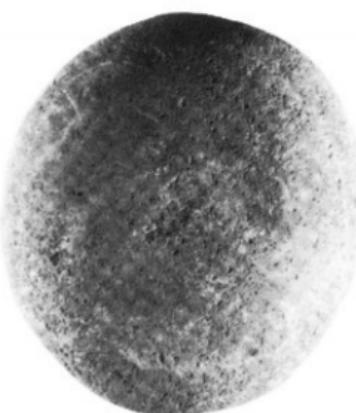


31

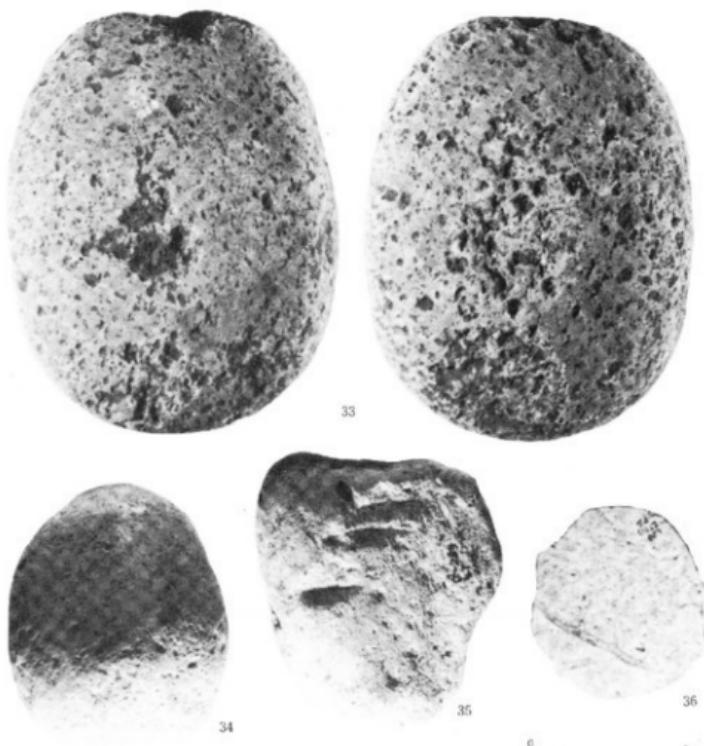
0  
5cm



32



図版39 第11層出土の石器(3)



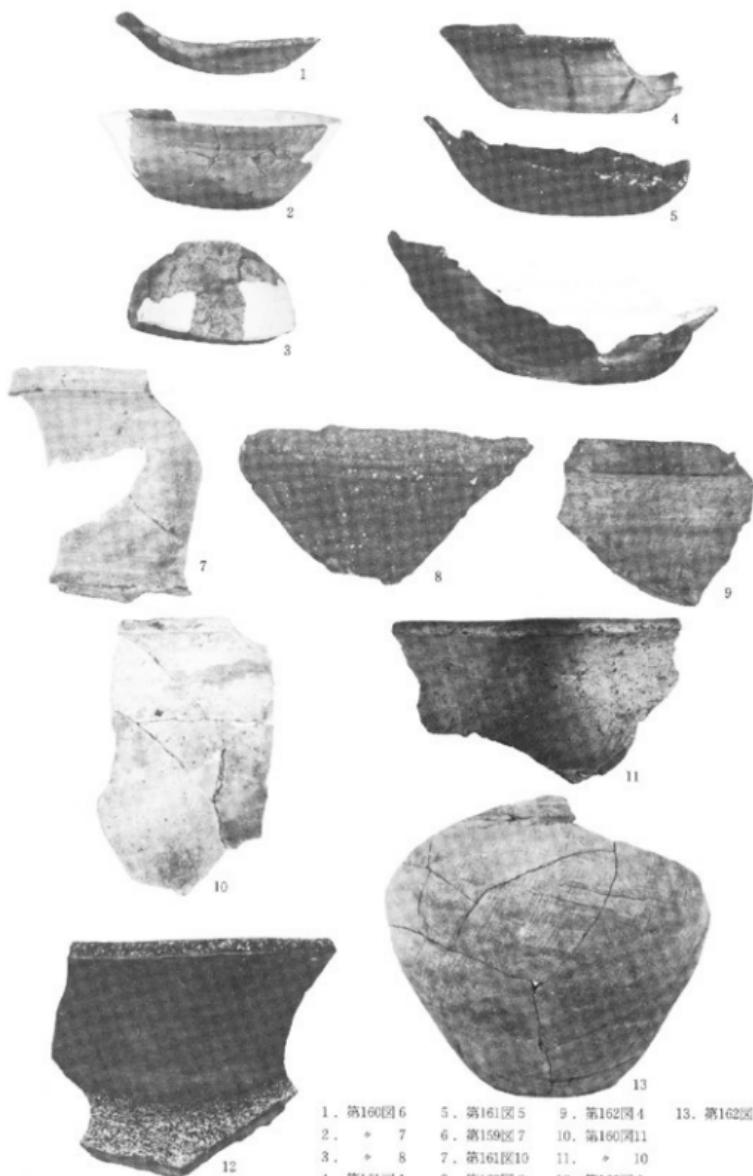
図版40 第11層出土の石器(4)



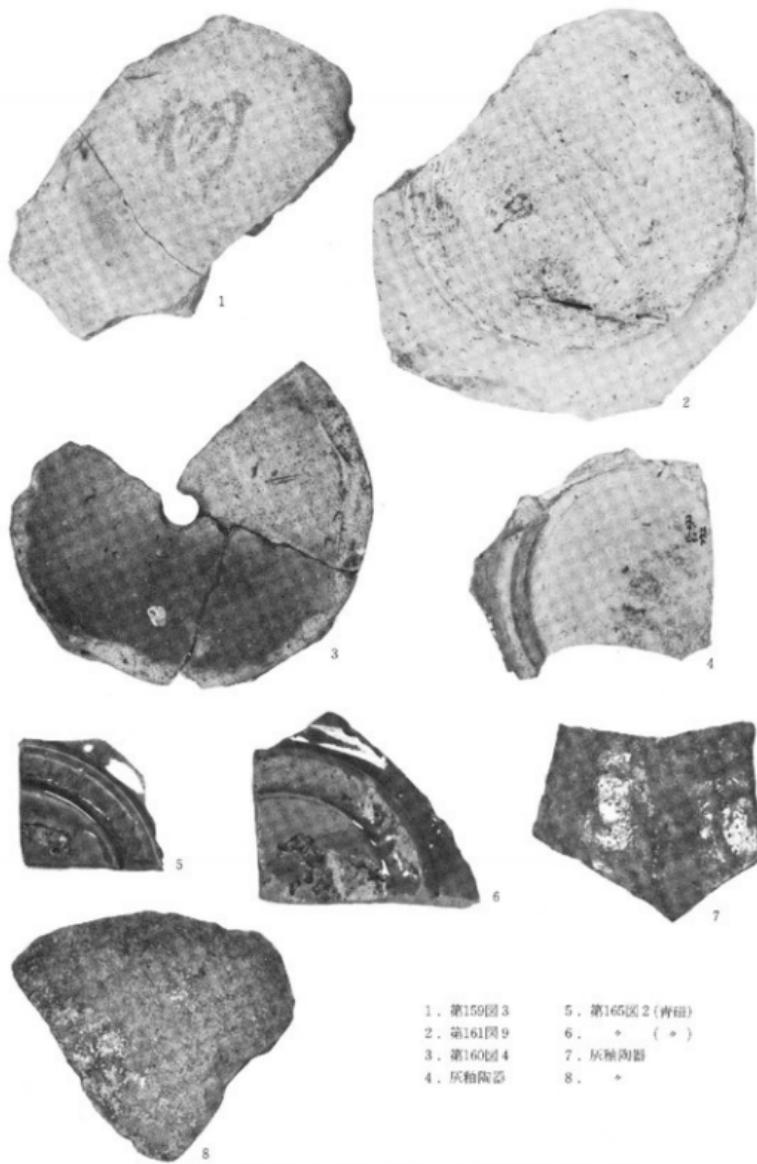
図版41 遺構出土・その他の石器



图版42 鹿角·昆虫压痕·弥生土器(缩尺不同)



図版43 土師器・須恵器(縮尺不同)(縮尺不同)



図版44 土師器・須恵器・青磁・灰釉陶器(縮尺不同)

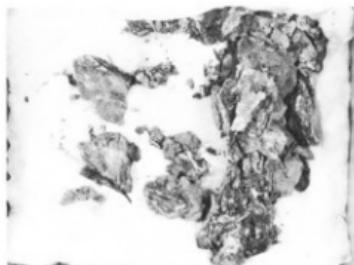
1. 第159図3  
2. 第161図9  
3. 第160図4  
4. 灰釉陶器

5. 第165図2(青磁)  
6. + (+)  
7. 灰釉陶器

8. \*



土錘



馬の上腕骨(上下とも同一個体)



馬の臼歯



馬の臼歯

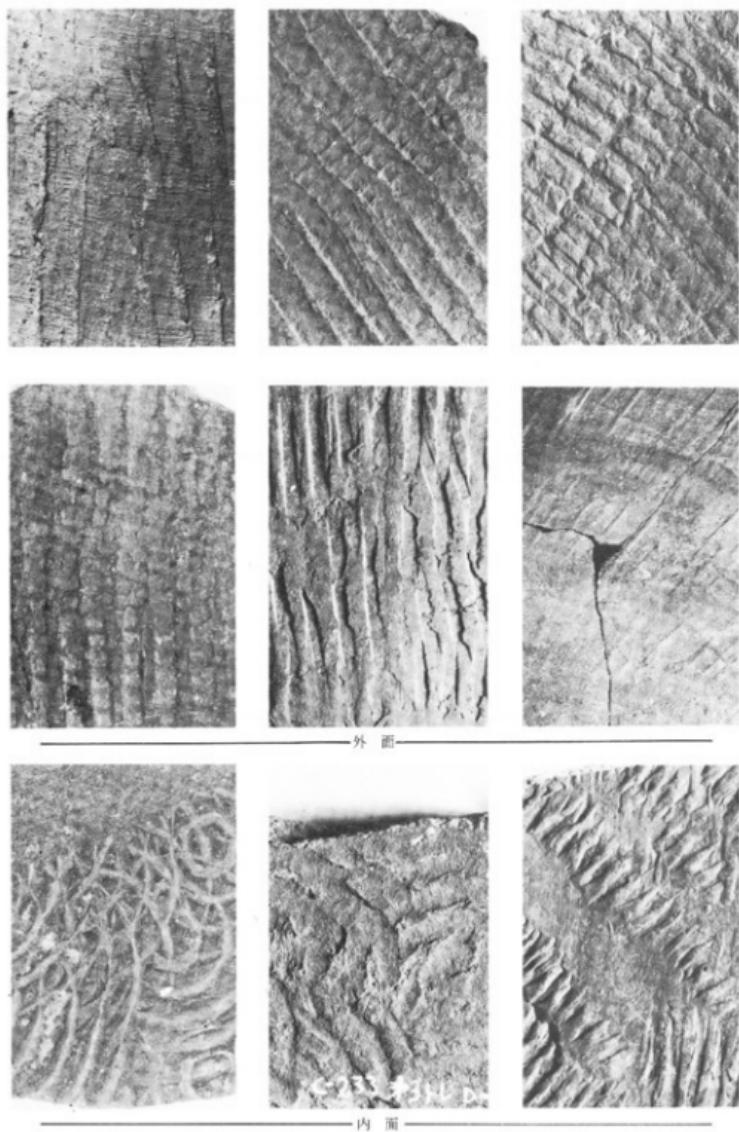


アブキ

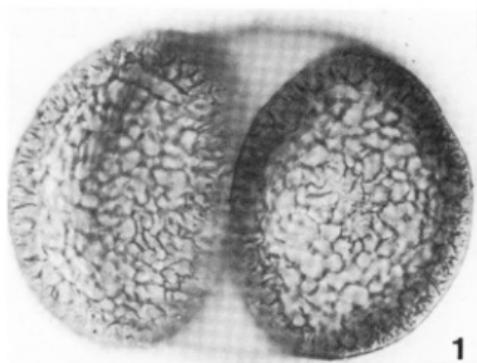


リョクトウ

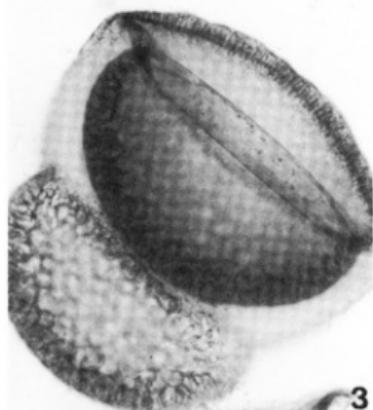
図版45 土錘・獸骨・炭化種子(縮尺不同)



図版46 須恵器甕の叩き目



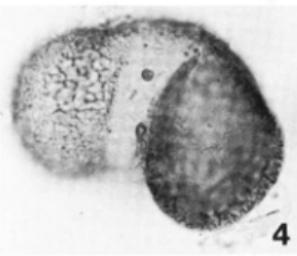
1



3



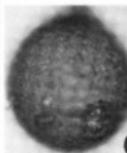
2



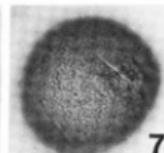
4



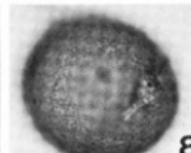
5



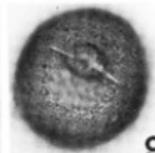
6



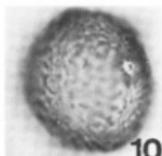
7



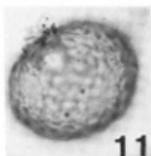
8



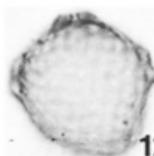
9



10



11



12

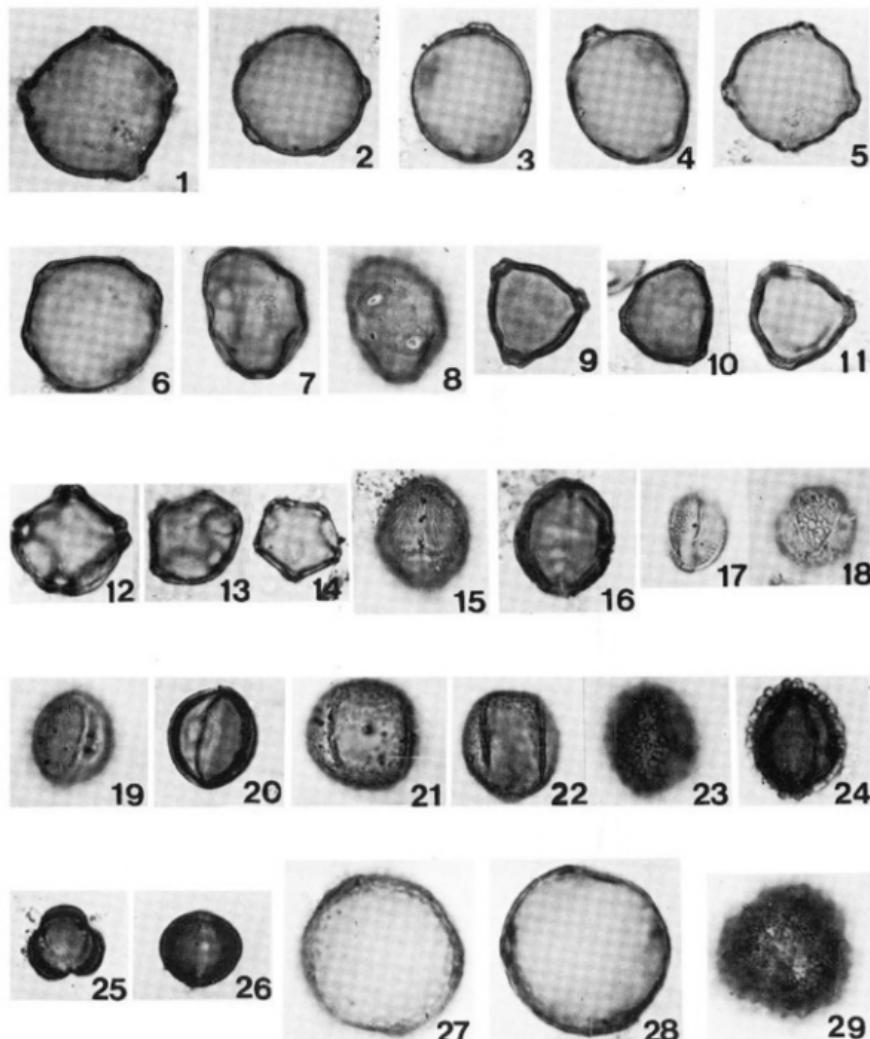


13



14

1, 2, 3, *Abies*, 4, *Pinus (Haploxyylon)*, 5, *Cryptomeria*,  
6, 7, 8, 9, *Fagus*, 10, 11, 12, 13, 14, *Ulmus* and *Zelkova*, (X 750)



1,2,3,4,5, *Carpinus*, 6,7,8, *Juglans*, 9, *Betula*, 10,11, *Corylus*  
 12,13,14, *Alnus*, 15,16, *Rhus*, 17,18, *Salix*, 19,20, *Acer*,  
 21,22, *Quercus*(*Lepidobalanus*), 23,24, *Ilex*, 25,26, *Artemisia*,  
 27,28, *Trichosanthes* 29, *Compositae* (X 750)

図版48 花粉の顕微鏡写真(2)

## 職 員 錄

### 社會教育課

課長 永野昌一  
主幹 早坂春一

### 文化財管理係

係長 鈴木昭三郎  
主任 鈴木高文  
主事 山口宏  
・ 渡辺洋一

### 文化財調査係

係長(兼) 幸坂春一範  
教諭 加藤正和  
主任 田中則和  
・ 結城慎一  
・ 柳沢みどり  
教諭 青沼彦二民  
主任 篠原信彦  
・ 木村一洋  
・ 佐藤孝  
・ 金森安孝  
・ 佐藤甲子  
・ 工藤哲司  
・ 渡部弘美  
・ 主浜光則  
・ 斎野裕彦  
・ 吉恭平

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物巖屋下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）  
第2集 仙台城（昭和42年3月）  
第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
第5集 仙台市南小泉法華塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
第6集 仙台市荒巻五木松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
第8集 仙台市向山安岩山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
第9集 仙台市岸岸町宗種寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
第10集 仙台市中田安久東通跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書（昭和53年3月）  
第14集 栗道跡発掘調査報告書（昭和54年3月）  
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
第16集 六反出遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
第17集 北原敷遺跡（昭和54年3月）  
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）  
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
第21集 仙台市開発関係通跡調査報告1（昭和55年3月）  
第22集 終ヶ美（昭和55年3月）  
第23集 年報1（昭和55年3月）  
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
第25集 三神峯跡発掘調査報告書（昭和55年12月）  
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
第28集 年報2（昭和56年3月）  
第29集 郡山遺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
第31集 仙台開発関係通跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）  
第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）

---

仙台市文化財調査報告書第33集

## 山口遺跡発掘調査報告書

昭和56年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市若柳町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

---

